

古津八幡山遺跡発掘調査報告書

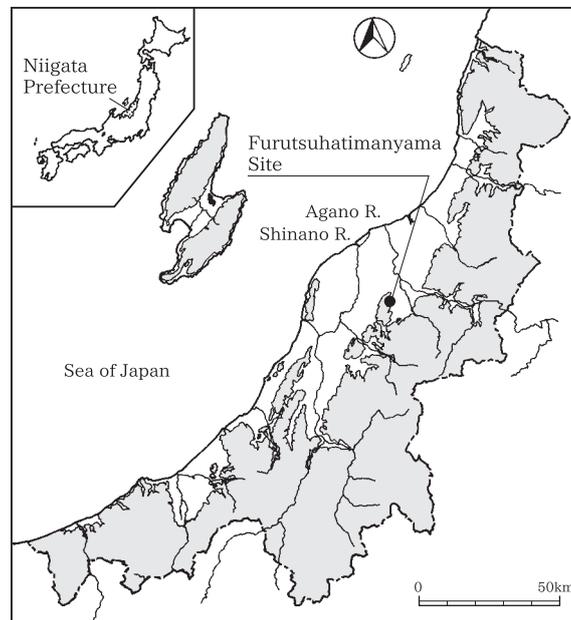
－ 第 20・21・22・23・24・25 次調査 －

2025

新潟市教育委員会

ふる つ はち まん やま
古津八幡山遺跡発掘調査報告書

— 第 20・21・22・23・24・25 次調査 —



2025

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市秋葉区古津・金津あきはくふるつかなづに所在する古津八幡山遺跡ふるつはちまんやまの発掘調査報告書である。
- 2 調査は史跡の保存活用計画〔新潟市教育委員会 2017〕に伴うもので、新潟市教育委員会が調査主体となり、第 20 次調査（平成 29 年度）・第 21 次調査（平成 30 年度）・第 22 次調査（令和元（平成 31）年度）・第 23 次調査（令和 2 年度）・第 24 次調査（令和 3 年度）・第 25 次調査（令和 4 年度）を実施した。
- 3 いずれも法令上の発掘調査種別は確認調査で、調査の目的は保存目的の遺跡範囲内容確認調査である。
- 4 基礎整理作業は調査年度ごとに行ったが、令和 5・6 年度に報告書作成に係る本格的な整理作業を行った。なお、確認調査・整理作業にかかる体制は第 1 章第 2 節に記した。
- 5 発掘・整理作業に係る記録類及び出土遺物は、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センターという）で収蔵・保管している。
- 6 本書の編集は相田泰臣・八藤後智人（市文化財センター）が行った。
執筆は、第 I・III・IV 章・第 V 章第 1～3・7 節・第七章第 1 節・第 2 節 A・第 3 節を相田が、第 II 章・第 V 章第 5 節・第七章第 2 節 C を八藤後が、第 V 章第 4 節・第七章第 2 節 B を植田尚子・高橋保雄（市文化財センター）が行った。
また、ガラス製品（第 VI 章第 3 節）については独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所の田村朋美氏に分析・執筆を依頼し、鉄製品（第 V 章第 6 節・第七章第 2 節 D）については駒澤大学の鈴木崇司氏に実測図の作成と分析・執筆を依頼し、それぞれ玉稿を賜った。
さらに、第 VI 章第 1 節はバリノ・サーヴェイ株式会社に、第 VI 章 2 節は株式会社加速器分析研究所にそれぞれ分析・執筆を委託した。
- 7 調査にかかる測量図面は、株式会社オリスに委託して作成した。
- 8 本書に掲載した写真の撮影は、写真図版 1 が米軍（国土地理院発行）、写真図版 2・3 が株式会社オリス、それ以外の遺構写真は相田・小林美土里・田中真理・平山千尋（市文化財センター）が撮影した。また、本書に掲載した遺物写真の撮影は、石器・石製品を植田・高橋（市文化財センター）が、ガラス玉を田村氏が、それ以外を相田が行った。
- 9 遺物実測図のデジタルトレース及び DTP ソフトによる各種版下の作成は、有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 10 出土遺物については、古津八幡山遺跡確認調査指導部会の委員である石川日出志氏、石黒立人氏、菊地芳朗氏、橋本博文氏（第三章参照）をはじめ、小熊博史氏、笹澤正史氏、鈴木崇司氏、滝沢規朗氏、田中耕作氏、田村朋美氏、禰宜田佳男氏、林 大智氏、森岡秀人氏、渡邊朋和氏からご指導・ご教示を受けた。
- 11 今回の調査成果については、これまで現地説明会資料や新潟市遺跡発掘調査速報会〔市文化財センター 2018・2019・2020・2021・2022・2023〕、新潟県考古学会〔新潟県考古学会 2019・2023〕などで発表・報告している。齟齬がある場合は本報告書をもって正とする。
- 12 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関よりご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。
青山博樹・石川日出志・石黒立人・上田直弥・岡林孝作・小熊博史・小黒智久・小野本敦・河合 忍・川上真紀子・菊地芳朗・小林達雄・坂井秀弥・笹澤正史・沢田 敦・品田高志・篠原和夫・朱雁・鈴木崇司・関 雅之・高橋郁子・滝沢規朗・田中耕作・田中祐樹・田村朋美・中島義人・奈良貴史・禰宜田佳男・橋本博文・林 大智・久田正弘・水澤幸一・森 貴教・森岡秀人・柳沼賢治・渡邊朋和・渡邊裕之
文化庁記念物課・新潟県教育委員会・新潟県文化課

（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約8度である。
- 3 掲載した図面のうち、既存の地形図等を使用したものについては、原図の製作者・製作年を示した。
- 4 引用・参考文献は、著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載したが、第VI章は同章の中で、第VII章第2節Dは同項の中で、引用・参考文献を末尾に記した。
- 5 遺構番号は発掘調査現場で付したものをを用いた。番号は調査年次や遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。遺構の種別記号は〔文化庁文化財部記念物課2010〕を参考に以下のように付けて表した。
 竪穴建物(SI) 掘立柱建物(SB) 方形周溝墓(SZ) 土坑(墓壇)(SK) 溝(SD) 性格不明遺構(SX) 柱穴・ピット(P)
- 6 遺構の記述は、基本的に前述の遺構の種別順に記述した。ただし、竪穴建物に伴う遺構（壁溝・排水溝(SD)、土坑・貯蔵穴(SK)、柱穴(P)）や、方形周溝墓に伴う埋葬施設の墓壇(SK)・周溝・排水溝(SD)については、竪穴建物や方形周溝墓の中で記述した。
- 7 土層の土色及び遺物の色調は『新版 標準土色帖』〔農林水産省農林水産技術会議事務局1967〕2005年度版を用いた。
- 8 遺構図面図版において、平面プランの確認のみの遺構については細い実線・点線で示した。
- 9 遺構図面図版断面図内の丸数字は、自然科学分析（第VI章第1・2節）の試料番号を示す。
- 10 遺物の掲載番号は種別（土器・陶磁器、木製品、石器・石製品、ガラス製品、鉄製品、銅製品）ごとに通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版に共通して用いた。
- 11 土器実測図で全周がおおむね1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両側に空白を設けた。
- 12 遺構計測表、遺物観察表中の（ ）付きの値は推定値を示す。
- 13 トレンチについては、「T」のアルファベットで示した。
- 14 遺物の注記は、調査を実施した年（西暦）の下2桁と、古津八幡山遺跡の最初のアルファベット（H）を組み合わせ、第20次：17H、第21次：18H、第22次：19H、第23次：20H、第24次：21H、第25次：22Hとし、さらにトレンチやグリッド、出土遺構、出土層位等を記載した。
- 15 本書では基本的に古津八幡山遺跡の既刊報告書〔渡邊2001〕で示された編年を使用した。時期名称や編年の併行関係については下表のとおりとして記述する。

本書	弥生時代	古津八幡山遺跡 〔渡邊2001〕	越後 〔滝沢2010b・ 2011a・2012〕	新潟シンポジウム編年 〔日本考古学協会新潟大会 実行委員会編1993〕	北陸南西部 〔田嶋1986・2006・2007〕		
1期	古 新	後期初頭		1	V-1		
		後期前半	1期古 1期新		1	V-2 V-3	猫橋式
2期	古 新	後期後半	2期古 2期新		2-1 2-2・2-3	2	2-1群 2-2群
		後期末	3期	3	3	3-1群 3-2群	月影式
4期	終末期 (古墳時代早期)	4期	様相1	4	4群	白江式	
5期		5		5群			
6期			様相2	6	6群		

目 次

第I章 序 章

第1節 遺跡概観	1
第2節 調査に至る経緯と概要	1

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 古津八幡山遺跡の地区別概要	4
第3節 周辺の遺跡	7
第4節 歴史的環境	10

第III章 調査の概要

第1節 発掘調査	12
A 調査方法	12
1) グリッドの設定	12
2) 調査方法	12
第2節 調査経過	13
A 第20次調査	15
1) 法的手続など	15
2) 調査概要	15
B 第21次調査	15
1) 法的手続など	15
2) 調査概要	15
C 第22次調査	15
1) 法的手続など	15
2) 調査概要	16
D 第23次調査	16
1) 法的手続など	16
2) 調査概要	16
E 第24次調査	16
1) 法的手続など	16
2) 調査概要	16
F 第25次調査 整理方法	17
1) 法的手続など	17
2) 調査概要	17
第3節 調査・整理体制	19

第IV章 遺 跡

第1節 概 要	20
第2節 層 序	20
第3節 遺 構	21
A 遺構の概要	21
1) 遺構の概要	21
2) 遺構の記述、図面図版	21
B 遺構各説	22
1) 竪穴建物 (SI)	22
2) 掘立柱建物 (SB)	25
3) 方形周溝墓 (SZ)	25
4) 土 坑 (SK)	28
5) 溝 (SD)	29
6) 性格不明遺構 (SX)	30
7) ピ ッ ト (P)	31

第V章 遺 物

第1節 概 要	33
第2節 土器・陶磁器	33
1) 竪穴建物 (SI)	33
2) 掘立柱建物 (SB)	35
3) 方形周溝墓 (SZ)	35
4) 土 坑 (SK)	36
5) 溝 (SD)	36
6) 性格不明遺構 (SX)	36
7) ピ ッ ト (P)	36
8) 遺 構 外	37
第3節 木 製 品	37
第4節 石 器	38
A 概 要	38
B 遺物各説	39
第5節 ガラス製品	43
第6節 鉄 製 品	43
第7節 銅 製 品	43

第VI章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定 -1	44
A 試 料	44
B 分析方法	44
C 結果と考察	44
第2節 放射性炭素年代測定 -2	46
A 測定対象試料	46
B 化学処理工程	46
C 測定方法	46
D 算出方法	46
E 測定結果	47
第3節 古津八幡山遺跡出土ガラス小玉の分析	49
A はじめに	49
B 資料と方法	49
C 結果と考察	49

第VII章 総 括

第1節 遺 構	53
A 北東地区における遺構の変遷	53
B 大型竪穴建物 (SI1)	54
C 方形周溝墓 (SZ743)	56
1) 埋葬施設	56
2) 周溝からのびる排水溝	59
D 土器を埋置したピット (P806・807)	59
E 近世以降の土坑墓 (SK384・736・748)	59
F 近・現代の畑の畝跡	59
第2節 遺 物	60
A 弥生時代の土器の位置づけ	60

B 石器について	64
1) 在地石材・搬入石材について	64
2) 出土石器の所属時期について	65
C 弥生時代のガラス小玉について	67
1) 概要	67
2) 県内の弥生時代後期から終末期におけるガラス小玉出土遺跡と点数、及び出土遺構について	67
3) 県内における当該期のガラス小玉の色調について	68
4) まとめにかえて 古津八幡山遺跡出土資料について若干の流通経路の検討	68
D 古津八幡山遺跡出土鉄器からみる弥生時代の広域交流	72
1) 先学における古津八幡山遺跡出土鉄器の評価	72
2) 製作技法からみる古津八幡山遺跡出土の鉄鏃	72
3) 平面形態からみる古津八幡山遺跡出土鉄鏃の再検討	73
4) 孔からみる古津八幡山遺跡出土鉄鏃	74
5) 鉄器からみる古津八幡山遺跡と広域交流	75
第3節 まとめ	77
要約	81
引用・参考文献	82
別表	92
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第1図 古津八幡山遺跡位置図	3	第20図 県内の弥生時代後期・終末期（1～6期）の周溝墓のある主な遺跡	56
第2図 古津八幡山遺跡周辺概念図・地区名称	5	第21図 古津八幡山遺跡の方形周溝墓	57
第3図 周辺の遺跡分布図	8	第22図 国内の主な木槨墓の分布	58
第4図 遺構の平・断面形態の分類	21	第23図 大型竪穴建物（SI1）周辺における畑の痕跡	59
第5図 遺構埋土の堆積形状の分類	21	第24図 古津八幡山遺跡第20～25次調査の主な遺構出土土器	61
第6図 遺構の計測概念図	21	第25図 上越市裏山遺跡東環濠出土土器	61
第7図 竪穴建物（SI1）建て替え前後及び竪穴建物（SI465）に伴う遺構	23	第26図 古津八幡山遺跡における北陸系土器を中心とした土器変遷図	62
第8図 方形周溝墓（SZ743）埋葬部1（SK739）平・断面着色図	27	第27図 県内における弥生時代後期から終末期に関するガラス小玉出土遺跡分布図	67
第9図 石鏃分類図	39	第28図 古津八幡山遺跡出土鉄鏃	72
第10図 暦年較正結果	45	第29図 鉄鏃の製作工程と分類	72
第11図 暦年較正年代グラフ	48	第30図 中部高地・関東における鉄鏃	73
第12図 化学組成によるカリガラスの細分（CaO vs. Al ₂ O ₃ ）	50	第31図 朝鮮半島東南部及び北部九州における鉄鏃	74
第13図 他遺跡出土のカリ石灰ガラスとの比較（CaO vs. Al ₂ O ₃ ）	51	第32図 弥生時代における多孔鏃の諸例	75
第14図 古津八幡山遺跡出土のガラス小玉顕微鏡写真	51	第33図 弥生時代後期前半・後半（1・2期）の遺構図	77
第15図 北東地区における弥生時代後期後半（2期）の主な遺構と弥生時代後期末・終末期（3・4期）の主な遺構	53	第34図 弥生時代後期末・終末期（3～6期）の遺構図	78
第16図 古津八幡山遺跡における竪穴建物の規模	54	第35図 県内の弥生時代鉄器出土遺跡及び要素別境界ライン	79
第17図 下馬場遺跡1号・7号竪穴平面図	55	第36図 弥生時代後期の地域圏とネットワーク	80
第18図 県内の土坑から排水溝がのびる竪穴建物	55	第37図 3世紀前半の人の動き	80
第19図 北陸における弥生時代後期・終末期の主な大型建物と遺跡分布図	56	第38図 約2000年前の越後平野の古地理図と道正遺跡・岡崎遺跡	80
		第39図 道正遺跡の線刻土器	80

表 目 次

第 1 表	これまでの調査一覧	6	第 13 表	古津八幡山遺跡出土ガラス小玉の蛍光 X 線分析結果	49
第 2 表	古津八幡山遺跡周辺の遺跡一覧表	9	第 14 表	古津八幡山遺跡竪穴建物一覧	54
第 3 表	史跡 古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会	13	第 15 表	県内における弥生時代後期・終末期 (1～6期)の主な竪穴建物 (古津八幡山遺跡・平地式建物除く)	55
第 4 表	古津八幡山遺跡確認調査指導部会	13	第 16 表	県内における弥生時代後期・終末期 (1～6期)の主な墳墓	57
第 5 表	古津八幡山遺跡確認調査指導部会の経過	14	第 17 表	日本列島における主な木槨墓	58
第 6 表	県・文化庁・有識者等の現地指導経過	14	第 18 表	古津八幡山遺跡における主な遺構の編年対照表	63
第 7 表	調査・整理体制	19	第 19 表	器種別石材表	64
第 8 表	方形周溝墓 SZ743 の埋葬施設一覧	27	第 20 表	新潟県内における弥生時代後期から 終末期に関するガラス小玉出土遺跡一覧	71
第 9 表	トレンチ別・遺構別の石器等集計表	38	第 21 表	県内における弥生時代の鉄器一覧	78
第 10 表	放射性炭素年代測定結果	45			
第 11 表	放射性炭素年代測定結果	48			
第 12 表	放射性炭素年代測定結果	48			

別 表 目 次

別表 1	遺構計測表	92	別表 5	ガラス製品(ガラス玉)観察表	102
別表 2	土器観察表	96	別表 6	鉄製品観察表	102
別表 3	木製品観察表	99	別表 7	銅製品(銭貨)観察表	102
別表 4	石器観察表	100			

図 版 目 次

図版 1	古津八幡山遺跡周辺の旧地形図(1/25,000)	図版 21	北東地区南個別実測図 9(4T)
図版 2	古津八幡山遺跡と周辺の遺跡 1(1/15,000)	図版 22	北東地区北個別実測図 1 (5T6・7、6T3・4、7T1～3、8T1 SZ743)
図版 3	古津八幡山遺跡と周辺の遺跡 2(1/4,000)	図版 23	北東地区北個別実測図 2 (5T1・2、6T3、11～13T SI821・SZ822)
図版 4	第 1～25 次調査位置図(1/3,000)	図版 24	北東地区北個別実測図 3 (5T3～5、6T5、8T2・3、10T SI728)
図版 5	遺跡全体図(1/3,000)	図版 25	北東地区北個別実測図 4 (6T1・2、9T1・2 SI802)
図版 6	北東地区(平成 29～令和 4 年発掘調査区) 遺構全体図(1/600)	図版 26	土器 1 SI1(1)
図版 7	北東地区南(1～4T)グリッド設定図(1/500)	図版 27	土器 2 SI1(2)
図版 8	北東地区北(5～13T)グリッド設定図(1/400)	図版 28	土器 3 SI1(3)・SI401・SI465・SI728・ SI802・SI821
図版 9	北東地区南(1～4T)遺構全体図(1/300)	図版 29	土器 4 SB1・SZ743・SK701・SK706・ SD40・SD819
図版 10	北東地区北(5～13T)遺構全体図(1/300)	図版 30	土器 5 SX42・SX813・P3・P46・P49・ P55・P184・P198・P212・P239・P243・ P285・P512・P631・P654・P703
図版 11	北東地区南(竪穴建物(SI1・SI465)・ 掘立柱建物(SB1)周辺)遺構平面図(1/100)	図版 31	土器 6 P806・遺構外 木製品 SK384
図版 12	北東地区北(竪穴建物(SI802・SI821)・ 方形周溝墓(SZ743・SZ822)周辺)遺構平面図 (1/150)	図版 32	石器 1
図版 13	北東地区南個別実測図 1(1T)	図版 33	石器 2
図版 14	北東地区南個別実測図 2(1T SI1)	図版 34	石器 3
図版 15	北東地区南個別実測図 3(1T SI465)	図版 35	石器 4
図版 16	北東地区南個別実測図 4(1・3T)	図版 36	ガラス製品・鉄製品・銅製品
図版 17	北東地区南個別実測図 5(1T SB1)		
図版 18	北東地区南個別実測図 6(1・3T)		
図版 19	北東地区南個別実測図 7(1T SI401)		
図版 20	北東地区南個別実測図 8(2T)		

写真図版目次

写真図版 1	古津八幡山遺跡周辺空中写真 (国土地理院 昭和 37 (1962) 年撮影)	写真図版 15	SZ743 (5 ~ 8T)
写真図版 2	古津八幡山遺跡周辺空中写真 (上が北 平成 27 年撮影 赤い破線は史跡範囲)	写真図版 16	SZ743 (5 ~ 8T)
写真図版 3	空中写真 (南から 平成 27 年撮影)・ 空中写真 (北西から 平成 27 年撮影 舟戸遺跡上空から古津八幡山遺跡を望む)	写真図版 17	SZ743 (5 ~ 8T)
写真図版 4	1T、SI1・465 (1T)	写真図版 18	SZ743 (5 ~ 8T)
写真図版 5	1T	写真図版 19	SZ743 (5 ~ 8T)
写真図版 6	SI1・465 (1T)	写真図版 20	SZ743 (5 ~ 8T)、SI728 (5T)
写真図版 7	SI1 (1T)	写真図版 21	SI728 (5T)、5T、6T
写真図版 8	SI1 (1T)、1T、SI465 (1T)	写真図版 22	6T、SI802 (9T)、10T
写真図版 9	SI465 (1T)	写真図版 23	SI821・SZ822 (11 ~ 13T)
写真図版 10	SI465 (1T)、1T、SB1 (1T)	写真図版 24	SI821・SZ822 (11 ~ 13T)
写真図版 11	SB1 (1T)	写真図版 25	土器 1
写真図版 12	1T、SI401 (1T)、3T	写真図版 26	土器 2
写真図版 13	2T	写真図版 27	土器 3・木製品
写真図版 14	4T	写真図版 28	石器 1
		写真図版 29	石器 2
		写真図版 30	石器 3
		写真図版 31	ガラス製品・鉄製品・銅製品

第 I 章 序 章

第 1 節 遺 跡 概 観

古津八幡山遺跡は新潟市秋葉区古津・金津地内に所在する。遺跡は新津丘陵の北西端に位置し、樹枝状にのびた支丘陵のうち、北北西にのびた通称金津丘陵に位置する。金津丘陵は、西側は越後平野に面し、東側は古津から金津に抜ける谷によって新津丘陵から分断されている。丘陵は東西 700 ～ 800m ほどの幅をもち、樹枝状に入り組んだ大小の谷が発達する。これらの谷を挟んだ丘陵斜面部には古代の製鉄関連遺跡が分布しており、金津丘陵製鉄遺跡群と呼称されている。金津丘陵の最高点は古津八幡山遺跡のある標高 54.5m である。

古津八幡山遺跡は、標高約 50m の丘陵上にある弥生時代後期・終末期の大規模な高地性環濠集落であり、これまでの発掘調査で竪穴建物 66 棟、方形周溝墓 5 基、前方後方形周溝墓 1 基などが確認されている。なお、環濠は幅・深さとも約 2m の V 字形をなす。また、古墳時代になると弥生時代にあった丘陵上の集落が廃絶する一方、古墳時代中期に直径 60m と県内最大の古墳である古津八幡山古墳が築かれる。弥生時代から古墳時代にかけての変遷や、北陸や東北などとの地域間関係など、当時の日本列島の社会情勢を考える上で核となる重要な遺跡であることから、平成 17 (2005) 年に国史跡に指定された。

本書で報告するのは、平成 29 年度から令和 4 年度に実施した古津八幡山遺跡の確認調査 (第 20 ～ 25 次調査) についてである。調査の結果、史跡指定地外において弥生時代の竪穴建物 6 棟 (うち 1 棟は遺跡で最大となる大型竪穴建物) や方形周溝墓 2 基 (うち 1 基は遺跡で最大となる方形周溝墓で、木柵構造と推測する埋葬施設 1 基を含む計 4 基の埋葬施設を確認) など、弥生時代の重要な遺構が新たに発見された (第 2 表)。このため、今後、史跡の追加指定等を行っていく予定である。

第 2 節 調査に至る経緯と概要

古津八幡山遺跡は平成 17 年 7 月 14 日に、官報告示で約 12ha が国の記念物 (史跡) に指定された。なお、国の史跡に申請するにあたり、全国的に八幡山遺跡の名称が多く存在することから、遺跡の所在する大字名「古津」を冠し、遺跡名を八幡山遺跡から古津八幡山遺跡に変更している。さらに、平成 23 年 2 月 7 日には、古津八幡山古墳及びその周辺域が追加指定された。

史跡申請とともに古津八幡山遺跡の保存整備事業を進め、平成 15 年度から平成 16 年度に八幡山遺跡整備基本計画策定委員会、平成 17 年度からは古津八幡山遺跡保存整備検討委員会により、史跡整備の基本計画や基本設計、整備方針などを検討した。平成 18 年度からは保存整備実施設計を作成し、遺跡のある丘陵上の「史跡公園」において、保護盛土を含む造成工事とともに弥生時代の環濠や竪穴建物、方形周溝墓などの復元整備工事を順次実施した。

そして、平成 24 年 4 月に遺跡のガイダンス施設である「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」(以下、弥生の丘展示館) が開館するのに合わせ、「史跡公園」と「弥生の丘展示館」からなる「新潟市古津八幡山遺跡歴史の広場」(以下、歴史の広場) として暫定供用を開始した (第 1 次整備)。



第 1 次整備で復元された竪穴建物
(平成 24 年撮影)

また、平成23年2月に古津八幡山古墳周辺が追加指定されたことを受け、古墳周辺の確認調査を実施し、その調査成果に基づいて古津八幡山古墳の復元整備工事などを行い、平成26年度に古墳時代復元ゾーンの整備工事も完了した（第2次整備）。このように、平成18年度から平成26年度にわたる整備工事を経て、平成27年4月に歴史の広場は全面公開となった。

その後、平成27・28年度と古津八幡山遺跡保存活用計画策定委員会を設置・開催し、今後も史跡を適切に保存管理し、後世に確実に継承するとともに、より充実した活用、整備を実施していくことを目的に、そのための指針となる『国史跡古津八幡山遺跡保存活用計画』〔新潟市教委2017〕（以下、保存活用計画）を平成28年度に策定した。また、平成29年度からは古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会（以下、推進委員会）を設置し、保存活用計画などの推進を図っている。

本書で報告する平成29（2017）年度から令和4（2022）年度にかけて実施した確認調査（第20～25次調査）は、この保存活用計画に則り実施した。調査の目的は保存目的の遺跡範囲内容確認調査である。調査地は、環濠に囲まれた遺跡の中心部である標高約50mの丘陵頂上部から下った、遺跡北東域の標高約25mの史跡指定地外（民有地）であり、現況は杉や竹が主体となる山林地になっている。

なお、調査地は第1次・第14次調査の際にもトレンチ調査が行われており、縄文時代の遺物や縄文時代の竪穴建物・土坑などが確認されたが、明確な弥生時代の遺物・遺構が検出されなかったことなどから史跡の範囲に含まれなかった経緯がある。

他方、第14次調査で確認された史跡内に位置する弥生時代の竪穴建物2棟（SI1407・SI1408）の地点からは、北へ向かって平坦あるいは緩やかに下っていく尾根がのびており、地形として連続することなどから、保存活用計画において「弥生時代の集落が広がっていた可能性があるものの、これまでの発掘調査範囲は狭く不明な点が多い。このため、追加指定や公有化の範囲を検討するために、発掘調査を行い、遺構の有無を早急に確認する必要がある」とされた。さらに「可及的速やかに発掘調査を行い地下遺構の内容把握を行うとともに、調査結果によって追加指定・公有地化を検討する」とされている。これらの計画に則り、遺跡北東地区において平成29年度から令和4年度にかけて本書で報告する確認調査（第20～25次調査）を実施しており、また、今後追加指定についても行っていく予定である。



弥生の丘展示館開館式（平成24年4月20日）



古津八幡山遺跡全面公開開場式（平成27年4月17日）



第2次整備後の古津八幡山遺跡全景（平成27年撮影）



着手前の現地近景（平成29年撮影）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

新潟市は平成 17 (2005) 年度に近隣の 12 市町村と合併し、平成 19 (2007) 年には 8 つの行政区からなる政令指定都市となった。秋葉区は新潟市域の南東部にあたり、合併前の旧新津市と旧中蒲原郡小須戸町（以下、旧小須戸町）で構成された区である。

秋葉区は越後平野のほぼ中央に位置し、面積は 95.38km² である。主な地形は丘陵・段丘・沖積地から成っており、河川に囲まれて丘陵地や里山がある緑豊かな環境である。区の西側には信濃川が、東側には福島―新潟を流れる阿賀野川が、北側には阿賀野川と信濃川を結ぶ小阿賀野川が流れている。区の南東側は「新津丘陵」と呼ばれる加茂川以北の丘陵〔鈴木郁 1989・鈴木浩 1993〕が南南西から北北東にのびており、遺跡はこの新津丘陵上に立地している。また、新津丘陵東縁を沿うように能代川が流れ小阿賀野川に注いでいる。なお、遺跡から日本海までは直線距離でおおむね北西方向に約 19km が最短となる。



第 1 図 古津八幡山遺跡位置図

現在水田のひろがる沖積地は、信濃川・阿賀野川・能代川の堆積作用が大きな要因で形成されたと考えられており〔鈴木 1993〕、なおかつ、それら河川のかつての流路に伴う自然堤防及び微高地が存在する。越後平野の地質調査で得られた地盤や地質の資料・情報をもとに、地層から推定される堆積環境と堆積年代から復元作成された古地理図の変遷〔鴨居・安井 2004〕によると、約 2000 年前には沿岸部の砂丘列が成長し、内陸側では湿原（泥炭地）が大きく拡大したとされ、新津丘陵の北西側から西側にかけての平野部は湿原となっていたとされる。なお、そのころの信濃川の本流は現在の西川付近を流れ、今の新川河口付近で日本海に注いでいたと考えられている。一方、新津丘陵は山地・丘陵を含み、南側から護摩堂山（標高 268m）・高立山（標高 276m）・菩提寺山（248m）・金比羅山（134m）があり、高立山から北側に向かって標高が低くなる。その山地の周囲に起伏の少ない丘陵が見られ、金比羅山寄りでは標高 100m 程度、北端の秋葉山付近では標高 70～80m と低下する。この丘陵の縁辺部には連続性のない段丘・台地が分布している。

古津八幡山遺跡は新津丘陵の北西端に位置し、そのなかの樹枝状にのびた支丘陵のうち、ほぼ北北西にのびた通称「金津丘陵」の北半部に立地する。周辺は谷により複雑な地形が形成されている。丘陵東側には金津谷がひろがり、丘陵に沿って東大通川（金津川）が北流している。この金津という地区を含む新津丘陵は、かつて「新津油田」と呼ばれる県内でも代表的な油田があった。その鉱場の一つである金津鉱場は、明治 7 (1874) から平成 8 (1996) 年まで操業した近現代の石油の採掘・精製に関わる施設で、周辺には油井や採油の動力源となるポンピングパワーなどが残り、近代のエネルギー産業の発展を知る上で重要であることから、平成 30 (2018) 年に「新津油田金津鉱場跡」として国指定史跡となった。

遺跡のある支丘陵は最高所の標高が 54.5m で、北西・東・南・西へと尾根が続く。この尾根上や緩斜面において弥生時代の集落が営まれ、古津八幡山古墳が築造されている。また、北東方向の下がった台地でも弥生時代後期の竪穴住居が検出され、それまで埋葬地遺跡とされていた場所が古津八幡山遺跡と一体として捉えられることになり〔渡邊・立木ほか 2004〕、さらにこの台地の北側でも後期の竪穴建物や方形周溝墓が検出された〔本書〕。

現在の古津八幡山遺跡からの眺望は西側に越後平野が広がり、海岸部に位置する弥彦・角田山塊が見渡せ、天

候が良ければ佐渡も見える。弥生時代には周辺の情勢・状況を把握するために高所で環濠（条溝含む）を有する高地性環濠集落として生活を営み、一方で古墳時代には平野側からの視線及び古墳からの眺望を意識して尾根の先端付近に古津八幡山古墳を築造したと推測できる。また、古津八幡山遺跡は阿賀野川周辺という弥生時代後期頃には北陸と東北の文化の接点に位置しており、信濃川・阿賀野川・日本海を介した他地域との交流ないし影響を示す遺物が確認されている。このことから古津八幡山の地は交通の要衝ならびに周辺地域の拠点として機能し、その地域を掌握した有力者の墳墓が造られた場所といえよう。

第2節 古津八幡山遺跡の地区別概要

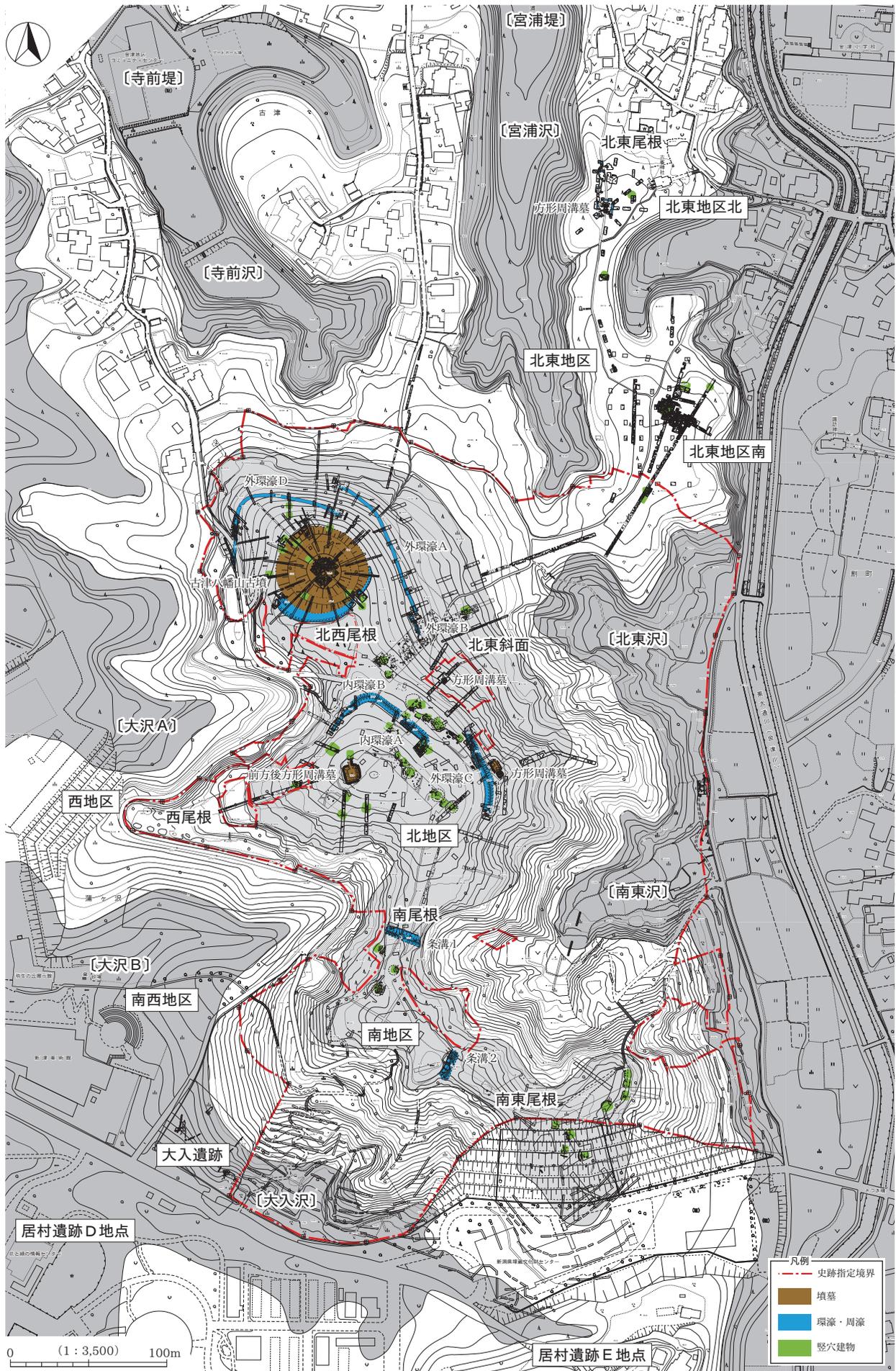
昭和62（1987）年から令和4（2022）年まで断続的に25次にわたる発掘調査が遺跡の立地する支丘陵を中心に行われてきた（第1表）。以下では、第2図で示した地区名称をもとに地区ごとの概要を述べる。

【北地区】 南尾根に位置する条溝1より北側を指し、古津八幡山古墳の立地する北西尾根までが中心地となる。標高は約35～55mで、南北約300m・東西約150mの範囲となる。これまでの調査で弥生時代の竪穴建物が最も多く検出された地区であり、古津八幡山古墳の墳丘盛土の下からも見つかっている。竪穴建物からは炭化米が検出されており、周辺で稲作が行われていたものと推測されている。これらの竪穴建物を囲むようなかたちで環濠が6条（条溝1は含めていない）検出されている。ただし、すべての環濠が同一時期に掘削されたものではなく〔渡邊・立木ほか2004〕、まず外環濠の掘削が行われ、その後に内環濠の掘削と外環濠の再掘削が行われたと考えられている〔笹澤2015〕。また、弥生時代の墳墓は土器棺墓が1基、方形周溝墓が3基、そして遺跡最高所に会津地方へ影響を与えたと考えられる前方後方形周溝墓が1基検出されている。

北西尾根の先端付近に築かれた古津八幡山古墳は、最大長約60mの二段築成の円墳で、部分的な周濠を持つ。築造方法が東日本・西日本の工法が融合したものであることが判明し、西日本的工法の導入は畿内政権との政治関係を築いていたものと考えられる。平安時代には墳頂部に方形の溝が掘削され、その後も様々な要因による削平があり、その影響で古墳の主体部は検出されなかった。良好な出土遺物が無いため確定できないが、築造方法などから古墳時代前期末から中期初頭を中心とする時期に築造された可能性が高いとされている〔相田・渡邊ほか2014〕。なお、古墳のある場所は少なくとも明治初めごろには八幡宮があったと推察され〔相田・渡邊ほか2014〕、この八幡宮は明治40年に古津の諏訪神社に合祀されている〔新津市図書館1979〕。この古墳のある北西尾根から更に分かれるように大略、北東・北・北西方向に細い尾根がのびている。

【北東地区】 北地区の北西尾根から分かれた北東側にひろがる標高約25～26m、南北約120m・東西約50mの平坦な台地（北東地区南）と、さらに北側の尾根続きにのびたところにある標高約23～24mの台地（北東地区北）までを指す。北東地区はいびつであるがおおむね南北250m・東西60～90mの範囲となる。植生は、スギ高木林と二次雑草地を主体とし、他にアカメガシワ林とモウソウチク林で構成されている。北東地区の西側は沢となっており、宮浦堤という溜池が存在する。なお、この宮浦堤の西側にある尾根を挟んで現在は金津地区コミュニティセンターがあるが、この場所にも寺前堤という溜池が存在していた（写真図版1）。

北東地区南は、かつて埋葬地遺跡とされていた場所が第14次調査の結果により古津八幡山遺跡と一体として捉えられることになった場所である〔渡邊・立木ほか2004〕。平成29年度から令和4年度まで行われた調査で、新たに北東地区南で大型竪穴建物などが見つかり、北東地区北では方形周溝墓や竪穴建物が検出された。特筆されるのは複数埋葬の方形周溝墓が検出され、その埋葬施設のうち1基が木槨構造と推測されたことである〔本書〕。この新たに見つかった方形周溝墓の北東側には古峯神社が鎮座する（図版6）。この辺りにはかつて熊野神社や八坂神社、そして八坂神社と並んで佐義神社があった。熊野神社は明治40年に古津の諏訪神社に合祀され、八坂神社も明治43年に同じ諏訪神社に合祀された。残った佐義神社が古峯神社と称するようになって現存している〔新津市図書館1979〕。古峯神社境内には金比羅の石祠と、大山祇大神と刻字された石塔が存在する〔斎藤1991a〕。



第2図 古津八幡山遺跡周辺概念図・地区名称

第2節 古津八幡山遺跡の地区別概要

第1表 これまでの調査一覧

年度		発掘調査				発掘調査の概要	調査面積	調査報告書	
S62	1987	確認調査	1次	北地区 (古墳)	1987 (S62) 9.28~10.9	市教育委員会による確認調査(担当 県文化行政課戸根) 八幡山城跡-古墳の可能性を指摘。 盛土下から竪穴住居跡検出。八幡山遺跡の発見	502㎡	『八幡山遺跡発掘調査 報告書』2001(新津市 教委)	
		確認調査	2次	北地区	1987 (S62) 11.24~12.8	市教委(担当 川上)による確認調査	77㎡		
					1988 (S63) 3.8	八幡山遺跡発見通知を文化庁に提出			
S63	1988	確認調査	3次	北地区	1988 (S63) 6.23~9.16	市教委による確認調査(担当 川上) 環濠・住居跡・前方後方形周溝墓等の検出	3,317㎡		
		確認調査	4次	南地区	1988 (S63) 9.21~10.3	市教委による確認調査(担当 川上・荒木) 遺物出土、「狼煙台」とされる焼土坑の検出	207㎡		
		確認調査	5次	南地区	1988 (S63) 11.9~11.18	市教委による確認調査(担当 伊与部) 竪穴住居跡の検出	156㎡		
H2	1990	本発掘 調査	6次	南地区 (記録保存)	1990 (H2) 5.26~7.9	市教委による発掘調査(担当 川上)	6,500㎡		
		確認調査	7次	南地区・ 南西地区	1990 (H2) 7.23~8.10	県文化行政課・市教委による確認調査(担当 渡邊) 南地区で環濠・住居跡等の検出 遺跡の範囲拡大	13,180㎡ (第6次調査分含む)		
H3	1991	本発掘 調査	8次	南地区 (記録保存)	1991 (H3) 5.20~10.31	市教委による発掘調査(担当 渡邊) 住居跡・焼土坑の検出	9,000㎡		
		測量調査		北地区 (古墳)	1991 (H3) 6.25~8.31	古津八幡山古墳の測量調査(古津八幡山古墳調査団 代表 新 潟大学教授 甘粕 健) 墳丘長約60mの2段構築の造出し付円墳と推定			『古津八幡山古墳Ⅰ 1991年測量調査報告』 1992(新津市教委)
H5	1993	確認調査	9次	北地区	1993 (H5) 9.21~11.5	市教委による確認調査(担当 渡邊) 環濠が古墳の東側・北東斜面に100m以上延びることを 確認	372㎡		『八幡山遺跡発掘調査 報告書』2001(新津市 教委)
H6	1994	確認調査	10次	北地区	1994 (H6) 9.16~11.14	市教委による確認調査(担当 渡邊) 環濠の確認 初めて方形周溝墓2基検出	590㎡		
H12	2000	確認調査	11次	北地区 (古墳)	2000 (H12) 7.3~7.7	市教委による古津八幡山古墳の確認調査(担当 立木) 環境省の測定所撤去に伴う事前確認調査	15㎡		
H13	2001	確認調査	12次	北地区 (古墳)	2001 (H13) 3.16~5.18	市教委による古津八幡山古墳の確認調査(担当 立木) 環境省の測定所撤去に伴う確認調査	46.18㎡		
H14	2002	確認調査	13次	北地区	2002 (H14) 6.3~10.7	市教委による確認調査(担当 渡邊) 外環濠・内環濠の各末端を確認し、各所で分断しているこ とを確認 竪穴住居と環濠の重複関係を確認	843.9㎡		『八幡山遺跡群発掘 調査報告書-第11・ 12・13・14次調査-』 2004(新津市教委)
H15	2003	確認調査	14次	北地区・ 北東地区	2003 (H15) 5.23~10.23	市教委による確認調査(担当 渡邊) 埋葬地遺跡で弥生時代の竪穴住居を検出 古津八幡山古墳の北西斜面で新たな環濠を確認	1,060.25㎡ (北地区698.54㎡、 北東地区361.71㎡)		
H18	2006	確認調査	15次	東側斜面 (東谷)	2006 (H18) 9.25~11.10	市教委による確認調査(担当 相田) 製鉄関連遺構を検出 水田遺構は検出されず	84.6㎡ (1・2T)		
H22	2010	確認調査	16次	北地区	2010 (H22) 6.14~7.24	市教委による確認調査(担当 渡邊すみ) 古津八幡山古墳北西にある外環濠Dの南東端を確認 2系統の外來系土器が伴って出土	56.3㎡ (1~4T)		
		レーダー 探査		北地区 (古墳)	2010 (H22) 8.30~9.1	古津八幡山古墳墳頂部のレーダー探査調査(代表 東京工業 大学教授 亀井宏行)		『史跡古津八幡山遺跡 発掘調査報告書 -第15・16・17・ 18・19次調査-』 2014(新潟市教委)	
H23	2011	確認調査	17次	北地区 (古墳)	2011 (H23) 7.11~11.25	市教委による古津八幡山古墳確認調査(担当 相田) 古墳や周濠の形・規模が判明	443.13㎡ (1~20T)		
H24	2012	確認調査	18次	北地区 (古墳)	2012 (H24) 5.29~12.25	市教委による古津八幡山古墳確認調査(担当 相田) 古墳の築造方法が判明 墳頂部で平安時代の方形に巡る溝 を確認	459.58㎡ (21~37T・墳頂部)		
H25	2013	確認調査	19次	北地区 (古墳)	2013 (H25) 6.3~8.20	市教委による古津八幡山古墳確認調査(担当 渡邊) 周濠の形状が判明 古代の焼土坑を確認	86.0㎡ (38~43T)		
H29	2017	確認調査	20次	北東地区 (史跡外)	2017 (H29) 7.19~11.13	市教委による確認調査(担当 相田) 弥生時代の竪穴建物、柱穴群を確認	218.0㎡		
H30	2018	確認調査	21次	北東地区 (史跡外)	2018 (H30) 5.30~11.2	市教委による確認調査(担当 相田) 掘立柱建物を確認 弥生時代終末期の大型竪穴建物(SI1)を確認	195.0㎡		
R1	2019	確認調査	22次	北東地区 (史跡外)	2019 (R1) 5.27~11.19	市教委による確認調査(担当 相田・小林) 弥生時代終末期の大型竪穴建物(SI1)やその周辺を確認	212.4㎡		
R2	2020	確認調査	23次	北東地区 (史跡外)	2020 (R2) 7.6~10.17	市教委による確認調査(担当 相田・田中) 弥生時代終末期の大型竪穴建物(SI1)や尾根北側を確認	141.2㎡	本書	
R3	2021	確認調査	24次	北東地区 (史跡外)	2021 (R3) 6.28~11.24	市教委による確認調査(担当 相田・平山) 弥生時代後期・終末期の竪穴建物や方形周溝墓などを確認 方形周溝墓(SZ743)は内部に3基の埋葬施設を確認	194.7㎡		
R4	2022	確認調査	25次	北東地区 (史跡外)	2022 (R4) 7.20~11.18	市教委による確認調査(担当 相田・平山) 弥生時代後期・終末期の竪穴建物や方形周溝墓などを確認 昨年見つけた方形周溝墓(SZ743)は内部に計4基の埋 葬施設を確認。うち1基は木柵構造の埋葬施設と推定	179.7㎡		

【南地区】 条溝 1 よりも南側で、北西から南東にのびる南東尾根までの範囲を指す。いびつであるが長軸約 200m・短軸約 30～70m の範囲で、標高は 45～50m 程度となる。南尾根と南東尾根に尾根筋を分断するかたちで条溝 2 が掘られている。条溝 1 と 2 の間の多少開けたところに竪穴建物 3 棟が検出され、条溝 2 よりも南東側にのびる尾根上の緩斜面で 8 棟の竪穴建物が検出されている。

【東側斜面の裾部分】 第 15 次調査で平安時代の遺構や遺物を中心に検出されている。製鉄関連遺物が認められており、炉壁や炉内滓があつて流動滓が多く出土していることから、周辺に箱形炉が存在したものと判断されている〔相田ほか 2014〕。古代の新津丘陵は官による手工業生産（製鉄・窯業）の一大基地となっており、なかでも金津地区は製鉄遺跡が多い場所となっている。したがって周囲に製鉄関連の遺構が存在する可能性はあろう。

第 3 節 周辺 の 遺 跡

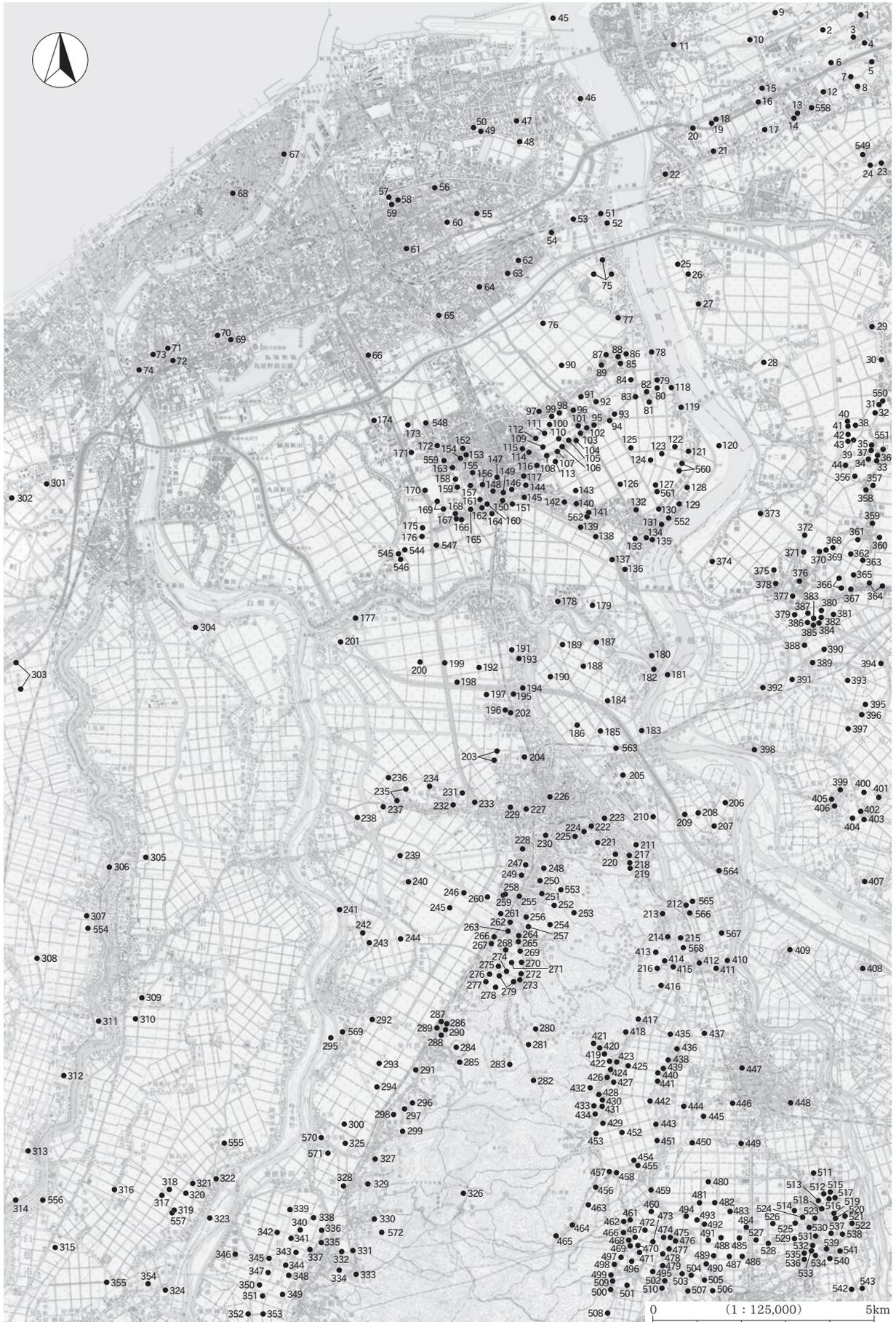
新潟市内では 791 遺跡、秋葉区内では 134 遺跡が確認されている（令和 6 年 3 月 31 日時点）。区内を中心に述べ、必要に応じて他区・他市町村の遺跡について言及する。位置などに関しては第 3 図・第 2 表・図版 2・3 を参照していただきたい。

旧石器時代の遺跡 秋葉区内では新津丘陵上の草水町 2 丁目窯跡〔新潟市 2007〕、秋葉遺跡〔前山 2014〕で石器が出土し、古津八幡山遺跡でもナイフ形石器が出土している〔渡邊・立木ほか 2001・2004〕。

縄文時代の遺跡 丘陵上から丘陵末端にかけて多く分布し、沖積地には少ない状況である。草創期の石器が出土した遺跡として愛宕澤遺跡〔立木ほか 2004〕と、古津八幡山遺跡がある〔渡邊・立木ほか 2001〕。また、早期後半の土器も古津八幡山遺跡で出土した〔本書〕。前期になると前葉の居村 C 遺跡〔渡邊・小田ほか 1997〕、前期末葉は草水町 2 丁目窯跡や丘陵末端部の程島館跡〔龍田ほか 2023〕で遺物が出土している。また、平遺跡では前期前葉・終末、中期前葉、後期前葉から中葉、晩期後半と各期の土器が確認されている〔川上ほか 1983、前山ほか 2023〕。中期・後期の遺跡としては原遺跡で中期から晩期後葉までの土器が出土し〔立木ほか 2023〕、秋葉遺跡では中期前葉から後期初頭の土器が出土している〔今井ほか 2021〕。また、沖積地にある大野中遺跡では中期前葉から後期前葉の土器が地下 2m 前後から出土している〔前山 2018〕。晩期を主体とする遺跡は沖積地に立地する大沢谷内遺跡〔細野ほか 2012、相田ほか 2020〕と大沢谷内北遺跡〔前山ほか 2010〕がある。大沢谷内遺跡は晩期中葉から後葉、大沢谷内北遺跡は晩期中葉後半の遺跡である。なお、大沢谷内遺跡ではアスファルト関連資料が多数出土しており、油田に伴う天然アスファルトが縄文時代から使用されていたことを示している。

弥生時代の遺跡 周辺の沖積地に立地する遺跡は数が少なく、依然として丘陵上や丘陵裾部の立地が多い。丘陵上では、原遺跡で前期の土器が出土し〔立木ほか 2023〕、秋葉遺跡では中期前葉の土器が 1 点〔渡邊・立木ほか 2004〕、平遺跡では後期前葉の土器が単独で出土している〔前山ほか 2023〕。古津八幡山遺跡の周辺では丘陵裾部の舟戸遺跡で中期後半・後期前半・終末期の遺物が出土している〔金田ほか 2017〕。また、舟戸遺跡に隣接する塩辛遺跡では中期後葉・後期の土器が出土している〔渡邊・立木ほか 2004、渡邊 2015〕。丘陵上にある居村 C 遺跡では終末期の土器〔渡邊・立木ほか 2001〕が出土し、山境遺跡〔渡邊・立木ほか 2001〕や丘陵裾部の森田遺跡〔八藤後 2005〕でも出土量は少ないが後期や終末期の土器が出土している。沖積地では大沢谷内遺跡で後期の土器が少量見つかっている〔川上 1990、細野ほか 2012〕。

また、古津八幡山遺跡は高地性環濠集落という性格を持つ。周辺で似た集落形態の遺跡は、新津丘陵上に五泉市大倉山遺跡〔川上 1994a、前山 1999〕と南蒲原郡田上町（以下、田上町）中店遺跡〔中島ほか 1976〕がある。両遺跡とも後期の遺跡で、周囲との高低差がある立地のため高地性集落と考えられている〔滝沢 2009e〕。大倉山遺跡では土器や石器が採集されており、土器は北陸系が主体であるが、続縄文土器も確認できる。未調査であり環濠の有無は不明である。中店遺跡は埋設土器の可能性が高い土器が検出されていることから、墓域と推測されている。ほかにも少量の土器が出土しているが、土器の大半は東北系である。なお、環濠は確認されていない。



第3図 周辺の遺跡分布図

第2表 古津八幡山遺跡周辺の遺跡一覧表

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	笹山A	縄	113	砂原早稲田	縄・古代・近世	228	程島館跡	戦	343	田上館跡	室	458	便正城跡	室
2	上舟橋	縄	114	塚ノ山	縄	229	新津城跡	平・南～戦	344	館内	奈・平	459	町屋六条	古代・中世
3	笹山B	縄	115	袋津向山	縄	230	古岡	平	345	二段あけ	平	460	下ノ坪南	平
4	笹山D	平	116	砂岡	平	231	腰塚	室・安	346	ガンゴウ寺	平	461	下ノ坪南	平
5	引越	平	117	茨木	古代	232	諏訪神社石仏	中世	347	上谷内	奈・平	462	下ノ坪南	古代・中世
6	笹山C	縄	118	居府B	不明	233	裏田郷	古代	348	中谷内	奈・平	463	八幡平	縄
7	あかしやだん	平	119	居府C	不明	234	浄菜	室	349	平ノ木	奈・奈・平	464	八幡平	縄
8	内島見B	平	120	小杉中洲	古墳	235	小戸ノ組	平・鎌～室	350	八反田	奈・平	465	古吉	縄
9	横山	平	121	松原寺	平	236	西沼	平	351	竹ノ花	奈・平	466	中ノ坪	平
10	向山	平	122	居府A	平～室	237	長左工門沼	平	352	保明浦	縄・奈・平	467	中ノ坪東	古代
11	神谷内	古代	123	山のハサバ	平	238	川根	古代～中世	353	川成	奈・平	468	中ノ坪南Ⅲ	平
12	たやしき	縄・古墳・鎌～室	124	小杉上田	縄・古代	239	下梅ノ木	平・鎌～南	354	仲作	中世	469	中ノ坪南Ⅱ	古代
13	尾山A	平	125	江尻	平	240	曾根	平	355	大手町	平	470	中ノ坪南Ⅰ	古代
14	尾山B	平	126	新田郷	平	241	浦奥野	古代	356	山鳥屋敷	古墳・古代・中世	471	中名沢	平
15	樋ノ入A	縄	127	宮尻郷	古代	242	桜行塚	不明	357	要吉	不明	472	梨木	平
16	樋ノ入B	縄	128	下郷	平	243	杉行塚	不明	358	駒林要害跡	室	473	夜明	平
17	尾山C	平	129	下郷経塚	安	244	江先	縄	359	土居内製鉄	不明	474	千原	平
18	樋ノ入C	縄	130	曾我墓所	平	245	中郷	平	360	土居内西	平・中世	475	川端北	平
19	寺ノ山	室	131	下郷南	平・鎌～室・近世	246	古通	平	361	轟	平・中世	476	川端南	平
20	法華塚	江	132	新田郷南	古墳・平	247	山崎	縄	362	善四郎谷内C	平・中世	477	中坪	平
21	築土山	平	133	横越館跡	室	248	城見山	縄・古代・中世	363	善四郎谷内	不明	478	浦西	古墳
22	新崎	古代	134	上郷D	平	249	沢海	縄	364	土居内	中世	479	笹野町A	平
23	正尺C	古墳	135	上郷B	平	250	原	縄	365	羽宮場	中世	480	善形北Ⅰ・Ⅱ	平
24	鳥屋	縄	136	上郷A	古代	251	大坪	古代	366	大曲川端	平	481	善形西Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	平
25	下前川原	平・室	137	上郷A	古墳・平	252	平林	縄	367	はかへ畑	不明	482	善形中Ⅰ・Ⅱ	平
26	森下古銭出土地	室	138	川根谷内	平	253	東島城跡	室	368	善四郎谷内	平	483	三軒屋	平
27	高森	平	139	川根谷内墓所	平・室・近世	254	山崎	縄・弥・江	369	善四郎谷内	中世	484	善形東	平
28	饅内	平	140	川根谷内	古代	255	東島大道下	古墳・古代・鎌・室	370	彌山	弥	485	善丈東	平
29	浦木	中世	141	下郷西	中世	256	山脇	古墳・平	371	曾根前	中世	486	小新保東	平
30	村下	古代	142	上沼	古代	257	森田	弥・古墳・平・中世	372	村下	平	487	小新保中	平
31	中道B	古代	143	筑木	奈・平	258	西島館跡	中世	373	下谷地	中世	488	善丈西	平
32	長場	平	144	亀田六枚田	古墳・飛・奈	259	板大門	平	374	曾根	平	489	小新保西	平
33	上堀田石仏C	中世	145	岡田	平	260	西島谷内	古代	375	城館跡	平	490	本久	平
34	上堀田石仏B	中世	146	所島前	縄・古代～近世	261	舟戸	弥・古墳・古代	376	本田裏	中世	491	善丈西	平
35	池田B	古代	147	三上山	古墳・平・中世	262	塩辛	弥・古墳・古代・中世	377	町道下	中世	492	善形南	平
36	上堀田	古代	148	亀田城山B	南・室・江	263	高矢C	古墳	378	城	不明	493	坪子東	平
37	池田A	古代	149	齊助山	縄・弥・古代	264	高矢A	縄	379	村前	中世	494	坪子西	平
38	山敷野神田A	古代	150	亀田城山A	縄・弥・古代	265	高矢B	縄	380	村前B	不明	495	浦	平
39	桜曾根	古代	151	牛道	平	266	二百刈	縄・古代	381	山口	縄・弥・古代・鎌・室	496	夜明南	古代
40	大夫曾根	平	152	市川裏	平・鎌	267	下谷地	縄	382	梶目木	古代・中世	497	上ノ坪	平
41	山敷野神田B	古代	153	西	平・鎌	268	古津八幡山古墳	古墳	383	清水家石仏	中世	498	家の浦	中世
42	並柳	古代	154	狐山	古代	269	古津初越B	古代	384	下の橋館跡	室	499	山ノ入	平・中世
43	桜曾根B	古代	155	貝塚	古代	270	古津初越A	古代	385	細屋	中世	500	山ノ入南	平・中世
44	上堀田石仏A	中世	156	荒木山	縄・平・中世	271	古津八幡山	旧・縄・弥・古墳・平	386	下の橋	不明	501	山ノ入	古代
45	阿賀野川河口	縄・古墳・平・中世	157	中ノ山	古墳・古代・中世	272	金津初越B	古代	387	村前東A	古代・中世	502	笹野町B	平
46	津島屋の石仏	南	158	手代山北	平・中世	273	金津初越A	古代	388	藤の木	室	503	太田北	平
47	居浦郷	平	159	手代山	弥・古墳・古代・鎌	274	大入	古代	389	諏訪神社	中世	504	城下西	平
48	古屋敷	古代・室・江	160	日水南	縄・弥・古墳・古代・室	275	鳥撃(打)場	縄	390	掛上り	不明	505	城下東	平
49	溜池	平	161	日水	古墳・古代・中世	276	神田	縄・古代	391	ナカクラ様	不明	506	城下東	平
50	宮浦	中世	162	日水前	縄・弥・平	277	居村A	平・古代	392	小河原	中世	507	太田中	平
51	本所居館跡	中世	163	日水	縄・弥・平	278	居村B	平・古代	393	七島館跡	不明	508	中丸北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	平・中世
52	堤内	中世	164	亀田道下	古代・近世	279	居村C	縄・弥・古代	394	境塚	平・近世	509	上ノ坪南	古墳
53	石動	縄・弥・古墳・平・中世	165	城所道下	平	280	十ヶ沢A	弥	395	中島神宮の石仏	室	510	江口橋	古墳
54	岡山の石仏	中世	166	武左衛門裏	縄・弥・古墳・古代	281	十ヶ沢B	南	396	中島の観音様石仏	室	511	相輪銅或寺塔	室
55	寺山	中世	167	八幡前	弥・平	282	金津城跡	縄	397	天神林の石仏	室	512	観成寺経塚	中世
56	牡丹山諏訪神社	古墳	168	養海山	縄・弥・古墳・平	283	坪が	縄	398	嘉瀬島諏訪社	中世	513	八反畑	中世
57	山本戸居下	平	169	大蔵	古代	284	坪が寺跡	中世	399	村下の石仏	室	514	門後	中世
58	山本戸居上	古墳・古代・中世	170	西郷	縄・弥・古代	285	西善寺石仏	中世	400	坪寺の石仏	室	515	門後墳墓	室
59	山本戸居付	平・平安・中世	171	泥湯	平	286	三沢B	平	401	江ノ端の石仏	室	516	門後北墳墓	鎌
60	竹尾西	平	172	西	古墳	287	三沢原	縄	402	新明野	室	517	門後南	中世
61	竹尾	平	173	龜ノ子	平	288	九つ塚	不明	403	分田館跡	室	519	荒屋	中世
62	笹ヶ馬場B	鎌～江	174	駒ノ湯	平・鎌	289	三沢塚	不明	404	内山王	室	520	荒屋墳墓	室
63	笹ヶ馬場A	平・室	175	早通前	平	290	五本田館跡	平	405	玉泉寺の石仏	室	521	高内西	中世
64	下場	平・中世	176	西前郷	縄・古代	292	東殿付	奈	406	玉泉寺石仏	中世	522	高内	中世
65	石山	中世	177	円通寺石仏	中世	293	大沢谷内北	縄・弥・古代・中世	407	大岡家蔵石仏群	南～室	523	大畑	中世
66	石仏山	中世・近世	179	天王寺	平	294	大沢谷内南	縄・弥・飛・古代・中世	408	高山石造物群	南	524	笠照寺五輪塔	鎌
67	旧新湯税関跡	近代	180	居居移	古墳・平・中世・近世	295	橋川浜堤外地	縄・平～室	409	山山石仏	中世	525	馬場西Ⅱ	古代・中世
68	近世新湯町跡	近代	181	長島(城跡)	平	296	浦ノ沢	古代	410	下家館跡	不明	526	善宮西Ⅱ	縄・平
69	女池稲荷	平	182	長崎	平・鎌	297	西紙屋山館跡	奈・中世	411	龜崎古銭出土地その1	中世	527	善宮西Ⅰ	古代・中世
70	親仁山	平・中世	183	新田久保	平	298	六兵衛沢蒸跡	平	412	龜崎古銭出土地その2	中世	528	善宮南	古代
71	愛宕の塚(二ノ丸方霊塔)	中世・近世?	184	無頭	平	299	鎌倉新田居村	縄	413	小丸山	縄・弥・古代	529	馬場	中世
72	地蔵山	鎌・室	185	大下	平	300	石ヶ沢上谷内	古墳・古代	414	大野山	平	530	馬場館跡	中世
73	鳥屋野	中世	186	山ノ浦	平	301	的場	縄～中世	415	山崎窯跡	奈	531	善宮西Ⅱ	縄・平
74	上中沢	中世	187	新久免の塚	室～江	302	神野	縄～中世	416	柳倉	不明	532	善宮東	中世
75	江口館跡	中世	188	内野	平・中世	303	釈迦堂	平・中世	417	日光寺	不明	533	善宮南	中世
76	西野	平・中世	189	中谷内	古墳・平・中世	304	林業寺の五輪塔	室	418	丸田館跡	室	534	善宮東	古代
77	大淵	平	190	沖ノ羽	古墳・古代・中世	305	小坂居付	中世	419	丸田館跡	室	535	小新保東	平
78	細山石仏	室	191	結七島	古墳・古代	306	味方排水機跡	縄	420	堀	室	536	下五輪塔	鎌
79	中山	縄・古墳・古代	192	内畑	古墳・平	307	味方水路	平	421	堀之内室裏印塔	中世	537	福蔵寺石仏群	南
80	城山	縄・古墳・平・鎌	193	内畑	平・中世・江	308	千日	平	422	中沢	不明	538	荒屋南墳墓	中世
81	笹山前	縄・弥・古墳・古代	194	内畑	平・中世・江	309	千日	中世	423	中沢北	不明	539	熊野堂南	中世
82	神明社裏	平	195	川口甲	平	310	下浦廻	鎌・南	424	丸田	平	540	熊野堂南	縄・古代
83	山	平	196	川口乙	平	311	下浦内	縄	425	丸田	平	541	彌定院五輪塔	鎌
84	松山向山	平	197	上浦B	古墳・古代	312	西寄場	弥	426	橋田北	不明	542	久津	縄
85	松山	縄・中世	198	上浦A	古代・中世	313	早稲田	弥・古代	427	遺倉	古代	543	中原	中世
86	直り山A	平	199	結	古墳・奈	314	水戸下	古代	428	赤坂	平	544	道下	縄・古墳・平
87	直り山B	平	200	長沼	飛・平・鎌	315	捨茶番割	古代	429	善本北	不明	545	岡崎南	中世
88	小丸山東	平安	201	下等別当	平	316	藤野	鎌	430	善本南	不明	546	五香田	縄・古代
89	小丸山	縄・古墳・平・中世	202	宅地郷	古代・中世	317	下石基	中世	431	善本南	不明	547	土居内	中世
90	東園	縄・弥・古墳	203	宅地郷	古代・中世	318	下石基	室	432	四十九沢	不明	548	土居内	中世
91	茗荷谷墓地	平	204	堀堀	中世	319	馬場屋敷	室	433	大倉山	弥	549	寺前藤経塚	江
92	茗荷谷	古代	205	大野中	縄・平	320	茗宮様	室	434	大倉山尼寺跡	中世	550	中道A	古代
93	藤山	平・鎌	206	下久保	平	321	観野	室	435	善宮下	古代	551	里飯野	平
94	上の山	縄・弥・平	207	道上	平	322	庄瀬館跡	室	436	村付	中世	552	下郷中	平
95	駒込小丸山	縄・弥・古代	208	盛岩寺石仏	中世	323	元屋敷	中世	437	中野	縄	553	稚子の墓	不明
96	丸山	平	209	細池寺道上	平・中世・近世	324	元屋敷	中世	438	日ノ明	縄	554	江向	鎌
97	清水が丘	平	210	西江浦	平	325	行屋崎	古墳・飛・奈・平	439	堀	平	555	牛崎館跡	不明
98	大道外	平・中世	211	居居の塚	室	326	藤澤堂城跡	室	440	櫻表	古代・中世	556	永安寺の五輪塔群	江
99	大道外	平・中世	212	大園館跡	中世	327	五社神社	縄	441	櫻表南	鎌～南	557	馬場屋敷の塚	江
100	彦七山	古代	213	大園館跡	中世	328								

古墳時代の遺跡 区内の墳墓は既述した古津八幡山古墳がある〔甘粕・川村ほか1992、渡邊・立木ほか2004、相田・渡邊ほか2014〕。また未調査ではあるが、直径19mの三沢塚（円塚古墳）という古墳の可能性が指摘される塚が新津丘陵西麓にある〔川上ほか1987、新潟市2007〕。隣接する田上町には前期と考えられるエゾ塚古墳〔川上1994b〕が新津丘陵上に存在する。

古津八幡山遺跡の周辺の集落は、舟戸遺跡、高矢C遺跡〔川上1989〕、森田遺跡、塩辛遺跡などが存在し、舟戸遺跡〔川上1995、相田2015、金田ほか2017〕では中期の竪穴建物や遺物が見つかり、塩辛遺跡〔渡邊・立木ほか2004〕では後期の遺物が定量出土している。丘陵の北側に広がる沖積地では、中期・後期の沖ノ羽遺跡〔星野ほか1996、立木ほか2008、遠藤ほか2014〕や、中田遺跡〔笹澤（諫山）2009〕などが点在する。丘陵南側の沖積地では大沢谷内遺跡で前期・中期の遺物が少量報告されている〔細野ほか2012、相田ほか2015・2020、遠藤ほか2018〕。

古代の遺跡 飛鳥時代の遺跡は県内でも希少であるが、沖積地に大沢谷内遺跡〔細野ほか2012〕や長沼遺跡〔渡邊1991〕がある。大沢谷内遺跡は7世紀後半の集落跡で、祭祀場を持つなど一般集落とは異なり、一種の官的要素を担っていたものと考えられている。長沼遺跡では7世紀後半から8世紀初頭の土器が出土している。

奈良・平安時代は平野部に数多くの集落が立地し、丘陵部は生産遺跡が多い。本遺跡付近では居村A・B・C遺跡や大入遺跡などで製鉄炉と木炭窯が確認されており、一帯は金津丘陵製鉄遺跡群〔川上1996、渡邊・小田ほか1997、渡邊・穴澤ほか1998〕と呼称され、8世紀から12世紀まで続いたものとされる。また、本遺跡から少し離れた新津丘陵北東側には七本松窯跡群〔中川・倉田1956〕・草水町2丁目窯跡〔新潟市2007〕などがあり、五泉市側にも山崎窯跡〔川上ほか1981〕が存在することから、付近は新津丘陵窯跡群と呼ばれている。このように奈良・平安時代の新津丘陵一帯は手工業生産の場となっている。

中世の遺跡 集落が平野部の微高地に、城館跡が平野部の微高地や丘陵及び丘陵裾部に、製鉄遺跡が丘陵上に立地している。大沢谷内遺跡では水田跡などの生産域や掘立柱建物による居住域が検出され、12世紀から14世紀の土器・陶磁器が定量出土し、出土例の少ない骨角製の筭や栗形などが確認されることから、古代から継続する有力者層の集落として位置づけられている〔相田ほか2015〕。細池寺道上遺跡では鎌倉～室町時代の掘立柱建物や道路状遺構、水田、青白磁合子が副葬される方形区画墓などが検出されている〔立木ほか2021など〕。城館跡は程島館跡が調査されており、掘立柱建物や井戸が検出され、井戸からは木製品も出土している。出土した木製品の年代測定では15世紀中頃から17世紀前半という結果が得られ、年代の判明するわずかな中世陶器もこの年代幅に収まる資料が出土している〔龍田ほか2023〕。

近世の遺跡 発掘調査例も少なく、区内の遺跡はわずかとなる。能代川の自然堤防上に立地する江内遺跡では掘立柱建物や井戸などの遺構や、肥前系陶磁器を主体とする遺物が確認され、17世紀前半頃に成立した集落が現在の集落まで存続しているものと考えられている〔春日ほか1996〕。

第4節 歴史的環境

遺跡のある秋葉区は古代では蒲原郡に属していたとされる。越後国は持統6（692）年ごろまでは阿賀野川周辺以北の出羽地方を含む範囲であり、北方との境は画定していなかった。その後、大宝2（702）年に越中国から頸城・古志・魚沼・蒲原の4郡が越後国に編入された。この持統6年ごろから大宝2年までの越中国であったころの蒲原郡の管轄範囲は、平成17年の大合併前の旧中蒲原郡・旧西蒲原郡・旧南蒲原郡の一帯と考えられている〔小林1995〕。また、阿賀野川を蒲原郡と沼垂郡の郡境にするよりは丘陵尾根で境にしたほうが合理的として、平成の大合併前の旧東蒲原郡も古代の蒲原郡の範囲内という考察もある〔相澤2012a・b〕。したがって、古代の蒲原郡の範囲はおおむね南は三条市近辺から北は阿賀野川周辺までと考えられ、秋葉区は蒲原郡内と考えられる。この郡域は南北朝期に蒲原郡の郡域が旧沼垂郡を含む領域に拡大するまで大幅な変更はないと思われる。

郡内には郷という下部の行政単位がある。10世紀前半の『和名類聚抄』には蒲原郡に日置・桜井・勇礼・青

海・小伏の5つの郷が記載されており〔木村1989a〕、これらの郷は地名や式内社、古墳・古代の遺跡の存在などから所在地が推定されている。桜井郷は弥彦村、勇礼・小伏郷が三条市周辺、青梅郷が加茂市周辺と考えられており、日置郷はどの辺りかということになる。『新津市史』では中世の公領のひとつである金津保の存在から、日置郷は旧新津市周辺ではないかと考えられている〔木村1993〕。一方で、『和名類聚抄』に記されたこの郷名の記載順には郡内における命令伝達経路と関係する一定の規則性があることなどを踏まえ、日置郷は信濃川河口付近から海岸砂丘地を経て角田山東麓にかけての地域とする解釈もある〔相澤2012b〕。なお、新潟市西蒲区にある下新田遺跡〔龍田ほか2015〕から「日置口」と書かれた墨書土器が出土し、この文字を郷名とすれば日置郷の範囲が角田山東麓からさらに東方の沖積地にも及んでいた可能性が指摘されている〔相澤2015〕。

未だにこの頃の秋葉区が何れの郷であったか定かではないが、古代では一郡一窯体制で行われていたとされる須恵器生産が新津丘陵では早ければ7世紀後半には始まっている。さらに窯業と燃料が薪と木炭という点で共通する金津丘陵製鉄遺跡群も古代に存在する。また、区内の大沢谷内遺跡は647年に造営された沼垂柵との関係性が指摘されており〔細野ほか2012〕、これらのことから古代の秋葉区は少なくとも官と何らかの関係が想定できる重要な地域であったことが推測される。

中世になると先述のように秋葉区は金津保に含まれていたと推定されている。金津保の成立時期は明確ではないが、他の公領と同様に11世紀後半から12世紀後半に至る院政期と考察されている。保域を示す資料をみると、「金津保」として文献で初めて登場するのは南北朝期の建武3（1336）年11月18日の『羽黒義成軍忠状写』であり、足利方（北朝方）の羽黒義成が「金津保新津城」に引き籠り、新田方（南朝方）の小国政光ら敵方と戦ったことが記されており〔田村1989c〕、金津保域に新津城があることが示されている。

15世紀末から16世紀初頭段階の金津保内の状況を示す内容で、明応年間から永生初年（明応・永生年間：1492～1521）に作成されたと考えられる『蒲原郡段銭帳』がある〔田村1989d〕。この中での金津保内の在地領主の名前は村落名と共通している場合があることから、一部の名称は旧小須戸町の土豪を示すとも推測されている〔田村1993〕。また、天文13（1544）年10月10日『上杉玄清定実知行宛行状』の中に「金津保下条村」とあり〔竹田1989a〕、これを新津市史では五泉市の下条を指すと捉えているが、肯定的ではない見解〔川上・木村ほか2002〕もある。ほかにも天正5（1577）年の『三条同名同心家風衆給分御帳』には「金津保内之内遊川」とあり〔竹田1989b〕、「遊川」が現在の田上町湯川と考えられることから湯川は金津保内の範囲と考えられている〔田村1993、山上1994〕。年代により領域に若干の違いがあった可能性はあるが、金津保はおおむね旧新津市を中心に旧小須戸町（現秋葉区）、旧中蒲原郡横越町（現江南区の一部）、田上町の一部、旧五泉市の一部（現五泉市の一部）が保域と考えられている〔田村1993〕。

このころの保域内の情勢をみると、まず新津姓の人物が『吾妻鏡』建仁元（1201）年3月4日条に登場している〔田村1989a〕。新津四郎という金津保に関連を持つ人物が、阿賀野川中流域の白河荘を本拠地としていた城長茂と行動を共にしていることがわかり、このことは蒲原津の背後に位置する国衙領の金津保に、城長茂の勢力が及んでいたものと推測できる〔木村・田村ほか1989、樋口2004〕。城氏の没落後、金津保地頭職に補任されたのは信濃源氏の平賀氏と考えられる。『吾妻鏡』承久3年6月8日条に、承久3（1221）年の承久の乱に際し、鎌倉方の北条朝時が越後国の武士である金津資義らを率いて上洛したとあり〔田村1989b〕、この金津資義の本姓は「平賀」であり、金津姓となっているのは地頭職だったことからと推測されている〔田村1993〕。また、南北朝期には蒲原津をめぐって北朝方の佐々木加地景綱らと南朝方の小国氏らとの戦いが起こり、この影響で先述の「金津保新津城」での合戦が起こる。この動乱ののち、越後守護となった上杉氏・守護代長尾氏により、室町幕府の統治下によって領国支配が推進される。金津保は国衙領として守護の支配下に置かれることとなる。

天正6（1578）年3月に上杉謙信が死去し、養子の景勝・景虎の間で後継争い「御館の乱」がおこる。この乱に景勝方で参戦した新津氏は、没落した平賀氏に替わり領主となった。そして慶長3（1598）年に景勝とともに会津へと国替えさせられるまで、新津氏が金津保を中心に発展をみせることになる。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 発掘調査

本書で報告する調査は、平成29年度から令和4年度までの6か年にわたり実施した確認調査（第20～25次調査）である。各調査期間は、第20次調査が平成29年7月19日～11月13日、第21次調査が平成30年5月30日～11月2日、第22次調査が令和元（平成31）年5月27日～11月19日、第23次調査が令和2年7月6日～10月17日、第24次調査が令和3年6月28日～11月24日、第25次調査が令和4年7月20日～11月18日である（第1表）。本節では上記調査における調査方法などについて記載する。

A 調査方法

1) グリッドの設定

本書で報告する調査はいずれも北東地区の東西両側を沢に挟まれた南北方向にのびる尾根における調査である。北東地区の調査は、地形に加えて過去の調査履歴や今回の調査内容などによって大きく北東地区南と北東地区北に分けられる（第2図）。北東地区南は第20～23次調査で実施した1～4Tの調査区で、大型竪穴建物（SI1）やその周辺を中心とする調査である（図版6・7）。また、北東地区南では過去にも試掘・確認調査が行われている（第1・14次調査）。北東地区北は第24・25次調査で実施した5～12Tの調査区で、方形周溝墓（SZ743）やその周辺を中心とする調査である（図版6・8）。なお、北東地区北は過去の調査履歴が無かった場所である。

調査区の設定については過去の調査区も参考に、地形などを考慮して場所を設定した。調査は基本的に幅2mのトレンチ調査で、必要に応じて面的に広げて調査を行った。グリッドの設定は、1・2Tでは基本的に調査区に沿って東西2m、南北1mごとに設定した。また、3～12Tについては調査区に沿うかたちで1mごとのグリッドを設けた（図版7・8）。出土遺物はこのグリッド、さらには層位ごとに分けて取り上げた。

2) 調査方法

調査地は杉や竹などが乱立する山林に位置する。調査を行う場所の草刈りや一部竹の伐採などは行ったが、杉については基本的に切らずに避けるかたちで調査を行った。

①表土除去・包含層調査・遺構確認・遺構調査 すべて人力で行った。調査の目的が保存目的の遺跡範囲内容確認調査であるため、基本的に遺構確認面までの掘削にとどめ、遺構を掘る場合については竪穴建物や方形周溝墓を除き原則半截までとした。

②遺物の取り上げ 出土遺物は遺物包含層や遺構の別、さらには前述したグリッド、層位ごとに取り上げを行った。なお、一部ドットで点上げをした遺物もある。

③実測・写真 平面・断面図の作成はいずれも測量業者に委託して行った。断面図は手取りのものと写真測量によるものがあり、基本1/20で作成した。

現場での写真撮影は調査担当及び調査員が行った。デジタルカメラでの撮影を行ったほか、6×7版・35mm版のカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。

④埋め戻し 遺構などの保護のため、調査後はいずれの調査区も基本的に調査区内に約0.2～0.3m厚で川砂を敷き詰めたあと、その上に排土を覆って締め固めた。基本的に人力で行ったが、砂の運搬や埋戻し後の締め固めのため、一部小型の重機やクローラードンプを使用した。

⑤自然科学分析 遺構の年代を明らかにするため、放射性炭素（¹⁴C）年代測定を行った（第Ⅵ章）。

第2節 調査経過

本書で報告する確認調査（第20～25次調査）は、第Ⅰ章で記載のとおり保存活用計画に基づいて実施した史跡指定地外における確認調査であり、調査にあたっては事前に土地所有者や地元自治会などへの説明会を開催するとともに、土地所有者の承諾を得られた範囲内で調査を行った。また、調査指導部会をはじめ、推進委員会、ならびに文化庁の調査官、県の担当者などから適宜指導や助言を受けながら、計画を立てて調査を実施した。調査期間にあたる平成29～令和6年度の推進委員会及び調査指導部会の委員名簿は第3・4表のとおりである。ちなみに、令和2・3年は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、調査指導部会は委員による現地指導の日を分散するかたちで行った。またその間、推進委員会も含め書面開催による報告・委員意見の聴取も行っている。

以下では調査年次ごとに調査経過の概要について記す。また、調査指導部会や文化庁、有識者らによる現地指導の経過については第5・6表に示した。

第3表 史跡 古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会（平成29～令和6年度）

	氏名	肩書	備考
委員長	小林 達雄	國學院大学名誉教授、 新潟県立歴史博物館名誉館長	平成29年6月1日～
副委員長	石川日出志	明治大学文学部教授、 福島県文化財センター白河館館長（令和4年7月～）	平成29年6月1日～ 調査指導部会を兼ねる
委員	稲葉 康宣	金津中学校校長	令和2・3年度
	内山 英紀	金津小学校校長	平成30～令和2年度
	川内美樹子	金津小学校校長	令和3年度
	川上真紀子	文化財保存全国協議会全国委員、 NHK文化センター講師	平成29年6月1日～
	後藤 孝	金津小学校校長	令和4年度
	小林 圭一	金津小学校校長	平成29年度
	齋藤 純子	新潟市文化財センターボランティア	平成29年6月1日～
	朱 雁	積雪地域植物研究所員	平成29年6月1日～
	高橋 郁子	新潟県民俗学会常任理事	平成29年6月1日～
	武樋 伸明	金津中学校校長	令和6年度
	中山 利之	金津中学校校長	平成29～令和元年度
	橋本 博文	新潟大学人文学部名誉教授、 新潟市瀧東樋口記念美術館・歴史民俗資料館館長（令和3年4月～）	平成29年6月1日～ 調査指導部会を兼ねる
	渡邊 貴俊	金津中学校校長	令和4・5年度
	渡邊 敏尚	金津小学校校長	令和5・6年度

第4表 古津八幡山遺跡確認調査指導部会（平成29～令和6年度）

	氏名	肩書	備考
部会長	橋本 博文	新潟大学人文学部名誉教授、 新潟市瀧東樋口記念美術館・歴史民俗資料館館長（令和3年4月～）	平成29年6月1日～ 推進委員会を兼ねる
委員	石川日出志	明治大学文学部教授、 福島県文化財センター白河館館長（令和4年7月～）	平成29年6月1日～ 推進委員会を兼ねる
	石黒 立人	元愛知県埋蔵文化財センター副センター長	平成29年6月1日～
	菊地 芳朗	福島大学行政政策学類教授	平成29年6月1日～

第2節 調査経過

第5表 古津八幡山遺跡確認調査指導部会の経過

年度	通算	開催日	委員	概要
平成29年度	1回	7月10日	石川委員・石黒委員・菊地委員・橋本委員	(推進委員会と同時開催) ・部会長の選出、調査計画にかかる現地指導など
	2回	9月26日	橋本部会長・石黒委員・菊地委員	・現地指導、出土遺物指導
		10月2日	石川委員	
		10月31日	橋本部会長	
3回	3月15日	橋本部会長・石川委員・石黒委員	(推進委員会と同時開催) ・調査成果と次年度の調査計画の報告・検討など	
平成30年度	4回	8月30日	橋本部会長・石黒委員・菊地委員	・現地指導、出土遺物指導
		9月12日	石川委員	
	5回	3月13日	橋本部会長・石川委員・石黒委員	(推進委員会と同時開催) ・調査成果と次年度の調査計画の報告・検討など
令和元年度	6回	9月30日	橋本部会長・石川委員・石黒委員	・現地指導、出土遺物指導
		10月7日～10月11日	石黒委員	
	7回	3月	橋本部会長・石川委員・石黒委員・菊地委員	※書面開催 (推進委員会と同時開催) ・調査成果と次年度の調査計画の報告・検討など
令和2年度	8回	9月28日～9月30日	石黒委員	・現地指導、出土遺物指導
		10月2日	橋本部会長	
		10月12日	石川委員	
9回	3月	橋本部会長・石川委員・石黒委員・菊地委員	※書面開催 (推進委員会と同時開催) ・調査成果と次年度の調査計画の報告・検討など	
令和3年度	10回	10月3日	橋本委員	・現地指導、出土遺物指導
		10月5日	石川委員	
		10月10日	菊地委員	
		10月11日	橋本部会長	
		10月18日	石黒委員	
11回	3月	橋本部会長・石川委員・石黒委員・菊地委員	※書面開催 (推進委員会と同時開催) ・調査成果と次年度の調査計画の報告・検討など	
令和4年度	12回	9月30日	石黒委員	・現地指導、出土遺物指導
		10月6日	橋本部会長・石川委員・菊地委員	
令和5年度	13回	6月29日	橋本部会長・石川委員・石黒委員	(推進委員会と同時開催) ・調査成果の報告・総括など

第6表 県・文化庁・有識者等の現地指導経過

年度	開催日	氏名
平成29年度	7月10日	滝沢 規朗 (新潟県教育庁文化行政課係長) 沢田 敦 ((公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団課長)
	9月26日	滝沢 規朗 (新潟県教育庁文化行政課係長)
	3月15日	田中 祐樹 (新潟県教育庁文化行政課主任調査員) 沢田 敦 ((公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団課長)
平成30年度	8月29日	滝沢 規朗 (新潟県教育庁文化行政課係長)
	3月13日	加藤 学 (新潟県教育庁文化行政課主任調査員)
令和元年度	9月30日	滝沢 規朗 (新潟県教育庁文化行政課係長) 沢田 敦 ((公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団課長)
	11月8日	川畑 純 (文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門技官)
	3月30日	滝沢 規朗 (新潟県教育庁文化行政課係長) 沢田 敦 ((公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団課長)
令和3年度	9月16日	坂井 秀弥 (奈良大学名誉教授)
	10月5日	渡邊 裕之 (新潟県教育庁文化行政課係長)
	10月7日	滝沢 規朗 ((公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団課長)
	10月16日	坂井 秀弥 (奈良大学名誉教授)
	10月18日	篠原 和夫 (静岡大学教授)
	11月9日	藤井 幸司 (文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門文化財調査官)
令和4年度	10月6日	小野本 敦 (新潟県教育庁文化行政課主任調査員)
	10月16日	岡林 孝作 (奈良県立橿原考古学研究所副所長)
	10月18日	上田 直弥 (大阪大学助教)
	10月26日	坂井 秀弥 (奈良大学名誉教授・新潟市歴史博物館館長)

A 第20次調査（平成29年7月19日～11月13日）

1) 法的手続など

調査地が周知の埋蔵文化財包蔵地である古津八幡山遺跡にかかることから、平成29年6月28日付で文化財保護法（以下、法）第99条による着手報告を新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長）宛に行い、調査後の同年12月1日付で終了報告を提出した。

2) 調査概要

人力による掘削作業を1T南端から始めた。途中、1Tの調査と並行して2Tの掘削作業も行った。1Tの半ばで広範囲に黒色土の落ち込みが確認され、その平面プランの西側への広がりを確認するため、一部西側を面的に広げて調査を行った。その結果、平面プランやサブトレンチによる断面の立ち上がりの形状、出土遺物などから、その落ち込みは約10mと大型の竪穴建物（SI1）で、出土遺物から建物の時期は弥生時代の終わり頃の可能性が推測された。さらに、その竪穴建物の東側を中心に柱穴が確認されたことから、複数棟の掘立柱建物の存在も推定された。この結果を受け、次年度以降、確認した大型の竪穴建物（SI1）のさらなる内容把握や掘立柱建物の有無の確認を行うこととした。また、2Tでは縄文時代もしくは弥生時代と判断できる遺構は確認されず、近現代の遺構が検出されている。11月4日に現地説明会を行い、11月7日から埋め戻しを行った。

B 第21次調査（平成30年5月30日～11月2日）

1) 法的手続など

平成30年5月23日付で法第99条による着手報告を県教育長宛に行い、調査後の同年11月30日付で終了報告を提出した。

2) 調査概要

1TのSI1や周辺域のさらなる内容把握を主目的として調査を行った。

大型竪穴建物（SI1）については、十字ベルトの北西部分について床面まで掘削を行った。また、北東・南東部分についてもさらに精査を行った。

その結果、SI1は壁溝を有し、壁溝の外側で計測すると一辺約9.5mで、平面形は胴の張るややいびつな隅丸方形の大型の竪穴建物になることが判明した。また、一部で壁溝が2条切り合いをもって確認されたことから、建物の建て替えを行っていると判断した。さらに、北東・南東部分の精査により、SI1と一部重複して、SI1を壊してつくられている竪穴建物の存在が推定された。なお、出土遺物からSI1が弥生時代の終わり頃の建物であることがより補強された。

掘立柱建物については、母屋部分が1間×3間で梁行約4.7m、桁行約6.2mの規模の掘立柱建物1棟を確認した（SB1）。また、中軸線上にあたる位置で母屋外側の南北ともに柱穴が存在したため、SB1に伴う柱穴と判断した。柱穴内からは縄文土器片が少量出土しており、弥生時代の遺物は出土していなかったが、弥生時代の大型竪穴建物（SI1）と近い位置関係にあることから、弥生時代の独立棟持柱建物の可能性を推定した（後に放射性炭素年代測定の結果、縄文時代の掘立柱建物であると判断）。

10月3日に報道機関向けの現地説明会を開催したが、10月9日に予定していた一般向けの現地説明会は荒天のため中止となった。11月7日から埋め戻しを行った。

C 第22次調査（令和元年5月27日～11月19日）

1) 法的手続など

令和元年5月20日付で法第99条による着手報告を県教育長宛に行い、調査後の同年12月9日付で終了報告を提出した。

2) 調査概要

1TのSI1や周辺域のさらなる内容把握を主目的として、東側の3Tも新たに広げて調査を行った。

大型竪穴建物(SI1)については、十字ベルトの北東部分について床面まで掘削を行った。その結果、建て替え前の平面形は、不整な楕円もしくは多角形状を呈していた可能性が高まった。また、建物内部で確認された柱穴の配置から、少なくとも5本以上の主柱をもつ建物の可能性が高まった。

前年度の調査で確認されたSI1と重複する建物(SI465)については、一辺約4mの隅丸方形をした竪穴建物であり、主柱穴が4基で、SI1より新しい建物であることが判明した。

さらに、SI1の北東約20mの位置で、新たに一辺約6mの竪穴建物(SI401)が確認された。

なお、1Tの東側に設定した3Tの調査により、SB1の東約10mまではピットが一定数確認できるが、それ以东では徐々に傾斜が急になり、遺構も希薄になることなどが確認された。

10月6日に現地説明会を行い、11月11日から埋め戻しを始めた。

D 第23次調査(令和2年7月6日～10月17日)

1) 法的手続など

令和2年6月9日付で法第99条による着手報告を県教育長宛に行い、令和3年3月9日付で終了報告を提出した。

2) 調査概要

1TのSI1及びSI465の全容把握、さらには尾根北側における遺構の有無の把握(4T)を主目的として調査を行った。

大型竪穴建物(SI1)については十字ベルトの南東部分について床面まで掘削を行った。これにより、SI1は十字ベルト部分を除き、すべて床面まで掘削を行ったことになる。炉や貯蔵穴を伴わないことや、主柱が6本となること、中央付近の土坑や壁溝から建物外へと伸びる溝(排水溝)の存在などが判明した。

SI465についても十字ベルト以外、床面まで掘削を行った。4本の主柱構造であることや、炉や貯蔵穴、壁溝から建物外へと伸びる排水溝などを確認した。

また、1Tからさらに北西方向に伸びる尾根における遺構の有無を確認するため、4か所のトレンチ(4T1～4)を設定して調査を行った。その結果、縄文時代と弥生時代のピットや溝などの遺構が確認された。

10月3日に現地説明会を行い、10月13日から埋め戻しを始めた。

E 第24次調査(令和3年6月28日～11月24日)

1) 法的手続など

令和3年5月21日付で法第99条による着手報告を県教育長宛に行い、令和4年2月2日付で終了報告を提出した。

2) 調査概要

令和2年度に調査を行った4Tよりもさらに北側における遺構の状況を確認するため調査を行った。その結果、弥生時代の竪穴建物1棟(SI728)や方形周溝墓1基(SZ743)などを確認した。

SZ743については東辺の溝を確認できなかったものの、周溝内側の立ち上がり上端部で南北約10mを測り、古津八幡山遺跡の方形周溝墓の中では最大の規模となることが判明した。また、周溝内部において3基の埋葬施設を確認した(SK739・741・742、埋葬部1・2・3)。埋葬施設については基本的に平面プランの確認までとし、一部で横断方向にトレンチを入れてプランや構造などを確認した。中心的な埋葬施設である埋葬部1(SK739)については、横断面で観察される土の堆積状況や、板材の規模などから、木槨構造となる可能性が推測された。なお、3基の埋葬施設の中心部分には赤道として利用されている通路が通っていたため、令和4年度に地元へ迂

回路についての周知を行ったうえで通路部分の調査を行い、SZ743の全体像を把握することとした。

SI728については、出土土器から弥生時代後期の建物と考えられ、弥生時代後期にはすでに調査地である丘陵中腹域が利用されていたことが明らかになった。

10月10日に現地説明会を行い、11月11日から埋め戻しを始めた。

F 第25次調査（令和4年7月20日～11月18日）

1) 法的手続など

令和4年5月24日付で法第99条による着手報告を新潟県知事宛に行い、令和4年12月5日付で終了報告を提出した。

2) 調査概要

令和4年度の調査では、令和3年度の調査で確認されたSZ743の全体像や各埋葬施設の形や規模、構造の把握、さらにはSZ743周辺における遺構の状況把握を主目的として調査を行った。調査の結果、SZ743周辺域において方形周溝墓1基（SZ822）と竪穴建物2棟（SI801・821）が新たに確認された。

SZ743については東辺の周溝（SD801）が確認され、方形周溝墓の形態や規模が明らかになった。また、通路部分について調査を行った結果、さらに1基の埋葬施設（SK810、埋葬部4）が見つかり、令和3年度の調査で確認されていた3基の埋葬施設と合わせ、合計4基の埋葬施設を持つことが判明した。なお、各埋葬施設の墓壇の形態や規模、埋葬施設の構造についても確認でき、中心的な埋葬施設であるSK739（埋葬部1）については、木槨構造の埋葬施設と判断した。

竪穴建物2棟については、出土土器から弥生時代後期後半と判断した。なお、SZ822の周溝がSI821の周溝を壊していることから、調査地周辺において、弥生時代後期後半には建物が複数棟存在し、以降は墓域として利用されていた実態が明らかとなった。

10月8日に現地説明会を行い、11月9日から埋め戻しを始めた。



調査指導部会（第1回 平成29年7月）



調査指導部会（第1回 平成29年7月）



調査指導部会（第6回 令和元年9月）



調査指導部会（第6回 令和元年9月）

第2節 調査経過



文化庁 川畑純技官 (令和元年11月)



現地説明会のようす (令和2年10月 第23次調査)



現地説明会のようす (令和3年10月 第24次調査)



文化庁 藤井幸司文化財調査官 (令和3年11月)



調査指導部会 (第12回 令和4年9月)



調査指導部会 (第12回 令和4年10月)



調査指導部会 (第12回 令和4年10月)



調査指導部会 (第13回 令和5年6月)

第3節 調査・整理体制

第20～25次調査にかかる調査・整理体制は第7表のとおりである。なお、平成29年度から令和4年度は現場の発掘作業とともに整理作業を実施したが、令和5・6年度は現場作業を行わず、整理作業のみ実施した。

第7表 調査・整理体制（平成29～令和6年度）

【平成29年度：第20次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：藤井希伊子 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当主査：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：外山孝幸 所長補佐：福地康郎・渡邊朋和 主幹：遠藤恭雄）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）

【平成30年度：第21次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：小沢昌己 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：外山孝幸 所長補佐：渡邊朋和・福地康郎 主幹：遠藤恭雄）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）

【令和元年度：第22次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：小沢昌己 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：渡邊朋和 主幹：天野泰伸・遠藤恭雄 係長：立木宏明）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）
調査員	小林美土里（新潟市文化財センター主事）

【令和2年度：第23次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：遠藤和典 課長補佐：廣野耕造・松本有希 埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：渡邊朋和 主幹：吉沢範久・遠藤恭雄 係長：立木宏明）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）
調査員	田中真理（新潟市文化財センター主事）

【令和3年度：第24次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：遠藤和典 課長補佐：廣野耕造・松本有希 埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：板垣正人 主幹：遠藤恭雄 係長：立木宏明・飯塚和美）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）
調査員	平山千尋（新潟市文化財センター主事）

【令和4年度：第25次調査】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：遠藤和典 課長補佐：廣野耕造・松本有希 埋蔵文化財担当主幹：朝岡政康） 新潟市文化財センター（所長：佐藤敏宏 主幹：遠藤恭雄 係長：立木宏明（～5月）・飯塚和美）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）
調査員	平山千尋（新潟市文化財センター主事）・八藤後智人（新潟市文化財センター会計年度任用職員）

【令和5年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：萬歳真紀 課長補佐：廣野耕造・拝野博一 埋蔵文化財担当主幹：遠藤恭雄） 新潟市文化財センター（所長：村山 明 主幹：朝岡政康 係長：飯塚和美）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）
調査員	八藤後智人（新潟市文化財センター会計年度任用職員）

【令和6年度】

調査主体	新潟市教育委員会（教育長 夏日久義）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：萬歳真紀 課長補佐：廣野耕造・拝野博一 埋蔵文化財担当主幹：遠藤恭雄） 新潟市文化財センター（所長：村山 明 主幹：朝岡政康 係長：高杉美穂）
調査担当	相田泰臣（新潟市文化財センター主査）
調査員	八藤後智人（新潟市文化財センター会計年度任用職員）、植田尚子・高橋保雄（新潟市文化財センター主事）

第Ⅳ章 遺 跡

第 1 節 概 要

本書で報告する第 20～25 次調査は、遺跡北東地区の南北方向にのびる標高約 20～25m の尾根において実施した確認調査である。尾根筋は東西約 30～50m と比較的狭いが、大型竪穴建物（SI1）や方形周溝墓（SZ743）周辺では東西約 100m とやや広い空間となる。また、調査地は平坦面または緩斜面域で構成されるが、標高は北東地区南の大型竪穴建物（SI1）周辺で約 25m、北東地区北の方形周溝墓（SZ743）周辺で約 20m と、全体的には北へ向かって緩やかに下る地形をなす。なお、調査地はいずれも史跡指定地外にあたる（第 2 図、図版 4～6）。

北東地区南では第 1 次・14 次調査でも一部トレンチ調査が行われており（第Ⅱ章第 2 節）、平成 15 年に実施した第 14 次調査 10T では、弥生時代の竪穴建物 2 棟（SI1407・SI1408）や縄文時代の竪穴建物 1 棟（SI1409）などが確認されている。平成 17 年の史跡指定時には、その弥生時代の竪穴建物までを史跡指定地とした一方、縄文時代の竪穴建物が見つかったさらに北側については、明確な弥生時代の遺構が確認されなかったことから史跡指定範囲から外した経緯がある。他方、弥生時代の竪穴建物 2 棟（SI1407・SI1408）の地点からは北へ向かって平坦あるいは緩やかに下っていく尾根がのびており、地形として連続することなどから、保存活用計画において「可及的速やかに発掘調査を行い地下遺構の内容把握を行うとともに、調査結果によって追加指定・公有地化を検討する」とされた（第Ⅰ章第 2 節）。今回の調査はこの保存活用計画に則り、平成 29 年度から令和 4 年度にかけて実施した保存目的の遺跡範囲内容確認調査（第 20～25 次調査）である。

第 2 節 層 序

基本層序はⅠ～Ⅳ層に大別できる。Ⅰ層が近現代の表土、Ⅱ層が近世～近現代の層、Ⅲ層が地山との漸移層、Ⅳ層が地山である。縄文時代と弥生時代の遺構確認面はⅢ層あるいはⅣ層で、近世～近現代の墓坑や畑などの遺構はⅡ層で検出し得る。また、弥生時代の遺構はⅡ層下面をもって削平されており、いずれのトレンチにおいても弥生時代の明確な遺物包含層は確認できなかった。なお、Ⅱ層は最大 3 つに細分した。以下、各層の標準的な特徴について記す。

- Ⅰ 層：黒褐色土（7.5YR3/2）粘性なし、しまりなし。表土。
- Ⅱa 層：褐色土（10YR4/4）～暗褐色土（10YR3/3）粘性ややあり、しまりなし～ややあり。炭化物少量含む。地山土少量含む。Ⅱb 層に比べて明るい色調。
- Ⅱb 層：暗褐色土（10YR3/3）～黒褐色土（10YR3/2）粘性ややあり～あり、しまりややあり。炭化物少量含む。Ⅱa 層に比べて暗い色調。近現代の遺構（畑の畝・墓坑など）の確認面。
- Ⅱc 層：にぶい黄橙色土（10YR6/4）粘性ややあり、しまりあり。地山土主体。北東地区北の赤道部分でのみ確認された土層。赤道部分に地山土主体の土を盛って締め固めたと判断される。
- Ⅲ 層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）～暗褐色土（10YR3/4）粘性あり、しまりややあり～あり。炭化物少量含む。地山土含む。Ⅳ層（地山）との漸移層。縄文時代・弥生時代の遺構確認面。シルト質土。
- Ⅳ 層：褐色土（10YR4/6）粘性あり、しまりあり。縄文時代・弥生時代の遺構確認面。シルト～粘質土。

第3節 遺 構

A 遺 構 の 概 要

1) 遺 構 の 概 要

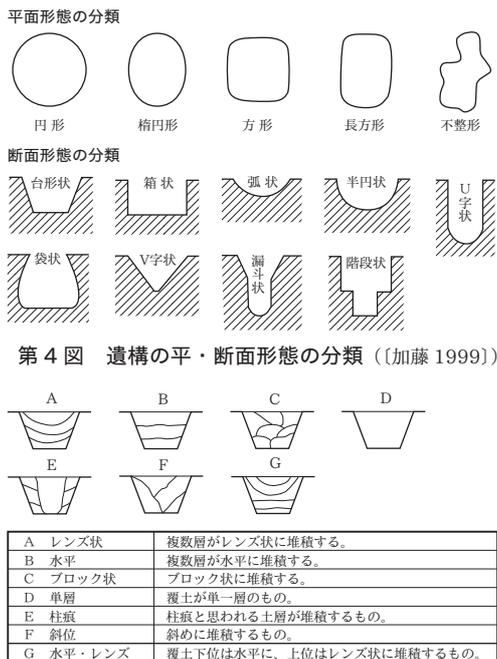
第20～25次調査では縄文時代と弥生時代の遺構・遺物が多く確認されたほか、江戸時代の土坑墓や近現代の畑の畝跡も多く検出された。なお、遺構掘削を行わずに平面プランの確認までにとどめたものも多い。掘削を伴わない平面プランの確認までのもので、かつ断面図にもかからず、遺物も出土していないものについては、基本的に遺構番号を付していない。第20～25次調査において遺構番号を付した遺構総数は652基で、内訳は竪穴建物(SI)6棟、掘立柱建物(SB)1棟、方形周溝墓(SZ)2基、土坑(SK)17基、溝(SD)115条、性格不明遺構(SX)24基、ピット(P)487基である。このうち、竪穴建物6棟と方形周溝墓2基は弥生時代の遺構であるが、掘立柱建物1棟は縄文時代の遺構である。また、溝の中には近現代の畑の畝跡が多く含まれる。なお、遺構覆土の特徴については、基本的に縄文時代の遺構覆土が薄い色調を基調とするのに対し、弥生時代の遺構覆土は黒色または茶色味の強い色調のものが主体をなす。

2) 遺構の記述、図面図版

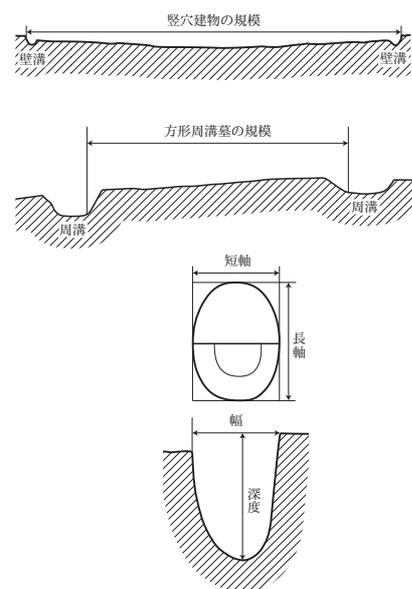
遺構の記述については原則種別ごととし、竪穴建物(SI)、掘立柱建物(SB)、方形周溝墓(SZ)、土坑(SK)、溝(SD)、性格不明遺構(SX)、ピット(P)の順とするが、竪穴建物と方形周溝墓については、付帯する周溝や壁溝・排水溝(SD)、貯蔵穴や墓壙(SK)、柱穴(P)を、それぞれ竪穴建物と方形周溝墓の中で記載した。なお、溝(SD)とピット(P)については、本書の中で遺構断面図や出土遺物の掲載があるものを中心に記述している。

遺構の記述に当たり、遺構の平・断面形態及び遺構埋土の堆積状況については、『和泉A遺跡』[加藤1999]・『青田遺跡』[荒川2004]で示された分類(第4・5図)を用いた。また、遺構の計測方法や、竪穴建物・方形周溝墓の規模の計測方法などについては第6図のとおりである。

遺構に関する図面図版については、北東地区南(1～4T、調査地や地区名などについては第II章第2節、第2図参照)と北東地区北(5～13T)の全体図を最初に掲載し(図版9～12)、その後、北東地区南(図版13～21)、北東地区北(図版22～25)の順番で個別実測図を掲載している。



第5図 遺構埋土の堆積形状の分類 ((荒川2004)を一部改変)



第6図 遺構の計測概念図

B 遺 構 各 説

1) 竪 穴 建 物 (SI)

第20～25次調査において竪穴建物が計6棟確認された(図版6)。出土遺物などから6棟とも弥生時代の竪穴建物と考える。SI1は遺構確認面で一辺9.6mと、本遺跡でこれまでに確認されている竪穴建物の中で最大の大規模建物である。出土遺物が少なく詳細な時期が不明な建物も多いが、時期別の内訳としては、弥生時代後期の建物4棟(SI401・728・802・821(2期))と同終末期の建物2棟(SI1(4期)・465(4期もしくは5期))と考える。なお、竪穴建物及び竪穴建物出土の弥生土器の年代については、第七章第1節A・第2節Aでまとめている。

調査地の北東地区平坦域では過去の調査で竪穴建物が3棟確認されている。平成15年に実施した第14次調査10Tにおいて、今回見つかった大型の竪穴建物(SI1)から南東約50mの場所で弥生時代の竪穴建物が2棟(SI1407・1408)と、同じくSI1の北東約30mの場所で縄文時代後期(南三十稲場式)の竪穴建物が1棟(SI1409)確認されている。

SI1(図版14)最初に建物全体の概要について記載し、その後、建物に伴うそれぞれの遺構について個別に記す。なお、特にことわりがない場合、建て替え後の建物についての記載である

1T38～49、L～Qに位置する。壁溝が2条確認でき(SD185・186)、1回建て替えが行われたと考えられる。また、外側の壁溝SD185が内側の壁溝SD186を切るため(図版14のC-C')、外側の壁溝SD185の方が新しい。竪穴上部は削平を受けており、実際の建物深度は不明であるが、現状において遺構確認面からの最大深度は壁溝底面で0.51mを測る。また、建物東側については別の竪穴建物(SI465)に壊されており、壁溝も確認できない。

建て替え後のSI1の平面形態は辺の中央(胴)がやや張る隅丸形状を呈する。建物規模は一辺9.6mを測り、建物面積は約78m²、主軸方位はN-30°-Wである。建物内は地山由来土を用いて貼床が行われており(図版14の7層)、建物内の埋土(図版14の1～6層)はレンズ状堆積をなす。なお、幅約0.5mの十字ベルトを残して完掘したが、建物に伴う炉跡・貯蔵穴は確認されなかった。

建て替え前の平面形態については、壁溝(SD186)の北東側が判然としないものの、西半においては不整な円形もしくは多角形状を呈する。後述するように、建物の支柱穴と考えるP194・511・527・601付近で壁溝(SD186)の角度が変わっている。

SI1に伴う支柱穴は、建物内の平面精査及びピットの配置、出土遺物やピット内炭化物の年代測定、ピット埋土の特徴などによる区分から、P194・507・511・526・527・601の6基と判断した。本遺跡において、過去に支柱穴が確認できた竪穴建物はいずれも支柱穴が4本の構造であり、SI1は本遺跡において初の支柱穴が5本以上となる多柱構造の建物となる。また、建て替え前の支柱穴については、建て替え後の支柱穴の組み合わせ以外に適切な柱穴配置とならないことや、前述のとおり建物の西半において、内側の壁溝(SD186)の角度が変わる場所に対応するように建て替え後の4基の支柱穴(P194・511・527・601)が位置する点などから、建て替え前後で同じ6本の柱穴を利用した可能性が推測される。なお、内側の壁溝(SD186)は地山由来土によって人為的に埋められており、出土遺物の位置づけ(第七章第2節)も含めてSI1の建て替えについてはあまり時間をおかずに連続して行った可能性が高い。

また、建物中央付近の土坑SK648から北側へのびて壁溝SD185とつながり、さらに壁溝SD185から建物外北側へ約2.8mのびて収束する溝(建物内:SD508、建物外:SD651)が検出された。これらの溝(SD508・651)は、北側へ向かって底面標高が緩やかに下がることから排水溝としての機能が推測される。溝の覆土の特徴や遺構の切り合い関係などから、建て替え前は土坑SK648と溝SD508・651があり、建て替え時に土坑SK648と建物内の溝SD508を人為的に埋め、建て替え後は壁溝SD185から溝SD651が北側へのびていた、という変遷が推測される(第7図)。なお、この種の建物内外の溝については、当遺跡においてこれまでにほかの竪穴建物では確認されていない。炉跡や貯蔵穴を持たないことも含め、この大型建物(SI1)の特異性がうかがえる。

SI1の出土遺物としては、弥生土器（図版26-1～図版28-69）、石器（図版32-1～4・6～9・13・16・17・19・21～29・31・35～37、図版33-38・40・44・53・54、図版34-56～60・62・65・66・68・71、図版35-73・76～79・81～84・86～92）、ガラス玉（図版36-1～3）、鉄製品（図版36-1）、炭化米がある。出土土器から、建て替え後の建物は弥生時代終末期（4期）を中心とする時期のものとする（第VII章第2節A）。以下、SI1に伴う遺構ごとに記述する。

SI1-SK648（図版14） SI1の中央付近に位置する土坑である。長軸0.62m・短軸0.53m以上の平面円形であり、最大深度は0.48mで、最深底面標高は24.91mを測る。断面形は漏斗状を呈し、水平に堆積する。埋土はいずれも地山土を含む土であり、人為的に埋められたと推測する。

SI1-SD185（図版14） SI1の建て替え後の壁溝である。最大深度は0.18mで、最深底面標高は25.36mを測る。断面形は半円状を呈し、レンズ状に堆積する。

SI1-SD186（図版14） SI1の建て替え前の壁溝である。最大深度は0.11mで、最深底面標高は25.45mを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は地山土を含む土であり、人為的に埋められたと推測する。

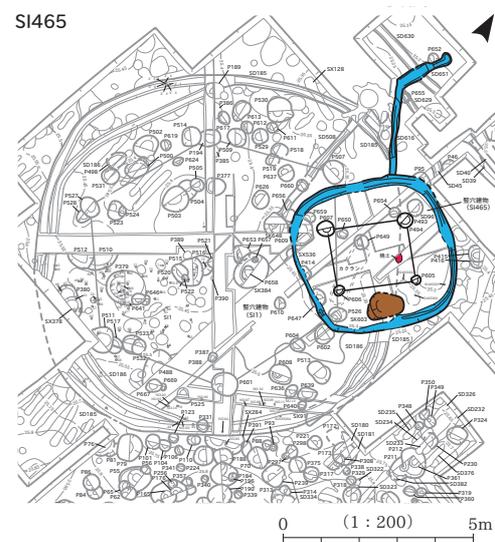
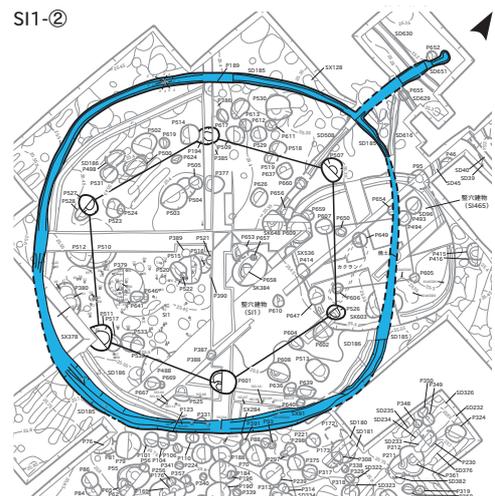
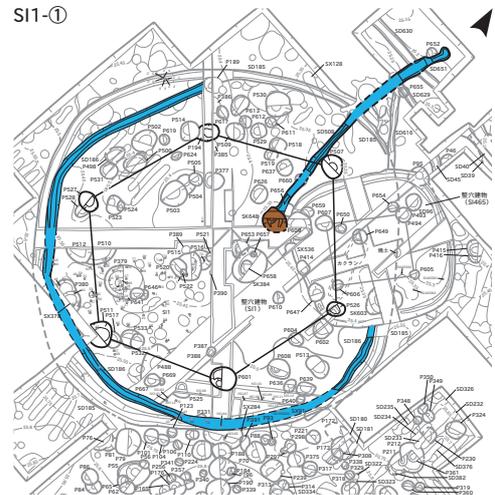
SI1-SD508（図版14） SI1の北東部でSK648から北側へのびる。建て替え前のSI1に伴う排水溝と推測する。最大深度は0.10mで、最深底面標高は25.26mを測る。断面形はV字状を呈し、埋土は単層である。埋土は地山土を含む土で、人為的に埋められたものと判断される。また、建て替え前の壁溝（SD186）埋土と類似しており、両者が同時に埋められた可能性がある。

SI1-SD651（図版14） SI1の壁溝SD185から建物外の北東方向へのびる溝で、壁溝から約2.8mの地点で収束する。壁溝から底面標高をゆるやかに減じながら北東へのびることから排水溝と考える。最大深度は0.05mで、最深底面標高は25.16mを測る。断面形は弧状を呈し、埋土は単層である。

埋土は建て替え後の壁溝SD185の埋土と類似しており、また両者の間で切りあい関係が認められないことから（図版14のI-I'）、壁溝SD185と排水溝SD651が同時に機能していたものとする。

なお、排水溝関係についてまとめると、建て替え前には中央土坑SK648から排水溝SD508が北東方向へのび、さらにSD651として建物外へと続いていたのに対し、建て替えに伴って中央付近の土坑SK648や排水溝SD508を人為的に埋めることで、建て替え後は壁溝SD185から排水溝SD651が北東方向の建物外（周堤外）へとへのびる構造に変化したものと推測する（第7図）。

SI401（図版19） 1T58～60、I～Lに位置する。竪穴建物



第7図 竪穴建物（SI1）建て替え前後及び竪穴建物（SI465）に伴う遺構

の南側のみ検出しているが、北側には崖が存在し、竪穴建物の北西部については削平を受けている。建物の平面形態は隅丸方形と推定され、建物規模は東西方向で6.22mを測るが、南北方向の長さは建物の北側が未調査のため不明である。中央付近に南北方向のサブトレンチを入れて床面を検出しており、床面については北へ向かってゆるやかに下降している。最大深度は0.30m、最深底面標高は24.22mを測る。一辺の軸はN-19°-Eである。埋土はレンズ状に堆積する。弥生土器（図版28-70～72）、石器（図版33-42・47・49、図版35-80・85）が出土している。

SI465（図版14・15） 1T45～49、L～Nに位置する。上部は削平を受けている。大型竪穴建物SIIの東側を一部削平して建てられている。平面形態は隅丸方形で、各辺ともやや丸味を帯びる。壁際には壁溝SD96が巡り、4基（P494・605～607）の主柱穴をもつ。中心から東へややずれた位置で焼土（炉跡）を確認している。また、南辺中央の壁際には貯蔵穴SK603が存在する。建物規模は長軸4.21m、短軸4.10m、最大深度は0.39m、最深底面標高は25.20mを測り、埋土はレンズ状堆積をなす。建物面積は約15m²で、一辺の軸はN-45°-Wである。

土器（図版28-73～82）、石器（図版32-11・14・30・32・33、図版33-52、図版34-63・70）が出土している。遺構の切り合いから、弥生時代終末期（4期）と考える竪穴建物SIIよりも新しい。出土土器も含めて弥生時代終末期（4期もしくは5期）に位置づけられ、古津八幡山遺跡における最終段階の建物跡といえる（第VII章第2節A）。

SI465-SK603（図版15） SI465の貯蔵穴と考える。長軸1.00m・短軸0.70m以上、最大深度0.36m、最深底面標高25.04mを測る。断面形は半円状を呈し、埋土は斜位堆積で、南側から人為的に埋められたと推測される。弥生土器片が出土している。

SI465-SD96（図版13～15） SI465の壁溝である。最大深度は0.19m、最深底面標高は25.22mを測る。上部の削平のため、西辺は不明瞭である。

SI465-SD616（図版14・15） SI465の壁溝SD96の北辺から北へ向かって底面標高を緩やかに減じながらのびる溝で、竪穴建物SI465の排水溝と推測する。最大深度0.06m、最深底面標高は25.25mを測る。SII-SD185を切る（図版15のH-H'）。なお、SD616は壁溝SD96から北へ約2.5mまで直線的にのびるが、SD651と重なったのち確認できなくなる。SD616とSD651が重なる地点（図版14のK-K'）において、両者の切り合い関係が確認できない点から、排水溝SD616はSD651とつながり北東へ屈曲して収束していた可能性がある。つまり、SIIの建物外排水溝と考えるSD651を、SI465においても再利用したと推測される（第7図）。

SI728（図版24） 5T5の77～79、A～Fに位置する。南西コーナー付近において2条の壁溝（内側からSD737・745）が確認できることから、建て替えを一度行ったと推測される。なお、調査は建物の南側のみを行ったが、沢が存在する東側については、沢への土の流出や攪乱（SX740）の影響などもあり不明瞭である。また、壁溝SD745の断面D-D'地点のすぐ東側で、建物内埋土と類似する黒色土が約0.34m幅で直線的に南側へのびる状況が観察された（図版24）。この遺構については未調査のため断面形状や深度などの詳細は不明であるが、1Tの竪穴建物SIIやSI465で見られた建物外へのびる排水溝の可能性もあり留意される。

SI728は最大深度0.29m、最深底面標高22.91mを測る。壁溝の南西コーナーの形状から、隅丸方形の竪穴建物と考えられ、建て替え後の規模は一辺約5mと推測する。P735は南東の主柱穴の可能性があり、主柱が4本構造の建物と推定される。一辺の軸はN-13°-E。埋土の堆積形状はレンズ状堆積とみられ、貼床が行われている（4層）。

掲載した土器（図版28-83～86）はいずれも壁溝SD745から出土している。ほかに、石器（図版33-55）と鉄製品（図版36-2）が出土している。出土土器は弥生時代後期（2期）に位置づけられる（第VII章第2節A）。

SI728-P735（図版24） SI728の柱穴と推測する。長軸0.37m・短軸0.25mの平面楕円形で、最大深度は0.34m、最深底面標高は22.47mを測る。

SI802（図版25） 9T2の18～20、A～Dに位置する竪穴建物である。調査区の壁際にサブトレンチを設定し、一部掘削を行った（図版25のB-B'）。建物は壁溝をもつほか、遺構確認面において竪穴建物の立ち上がりの上端

から約0.5～0.6m離れて周溝(SD803)が存在する。SI802の最大深度は0.25m、最深底面標高は24.04mを測る。調査区に限られるため、SI802の正確な平面形態や規模については不明であるが、周溝SD803の平面形態も含めて、SI802は円形状で、直径5mほどの規模と推定される。なお、図版25のB-B'断面図における3層については盛土と推定され(トレンチ反対側の断面でも確認)、周堤の残存の可能性はある。

SI802-SD803(図版25) SI802の周溝である。最大深度は0.19m、最深底面標高は24.13mを測る。

周溝と建物内から弥生時代後期後半(2期)頃と推測する土器が出土している(図版28-87・88)。

SI821(図版23) 11Tの6～15、D～I及び12Tの1～6、A・Bさらには13Tの2～4、A～Cに広がって存在する竪穴建物である。上部は削平を受けており竪穴の範囲は不明瞭であるものの、建物には周溝SD809が伴うほか、主柱穴と考えるピット3基(P811・817・818)を確認しており、主柱が4本の建物と考えられる。

なお、前述のとおり竪穴の掘り込み範囲は不明瞭ではあるものの、やや黒味を帯びた軟質な土の範囲が確認されている(図版23の点線ライン)。この土質の違う範囲については、周溝や柱穴のラインと軸が一致することから、竪穴の掘削や貼床に起因する可能性が想定され、おおむね竪穴の範囲を示すものと推察する。その範囲から推定される竪穴建物の平面形はやや丸味を帯びた隅丸方形で、一辺約6mの規模と推定され、竪穴部分の面積は約32m²となる。建物の主軸はN-11°-W。周溝SD809は方形周溝墓SZ822の周溝SD815に切られているため、方形周溝墓SZ822の方がSI821より新しく位置づけられる。

SI821-SD809(図版23) SI821に伴う周溝である。上部は削平を受けており、北・西側では確認されたが、東や南側では検出できなかった。最大深度は0.20m、最深底面標高は23.26mを測る。断面形は弧状を呈し、埋土の形状はレンズ状堆積である。なお、周溝の上端外端まで含めた推定復元規模は一辺約9.5mである。P811出土土器(図版28-89)から、弥生時代後期後半(2期)の建物と推測する(第VII章第2節A)。

2) 掘立柱建物(SB)

掘立柱建物は第21次調査で1棟確認された(SB1)。当初、弥生時代の掘立柱建物(独立棟持柱建物)の可能性を考えていたが、出土土器や放射性炭素年代測定の結果(第VI章)などから縄文時代の掘立柱建物と判断した。

SB1(図版17) 1Tの35～42、H～Kに位置する。主軸方位はN-0°で、平面形は1間3間の長方形の身舎に、両側の主軸柱が突出する亀甲形と推測する。主軸長7.70m、梁行長4.70m、桁行長6.30mで、身舎面積約29.6m²、総面積33.0m²を測る。

柱穴 主軸柱は北側がP178、南側がP158で、側柱は西側が北からP313・140・141・142、東側が北からP192・148・159・156である。また、P149は建物内の主軸上に位置しており、ほかの柱穴に比べて柱穴深度が浅いことから補助的な支柱の可能性はある。

柱穴掘り方の平面形は円形もしくは楕円形で、長軸長は約0.4～1.1mの規模である。いずれも広めに掘り方を掘って柱を立て、周囲を埋めて柱を固定したことがうかがえる。また、側柱の柱間の距離は2.0～2.2mで、おおむね等間隔に配置されている。

P140～142・148・156・158・159・192・313からは土器が出土している。小破片が多く、図化できた遺物はP140・141・148出土の縄文土器4点に限られる(図版29-90～93)。掲載以外の土器でも時代のわかるものはいずれも縄文時代後期の土器と考えられ、さらに掘立柱建物を構成する4基の柱穴埋土の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、いずれも縄文時代後期の年代値が算出されたことから、掘立柱建物SB1は縄文時代(後期)の建物であるとの結論に至った。

3) 方形周溝墓(SZ)

方形周溝墓は第24・25次調査において計2基確認され(SZ743・822)、北東地区北が弥生時代に墓域としても利用されていたことが判明した。出土土器や自然科学分析、遺構の切り合い関係などから、SZ743は2期前後(1～3時期頃)、SZ822は3・4期頃と推測する(第VII章第1節A・第2節A)。

SZ743(図版22) 5T6・7の28～38、C～H・6T3・4の34～38、A～E・7T1～3の0～8、B～G・8T1

の1～3、A～Eに位置する。四辺に周溝（南辺：SD715、西辺：SD730、北辺：SD732、東辺：SD746・801）を有するが、四隅は途切れる。また、周溝の内側で埋葬施設を4基確認した（埋葬部1：SK739、埋葬部2：SK741、埋葬部3：SK742、埋葬部4：SK810）。

平面形態及び墳丘規模については、南北方向の方が東西方向よりもやや長く、周溝内側下端で計測すると（第6図）、長軸（南北方向）10.02m、短軸（東西方向）8.78mである。主軸は南北方位とおおむね一致しており、N-6°-Eである。なお、墳丘は大きく削平を受けており、いずれの埋葬部においても上方より上は残存しておらず、墳丘盛土についても確認できなかった。

周溝（図版22）

SZ743-SD715 SZ743の南辺の周溝で、周溝東側については未調査のため不明であるが、東の5T7まではのびておらず、その手前で収束すると考えられる。短軸0.60～0.74m、最大深度0.30m、最深底面標高23.78mを測る。断面形は弧状を呈し、埋土の堆積形状はレンズ状堆積である。また、周溝西端からは排水溝と推測する短軸0.15～0.27mと幅の細い溝SD747が西方の沢へ向かってのびる。なお、SD715とSD747とは埋土の特徴が類似し、両遺構の間で切り合い関係が認められないことから、同時に存在したものと考える。

SZ743-SD730 SZ743の西辺の周溝である。近世の土坑墓であるSK736・748に一部壊され、周溝の南端については調査区外のため不明であるが、6T4調査区内で周溝が確認できないことから、それ以北で収束するものと判断できる。短軸0.87～1.12m、最大深度0.24m、最深底面標高は23.72mを測る。断面形は弧状を呈し、埋土の堆積形状はレンズ状堆積である。また、周溝北端からは排水溝と推測する短軸0.23～0.37m、最大深度0.12mと幅が狭くて浅い溝SD731が北西方向の沢へ向かってのびる。なお、SD730とSD731とは埋土の特徴が類似し、両遺構の間で切り合い関係が認められないことから、同時に存在したものと考える。

一部掘削を行った周溝の北端域で弥生時代の土器（図版29-97～99）やガラス玉（図版36-4）が出土している。甕97は略完形で、周溝の内（東）側で潰れた状態で出土していることから、墳頂にあったものが流れ落ちたものと推測される。

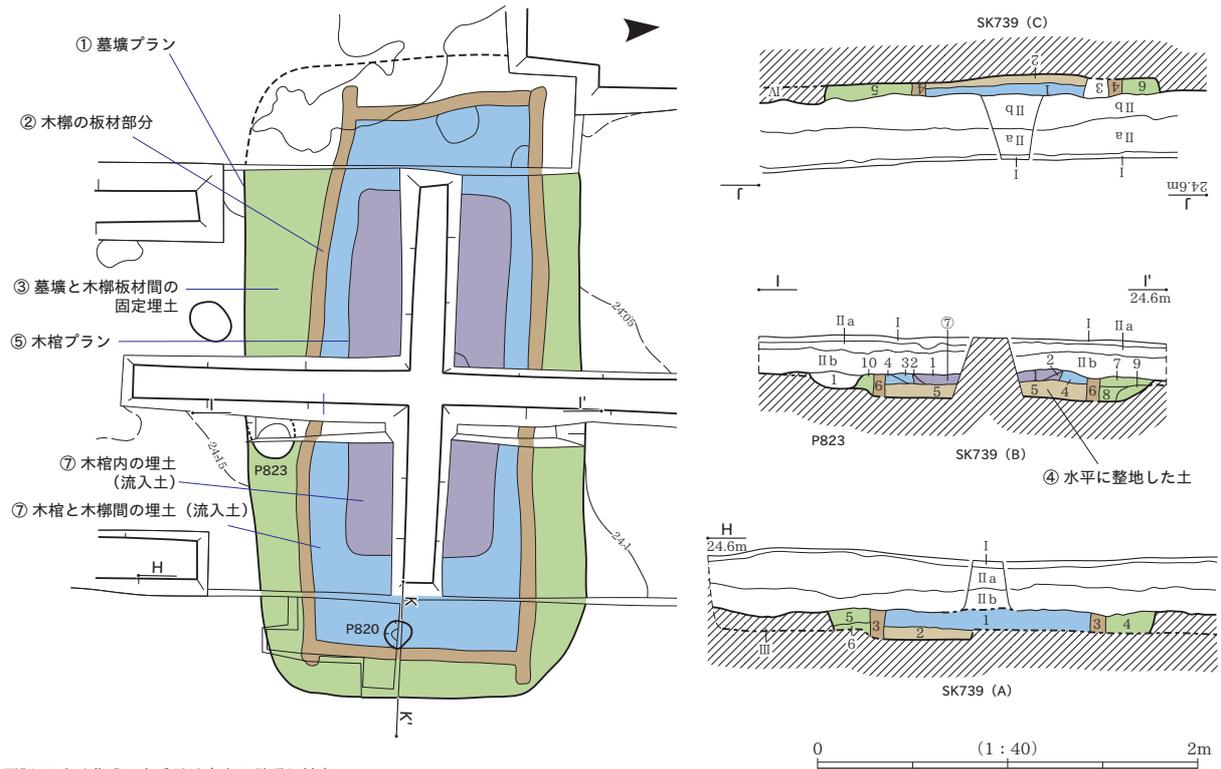
SZ743-SD732 SZ743の北辺の周溝である。西端については調査区外のため検出していないが、調査区内で収束しはじめていることから、調査区外すぐの場所で収束するものと考えられる。短軸0.98～1.09m、最大深度0.25m、最深底面標高は23.62mを測る。断面形は弧状を呈し、堆積形状はレンズ状堆積である。

SZ743-SD746・801 SZ743の東辺の周溝である。第24次調査でSD746が確認された段階では周溝かどうかは不明であったが、第25次調査でSD801が検出され、SD746・801がSZ743の東辺の周溝であることが確定した。長軸7.88m、短軸0.93～1.42m、最大深度0.31m、最深底面標高は23.93mを測る。断面形は弧状を呈し、堆積形状は斜位をなす。周溝の北側において、周溝底面から上方約0.2mの1層から略完形の壺（図版29-102）が出土しており、周溝がある程度埋没した後に墳丘から転落した土器と推測される。北辺の周溝からも同様の特徴をもつ壺（同図100）が出土しており、この種の小型壺が墳丘上に複数個体置かれていたことが推測される。

埋葬施設（図版22・第8表）

SZ743-SK739（埋葬部1）SZ743の埋葬施設である。SZ743で確認された4基の埋葬施設の中で最大の墓壇規模であり、中心部に近いことなどから、墓の中心的な埋葬施設と考えられる。なお、ほかの3基（埋葬部2～4）と少し距離が離れることや、ほかと比べて墓壇底面が高いこと、木棺埋土中炭化物の放射性炭素年代測定の結果が、埋葬部2よりも新しい年代値を示すこと（第Ⅵ章、第8表）などから、ほかの3基の埋葬施設よりも構築年代が新しい可能性が考えられる。ただし4基の埋葬施設の配置からは、埋葬部2～4を構築する時点ですでに埋葬部1の構築を想定していたものと推察される。

墓壇は西端のラインが明瞭でないものの、長軸推定3.40m、短軸1.78mの平面隅丸長方形で、最大深度0.17m、最深底面標高24.01mを測る。また、墓壇内では木槨と推測する板材の痕跡や、木棺部と推定される



図版 22 より作成 丸番号は本文の説明と対応

第 8 図 方形周溝墓 (SZ743) 埋葬部 1 (SK739) 平・断面着色図

第 8 表 方形周溝墓 SZ743 の埋葬施設一覧

方形周溝墓 SZ743 埋葬施設	遺構規模 (m)								木棺埋土中の炭化物による放射性炭素年代測定結果 (暦年校正年代 (1σ)) ※ 第VI章から
	墓壇 (長軸・短軸は上端計測値)				木槨 (板材外端)		木棺 (板材外端)		
	長軸	短軸	深度	最深底面標高	長軸	短軸	長軸	短軸	
SK 739 埋葬部 1	3.40	1.78	0.17	24.01	3.06	1.20	1.94	0.80	70 ~ 200cal AD
SK 741 埋葬部 2	2.48	1.37	0.35	23.92	—	—	2.16	0.58	169 ~ 59cal BC
SK 742 埋葬部 3	2.23	0.72	0.30	23.97	—	—	—	0.51	—
SK 810 埋葬部 4	2.75	1.16	0.29	23.86	—	—	—	—	—

プランが平・断面において確認できた。なお、断面観察から木槨、木棺ともに底板の痕跡が確認できず、どちらも底板が無かった可能性が高い (図版 22 の G-G'・H-H'・I-I'・J-J')。

木槨と推測する板材の幅は約 0.08m で、板材の外端で長軸 3.06m、短軸 1.20m を測り、長側板の端から少し内側で、小口板を挟み込んでいたことがうかがえる。また、木棺の推定ラインについては、長軸 1.94m、短軸 0.80m を測る。板材を据える際の掘り方については確認できなかった。掘り方の有無については今後の課題である。

平・断面の観察からは埋葬部 1 の構築過程が以下のように推定される (第 8 図、図版 22)。

①墓壇を掘る。②木槨の板材を据える (図版 22 (以下同じ) の H-H' の 3 層、I-I' の 6 層、J-J' の 4 層、K-K' の 1 層)。
③墓壇と木槨との間を土で埋めて固定する (H-H' の 4 ~ 6 層、I-I' の 7 ~ 10 層、J-J' の 5・6 層、K-K' の 2 層)。
④木槨内に厚さ 0.08 ~ 0.10m 程度の土 (置土) を入れて水平に整地する (H-H' の 2 層、I-I' の 5 層、J-J' の 2 層、K-K' の 3 層)。
⑤整地土の上に木棺を据える (I-I' の 2 層外側の立ち上がり)。
⑥木棺と木槨に蓋をし、その上に盛土をして覆い、墳丘を完成させる。なお、その後については⑦木槨・木棺の材が腐朽して槨内・棺内に土が流入する (H-H' の 1 層 (木槨内)、I-I' の 3・4 層 (木槨内)、1・2 層 (木棺内)、J-J' の 1 層 (木棺内))。なお、埋葬部 1 ~ 4 において、赤色顔料などは確認できなかった。

ちなみに、木槨の東側小口板の内側に接して検出された P820 については木槨を据える際に固定用に打ち込ん

だ杭の穴の可能性も考えられる。同様の可能性があるものは、木槨北西側の図版 22 の J-J' 断面にかかる位置において、長側板の内側に接するかたちで杭状の可能性のある落ち込みが確認されている（図版 22 の J-J' の 3 層）。

出土遺物は木槨プラン内を中心に定量出土しており、掲載土器（図版 29-103・104）はいずれも遺構の平面プラン確認時に出土したものである。また、木槨プラン中央を横断するサブトレンチにおいて、石鏃が 2 点（図版 32-12・20）出土したほか、完形のガラス玉も 1 点（図版 36-5）出土している。

SZ743-SK741（埋葬部 2） SZ743 の埋葬施設である。埋葬部 4 とは軸が一致する。墓壙は長軸 2.48m・短軸 1.37m の平面隅丸長方形で、最大深度 0.35m、最深底面標高 23.92m を測る。また、平・断面において木槨の板材と考える土層が観察され（図版 22 の L-L' の 4 層）、木槨直葬と判断される。木槨の板材の厚さは約 0.06m で、木槨の平面プランは板材の外端で長軸 2.16m、短軸 0.58m を測る。平面プランの所見からは、長側板の端から少し内側で、小口板を挟み込んでいたものと推察される。なお、断面観察で木槨の底板の痕跡は確認できず、底板は無かったと推測される。墓壙と木槨との間は地山主体の土が埋められている（図版 22 の L-L' の 5～7 層）。

弥生土器片が出土しているほか、石鏃（図版 32-5）が出土している。

SZ743-SK742（埋葬部 3） SZ743 の埋葬施設で、4 基の中で最も墓壙の規模が小さい。墓壙は長軸 2.23m・短軸 0.72m の平面隅丸長方形もしくは楕円形であり、最大深度 0.30m、最深底面標高 23.97m を測る。また、断面において木槨の板材と考える土層が観察され（図版 22 の L-L' の 3 層）、木槨直葬と考えられる。木槨の板材の幅は約 0.06m を測る。なお、墓壙と木槨との間は地山主体の土が埋められている（図版 22 の L-L' の 4～7 層）。

SZ743-SK810（埋葬部 4） SZ743 の埋葬施設である。埋葬部 2 とは軸が一致しており、東西（長軸）方向で隣り合う。墓壙は長軸 2.75m・短軸 1.16m の平面隅丸長方形であり、最大深度 0.29m、最深底面標高 23.86m を測る。また、断面において木槨の板材と考える土層が観察され（図版 22 の M-M' の 4 層）、木槨直葬と考えられる。木槨の板材の厚さは約 0.06m を測る。

平面プランの南辺中央付近に杉の大木があり掘削できなかつたため、北側半分の調査となった。このため、木槨の規模などの詳細については不明である。なお、墓壙と木槨との間は地山主体の土が埋められている（図版 22 の M-M' の 5～8 層）。

SZ822（図版 23） 11T の 2～9、B～G に位置する。方形周溝墓 SZ743 から北北西約 20m に位置する。調査区の西方には南北方向にはしる谷が存在する。南辺・東辺・北辺の周溝の一部を確認しており、南北方向約 5.5m の方形周溝墓と考える。

SZ822-SD815（図版 23） 周溝規模は短軸 0.83～0.94m で、最大深度 0.42m、最深底面標高 23.02m を測る。断面形は台形状を呈し、堆積形状はレンズ状堆積である。SZ743 の周溝に比べて傾斜が急である。周溝隅は東側においては途切れず、やや丸味を持ちながら屈曲する。南北軸は N-4°-W である。

なお、周溝の北西から南西側にかけては未調査や攪乱などもあり不明な点が多い。調査区の西壁にかかるかたちで南北方向の溝状の遺構プランが一部確認されており、これが西辺の周溝となる可能性がある。周溝内からは自然礫以外の出土遺物がなく詳細な年代は不明であるが、周溝 SD815 が竪穴建物 SI821 の周溝 SD809 を切っており、SI821 よりも新しいといえる。また、中世の珠洲焼（図版 29-108）が出土した溝 SD819 に一部切られている。

4) 土坑 (SK)

土坑は 20 次～25 次調査において計 17 基確認された。このうち、竪穴建物 SI1・465 に伴う土坑 (SK648・603) と方形周溝墓 SZ743 に伴う墓壙 (埋葬部 1～4, SK739・741・742・810) については、1) 竪穴建物 (SI) と 3) 方形周溝墓 (SZ) の項でそれぞれ記載しているため本項では扱わない。

SK275（図版 18） 1T31・32、G・H に位置する。長軸 1.03m 以上・短軸 0.70m の平面楕円形で、最大深度 0.29m、最深底面標高 25.74m を測る。縄文土器片が出土している。

SK384（図版 14） 1T43・44N に位置する。長軸 0.99m・短軸 0.75m の平面楕円形で、最大深度 0.17m、最

深底面標高 25.30m を測る。木製の数珠玉 2 点 (図版 31-1・2) や六道銭と考えられる古銭 6 点 (図版 36-1～5) とともに、焼骨片や炭化物が多く出土している。放射性炭素年代測定値 (第VI章) と合わせ、江戸末期～明治時代の火葬土坑墓と考えられる。

なお、平面プランは確認できなかったものの、十字ベルトの壁面 (図版 14A-A') で確認された SX396 も炭化物が多く出土しており、別の地点でも炭化物や焼骨片が出土した地点があることから、周辺にこの種の火葬土坑墓が数基存在したものとする。

SK417 (図版 19) 1T51・52J に位置する。長軸 0.80m・短軸 0.65m の平面楕円形で、最大深度 0.14m、最深底面標高 25.15m を測る。弥生土器片が出土している。

SK420 (図版 18) 3T4～6、E・F に位置する。長軸 1.31m・短軸 0.79m の平面楕円形で、最大深度 0.32m、最深底面標高 25.49m を測る。弥生土器片が出土している。

SK622 (図版 21) 4T1 の 4・5B に位置する。長軸 0.72m・短軸 0.62m の平面楕円形で、最大深度 0.20m、最深底面標高 24.12m を測る。縄文土器片が出土しており、覆土の特徴と合わせて縄文時代の遺構と推測する。

SK623 (図版 21) 4T1 の 2・3A に位置する。長軸 0.91・短軸 0.83m 以上の平面不整形で、最大深度 0.17m、最深底面標高 24.38m を測る。縄文土器が出土しており、覆土の特徴と合わせて縄文時代の遺構と推測する。

SK628 (図版 21) 4T1 の 3B に位置する。長軸 0.52m 以上・短軸 0.40m の平面楕円形で、最大深度 0.21m、最深底面標高 24.33m を測る。覆土の特徴から縄文時代の遺構と推測する。

SK701 (図版 23) 5T2 の 12F に位置する。長軸 0.58m 以上・短軸 0.44m の平面楕円形で、最大深度 0.14m、最深底面標高 23.59m を測る。弥生土器が出土している (図版 29-105)。

SK706 (図版 23) 6T3 の 21・22C に位置する。長軸 1.30m 以上・短軸 0.76m の平面楕円形で、最大深度 0.11m、最深底面標高 24.10m を測る。弥生土器が出土している (図版 29-106)。

SK736 (図版 22) 7T1 の 1～3、B～D に位置する。長軸 1.90m・短軸 1.21m の平面は不整な長方形を呈する。調査は平面プランの確認までで、遺構の掘削を伴う調査は行っていないため深度などは不明である。平面プラン確認時に骨片が出土している。

方形周溝墓 SZ743 の周溝 SD730 を切って構築されている SK748 をさらに切って掘られている。遺構埋土は地山ブロックを多量に含む土で、SK748 の埋土と共通している。どちらも人為的に埋められている。1T では SK384 のような江戸末期～明治時代の火葬土坑墓が確認されているが、本遺構についても近世～近現代の土坑墓と推測する。

SK748 (図版 22) 7T1 の 1B～D に位置する。遺構はⅡb 層から掘り込まれており、SZ743-SD730 を切る。また、一部重複する SK736 に切られる。長軸 1.08m・短軸 0.55m 以上で、平面は方形もしくは長方形を呈すると推測される。方形周溝墓 SZ743 の周溝 SD730 の遺構確認面の高さで止めているため、遺構の深度などについては不明であるが、掘り込み面から 0.60m 以上の深さをもつ (図版 22 の G-G')。

遺構埋土は地山ブロックを多量に含む土で人為的に埋められている。平面形態や埋土の特徴、骨片の出土など、切り合い関係にある SK736 と類似する。両遺構とも近世～近現代の土坑墓と推測する。

5) 溝 (SD)

溝 (SD) は第 20～25 次調査において計 115 基確認した (遺構番号を付したものに限る。平面プランの確認のみでかつ遺物が出土していない溝については基本的に遺構番号を付していない)。このうち、竪穴建物の壁溝や周溝、排水溝、さらには方形周溝墓の周溝や排水溝については、1) 竪穴建物 (SI) と 3) 方形周溝墓 (SZ) の項でそれぞれ記載しているため本項では扱わない。

なお、調査地周辺は近現代に畑地に利用されており、検出された溝の中には畑の痕跡が多く含まれる (第VII章 第1節 F)。以下では、近現代の畑に伴う溝については基本的に記載していない。

SD40 (図版 13) 1T50・51M に位置する。規模は短軸 0.41～0.45m、最大深度 0.12m、最深底面標高

25.23mを測る。弥生土器が出土しており（図版29-107）、覆土の特徴も合わせて弥生時代の遺構と考える。

SD45（図版13） 1T49・50Mに位置する。規模は短軸0.22～0.25m、最大深度0.07m、最深底面標高25.29mを測る。縄文土器が出土している。

SD615（図版21） 4T2の12A・Bに位置する。規模は短軸0.43～0.61m、最大深度0.17m、最深底面標高23.47mを測る。弥生土器が出土している。

SD620（図版21） 4T2の13～15、A・Bに位置する。規模は短軸0.15～0.23m、最大深度0.12m、最深底面標高23.38mを測る。覆土から、弥生時代の遺構と推測する。

SD627（図版21） 4T1の1～4、A・Bに位置する。規模は短軸0.28～0.54m、最大深度0.19m、最深底面標高24.31mを測る。覆土の特徴から弥生時代の遺構と推測する。

SD638（図版21） 4T1の1・2Bに位置する。規模は短軸0.26m、最大深度0.05m、最深底面標高24.58mを測る。覆土の特徴などから弥生時代の遺構と推測する。

6) 性格不明遺構 (SX)

性格不明遺構 (SX) は第20～25次調査において計24基確認された。このうち、遺構の掘削調査をしているものを中心に記載する。

SX13（図版13） 1T22～25Mに位置する。IIb層から掘り込まれている。長軸2.90m・短軸1.70m以上の平面不整形で、最大深度は0.20m、最深底面標高は25.85mを測る。

SX36（図版13） 1T33・34Mに位置する。長軸1.45m・短軸1.35m以上の平面不整形で、最大深度は0.24m、最深底面標高は25.69mを測る。縄文土器が出土しており、覆土の特徴も合わせて縄文時代の遺構と推測される。

SX42（図版13） 1T51～53Mに位置する。長軸1.66m・短軸0.85m以上の平面楕円形もしくは不整形であり、最大深度は0.71m、最深底面標高は24.46mを測る。縄文土器が一定量出土している（図版30-109～111）。覆土の特徴及び出土土器から、縄文時代の遺構と考えられる。

SX78（図版13） 1T68・69Mに位置する。長軸0.65m・短軸0.50m以上の平面円形もしくは楕円形であり、最大深度は0.22m、最深底面標高は23.20mである。陶磁器片が出土している。

SX117（図版13） 1T69・70Mに位置する。平面形は不明である。長軸0.85m・短軸0.35m以上、最大深度0.23m、最深底面標高23.11mを測る。

SX118（図版13） 1T74・75Mに位置し、調査区外へと伸びる。平面は楕円形もしくは不整形であり、最大深度0.24m、最深底面標高は22.89mを測る。縄文土器の出土や覆土の特徴も合わせて縄文時代の遺構と推測する。

SX125（図版13） 1T72・73Mに位置する。長軸1.19m・短軸0.48m以上の平面楕円形で、最大深度0.27m、最深底面標高22.95mを測る。

SX127（図版20） 2T10～12に位置する。平面形については不明な点が多いが、長軸1.80m・短軸1.70m以上の不整形と推測され、最大深度0.34m、最深底面標高22.14mを測る。近世陶磁器が出土している。

SX129（図版20） 2T25・26に位置する。長軸0.73m・短軸0.34m以上の平面円形もしくは楕円形で、最大深度0.13m、最深底面標高22.34mを測る。

SX133（図版20） 2T18・19に位置する。長軸1.33m・短軸1.00mの平面楕円形であり、最大深度0.27m、最深底面標高22.30mを測る。

SX134（図版20） 2T28・29に位置する。長軸0.91m・短軸0.67m以上の平面不整形であり、最大深度0.11m、最深底面標高22.21mを測る。

SX284（図版16） 1T40・41、L・Mに位置する。長軸1.02m・短軸0.59m以上の平面楕円形で、最大深度0.40m、最深底面標高25.35mを測る。縄文土器が出土しており、覆土の特徴と合わせ縄文時代の遺構と考える。

SX396（図版14） 1T42・43Nに位置する。壁面のみで確認できており、平面形などは不明である。短軸

0.50m、最大深度 0.17m、最深底面標高 25.44m を測る。断面形は半円状を呈し、単層で炭化物を多量に含む。

炭化物を多量に含む点は、北東約 1m に位置する近世の土坑墓と考える SK384 と類似しており、骨片は出土していないものの、同種の遺構の可能性が推測される。

SX436 (図版 18) 3T8D に位置する。長軸 0.55m・短軸 0.40m の平面楕円形であり、深度 0.07m、底面標高は 25.73m を測る。

SX536 (図版 14) 1T45N に位置する。遺構は深く、底面まで検出していない。また、サブトレンチ内でのみ平面形状を確認できたものの、遺構の全体形などについては不明である。SI465 を切って構築されており、深度は 0.41m 以上と深い。覆土は地山土を多量に含んでおり、人為的に埋められたと考えられる。南西約 1m には近世の火葬土坑と考える SK384 が位置しており、本遺構も墓に関連する遺構の可能性はある。

SX702 (図版 25) 6T1 の 1C に位置する。平面不整形だが攪乱の影響で不明な点が多い。最大深度 0.19m、最深底面標高 23.59m を測る。弥生土器片が出土している。

SX812 (図版 23) 11T の 13～15、D～F に位置する。断面図は掲載していない。IIb 層から掘り込まれており、近世以降のものである。平面形は方形もしくは長方形で、南北方向約 4m、東西方向 2m 以上の規模である。調査区の西壁に沿って 2m 四方の範囲で掘削を行ったが、1.5m 掘り下げても底面は検出できなかった。覆土は攪乱土であり、人為的な埋土である。近世以降の土坑墓、もしくは廃棄に伴う土坑の可能性が推測される。

SX813 (図版 23) 11T の 8～10、H・I に位置する。長軸 1.52m・短軸 0.60m 以上の平面長方形もしくは不整形と推測される。平面プラン確認のみで掘削による調査は行っておらず、断面形状や深度などは不明であるが、平面プラン確認時に覆土から珠洲焼が出土している (図版 30-112)。

7) ピ ッ ト (P)

ピット (P) は第 20～25 次調査において計 487 基確認された。なお、この中には建物に伴う柱穴の数も含まれる。建物に伴う柱穴については、1) 竪穴建物 (SI) や 2) 掘立柱建物 (SB) の項で別途記載しているため本項では扱わない。ここでは断面図や出土遺物を掲載しているピットを中心に、主要なものに限り記載する。

P3 (図版 13) 1T4・5M に位置する。長軸 0.31m・短軸 0.28m の平面円形を呈し、最大深度 0.14m、最深底面標高 25.98m を測る。縄文時代早期後半の土器が出土している (図版 30-113)。

P46 (図版 13) 1T49・50M に位置する。長軸 0.37m・短軸 0.15m 以上、最大深度 0.35m、最深底面標高 24.98m を測る。縄文土器が出土している (図版 30-114)。

P49 (図版 13) 1T51・52、L・M に位置する。長軸 0.63m・短軸 0.54m 以上、最大深度 0.64m、最深底面標高 24.67m を測る。縄文土器が出土しており (図版 30-115・116)、覆土の特徴と合わせて縄文時代の遺構と考える。

P55 (図版 13) 1T38M に位置する。長軸 0.85m・短軸 0.65m、最大深度 0.67m、最深底面標高 25.13m を測る。弥生土器が出土している (図版 30-117)。覆土の特徴や出土土器から弥生時代の遺構と考える。

P184 (図版 16) 1T40L に位置する。長軸 0.71m・短軸 0.59m、最大深度 0.31m、最深底面標高 25.51m を測る。縄文土器が出土している (図版 30-118・119)。

P198 (図版 16) 1T43J に位置する。長軸 0.51m・短軸 0.41m の平面楕円形を呈し、最大深度 0.38m、最深底面標高 25.41m を測る。アスファルトが付着した縄文時代のミニチュア土器が出土している (図版 30-120)。

P212 (図版 16) 1T43・44、J・K に位置する。長軸 0.82m・短軸 0.67m の平面楕円形を呈し、最大深度 0.35m、最深底面標高 25.40m を測る。縄文土器が出土しており (図版 30-121)、覆土の特徴などから縄文時代の遺構と考える。

P239 (図版 16) 1T41K・L に位置する。長軸 0.60m・短軸 0.58m の平面円形で、最大深度 0.64m、最深底面標高 25.37m を測る。縄文土器が出土している (図版 30-122)。覆土の特徴や出土土器から縄文時代の遺構と考える。

P243 (図版 16) 1T39J・K に位置する。長軸 0.63m・短軸 0.53m の平面円形を呈し、最大深度 0.40m、最深底面標高 25.51m を測る。縄文土器が出土している (図版 30-123)。

P285 (図版 16) 1T35・36J に位置する。長軸 0.60m 以上・短軸 0.40m の平面楕円形を呈し、最大深度 0.38m、最深底面標高 25.56m を測る。縄文土器や弥生土器が出土している (図版 30-124・125)。

P379 (図版 14) 1T41・42O に位置する。長軸 1.03m、短軸 0.86m の平面円形を呈し、最大深度 0.47m、最深底面標高 24.98m を測る。柱穴覆土出土の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ縄文時代 (後期) の値が測定されており (第IV章参照)、縄文時代後期の柱穴と判断される。掲載遺物に石器 (図版 35-75) がある。

P512 (図版 14) 1T41O・P に位置する。長軸 0.68m・短軸 0.36m で、最大深度 0.31m、最深底面標高 25.21m を測る。弥生土器が出土している (図版 30-126)。

P631 (図版 21) 4T1 の 1A に位置する。長軸 0.23m・短軸 0.22m の平面円形を呈し、最大深度 0.14m、最深底面標高 24.54m を測る。弥生土器が出土している (図版 30-127)。

P654 (図版 15) 1T48M に位置する。長軸 0.27m・短軸 0.25m の平面円形を呈し、最大深度 0.67m、最深底面標高 24.63m を測る。弥生土器が出土している (図版 30-128)。

P703 (図版 23) 5T2 の 13・14F に位置する。長軸 0.33m・短軸 0.30m の平面円形を呈し、最大深度 0.44m、最深底面標高 23.46m を測る。北陸系と東北系の折衷土器が出土している (図版 30-129)。

P804 (図版 24) 10T の 5A・B に位置する。長軸 1.04m・短軸 0.52m 以上の平面円形または楕円形と推測され、最大深度 0.39m、最深底面標高 23.55m を測る。平・断面形は北西約 1.8m に位置する P805 と類似し、建物に関連する一連の遺構と推定される。遺構の広がりや構造については今後の課題である。弥生土器片のほか石器 (図版 34-72) が出土している。

P805 (図版 24) 10T の 1・2、A・B に位置する。長軸 1.17m・短軸 0.93m の平面楕円形で、断面形は漏斗状、中央に柱痕が認められる。平・断面形は南東約 1.8m に位置する P804 と類似しており、一連の遺構と考えられる。遺構の広がりが不明であるものの、建物に関連する遺構と考えられ留意される。弥生土器片が出土している。

P806 (図版 24) 10T1A に位置する。長軸 0.21m・短軸 0.20m 以上で、最大深度 0.46m、最深底面標高 23.73m を測る。断面形は U 字状で、半截したところ柱穴内覆土の 1 層において上下 0.2～0.3m ほどの範囲で、弥生時代後期後半 (2 期) の土器片が連続して密に埋まった状態で検出された (図版 31-130～132)。また、覆土には炭化物が多く含まれていた。

この種のピットの類例は不明であるが、出土状況から柱を抜き取った後に意図的に土器を埋置したと推測され、何らかの祭祀行為との関連が推測される。なお、南方約 1.2m に位置する P807 も、P806 ほど密ではないが柱穴内に同じように土器が埋置されており、炭化物も比較的多く含まれる。両ピットは建物に関連する一連の遺構と考えられるが、調査区外へのびるため遺構の広がりや構造などについては今後の課題である。なお、軸は北西約 5m に位置する方形周溝墓 (SZ743) と一致しており、両者の関連性が示唆される。

P807 (図版 24) 10T2A・B に位置する。長軸 0.25m・短軸 0.21m の平面楕円形で、最大深度 0.30m、最深底面標高 23.76m を測る。P806 と同様、炭化物を比較的多く含む遺構覆土中に弥生土器片が重なって埋められていた。

P808 (図版 24) 10T3A に位置する。長軸 0.32m・短軸 0.12m 以上、最大深度 0.19m、最深底面標高 23.98m を測る。P807 を軸にすると P806 と P808 は約 1.2m の等間隔で直角方向にそれぞれ位置する。調査区周辺の状況把握については今後の課題であるが、P806～808 は同じ建物に関連する一連の柱穴の可能性が有る。

第V章 遺 物

第1節 概 要

本書で報告する第20～25次調査では、土器（縄文土器・弥生土器）、陶磁器（中・近世陶磁器）、木製品（近世）、石器・石製品（縄文・弥生）、ガラス製品（弥生）、鉄製品（弥生）、銅製品（近世）、骨片（近世）、種子が出土しており、その量はコンテナ（内寸54cm×34cm×15cm）で計133箱である。内訳は、土器・陶磁器80箱、木製品0.5箱、石器・石製品50箱、ガラス製品0.5箱、鉄製品0.5箱、銅製品0.5箱、骨片0.5箱、種子0.5箱である。弥生時代（後期・終末期）の遺物が多く、縄文時代（後期）の遺物も一定量出土している。ほかに縄文時代早期の土器1点と中・近世の遺物が少量出土している。

第2節 土器・陶磁器

土器・陶磁器の記載や遺物図版については、遺構資料と遺構外資料とに分け、さらに遺構資料については第IV章の遺構順に従い記載・掲載した。また、弥生土器の分類については既刊報告書のまとめ（渡邊2001）に倣い、A群：北陸系土器、B群：東北系土器、C群：折衷在地系土器、と大別して記載する。なお、竪穴建物と方形周溝墓出土の弥生土器の年代的位置づけについては、第七章第2節Aでまとめている。

1) 竪 穴 建 物 (SI)

SI1（図版26～28 1～69） SI1は1度建て替えを行っており、建て替え後は一辺9.6mと大型の竪穴建物である。調査は十字方向の畔（ベルト）を残して完掘しており、比較的多くの土器や石器・石製品のほか、鉄製品も出土している。土器はA群（北陸系土器）でほぼ占められ、時期はおおむね4期と推測される。

SI1-SD185（図版26 1～16） 1～16はSI1の建て替え後の壁溝SD185出土土器である。1～5は高杯・器台で、1・2・5が高杯、3・4が器台と考える。1～4は杯部・受部の内外面に赤彩が認められ、横方向主体のヘラミガキが施される。1は杯部の口縁部と底部との間に稜を持ち、比較的長い口縁部が外反気味に広がる有稜高杯である。2・3は口径20cm以上の大型品である。2は有段高杯で、口縁部が外反気味に外傾する。いわゆる中山南型式〔北野1991〕の高杯と推測する。3は短い口縁部が直線的に外傾し、端部は面を持つ。器台と推測する。4は内湾する口縁部で、端部は丸く収まる。小型の器台と推測する。5は高杯脚部で、脚柱部は中実で、裾部にかけてハの字状に外反して広がる。

6は小型のいわゆる直口壺で、口縁部の内外面に赤彩が施されるとともに、横方向の丁寧なヘラミガキが行われている。7は体部下位から底部で、底部は狭い平底をなし、外面に赤彩が施される。鉢と考える。8・9は壺である。8は有段口縁壺の口縁部で、内外面にヘラミガキと赤彩が施される。9は体部下位から底部にかけての破片で、外面にはハケメのちヘラミガキが、内面にはハケメが認められる。また、外面には黒斑が観察される。10は有段口縁の鉢で、やや内湾気味に上方へのびる口縁部で、外面には赤彩が認められる。11は体部下半から底部にかけての破片で、内面にもヘラミガキや赤彩が確認できることから鉢と推測する。12～15は甕。12は口縁端部を丸く収めている。13～15の口縁端部は面を持つ。13は上方への摘み上げが強い。14・15は口縁端部の面が比較的強く内傾し、さらに15では口縁端部下端の張り出しが比較的長い。外面ハケメ、内面ヘラミガキが確認できる。16は底部で、底径は小さい。内外面にヘラミガキが観察される。鉢もしくは甕の底部か。

SI1-SD186（図版26 17～20） 17～20はSI1の建て替え前の壁溝SD186出土土器である。17・18は高杯、

19は器台、20は壺と考える。17は高杯杯部の破片で、内湾する杯底部から段を持ったのち、口縁部が外反気味に外傾する。いわゆる御経塚ツカダ型式〔北野1991〕の高杯と考える。杯部は外面と口縁部内面に赤彩が施され、ヘラミガキが観察される。19は器台受部の破片で、外反気味に外傾したのち口縁部が有段となる。内外面にヘラミガキと赤彩が施される。20は壺の肩部から頸部の破片で、外面には丁寧なヘラミガキと赤彩が行われている。

SI1 (図版26～28 21～67) 21～67は壁溝・支柱穴以外のSI1出土土器である。

21～29・31は高杯と考える。21・22・26は高杯杯部で、内湾する杯底部から段を持ったのち、口縁部が外反気味に外傾する。いわゆる御経塚ツカダ型式〔北野1991〕の高杯と考える。22・26の段部内面の稜線は不明瞭である。21は17と比べると杯底部が浅く、器壁が厚い。23・24は口縁部が有段となり外反する。杯底部は直線・外反気味にのびる。25は小型高杯と推測するが器台の可能性もある。内湾する杯部で、端部は丸く収まる。27は内外面とも丁寧なヘラミガキと赤彩が確認できる。口縁部は外反しながら広がり、端部を丸く収める。28は内外面とも丁寧なヘラミガキと赤彩が施されており、外反気味に外傾する。器台の可能性もあろうか。29は器壁が比較的厚く、内外面とも丁寧なヘラミガキと赤彩が施されている。31は高杯脚部で、外面に赤彩が施される。

30・32は器台と推測する。30は有段で、短い口縁部が直線的に外傾する。内外面とも横方向の丁寧なヘラミガキと赤彩が確認できる。32は脚部片で、外面には丁寧なヘラミガキと赤彩が施されている。器台の脚部と推測する。また、33の器種は不明であるが脚の裾部片とみられ、短い裾部が水平気味に広がり丸く収まる。外面は赤彩が施される。高杯か器台もしくは鉢の脚部の可能性が推測される。

34～36は蓋で、34の頂部は平坦面をなし、35・36の頂部は凹む。また、36の外面は赤彩が確認できる。

37～40は鉢と考える。38は最大径を口縁部にもち、有段をなす。体部の器壁は比較的薄い。39は外面に赤彩が認められ、底の外面には下端を外方へ引き出した際の指頭圧痕が観察できる。台付鉢の台部と推測する。

41～46は壺と考える。41は口縁端部の破片で、内湾気味に外傾しながら端部を丸く収める。直口壺と推測するが、鉢となる可能性もある。42は口縁部で、外反しながら口縁端部へと至るいわゆる広口壺と考える。器面の摩滅が激しく調整は不明である。43は口縁部破片で、端部を摘まみ上げる。外面にヘラミガキが認められる。44は壺の頸部破片で、直立気味に立ち上がったのち外方へ外反して広がっている。外面はハケメ調整である。45は外反気味に外傾しながら広がるいわゆる広口壺の口縁部破片で、口縁端部は面を持つとともに、端部下端はやや突出する。46は縄文土器で、外面にLRの縄文が施されている。

47～55・57は甕と考える。47は有段口縁の甕で、外面と体部内面にはハケメ調整が行われている。なお、口縁部外面には横方向の比較的幅の広いハケメ調整痕が観察されるが、これについては擬凹線を意識した可能性はある。

48も有段口縁の甕であるが、器面の摩滅が激しく調整は不明である。49は外反する口縁部を持ち、端部は上方に摘まみ上げて面を持つ。体部内外面はハケメ調整が行われている。50は内湾気味に外傾する短い口縁部を持ち、口縁端部を上方に摘まみ上げている。51は外反する口縁部を持ち、端部は上方に摘まみ上げて面を持つとともに、端部下端がやや突出する。52・53は口縁部が外反し、口縁端部は面を持つ。52の外面にはススが付着する。54は、口縁端部が外方へ短く折れ、面を持って収束する。55は外反する口縁部破片で、口縁端部は工具により小波状を呈す。外面はヘラ状工具による鋸歯状の施文が認められる。また、内外面はハケメ調整が認められる。天王山系の在地の土器と推測される。56は縄文土器の深鉢口縁部破片で、肥厚した口縁端部に横方向の1条の沈線を施し、その上にヘラ状工具によって斜めのキザミを施文している。内外面にスス・炭化物が付着する。57は体部下方の破片で、外面にスス、内面に炭化物が付着している。

58～67は壺・甕の底部である。底部のつくりや調整、厚さなどから、63～65は壺の底部の可能性はある。

SI1-P511 (図版28 68・69) SI1の柱穴P511出土土器である。甕2点を図化し得た。68は有段口縁甕の口縁部である。器面摩滅のため調整は不明であるが、外面にススが付着する。69は天王山式系土器の口縁部破片で、内湾する口縁部に上方には沈線による施文が、下方には2段に及ぶ交互刺突文が確認できる。

SI401 (図版 28 70～72) 70 は壺の肩部破片で、外面にはヘラミガキが、内面にはハケメが施されている。71 は壺の底部か。内面にはヘラナデが観察される。72 は天王山式系土器の口縁部で、内湾して端部に面を持つ。外面にはRL縄文が斜位に施される。なお、端部には粘土の接合に伴う線状の痕跡を残す。土器はおおむね2期と推測する。

SI465 (図版 28 73～82) 73・74 は高杯で、73 は有段口縁の杯部破片。74 は高杯脚部で、杯部の形状は欠損のため不明である。脚部は裾に向かってハの字に広がる形態で、外面と杯部内面は丁寧なヘラミガキと赤彩が施される。75 は蓋と考える。端部を欠損する。外面はヘラミガキと赤彩が確認できる。76 は小型壺の体部と推測される。外面は丁寧なヘラミガキと赤彩が施され、内面にはヘラナデが行われる。77 は体部下半から底部の破片で、内外面ともヘラミガキのうえ、体部外面には赤彩が施される。鉢と推測する。78 は底部で、内外面は丁寧なヘラミガキが行われる。鉢もしくは壺の底部と推測する。79 は縄文土器の口縁部破片と推測され、段をもって直立気味に立ち上がった後、口縁端部が外方へ丸味をもって屈曲、収束する。80 は甕の体部下半から底部の破片で、底部は径が小さい平底をなす。外面にはススが付着する。81 は甕か壺の底部と推測する。82 の底部外面では網目状の圧痕を確認できる。縄文土器と考える。弥生土器はおおむね4期と推測する。

SI728-SD745 (図版 28 83～86) 83 は甕もしくは壺の口縁部破片で、内湾する口縁部に端部は面をもつ。C群土器と推測する。84 は東北系土器で、内湾する口縁部に縄文RLを斜位に施し、端部は平縁に刺突、キザミを行う。85 は平底の底部破片。鉢もしくは壺の底部か。86 は高杯の杯底部から脚柱部にかけての破片。杯底部下中央から下方へ突出する棒状の粘土を筒状の脚部の中へ差し込むことで杯部と脚部とをつなげている。土器はおおむね2期と推測する。

SI802 (図版 28 87・88) 87 は甕の口縁部と推測され、有段口縁で端部は丸く収まる。88 はB群土器で、沈線と沈線との間に交互刺突文が施されている。土器は概ね2期と推測する。

SI821-P811 (図版 28 89) 89 はC群土器の甕と推測され、口縁部外面にはススが付着する。有段状の口縁で、口縁部は内湾する。口縁端部は丸縁で、キザミが施される。口縁部外面には横位・斜位のハケメが認められる。土器はおおむね2期と推測する。

2) 掘立柱建物 (SB)

SB1 を構成する3基の柱穴 (P140・141・148) から出土した土器を図化・掲載し得た。SB1 は、出土土器や放射性炭素年代測定値 (第VI章参照) から、縄文時代後期の掘立柱建物と判断する。

SB1-P140 (図版 29 90・91) 90 は縄文土器で壺形土器の肩部と推測する。外面はヘラミガキが行われており、一部縄文が施されている。91 は鉢形土器と推測され、内湾する体部から頸部で段を持ったのち短い口縁部が外反もしくは直立気味にのびて収束する。口縁端部は指圧によって波状を呈する。また、段の部分にはキザミを施す。縄文土器で後期前葉の南三十稲場式に該当する。

SB1-P141 (図版 29 92) 92 は縄文土器の鉢の底部であろうか。

SB1-P148 (図版 29 93) 93 は深鉢の体部と推測される。外面はLR縄文が斜位に施され、内面はヘラミガキが認められる。

3) 方形周溝墓 (SZ)

方形周溝墓についてはSZ743とSZ822の2基発見されたが、土器が出土したのはSZ743に限られ、掲載遺物はSZ743の周溝と埋葬部から出土している。土器はおおむね2期を中心とした年代と推測する。

SZ743-SD715 (図版 29 94～96) SZ743の南辺の周溝である。94 は直口壺で、体部の内外面にハケメ調整が確認できる。95 は壺の底部と推測する。96 はB群の甕と考えられ、口縁部は有段ののち内湾気味にのび、端部をさらに上方へ摘まんで丸く収める。器面の摩滅が激しく調整など不明な点が多いが、外面にはススが付着しており、口縁部外面には一部縄文が確認できる。

SZ743-SD730 (図版 29 97～99) SZ743の西辺の周溝で、周溝北側の一部について掘削している。略完形

に復元された甕 97 は、潰れた状態で出土しており、墳丘から転落したものと推測される。なお、ガラス玉（図版 36-4）も近くで出土している。97 は「く」の字口縁の甕である。口縁部は直線的に外傾し、端部は面をもち、端部下端はわずかに突出する。器面の摩滅が激しいが、外面はハケメ調整で一部ススと黒斑が、内面はハケメやヘラナデ、頸部に指頭圧痕が観察される。98 は B 群の壺形土器で、内湾複合口縁部には上向きの連弧文と RL 縄文を、体部上半にも RL 縄文が施され、頸部は無文とする。また、口縁部下端には交互刺突文が、頸部の下端には横方向の沈線が 1 条認められる。なお、体部下方を欠損するものの同一個体と考える底部が出土している。99 は壺の体部である。C 群か。外面に黒斑が観察される。

SZ743-SD732（図版 29 100・101） SZ743 の北辺の周溝である。100 は直口壺の口縁部で、破片上端で横方向の沈線を 2 条確認できる。102 と類似しており、同様な形状の壺と考えられる。内外面赤彩。101 は壺の体部下半と推測され、内外面にハケメ調整が認められる。

SZ743-SD801（図版 29 102） SZ743 の東辺の周溝である。102 は周溝底面から約 0.2m 上の 1 層から略完形の状態で出土しており、周溝が埋没した後に墳丘から転落したものと推測される。口縁部が無段の細口直口壺で、体部中位に最大径をもつ。口縁部上方には 3 条の横方向の沈線が施されているが、下 2 条は比較的幅が広く、一番上は幅が狭い。擬凹線の影響と推測される。外面と口縁部内面には赤彩が認められる。口縁部内面はハケメ調整で接合痕を残し、外面のヘラミガキも含めて調整は全体的に粗い。

SZ743-SK739（図版 29 103・104） SZ743 の埋葬部 1 で、103・104 とともに遺構の平面プラン確認時に棺のプラン内から出土した。103 は器台と推測する。受部底部中央に直径 7mm ほどの孔が焼成前につくられている。受部内外面と脚部外面にハケメ調整が認められる。比較的粗いつくりである。104 は甕の底部であろうか。内外面にハケメ調整が認められ、外面にはススが付着する。

4) 土 坑 (SK)

SK701（図版 29 105） 105 は B 群の複合口縁壺と推測する。端部は平縁で、外面は横ハケ地文の内湾口縁部に 2 本沈線で連弧文を描き、下部には交互刺突文を施す。

SK706（図版 29 106） 106 は甕の口縁部と推測する。内面にハケメが行われる。

5) 溝 (SD)

SD40（図版 29 107） 107 は有段口縁の高杯の口縁部で、内外面とも横位のヘラミガキと赤彩が認められる。

SD819（図版 29 108） 108 は珠洲焼の鉢の破片である。方形周溝墓 SZ822 の周溝を切る溝から出土した。

6) 性格不明遺構 (SX)

SX42（図版 30 109～111） 109～111 はいずれも縄文土器で、後期前葉の南三十稲場式に該当する。110・111 の外面にはススが付着する。

SX813（図版 30 112） 112 は珠洲焼の鉢の口縁部である。SX813 は竪穴建物 SI821 内の不整な方形の遺構である。なお、112 は平面プラン確認時に覆土から出土したもので、遺構の掘削調査は行っていない。

7) ピ ッ ト (P)

P3（図版 30 113） 113 は縄文土器の深鉢の体部上方の破片で、外面にはススが付着する。外面の施文については、斜位の単節 LR 縄文の後、破片下部に横位の条痕文を施し、破片上部は磨り消し縄文による区画と円形竹管文を施文している。また、内面はミガキとナデで平滑に仕上げられている。

条痕文や磨り消しによる区画、円形竹管文といった特徴は、関東の鶴ヶ島台式土器の特徴と類似しており、縄文時代早期後半と考えられる。一方、内面に条痕文を施さない点や、胎土に植物質による繊維を含まない点など、県内における条痕文系土器とはやや異質な要素も見受けられる（小熊博史氏ご教示）。古津八幡山遺跡においてはこれまで確認されていなかった時期の遺物であり、新潟市内で最も古い土器となる。なお、胎土は在地のものでなく（前山精明氏ご教示）、遺跡周辺に同時期の遺跡が存在しないことなどから、遊動性に富む集団によって残された資料と推測される。

P46 (図版 30 114) 114 は縄文土器の南三十稲場式である。外面にススが付着する。

P49 (図版 30 115・116) 115 は縄文土器の南三十稲場式である。外面にススが付着する。116 は縄文土器の底部と推測される。底部内面には炭化物が付着しており、外面には籠目状圧痕が認められる。

P55 (図版 30 117) 117 は有段口縁で、器面の摩滅が激しいものの外面はヘラミガキ調整とみられ、器壁が薄いことなどから鉢と推測する。

P184 (図版 30 118・119) 118・119 は縄文土器の深鉢。

P198 (図版 30 120) 120 はU字形をした鉢形の土器で、底部は丸味を帯びるものの正位の状態安定して据わる。アスファルトが内面全体と、さらには一部外面にも内面から流れた状態で付着する。アスファルトの容器として利用した可能性が考えられる。土器の形や遺構覆土の特徴などから、縄文時代後期の土器と考える。

P212 (図版 30 121) 121 は縄文土器の南三十稲場式である。外面にススが付着する。

P239 (図版 30 122) 122 は外面に斜位のLR縄文を施す。内面はナデが認められる。外面にススが付着しており、C群の甕の体部破片と推測する。

P243 (図版 30 123) 123 は縄文土器の南三十稲場式である。外面にススが付着する。

P285 (図版 30 124・125) 124 は蓋。器面の摩滅が激しく調整などは不明である。125 は壺の底部か。

P512 (図版 30 126) 126 は高杯もしくは器台の脚部で外面にはヘラミガキが行われている。

P631 (図版 30 127) 127 は小型壺の体部で、外面にはヘラミガキ・赤彩が認められる。

P654 (図版 30 128) 128 は底部である。径が小さく鉢の底部か。

P703 (図版 30 129) 129 はC群土器の広口長頸壺で、体部下位から底部にかけて欠損する。口縁端部は平縁でキザミを入れる。内外面ともハケメ調整が行われ、体部内面には粘土紐の接合痕や指頭圧痕が観察される。

P806 (図版 31 130～132) 130 は有段口縁甕で、口縁部の内外面にハケメ調整を行う。131 は甕もしくは壺の頸部から肩部にかけての破片と推測する。肩部に板状工具による斜め方向のキザミが入れられている。上下が反対となる可能性もある。132 はC群の広口長頸壺と考える。外面にはハケメ調整が行われている。

8) 遺構外

遺構外 (図版 31 133～156) 遺構外出土遺物については調査区ごとに分けて掲載・記述する。

1T (133～151) 133 は器台、134～137 は高杯、138 は蓋、140・141 は鉢、142～144・151 は壺、145～150 は甕と推測する。136 は脚部外面に未貫通の孔が穿たれている。さらに、水平に約1.2cm離れた箇所には同じ大きさの円形の痕跡があり、穿孔の目印あるいは穿孔工具があたった痕跡の可能性もある。139 は楕円形の底部で、器種については不明である。縄文土器と推測する。

5T (152) 152 は高杯の杯部と考える。内外面とも比較的粗いヘラミガキが行われている。

7T (153) 153 は底部で、鉢もしくは壺の底部と考える。

9T (154・155) 154・155 はB群土器で、154 は重菱形文が、155 は交互刺突文と沈線が確認できる。ともに外面にススが付着する。なお、154 は堅穴建物SI802に伴う可能性がある。

11T (156) 156 は古代の土師器碗の底部で、回転糸切りによる切り離しである。

第3節 木製品

木製品としては、近世の土坑墓と考えるSK384から木製の数珠玉が2点出土しているのみである。なお、SK384からは、ほかに銭貨(本章第7節)や骨片が出土している。

SK384 (図版 31 1・2) 1・2とも木製の数珠玉で、どちらも中心部に孔が1つ穿たれている。ともに平面形は円形で、断面形状はおおむね球形を呈するが、孔が穿たれる両面には平坦面がつくられている。側面には黒漆を塗布したと推測されるが、摩滅して部分的に剥落している。なお、本土坑は半截した段階で調査を終了してい

るため、遺構全体の出土遺物については不明であるが、土坑から出土した数珠玉は2点と数が少ないことから、糸で繋がった本来の状態では埋置された可能性は低いと考える。

第4節 石 器

A 概 要

第20～25次にわたる確認調査は、南北約200m、東西約90mの広範囲に12本のトレンチを設定して行われた。それぞれのトレンチの調査面積も大きく異なり、また検出した遺構数の多少や種別も多様である。したがって、石器の出土量や石器組成も様々と思われる。第9表はトレンチ別に石器、搬入礫などを集計したものである。

第9表 トレンチ別・遺構別の石器等集計表

トレンチ名	遺構名・包含層	石 器 器 種													小計 (点)	原石		搬入礫				
		石 鎌	石 鎌未 成品	石 錐	削 器	両 極 石 器	磨 製 石 斧	石 錘	敲 磨 石 類	砥 石	台 石 類	剥 片 類	チ ツ ブ 類	石 核		軽 石 製 品	玉 作 資 料	黒 曜 石 (点)	メ ノウ ウ (点)	搬入礫 点数 (点)	搬入礫 重量 (g)	搬入礫の内 被熱点数 (点)
1T	SI1	19	8		7	14		12	3	1	59	680	4	1	1	809	25	3	255	14,756	45	5,772
1T	SI1-ビット4基	1				1						1				3			1	15	1	15
1T	SI1-SD185	4							1			5	31			41	1		25	990	8	180
1T	SI1-SD186						1					1	20			22			14	2,453		
1T	SI1-SK648																		2	51		
	小計	24	8		7	15	1	12	4	1	66	731	4	1	1	875	26	3	297	18,265	54	5,967
1T	SI401					1	2							1	1	5			7	1,506	4	1,146
1T	SI465	4	3	1		2		2	2	1	11	166				192	1		22	2,776	17	1,300
1T	SI465-SK603					1							2			3						
1T	SI465-SD96												4			4						
1T	SI465-P606				1											1						
	小計	4	3	2		3		2	2	1	11	172				200	1		22	2,776	17	1,300
1T	SB1-ビット7基							1								1			8	133	5	116
1T	SK275																		3	207		
1T	SK384											1	9			10	2					
1T	SD-3条																		4	47	2	38
1T	ビット50基	2			1	4		4	1	1	7	19				39	5		82	7,465	22	3,139
1T	その他の遺構-4基												3						8	472		
1T	遺物包含層	1	3		5	11	5	8	9	3	48	3	6			102	11	4	184	20,684	71	5,969
2T	遺物包含層							1							1	2	1		2	52		
3T	ビット8基				1					1	2					4	1		6	66	3	30
3T	遺物包含層	1												1		2	1		2	106		
4T	SK622											1				1						
4T	SD627																		1	94	1	94
4T	遺物包含層					1	1	1	2	1		2				8			11	1,600	1	49
5T	SI728											1				1						
5T	SI728-SD745							1								1		1				
5T	SZ743-SK739	2											2			4						
5T	SZ743-SK741	1														1						
6T	P707																1					
6T	遺物包含層				1			1								2						
7T	SZ743-SK810												1			1						
7T	SZ743-SD730																1					
9T	SI802				1							2				3						
9T	遺物包含層				1											1						
10T	P804											1				1						
11T	SI821-P817																		1	1,220		
11T	SZ822-SD815																		18	3,154	4	204
12T	SI821-P818																		1	690		
	表採・排土等											4	4			8			3	306		
	合計(点)	35	14	2	17	35	9	1	32	17	7	149	941	12	3	1,275	50	8	660	59,503	184	18,052

第9表を概観すると調査面積が広い1トレンチでは遺構数が多く、しかも遺構種別の多様であり、石器や搬入礫の出土はほかのトレンチに比べ圧倒的に多く、石器で96.9%、搬入礫で87.8%を占める。1トレンチでは過去の確認調査を含め、縄文時代後期と弥生時代後期の遺構・遺物が混在している地区である。これに対し、弥生時代後期の竪穴建物や方形周溝墓を検出した6～13トレンチでは、石器や搬入礫はそれほど多く出土していない。また1トレンチ周辺の2～5トレンチでは遺構・遺物はさらに少なくなる。

以下、出土石器の内容について詳述するが、出土点数から1トレンチの石器様相としてほぼ捉えることができる。

B 遺物各説

石鏃 (図版 32-1～25)

石鏃 (成品) は〔石川 1996〕の分類を基準に、以下の①～③のすべてにあてはまるものとした。

- ① 弓矢先端にふさわしい尖頭部と矢柄を装着する着柄部、この先端部と基部の双方に細部調整がされている。
- ② 側縁に細部調整が加えられ、正面形がほぼ左右対称である。
- ③ 側面から見て身部の軸がほぼ直線である。

成品とした個体の中にも、形がいびつなものや素材の厚みが残っているもの、二次調整がやや不十分で未成品に近いものなどがあるが、成品と未成品のいずれかに判断しかねる場合は石鏃 (成品) に含めた。

分類 石鏃 (成品) は35点出土した。その中で〔鈴木 1981〕を参考に以下のようにわけた。

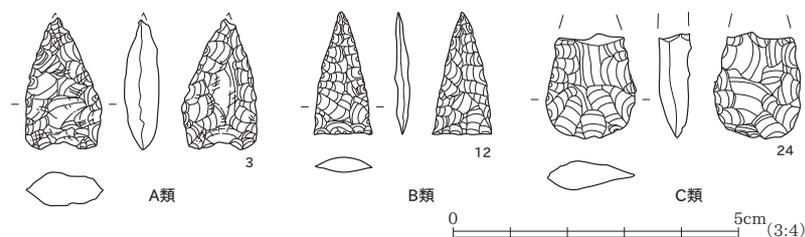
A類 凹基無茎族 中茎 (柄) がなく基部が凹状であるもの。

B類 平基無茎族 中茎 (柄) がなく基部が直線的であるもの。

C類 円基族 基部が丸みを帯びるもの。

分類不可 破損しており、基部が失われ分類ができないもの。

分類物出土数 A類は9点、B類は20点、C類は3点、分類不可3点である。このうち25点図示した。



第9図 石鏃分類図

石材 A類は流紋岩4点、凝灰岩2点、珪質頁岩2点、半透明頁岩1点、玉髓1点、B類は凝灰岩9点、珪質頁岩・流紋岩各3点、玉髓2点、半透明頁岩・黒曜石・頁岩各1点、C類は鉄石英・半透明頁岩・流紋岩各1点、分類不可は頁岩・チャート・黒曜石各1点である。多くは阿賀野市、新発田市、阿賀町方面及び阿賀野川水系からの搬入と思われる〔阿部 1997、村上・佐藤 2023〕が、黒曜石は大きさ、内外面の特徴から新津金津産〔立木 2001〕、半透明頁岩は岩船郡関川村産〔秦 2001〕と推定している。

個別遺物の説明 1・5・9は基部側辺が直線的であり、基部端では緩やかに内湾し、中期に見られる深く内湾するものは見られない。すべて完形である。5は尖頭部の左右にも角を持ち、正面形が五角形を呈する。9は10.1mm、8.7mm、1.9mmを測り、出土した他の個体よりも小型の石鏃であるが、端部まで精緻に調整がなされている。2～4・6～8ではすべて先端または脚部に欠損が見られる。2は尖頭部・脚部が欠損し、先端から右側縁にかけて縦に衝撃剥離痕が残る。

10～23をB類とした。10・15・17の尖頭部には衝撃剥離痕が残る。15にはアスファルトが付着している。

20 は半分が失われた石鏃破片であり、先端から基部にかけて縦に衝撃剥離痕が残る。これらは実際に石鏃として使用されたものと考えられる。

24 はC類とした。尖頭部は欠損している。石材は鉄石英である。

25 は分類不可とした。尖頭部が作り出されているものの、基部が欠損している。

石鏃未成品 (図版 32-26 ~ 31)

石鏃の分類基準①~③の条件に当てはまらないものを石鏃未成品とした。14 点出土し、6 点図示した。26 は、尖頭部が作り出されているが基部調整が不十分であり、基部に厚みが残る。27 は正面では薄く、裏面に厚みが残るため側面形が湾曲している。28 は風化により剥離が判然としないが、基部の調整が不十分で厚みが残る。29 は正裏面の厚みが均衡でないために、側面形が左右非対称になっている。30 は正面に厚み残り、尖頭部・側縁は粗い二次調整が入る。31 は側縁の断面形がコの字形を呈するほど厚く、側縁調整がなされていない。

石錐 (図版 32-32・33)

剥片の一部に二次調整を加え、尖頭部(錐部)を作出したものを石錐とした。2 点が出土している。この2 点は、ほぼ左右対称であり、石鏃とも正面形が類似するが、その先端部の断面形が厚みのある四角形または菱形を呈するため、石錐と判断した〔石川 1996〕。

32 は自然面(礫面)を残す。剥片のほぼ全周に連続した二次調整が加えられ、錐部を作出している。石材は玉髓である。33 は錐部に剥離が集中する。どちらも回転擦痕は見られない。

削器 (図版 32・33-34 ~ 39)

〔高橋 2024〕を参考に、剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が見られる不定形な石器を削器とした。17 点出土し、5 点図示した。34 は弧状の側縁部に不連続な剥離痕が見られる。石材は凝灰岩である。35 は凹状の側縁部に不連続な剥離が見られる。石材は凝灰岩である。36 は下端部のみ連続した剥離が見られる。石材は玉髓である。37 は弧状と凹状の両側縁に連続した剥離が見られる。石材は頁岩である。38 は下端部にのみ微細剥離痕が残る、片側縁では切断状剥離が見られる。石材は頁岩である。39 は剥片のほぼ全周に二次調整が加えられた円形の削器(ラウンドスクレイパー)である。石材は凝灰岩である。いずれも小型品である。

両極剥離痕のある石器 (図版 33-40 ~ 42)

「向かい合った2 辺ないしは4 辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対になって存在する」石器である〔岡村 1983〕。両極剥離痕のある石器としたものは剥片状のものがほとんどで、一部小型の石核状のものも含めた。大型で明らかに剥片を生産したと思われる石核状のものは、両極剥離痕のある石核として石核に分類した。35 点出土し、4 極2 対の刃部を持つもの5 点、2 極1 対の刃部を持つもの30 点を数える。このうち3 点を図示した。40 は4 極2 対の刃部を持ち、石材は凝灰岩である。41・42 は2 極1 対の刃部を持ち、石材はどちらも自然面(礫面)を残す黒曜石である。自然面(礫面)から、1 ~ 2cm 程度の小円礫を利用したと考えられる。秋葉山地区では小粒の黒曜石が産出することが知られている〔2001 藁科〕。なお全体の石材を見ると、黒曜石10 点、珪質頁岩6 点、凝灰岩・頁岩各5 点、流紋岩4 点、玉髓2 点、黒色緻密安山岩・緑色凝灰岩・チャート各1 点である。黒曜石は既述のように新津金津産、半透明頁岩は岩船郡関川村産と推定される。黒色緻密安山岩は十日町市方面の信濃川や上越地方の関川で採集できるが、遺跡周辺の下越方面では見られない。

磨製石斧 (図版 33-43 ~ 50)

斧形に成形され、表面を研磨されたものを磨製石斧とした。9 点が出土し、8 点図示した。そのうち5 点が破損品のため正確な大きさは不明であるが、遺存部から元の大きさを推定し、大型品と小型品に分けた。また、すべて石斧主面との間に稜を作り、断面が隅丸長方形であることから定角式磨製石斧と考えられる〔鈴木 1981〕。43 は長さ147.0mm、幅48.0mm、厚さ27.0mmを測る完形品である。刃部は円刃の両刃である。表面は著しく風化しており、擦痕は認められない。石材は輝緑岩である。44 はほぼ完形品であるが刃部と側縁部に敲打痕が見られ、敲打石に転用されたと考えられる。敲打痕により、やや刃が欠けているものの、円刃の両刃と考えら

れる。石材は安山岩である。45は片側縁部から刃部にかけて一部欠損している。石材は蛇紋岩である。46は刃部のみを残す破損品である。平刃の両刃である。石材は輝緑岩である。47～50は基部のみが残る破損品である。47はやや厚手に作られ、裏面中央には敲打痕が残る。49・50は残存した基部の厚さ・幅から小型品であると考えられ、石材はどちらも透閃石岩である。50は滑らかに研磨され、光沢を帯びる。

形状はすべて定角式磨製石斧で基部がすぼまり、刃部がわかるものは両刃である。太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧などと呼称される大陸系の磨製石斧は見られない。

石錘 (図版 33-51)

1点出土した。51は扁平な楕円礫を利用し、長軸の両端に切込みが施された石錘である。〔渡辺1973〕では、円石の両端に縄かけ用の切込みを施した石錘を切目石錘としている。切込みは使用により摩滅していると考えられる。石材は凝灰岩である。縄文時代後期の所産と推定される。

敲磨石類 (図版 33・34-52～60)

表面に敲打痕がある礫を敲石とし、磨面のみ残るものは磨石とする。またその両方が認められる礫を敲磨石とした。32点出土し、このうち9点を図示した。52～54敲磨石である。52は上端に敲打痕が残り、裏面にのみ磨痕が残る。下半分が欠損している。チャートの円礫を利用している。53は剥離と敲打痕が混在している。正面中央には磨痕が見られる。砂岩の楕円礫を利用している。54は両面とも中央に敲打痕が残り、敲打痕を囲むように磨面が見られる。花崗岩の円礫を利用している。55・56は敲打痕のみ残す敲石である。55は礫の下半分が欠損しており、正面の左側縁と破損部位の縁をなぞるように敲打痕が残る。破損しているものの砂岩の扁平礫を利用していると考えられる。56は下端部に剥離痕と敲打痕が集中する。流紋岩の楕円礫を利用している。57・58は磨石である。57は正面と片側面に磨痕が見られ、擦痕が残る。また裏面の縁辺にのみ剥離痕が残る。垂円礫を利用している。58は正面に磨痕が残る。被熱痕があり、裏面は欠損している。扁平礫を利用している。59は側面と下端に剥離痕と敲打痕を残す。60は磨痕のみ残る磨石である。下半分が欠損している。砂岩の垂円礫を利用している。

なお図示していないものも含めた石材は、砂岩9点、花崗岩5点、流紋岩・凝灰岩各4点、安山岩・チャート各3点、ドレライト2点、ホルンフェルス・玄武岩各1点である。阿賀野市・新発田市・阿賀町方面及び阿賀野川水系で採集されたものと推定される。

砥石 (図版 34-61～66)

研磨による平滑な砥面を持つものを砥石とした。砥石は17点出土し、このうち6点を図示した。61は正面以外を欠いた砥石片だが、残存する正面の全面が砥面である。砥面には凹凸がなく、非常に滑らかで光沢を帯びる。中砥である。置砥石と考えられる。62は正裏両面にのみ砥面が見られ、側面は使用されていない。中砥である。下端は欠損しているが砂岩の垂角礫を利用していると考えられる。63は正裏両面に砥面が残る。中砥である。板状の凝灰質砂岩を利用している。64～66はすべて横断面形が方形状の砥石である。いずれも凝灰岩を利用しており、細砥である。64は正裏面及び右側面が使用され、細かい擦痕が残る。下端が欠損している。65は正裏面及び側面・上面の5面すべてを砥面として使用し、細かい擦痕が残る。下端は欠損している。66は正裏面及び側面・下面の5面すべてに砥面の残る完形品である。正面には一部自然面が残り、裏面の中央に擦痕が集中する。61は砥面の状況、64～66は断面方形状の手持ち砥石から弥生時代ないしはそれ以降の所産と推定される。

なお図化していない砥石を含めた石材は、砂岩12点、凝灰岩4点、凝灰質砂岩1点である。

台石類

大型礫を素材とし、使用による磨痕や敲打痕が認められる石器である。加工の有無や使用痕の状況から石皿あるいは台石に細分している。7点抽出したが、図示していない。完形は1点のみで、ほかは破片である。完形としたものは安山岩の楕円礫で、長さ21.4・幅13.8・厚さ9.0cmの大きさで、重さは3.34kgを量る。正面の中央

部に2か所の窪み状の敲打痕が認められ、台石に分類されるものである。ほかの6点は破片で断定できないが、使用面の磨痕の状況から石皿の破片と思われるもので、掃出し口付近の破片が1点認められた。

剥片類・チップ類 (図版 34・35-67～79)

剥片類とチップ類の仕分けは、長さ・幅15mm前後の大きさをおおよその基準とした。剥片類は全体で149点、チップ類は同じく941点出土した。このうち1トレンチで剥片類136点(全体からの比率で91.3%)、同じくチップ類934点(全体からの比率で99.3%)出土している。ほかのトレンチに比べ極めて多いのは、縄文時代後期及び弥生時代後期の遺構が多く混在していたことや、竪穴建物などの重要遺構の覆土を水洗選別(ウォーターセパレーション)したことによるものと思われる。

剥片類やチップ類の中から13点の剥片を図示した。石材は流紋岩・頁岩各4点、珪質頁岩2点、凝灰岩・鉄石英・玉髓各1点であり、剥片石器の石材と同様である。67～77は大型剥片であり、小型剥片石器の素材に成り得るものである。打面を見るとほぼすべて剥離面で、正面の剥離面数も2～8面もあり、頻繁に打面転移して剥離作業が行われていたと推定できる。石材環境の良くない遺跡での剥片形状を示している。

78・79はチップ状の小型剥片で、小型石器の素材にもなり得ないと思われる。

石核 (図版 35-80～84)

剥片剥離作業の途中で、剥離作業を断念したか、または剥片剥離作業終了後の残核である。12点出土し、5点図示した。80は風化により判然としない部分もあるが、6面すべてに剥離痕が見られ、一部自然面が残る。81は正裏面・側面・下面に剥離痕が見られる。剥離作業が進み、小型化していると考えられる。82は大型剥片の裏面の周縁から剥離作業行われているが、手ごろな大きさの剥片は得られていない。83は新津産としては大きめの黒曜石の両端から剥離痕が見られることから両極剥離痕のある石核である。84は小型剥片の上面から左側面、正面に剥離作業が行われている。大きさからすれば剥離作業のほぼ終わりの形状と思われる。

軽石製品 (図版 35-85・86)

軽石の礫面に使用痕や加工痕が認められるものを軽石製品とした。2点出土した。85は裏面が、86では正裏面及び右側面に使用または加工により平坦状になっている。

玉作資料 (図版 35-87)

1点のみ出土した。87は長さ13.5mm・幅10mm・厚さ4mmを測る剥片である。管玉製作資料の第3工程形割未成品〔寺村1966〕の失敗品と推定される。石材は淡緑色を呈する緑色凝灰岩であり、弥生時代に所属する。

搬入礫 (図版 35-88～93)

明確な使用痕は認められないが何らかの目的を持って遺跡に持ち込まれたと思われるものを搬入礫とした。第9表のように搬入礫は660点(59.503kg)出土した。このうち被熱礫は184点(18.052kg)である。既述のように1トレンチからの出土が多く、搬入礫は615点(52.215kg)で全体の中の点数で93.2%を占める。被熱礫は175点(17.675kg)で全体の中の点数で95.1%を占める。このように搬入礫・被熱礫はほぼ1トレンチからの出土である。

搬入礫は使用痕が認められないものであるが、中には使用痕かどうか判断しかねるものが存在する。これらの搬入礫のうち6点を図化した。88は敲打痕様の器面を呈するが、器面全体が荒れていることから搬入礫とした。玄武岩の垂円礫である。89は下端が欠損するが、剥離痕が認められる。これ以外は使用痕や意図的な剥離が認められないことから石器認定していない。90は下半分が欠損しており、被熱痕も見られる。器面のごく一部に敲打痕様の痕跡が認められるが、器面の荒れと判別できなかった。凝灰岩の垂円礫である。91は風化が激しく、器面の荒れと剥落と敲打痕様の識別ができなかった。砂岩の円礫である。92は下半分が欠損している。全面が滑らかな器面を呈するが、磨痕と認定できなかった。凝灰岩の円礫である。93は石核のように見えるが、風化が激しく認定できなかった。白色凝灰岩の垂角礫である。

第5節 ガラス製品

第20～25次調査で計5点のガラス小玉が出土している(図版36-1～5)。いずれも遺構から出土したもので、SI1から3点、SZ743の周溝(SD730)から1点、SZ743の埋葬部1(SK739)から1点出土している。この5点に加え、第13次・14次調査で遺構外から出土したガラス小玉2点(渡邊・立木ほか2004)の計7点について、田村朋美氏に分析・考察をしていただいた(第VI章第3節)。ここでは本書で報告する1～5の形態や大きさなどの特徴を記述する。なお、1～5は孔と平行方向に並ぶ気泡が観察でき、端面は程度に差はあるが研磨されている。また、観察表にて長さとし幅とした数値のうち、長さとした数値の大きい方を以下では直径として記述した。

1～3はSI1からの出土資料で、いずれも覆土のフルイがけ作業で検出したものである。1は半分程度欠損している。欠損のため残存値での最大長は7.24mmを測るが、推定の直径は8.00mm程度となろう。色調は紺色透明である。2・3は完形品。2の直径は3.40mmで、3の直径は3.68mm、色調はともに淡青色透明である。4はSZ743の周溝(SD730)からの出土資料。半分が欠損するため幅は不明であるが、長さから直径は3.41mmとしておく。色調は淡青色透明である。5はSZ743の埋葬部1(SK739)からの出土資料。覆土のフルイがけ作業で検出した。完形品で直径は4.83mm、色調は淡青色透明である。

第6節 鉄製品

第20～25次調査において鉄製品は2点出土した(図版36-1・2)。どちらも竪穴建物からの出土である(SI1・728)。1は第21次調査にてSI1より出土したヤリガンナである。残存長4.9cm、身部残存長1.2cm、柄部残存長3.7cm、最大幅1.2cmを測る。最も幅広となる場所は刃部であり、柄の一部を鍛延することで身を作り出したと思われる。身部が反る側面形であり、反りは身と柄の境から始まる。柄の断面形は厚さ0.45cmを測る長方形だが、身の断面形は錆膨れで判然としない。有機質等の痕跡は確認できなかった。

2は第24次調査にてSI728より出土した鉄鎌である。残存長2.25cm、最大幅1.55cmを測る。上下端部が欠損しているため、正確な形状は復元できないが、側縁S字を描く平面形態だった可能性がある。断面形は凸レンズ形で厚さは0.25cmを測る。透過X線を撮影したことで(写真図版31)、中央部に穿たれた直径0.2cm程度を測る4つの孔が確認できた。その配置は並列二孔が縦列する形であり、欠損前はより多くの孔が穿たれていた可能性もある。一部に木質とおぼしき有機質の付着痕が確認できるが、根挟みのような矢柄の痕跡ではなく、土中埋没時に、近接した有機質が偶発的に付着したものと考えたい。側縁S字となる平面形態や凸レンズ形の断面形態から、鍛打技術も用いて製作したと考えられる。

第7節 銅製品

第20～25次調査において銅製品は8点出土しており、いずれも1Tから出土した銭貨である(図版36-1～7)。このうち6点は近世の土坑墓であるSK384から出土しており(同図1～5)、ほか2点は遺構外での出土である。1は錆によって2枚が固着した状態にある。SK384から計6枚の銭貨が出土していることから六道銭と推定される。一部に欠けや溶解・錆が確認されるものの、いずれも残存率は良い。1の文字は不明であるが、2～5はいずれも「寛永通寶」の文字が確認できる。6・7は遺構外の出土である。どちらも残存率が良く、「寛永通寶」の文字が確認できる。

第VI章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定－1

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

新潟県新潟市秋葉区金津・古津に所在する古津八幡山遺跡は、信濃川と阿賀野川に挟まれた丘陵上に立地する弥生時代の大規模な高地性環濠集落とされる。

本分析調査では、遺構内から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施し、遺構の年代に関する資料を得る。

A 試料

試料は遺構出土の炭化材で、SB1-P142の2層（試料①、図版17G-G'）、SB1-P178の2層（試料②、図版17I-I'）、P379の4層（試料③、図版14M-M'）、SK384の1層（試料④、図版14B-B'）の4点である。樹種を確認した結果、試料①は広葉樹の節（種類不明）、試料②と試料③はクリ、試料④はヤナギ属であった。

B 分析方法

炭化材は周囲をトリミングして付着物を取り除き50mg程度に調整する（切り取った残渣で樹種を確認する）。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理AAA：Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。試料が脆弱で、炭素の損耗が激しい試料に関しては、アルカリの濃度を薄くして処理する（AaAと記載）。

試料を燃焼し、二酸化炭素を発生させたあと、精製する。鉄を触媒とし水素で還元することによってグラファイトを得る。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う〔Stuiver & Polach 1977〕。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いる較正曲線はIntcal13〔Reimer et al.,2013〕である。

C 結果と考察

結果を第10表、第10図に示す。同位体補正を行った値は、試料①（SB1-P142 2層）が $3,655 \pm 20\text{BP}$ 、試料②（SB1-P178 2層）が $3,630 \pm 20\text{BP}$ 、試料③（P379 4層）が $3,755 \pm 20\text{BP}$ 、試料④（SK384 1層）が $125 \pm$

20BPである。

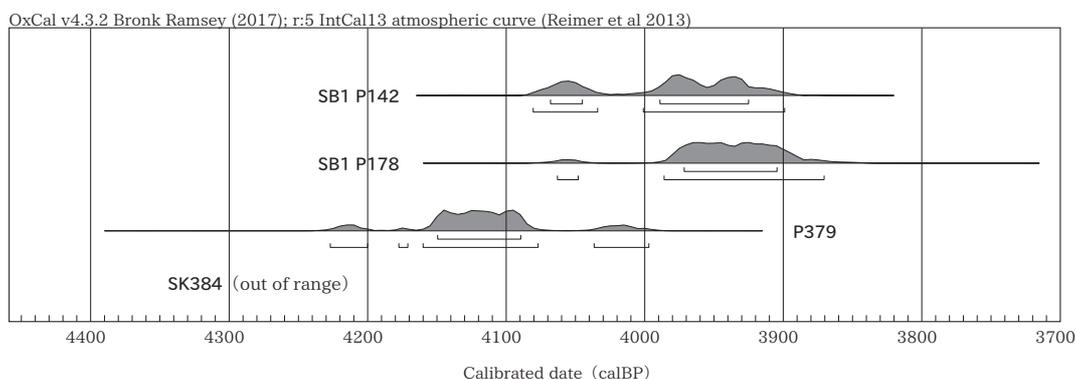
暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。ソフトウェアは、Oxcal4.3 [Bronk 2009]を用いる。2σの値は、試料①が4,081～3,899calBP、試料②が4,063～3,871calBP、試料③が4,227～3,997calBP、試料④が270～12calBPである。

試料①～③の3点については縄文時代中期後半の値を示した。遺構から出土した遺物の年代観などの発掘調査所見を含め、遺構の年代を検討することが望まれる。試料④については、近世～近現代の値が得られているが、炭化材の出土状況や遺構覆土の堆積状況などを含めた総合的な検討を実施し、遺構の年代を考える必要がある。

第10表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ ¹³ C (‰)	暦年較正年代			Code No.			
					年代値	確率%					
試料①	SB1 P142 2層	炭化材 広葉樹	AaA (0.1M)	3655±20 (3654±22)	-26.60±0.36	σ	cal BC 2119 - cal BC 2096 cal BC 2040 - cal BC 1976	4068 - 4045 cal BP 3989 - 3925 cal BP	16.1 52.1	YU-10971	pal-12489
						2σ	cal BC 2132 - cal BC 2085 cal BC 2052 - cal BC 1950	4081 - 4034 cal BP 4001 - 3899 cal BP	25.2 70.2		
試料②	SB1 P178 2層	炭化材 クリ	AAA (1M)	3630±20 (3628±22)	-25.96±0.045	σ	cal BC 2023 - cal BC 1956	3972 - 3905 cal BP	68.2	YU-10972	pal-12490
						2σ	cal BC 2114 - cal BC 2099 cal BC 2037 - cal BC 1922	4063 - 4048 cal BP 3986 - 3871 cal BP	2.6 92.8		
試料③	P379 4層	炭化材 クリ	AaA (0.1M)	3755±20 (3756±22)	-25.59±0.34	σ	cal BC 2201 - cal BC 2141	4150 - 4090 cal BP	68.2	YU-10973	pal-12491
						2σ	cal BC 2278 - cal BC 2251 cal BC 2229 - cal BC 2222 cal BC 2211 - cal BC 2128 cal BC 2088 - cal BC 2048	4227 - 4200 cal BP 4178 - 4171 cal BP 4160 - 4077 cal BP 4037 - 3997 cal BP	6.9 0.9 78.2 9.4		
試料④	SK384 1層	炭化材 ヤナギ属	AAA (1M)	125±20 (124±20)	-24.21±0.46	σ	cal AD 1685 - cal AD 1706 cal AD 1720 - cal AD 1733 cal AD 1808 - cal AD 1819 cal AD 1833 - cal AD 1880 cal AD 1915 - cal AD 1928	266 - 245 cal BP 231 - 218 cal BP 143 - 131 cal BP 118 - 70 cal BP 35 - 22 cal BP	11.4 7.9 7.0 33.3 8.6	YU-10974	pal-12492
						2σ	cal AD 1681 - cal AD 1739 cal AD 1746 - cal AD 1763 cal AD 1802 - cal AD 1894 cal AD 1906 - cal AD 1938	270 - 211 cal BP 204 - 187 cal BP 149 - 56 cal BP 45 - 12 cal BP	27.7 2.9 50.6 14.2		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、Intcal13を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である



第10図 暦年較正結果

第2節 放射性炭素年代測定－2

(株) 加速器分析研究所

A 測定対象試料

古津八幡山遺跡（新潟県新潟市）の測定対象試料は、掘立柱建物のピットと方形周溝墓の埋葬施設から出土した炭化物4点（試料⑤～⑧、試料⑤：図版17C-C'、試料⑥：図版17B-B'、試料⑦：図版22I-I'、試料⑧：図版22L-L'）である（第11・12表）。

B 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第11表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

C 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

D 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第2表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP、第2表）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用し、 $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する〔Stuiver and Polach 1977〕。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい（¹⁴Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている（第2表）。
- (4) 暦年較正年代（または単に較正年代）とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応

する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.3\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である(第2表の「暦年較正用(yrBP)」)。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線[Reimer et al. 2020]を用い、OxCalv4.4較正プログラム[Bronk Ramsey 2009]を使用した。暦年較正の結果を第3表($1\sigma \cdot 2\sigma$ 暦年代範囲)に示す。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用(yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

E 測定結果

測定結果を第11・12表、第11図に示す。

掘立柱建物跡のピットから出土した試料2点(試料⑤・⑥)の ^{14}C 年代は、試料⑤が $3710 \pm 30\text{yrBP}$ 、試料⑥が $3670 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、試料⑤が2191～2039cal BC、試料⑥が2131～1980cal BCの間に各々3つの範囲で示され、いずれも縄文時代後期前葉頃に相当する[小林編2008、小林2017]。

方形周溝墓の埋葬施設から出土した試料2点(試料⑦・⑧)の ^{14}C 年代は、試料⑦が $1920 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料⑧が $2120 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、試料⑦が70～200cal AD、試料⑧が169～59cal BCの間に各々複数の範囲で示される。試料⑦が弥生時代後期頃、試料⑧が弥生時代中期頃に相当し[小林2009]、同じ方形周溝墓に属する異なる埋葬施設間で年代差が認められる。

今回測定された試料は観察所見から木炭の可能性が高い。いずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す(古木効果)。今回測定された試料はいずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

なお、試料⑦が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、これまで北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘があった[尾寄2009、坂本2010など]。2020年に更新された較正曲線IntCal20[Reimer et al. 2020]では、新たに日本産樹木のデータが採用された結果、この範囲の較正年代値が日本産樹木の測定値に近づいた。系統的に認められる差異の原因究明を含め、今後関連する研究の動向を注視する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

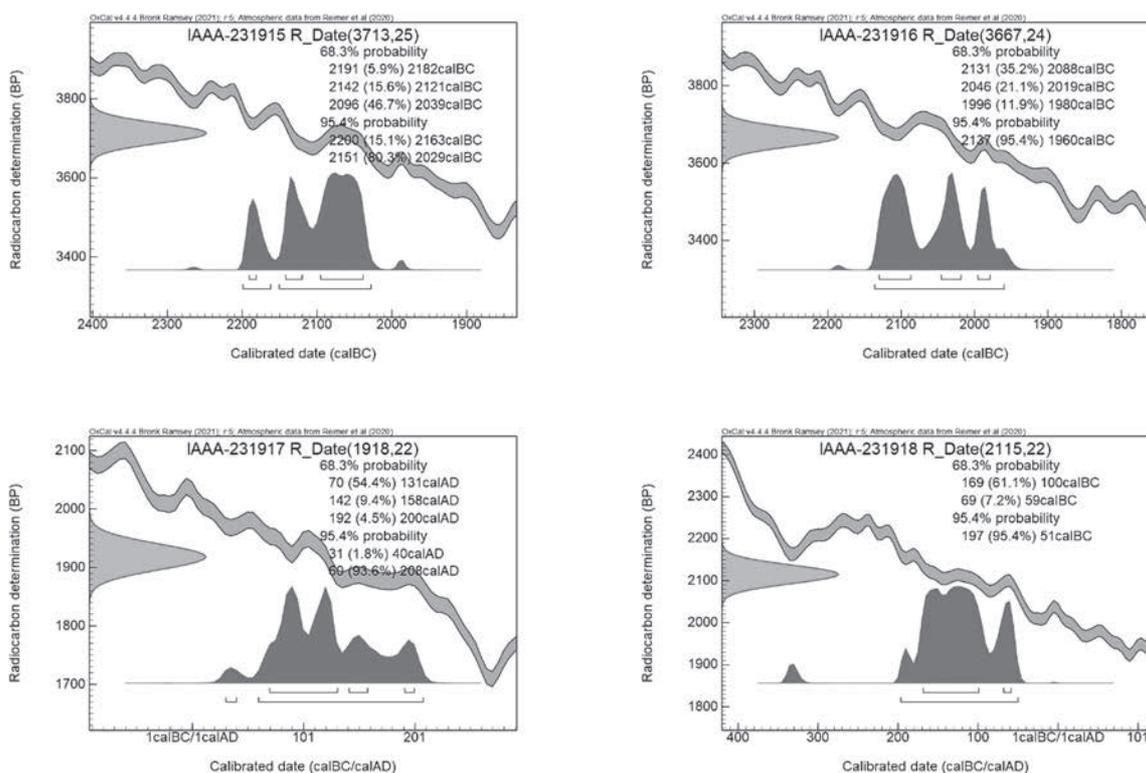
第 11 表 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C、¹⁴C年代 (Libby Age)、pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-231915	試料⑤	掘立柱建物SB1 P140 2層	炭化物	AAA	-25.02±0.24	3,710±30	62.99±0.20
IAAA-231916	試料⑥	掘立柱建物SB1 P192 2層	炭化物	AAA	-24.55±0.19	3,670±30	63.35±0.20
IAAA-231917	試料⑦	方形周溝墓SZ743埋葬部1 SK739 1層	炭化物	AAA	-24.21±0.20	1,920±30	78.76±0.22
IAAA-231918	試料⑧	方形周溝墓SZ743埋葬部2 SK741 1層	炭化物	AAA	-25.38±0.18	2,120±20	76.85±0.22

[IAA登録番号 : #C417]

第 12 表 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	試料名	採取場所	暦年較正用 (yrBP)	較正条件	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
IAAA-231915	試料⑤	掘立柱建物SB1 P140 2層	3,713±25	OxCal v4.4 IntCal 20	2191 cal BC - 2182 cal BC (5.9%) 2142 cal BC - 2121 cal BC (15.6%) 2096 cal BC - 2039 cal BC (46.7%)	2200 cal BC - 2163 cal BC (15.1%) 2151 cal BC - 2029 cal BC (80.3%)
IAAA-231916	試料⑥	掘立柱建物SB1 P192 2層	3,667±24	OxCal v4.4 IntCal 20	2131 cal BC - 2088 cal BC (35.2%) 2046 cal BC - 2019 cal BC (21.1%) 1996 cal BC - 1980 cal BC (11.9%)	2137 cal BC - 1960 cal BC (95.4%)
IAAA-231917	試料⑦	方形周溝墓SZ743埋葬部1 SK739 1層	1,918±22	OxCal v4.4 IntCal 20	70 cal AD - 131 cal AD (54.4%) 142 cal AD - 158 cal AD (9.4%) 192 cal AD - 200 cal AD (4.5%)	31 cal AD - 40 cal AD (1.8%) 60 cal AD - 208 cal AD (93.6%)
IAAA-231918	試料⑧	方形周溝墓SZ743埋葬部2 SK741 1層	2,115±22	OxCal v4.4 IntCal 20	169 cal BC - 100 cal BC (61.1%) 69 cal BC - 59 cal BC (7.2%)	197 cal BC - 51 cal BC (95.4%)



第 11 図 暦年較正年代グラフ

第3節 古津八幡山遺跡出土ガラス小玉の分析

田村 朋美（奈良文化財研究所）

A はじめに

古津八幡山遺跡では13次・14次調査で包含層から出土したガラス玉2点を含む合計7点のガラス小玉が出土している。本稿では、古津八幡山遺跡から出土したガラス小玉の基礎ガラスの種類および着色剤の特徴を把握することを目的として、化学組成の非破壊分析を実施した。以下、その結果について報告する。

B 資料と方法

調査対象とした資料は、13次・14次調査で包含層から出土したガラス玉2点（分析No.1～No.2）、21次・23次調査で大型竪穴建物（SI1）から出土したガラス玉3点（No.3～No.5）、24次調査で方形周溝墓（SZ743）の周溝（SD730）から出土したガラス玉1点（No.6）、そして24次調査で方形周溝墓（SZ743）の埋葬部1（SK739）から出土したガラス小玉1点（No.7）である。分析No.2が淡青色不透明、分析No.3が紺色透明を呈し、他はすべて淡青色透明である（No.1、No.4～No.7）。No.3およびNo.6は半分が欠損している。

調査は、実体顕微鏡観察および蛍光X線分析による非破壊元素分析によった。蛍光X線分析の測定結果は、ガラス標準試料を用いて、FP法によって規格化し、酸化物重量濃度（wt.%）で表示した。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDAX社製EAGLE III）、励起用X線源はRh管球である。管電圧は、標準資料で補正したFP法での定量分析では20kVに設定した。錫（Su）など20keV以上のスペクトルを検出する場合には管電圧を45kVに設定し、スタンダードレスのFP法により重量濃度を算出した。管電流は200 μ A、X線照射径は50 μ m、計数時間は300秒とした。測定は真空中で実施した。

C 結果と考察

古津八幡山遺跡出土のガラス小玉は、No.2以外は孔内面が平滑で、孔と平行方向に並ぶ気泡が確認されることから、軟化したガラスを引き伸ばしてガラス管を製作し、それを分割して小玉を得る「引き伸ばし法」によって製作されたと推定される。端面がわずかに研磨されている。No.2は軟化したガラスを芯棒に巻き付けた痕跡が孔と直交方向に筋状に認められることから、巻き付け法によると推定される。

第13表 古津八幡山遺跡出土ガラス小玉の蛍光X線分析結果

分析No.	出土遺構	製作技法	色調	基礎ガラス	材質分類	着色剤	本書報告 図版番号
1	13次調査 2T1区	引き伸ばし	淡青色透明	カリガラス	Group PII	銅	
2	14次調査 10T32区	巻き付け	淡青色不透明	カリ石灰ガラス	材質III	銅	
3	21次調査 大型竪穴建物（SI1）	引き伸ばし	紺色透明	カリガラス	Group PI	コバルト	図版36-1
4	23次調査 大型竪穴建物（SI1）	引き伸ばし	淡青色透明	カリガラス	Group PII	銅	図版36-2
5	21次調査 大型竪穴建物（SI1）	引き伸ばし	淡青色透明	カリガラス	Group PII	銅	図版36-3
6	24次調査 方形周溝墓（SZ743）の周溝（SD730）	引き伸ばし	淡青色透明	カリガラス	Group PII	銅	図版36-4
7	24次調査 方形周溝墓（SZ743）の埋葬部1（SK739）	引き伸ばし	淡青色透明	カリガラス	Group PII	銅	図版36-5

分析No.	重量濃度（wt.%）																			non-std
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	
1	2.1	0.9	4.7	74.8	0.1	0.1	13.8	0.6	0.14	0.02	0.01	0.52	0.00	1.57	0.02	0.43	0.06	0.03	0.13	0.24
2	5.1	1.0	6.1	63.6	0.1	0.1	13.1	7.5	0.14	0.02	0.02	0.38	0.01	1.54	0.90	0.22	0.03	0.07	0.13	0.18
3	2.0	1.0	3.0	77.3	0.1	0.1	11.9	1.4	0.14	0.02	1.58	1.24	0.05	0.03	0.02	0.03	0.03	0.04	0.08	n.d.
4	1.2	0.8	4.2	74.2	0.0	0.1	15.2	0.7	0.13	0.02	0.01	0.58	0.00	2.03	0.02	0.48	0.09	0.03	0.16	0.28
5	2.8	1.0	4.7	75.3	0.1	0.1	13.2	0.6	0.13	0.02	0.02	0.46	0.00	1.15	0.02	0.24	0.06	0.03	0.10	0.27
6	1.7	1.0	4.6	74.9	0.0	0.1	14.3	0.6	0.13	0.02	0.02	0.50	0.00	1.56	0.02	0.32	0.07	0.03	0.14	0.23
7	2.5	1.0	4.6	76.8	0.0	0.0	11.5	0.6	0.14	0.02	0.01	0.54	0.00	1.59	0.02	0.33	0.06	0.03	0.13	0.34

蛍光X線分析の結果、いずれもカリウム (K_2O) を多く含有することから、カリウムを融剤とするガラスであると推察される。ただし、No.2 はカルシウム (CaO) を 7.5% 含有することから、弥生～古墳時代に流通したカリガラスではなく、中世以降 (12世紀以降) に流通したカリ石灰ガラス (材質Ⅲ [田村・高橋 2022]) である (第13表)。巻き付け法で不透明を呈する色調も中世以降のカリ石灰ガラスに一般的な特徴である。

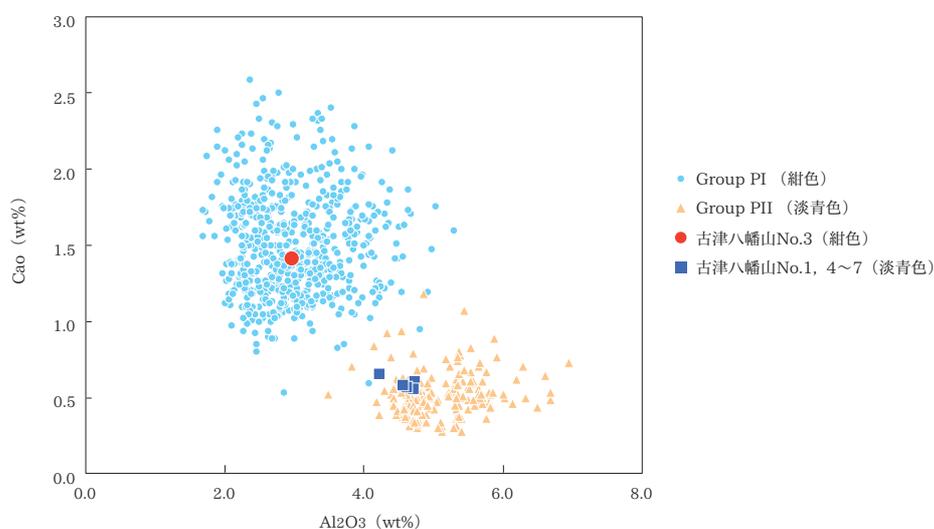
まず、No.2 以外について詳述する。紺色透明を呈する No.3 は、コバルト (CoO) を 0.05% 含有しており、コバルトイオンが主要な着色成分である。コバルト原料の特徴として、不純物と考えられるマンガン (MnO) を 1.58% 含有し、銅 (CuO) および鉛 (PbO) の含有量がきわめて少ない (0.1% 未満)。

一方、淡青色透明を呈する 5 点 (No.1, No.4～7) は、 CuO の含有量が多く (1.15-2.03%)、銅イオンが主要な着色要因である。いずれも微量の PbO と錫 (SnO_2) を含有しており、着色剤として利用された銅原料が青銅の可能性を示している。

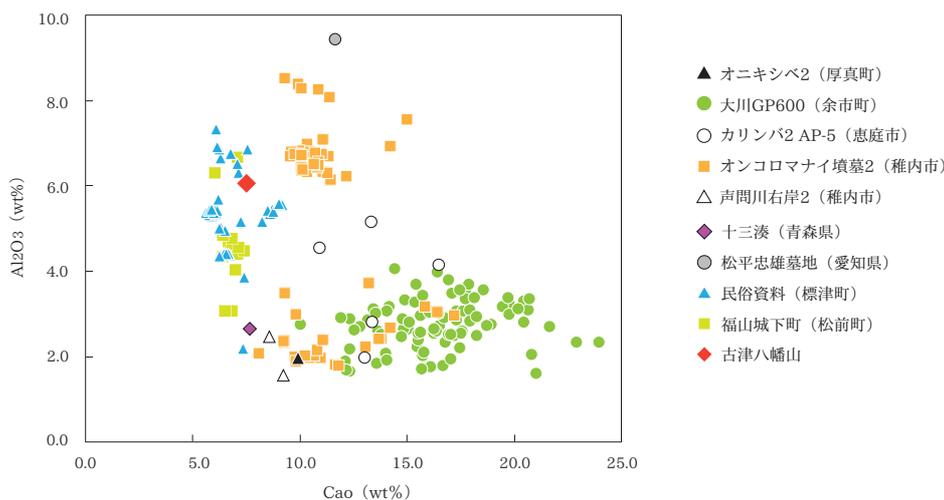
既往研究において、日本列島で出土するカリガラスは、 CaO と Al_2O_3 の含有量から二種類 (Group PI, Group PII) に大別され、さらに Group PI はコバルト着色の紺色カリガラスに、Group PII は銅着色の淡青色カリガラスに対応することが明らかとなっている [Oga and Tamura 2013]。本調査の結果、古津八幡山遺跡出土品についても基礎ガラスの種類と着色剤の関係において先行研究の分類と一致する結果が得られた。すなわち、紺色透明を呈する No.3 は、 Al_2O_3 含有量が相対的に少なく、 CaO 含有量が多いタイプのカリガラス (Group PI) と呼んでいるものに相当し、淡青色透明を呈する個体 (5 点) は Al_2O_3 含有量が多く、 CaO 含有量が少ないタイプ (Group PII) に相当する (第12図)。

No.3 は Group PI のカリガラスのなかでも大型品に属する。大型の Group PI は弥生時代後期後葉に出現し、北部九州や南関東で多く流通した [大賀 2020]。ただし、No.3 は端面が研磨されていることから、流入から一定の期間が経過していると推察される。Group PII のカリガラスは弥生時代後期初頭～前葉に北部九州と近畿北部に流入する。北部九州では Group PII に匹敵または卓越する量の Group PI (小型品) が流入するのに対し、近畿北部では Group PII が圧倒的に多い。本遺跡では Group PII が卓越する点で近畿北部の構成に類似する。ただし、やはり端面がわずかに研磨されており、流入から一定の期間が経過していることが示唆される。

最後に、包含層から出土したカリ石灰ガラス (No.2) について述べる。カリ石灰ガラスは中世ヨーロッパで製作された、ブナなどの森林の木材の灰を原料に用いた「ヴァルトガラス」が有名である [黒川 2009 など]。一方、中国でも山東省淄博市博山で発見された元末～明初のガラス工房遺跡においてカリ石灰ガラスが出土しているが、ヨーロッパのヴァルトガラスとは材質の特徴が異なる [易・涂 1984、淄博市博物館 1985]。中国では宋代は



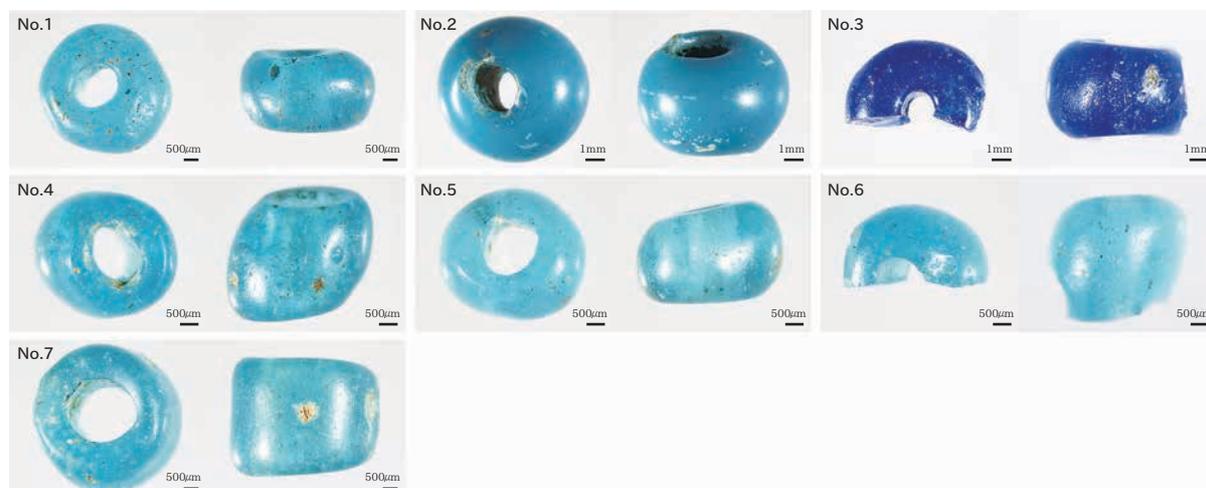
第12図 化学組成によるカリガラスの細分 (CaO vs. Al_2O_3)

第 13 図 他遺跡出土のかり石灰ガラスとの比較 (CaO vs. Al₂O₃)

かり鉛ガラスが流通したが、次第にかり石灰ガラスへと移行する〔干 2005〕。本州以南の日本列島では福岡県博多遺跡群で簪などの製品が少量出土している程度である〔比佐 2009〕。

一方、北海道では 14 世紀頃にはかり石灰ガラスの玉類の流通が一定量確認される。民俗資料も含めると北海道では近代まで多くのかり石灰ガラス製の玉類が流通していたようである。筆者らのこれまでの調査で、北海道で流通したかり石灰ガラスには化学組成によって複数のグループが存在すると考えている〔田村・高橋 2022〕。まだ分析調査は十分とは言えず、分類や時期変遷については不明な点も多いものの、筆者らがこれまでに調査した 14 世紀～近代 (民俗資料) のかり石灰ガラス、特に淡青色半透明～不透明のガラス玉の化学組成と比較をおこなった結果、北海道松前町福山城下町遺跡出土のガラス玉〔田村・高橋 2024〕と類似の組成を持つことが分かった (第 13 図)。福山城下町遺跡出土のガラス玉は、陶磁器の年代から 17 世紀後葉～18 世紀前葉に帰属すると推定されている。

着色材に関しては、銅 (CuO) を 1.54% 含むことから、銅が主要な着色要因である。さらに、亜鉛 (ZnO) を 0.90% 含む。このような銅原料の特徴も上述の福山城下町遺跡出土品と共通する。また、不透明のかり石灰ガラスは蛍石 (CaF₂) によって乳濁されていることが知られており〔田村・高橋 2020 など〕、本資料についても蛍石によって不透明を呈していると推測されるが、本測定ではフッ素 (F) は検出できないため、確証は得られていない。いずれにしても、弥生時代のガラスではなく、後世の混入品であると結論付けられる。



第 14 図 古津八幡山遺跡出土のガラス小玉顕微鏡写真 (倍率不同)

引用・参考文献

第Ⅵ章 第1・2節

- オ 尾崎大真 2009 「日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代」『弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭』同成社 225-235
- コ 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」『新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣 55-82
- 小林謙一 2017 『縄文時代の実年代 -土器型式編年と炭素14年代-』同成社
- 小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会 アム・プロモーション
- サ 坂本 稔 2010 「較正曲線と日本産樹木 -弥生から古墳へ-」『第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集』(株)加速器分析研究所 85-90
- B Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- R Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafliðason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62 (4), 725-757
- S Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

第Ⅵ章 第3節

- オ 大賀克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『古川登さん退職記念献呈考古学文集 いにしへの河をのぼる』55-64
- ク 黒川高明 2009 『ガラスの文明史』
- タ 田村朋美・高橋美鈴 2020 「擦文時代末期～アイヌ文化期初期におけるガラス玉の起源と流入経路」『北海道考古学』56 1-20
- 田村朋美・高橋美鈴 2022 「アイヌ文化期の遺跡出土ガラス玉の材質的特徴と時期変遷」『北海道考古学』58 45-66
- 田村朋美・高橋美鈴 2024 「福山城下町遺跡出土ガラス製遺物の自然科学分析」『松前町福山城下町遺跡 -町道朝日豊岡線代行事業改良工事に関わる埋蔵文化財発掘調査報告書-』付編I -10 (デジタル版)
- ヒ 比佐陽一郎 2009 「博多遺跡群161次で出土したガラス資料と156次調査出土の権について」『博多126』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1038集) 33-44
- ア 安家瑤 1984 「中国早期玻璃器皿」『考古学報』1984年第4期 413-448
- カ 干福熹(編) 2005 『中国古代玻璃技術的發展』
- イ 易家良・涂淑进 1984 「十四世紀中国博山の琉璃工艺」『硅酸盐学报』第十二卷第四期 404-410
- シ 淄博市博物館 1985 「淄博市元末明初玻璃作坊遗址」『考古』1985年第6期 530-539
- オ Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9. 35-65

第Ⅶ章 総 括

第1節 遺 構

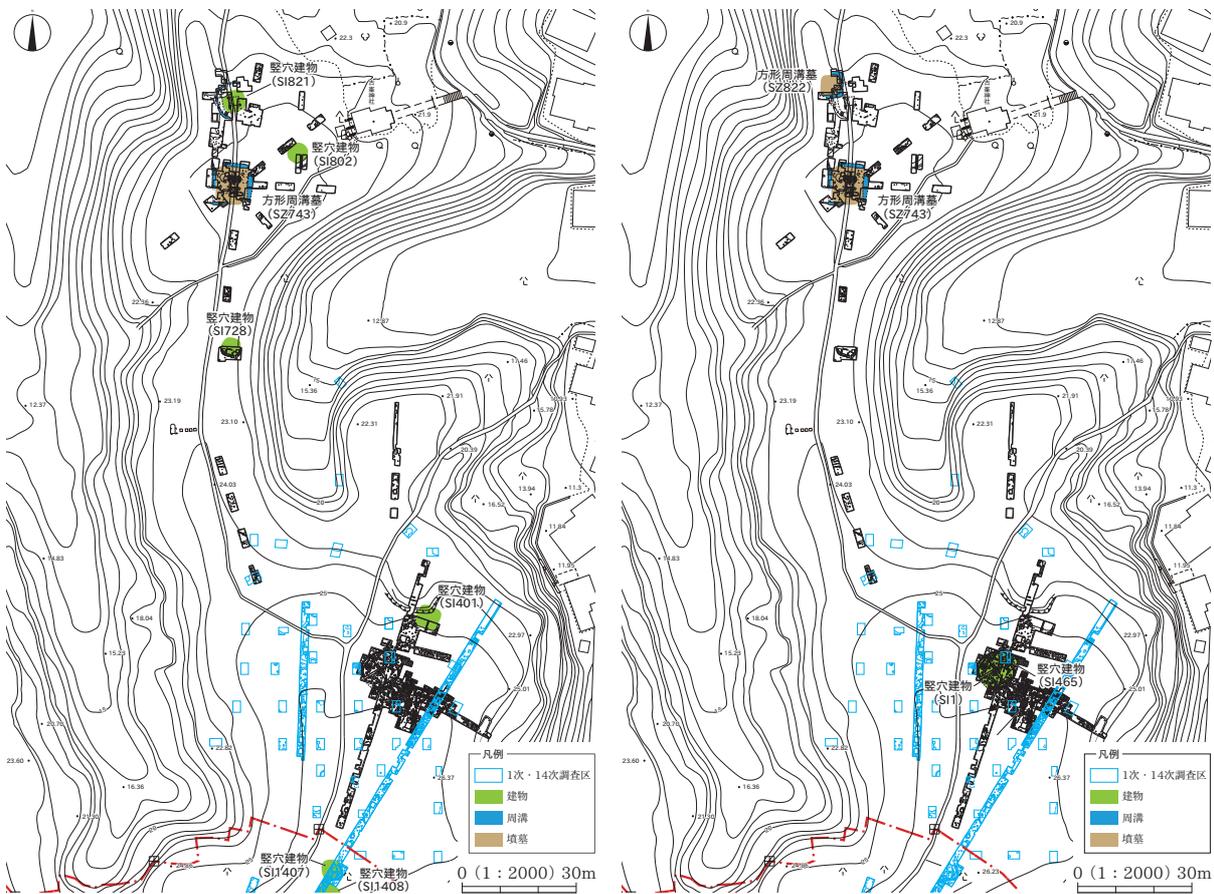
A 北東地区における遺構の変遷

本項では北東地区における主な遺構の変遷について概観する（第15図）。なお、主な遺構出土土器の年代については本章第2節Aで示している。

方形周溝墓（SZ743）については、出土土器から後期後半（2期）を中心とする年代が推測され、さらに埋葬部1の放射性炭素年代測定値（第Ⅵ章）からは後期後半・後期末（2・3時期）頃の年代が推定される。また、埋葬部2～4については埋葬部1より古い可能性が考えられる（第Ⅳ章第3章）。埋葬部2の放射性炭素年代測定値は弥生時代中期を示すが、これまでの古津八幡山遺跡出土遺物の上限からは遡っても後期前半（1期）とみたい。

さて、弥生時代後期後半（2期）には北東地区の北・南とも竪穴建物が点在していたと考えられる。また、既述のとおり方形周溝墓（SZ743）もこの時期には存在していた可能性が高い。

弥生時代後期末・終末期（3・4期）になると、北東地区南では当遺跡で最大の竪穴建物（SI1）が出現し、その後、さらに竪穴建物（SI465）が続く。一方、北東地区北では竪穴建物は見られなくなり、SZ743の北側にSZ822が見つられるなど、尾根に沿うかたちで墓域が形成されていったと推定される。SZ822の北側を調査すれば別の墳墓が確認される可能性は高いであろう。また、この時期に居住域と墓域とが意識された可能性がある。



第15図 北東地区における弥生時代後期後半（2期）の主な遺構（左図）と弥生時代後期末・終末期（3・4期）の主な遺構（右図）

B 大型 竪穴建物 (SI1)

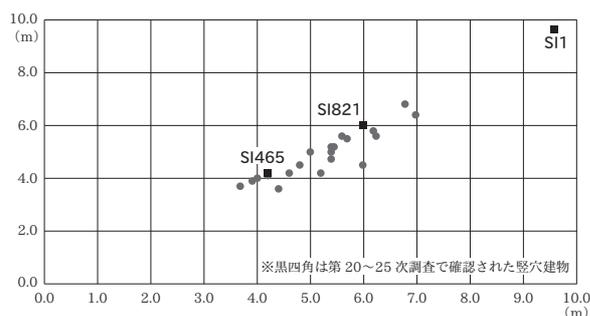
本書報告の第20～25次調査で弥生時代の竪穴建物を6棟確認した。これにより、古津八幡山遺跡においてこれまでの発掘調査で確認された弥生時代の竪穴建物の総数は65基となった。部分的な調査で全体が不明な建物も多いが、基本的に平面形態は隅丸方形で4本の支柱構造をなす。また、建物規模は5m前後が一般的で、4～6mの中に大半が収まる(第14表・第16図)。

建て替え後の大型竪穴建物SI1は一辺9.6mと古津八幡山遺跡の竪穴建物の中では特段大きな規模である(第16図)。支柱は6本構造で、古津八幡山遺跡の竪穴建物の中では異質といえる。県内でも支柱が5本以上となる多柱構造の竪穴建物は限られ、上越市の下馬場遺跡1号竪穴や7号竪穴など僅かである(第15表・第17図)。なお、佐渡市蔵王遺跡の大型の平地建物でも多柱構造が確認されている。以上、建物の規模や構造に加え、炉跡や貯蔵穴を伴わない点などから、大型竪穴建物SI1は居住以外の用途で利用されたと推測する。

また、第IV章で記したとおり竪穴建物SI1は建て替え前には中央付近の土坑から建物外へと排水溝がのび、建て替え後には壁溝から建物外へと排水溝がのびていたと考えられる(第7図)。当遺跡において前者の事例は他に確認されておらず、後者の事例も本書報告のSI465の1例に限られる。

県内では、建物内の土坑から壁溝へ排水溝がのびる事例が糸魚川市の後生山遺跡1号住居と出雲崎町の大慶寺御経塚1号竪穴建物で認められるが、排水溝が建物内で収束する点で異なる(第18図)。両建物とも玉作り関係の建物と考えられているが、SI1では玉作り関連の資料は剥片1点(図版35-87)に限られる。

建物内の土坑や壁溝から建物外へと排水溝がのびる事例は西日本に多く、北陸でも拠点集落の大型建物を中心に確認されている〔石黒2019〕(第19図、石黒立人氏ご教示)。多柱構造も含め、古津八幡山遺跡のSI1の建物構造については西方の拠点集落、有力者層との関係が考えられよう。



第16図 古津八幡山遺跡における竪穴建物の規模

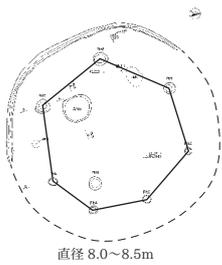
第14表 古津八幡山遺跡竪穴建物一覧

遺構名称	調査年次	平面形態	規模 (m)		支柱穴の数	備考
			長軸	短軸		
1 SI0101	1次	—	—	—	—	
2 SI03S02	3次	隅丸方形	5.0	—	—	
3 SI03S03	3次	隅丸方形	5.4	5.2	4	
4 SI03S05	3次	隅丸方形	7.0	6.4	4	
5 SI03S06	3次	—	—	—	—	
6 SI03S07	3次	隅丸方形	—	—	—	
7 SI03S11	3次	隅丸方形	5.4	4.8	—	
8 SI03S12	3次	隅丸方形	—	—	—	
9 SI03S13	3次	隅丸方形	—	—	—	
10 SI03S17	3次	—	—	—	—	
11 SI03S18	3次	隅丸方形	3.9	3.9	—	焼失建物
12 SI03S19	3次	隅丸方形	—	—	—	
13 SI03S20	3次	隅丸方形	—	—	—	
14 SI03S22	3次	隅丸(長)方形	4.4	3.6	—	
15 SI03S23	3次	隅丸方形	4.0	4.0	—	
16 SI03S24	3次	隅丸方形	5.2	—	—	
17 SI03N01	3次	隅丸方形	4.2	4.2	—	
18 SI03N02	3次	隅丸方形	5.4	5.0	4	
19 SI03N03	3次	隅丸方形	5.4	5.0	4	
21 SI03N04	3次	—	—	—	—	
20 SI03N08	3次	隅丸方形	6.2	5.8	—	
22 SI0601	6次	隅丸(長)方形	5.2	4.2	4	
23 SI0602	6次	隅丸方形	5.6	5.6	4	
24 SI0603	6次	隅丸方形	—	—	—	
25 SI0701	7次	隅丸方形	3.7	3.7	4	
26 SI0702	7次	円形?	—	—	—	
27 SI0703	7次	隅丸方形	5.0	5.0	—	
28 SI0704	7次	隅丸方形	5.0	5.0	—	
29 SI0705	7次	隅丸方形	6.0	6.0	—	
30 SI0802	8次	隅丸方形	6.0	4.5	4	
31 SI0803	8次	隅丸方形	5.0	5.0	4	
32 SI0804	8次	隅丸方形	5.0	5.0	4	鉄鏝 焼失建物
33 SI1002	10次	—	—	—	—	
34 SI1003	10次	隅丸方形	4.6	4.2	—	
35 SI1007	10次	—	—	—	—	
36 SI1008	10次	—	—	—	—	
37 SI1009	10次	—	—	—	—	
38 SI1010	10次	—	—	—	—	
39 SI1301	13次	—	—	—	—	
40 SI1307	13次	隅丸方形	6.2	5.6	—	
41 SI1308	13次	—	—	—	—	
42 SI1309	13次	隅丸方形	6.8	6.8	—	
43 SI1311	13次	—	—	—	—	
44 SI1312	13次	—	—	—	—	
45 SI1313	13次	—	—	—	—	
46 SI1401	14次	隅丸方形	5.7	5.5	4	旧SI03S21
47 SI1407	14次	隅丸方形	4.8	4.5	4	
48 SI1408	14次	隅丸方形	5.5	5.2	—	
49 SI1708	17次	—	—	—	—	
50 SI1712	17次	隅丸方形	—	—	—	
51 SI1722	17次	隅丸方形	4.0	4.0	—	
52 SI1729	17次	—	—	—	—	
53 SI1730	17次	—	—	—	—	焼失建物、炭化米
54 SI17311	17次	隅丸方形	—	—	—	
55 SI1732	17次	—	—	—	—	
56 SI1733	17次	—	—	—	—	
57 SI1805	18次	—	—	—	—	
58 SI1819	18次	—	—	—	—	
59 SI1822	18次	—	—	—	—	
60 SI1	20次	隅丸方形(多角形状)	9.6	9.6	6	大型建物、ヤリガンナ
61 SI401	22次	隅丸方形	6.2	—	—	
62 SI465	22次	隅丸方形	4.2	4.1	4	
63 SI728	24次	隅丸方形	—	—	4か	鉄鏝
64 SI802	25次	円形?	—	—	—	
65 SI821	25次	隅丸方形	6.0	6.0	4	

第 15 表 県内における弥生時代後期・終末期（1～6期）の主な竪穴建物（古津八幡山遺跡・平地式建物除く）

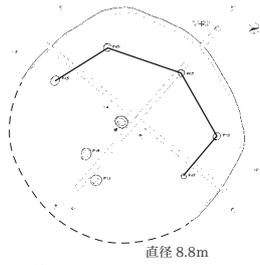
遺跡名	市町村名	低地との比高	遺構名	平面形	規模 (m)		主柱穴の数	備考
					短軸	長軸		
滝ノ前遺跡	村上市	40m	第1号住居跡	円?	—	—	不明 (柱穴3)	
			第2号住居跡	円	5.5	5.7	不明 (柱穴多)	
			第3号住居跡	円	5.2	5.4	不明 (柱穴多)	
山元遺跡	村上市	37m	1号竪穴建物	楕円	4.5	6.3	抽出できず	
中曽根遺跡	村上市	0m	SI40	楕円?	4.8	5.7	不明 (柱穴5本確認)	
			SI41	楕円?	4.6	8.2	不明 (柱穴4)	
堂の前遺跡	村上市	0m	SI318	楕円	4.5	5.5	4か (3本確認)	
			1号住居跡	隅丸方形	3.7	—	4	
大沢遺跡	新潟市	30m	2号住居跡	隅丸方形	3.0	3.0	不明 (確認されていない)	
			4号住居跡	隅丸方形	4.0	4.0	4	
			6号住居跡	隅丸方形	2.0	2.0	不明 (柱穴3か6)	
			1号住居跡	?	—	—	不明 (ピット1)	
経塚山遺跡	三条市	67m	2号住居跡	隅丸方形	4.7	—	不明 (ピット3)	
			3号住居跡	隅丸方形?	—	—	不明	
			SI1	隅丸方形	7.5	6.9	4	周溝を持つ建物
岩沢遺跡	見附市	40m	3号住居跡	隅丸方形	3.3	3.3	不明	
			4号住居跡	隅丸方形	4.8	4.8	不明	
			5号住居跡	隅丸方形	—	—	不明	
高稲場遺跡	見附市	15～20m	1号住居跡	円形	5.0	5.0	不明 (柱穴あり)	
山崎A遺跡	見附市	30～35m	003住居跡	隅丸方形?	—	—	不明 (柱穴2)	
藤ヶ森遺跡	長岡市	26～32m	竪穴住居跡	隅丸方形	6.3	7.0	4か (3本確認)	
横山遺跡	長岡市	6m	1号住居跡	隅丸方形	5.0	5.0	4	
			2号住居跡	隅丸方形	5.3	5.3	4	
			3号住居跡	方形	4.4	4.4	4か (3本確認)	
			4号住居跡	隅丸方形	3.6	—	不明	
奈良崎遺跡	長岡市	22m	SI4	円?	3.5	5.3	不明	
			SI12	円	9.6	—	不明	
			SI20	?	—	—	不明	
			SI105	隅丸方形	4.6	—	不明	
			SI102A	隅丸方形	3.5	3.7	4	
			SI102B	方形	3.3	3.4	4	
			SI1581	隅丸方形	—	—	4	
五斗田遺跡	長岡市	0m	方形周溝状遺構	隅丸方形	9.1	9.0	4	周溝を持つ建物
大慶寺御経塚遺跡	出雲崎町	34m	1号竪穴建物	隅丸方形	6.3	6.3	4	土坑・排水溝
内越遺跡	柏崎市	15～20m	住居跡	隅丸方形	8.4	8.8	4	
真山遺跡	上越市	75m	1号竪穴	隅丸方形	4.8	6.2	4	
			2号竪穴	隅丸方形	4.7	5.6	4	
			3号竪穴	楕円形	3.5	4.9	0か	
			4号竪穴	隅丸方形?	5.0	—	不明	
			5号竪穴	?	—	—	不明	
			6号竪穴	隅丸方形	3.7	4.1	0か	
			7号竪穴	隅丸方形	3.5	4.4	不明	
			8号竪穴	隅丸方形	3.4	4.2	不明	
下馬場遺跡	上越市	30～40m	1号竪穴	円?	8.0?	—	7	
			2号竪穴	隅丸方形	9.0	9.0	4	
			3号竪穴	隅丸方形	5.0	5.0	4	
			4号竪穴	隅丸方形	5.7	6.2	4	
			5号竪穴	隅丸方形	4.5	4.8	2	
			6号竪穴	隅丸方形	4.0	4.6	2	
			7号竪穴	隅丸方形	8.8	8.8	5	
			8号竪穴	隅丸方形	3.6	—	不明	
			9号竪穴	隅丸 (長) 方形	3.4	4.4	2	
			10号竪穴	隅丸方形	3.5	—	2か (1本確認)	
			11号竪穴	隅丸方形	6.2	6.5	4	
			12号竪穴	隅丸 (長) 方形	4.9	6.2	2	
			13号竪穴	隅丸方形	4.9	5.9	2	
			14号竪穴	隅丸方形?	—	—	不明	
山畑遺跡	上越市	15～20m	7号住居跡	隅丸方形	5.1	5.9	3 (柱穴3)	
			吹上遺跡	上越市	0m	SI688A、B SI696A、B、C	隅丸方形?	—
子安遺跡	上越市	0m	SI20239	隅丸 (長) 方形	6.8	9.6	4	
			SI20240	隅丸 (長) 方形	6.8	8.4	4	
			SI20631	隅丸方形	4.0	4.5	5	
			SI20648	隅丸方形?	6.0	—	4か (2 or 3本確認)	周溝を持つ建物
			SI20649	隅丸方形?	7.5	—	4か (2本確認)	周溝を持つ建物
			SI20724	隅丸方形?	5.5	5.5	4	周溝を持つ建物
			SI20900	隅丸方形?	7.0	6.5	6	周溝を持つ建物
			SI20968	方形	4.7	5.6	2	周溝を持つ建物
			SI20969	円形?	7.0	6.4	5	周溝を持つ建物
中島廻り遺跡	上越市	0m	1号墳	隅丸方形	9.1	8.7	不明	周溝を持つ建物
荒町南新田遺跡	上越市	5～10m	SI1356	隅丸 (長) 方形	3.5	4.3	不明	
釜蓋遺跡	上越市	0m	SI41	隅丸方形	6.4	7.2	不明	
			SI83	隅丸方形	9.9	10.1	4か (1本確認)	
			SI1050	隅丸方形	11.0	11.2	不明	
			SI1152	隅丸方形	11.7	11.7	不明	
			SI1271	隅丸方形?	—	—	不明	
			SI1274	長方形?	3.5	—	不明	
			SI1276	隅丸方形?	—	—	不明	
			SI1277	隅丸 (長) 方形?	—	—	不明	
			SI1278	?	—	—	不明	
			SI1280	隅丸方形?	—	—	不明	
			SI1282	隅丸方形	3.8	4.0	不明	
			SI1553	隅丸方形	7.0	6.6	不明	
			SI1556	長方形	5.1	3.6	不明	
			SI1581	方形	6.7	6.3	不明	
			SI1582	長方形	4.7	5.9	不明	
			SI1583	?	—	—	不明	
			SI1564	?	—	—	不明	
			SI1568	隅丸方形	12.4	12.4	4	
斐太遺跡群	妙高市	45m以上	上ノ平・矢代山地区1号	隅丸方形	6.0	6.0	4	
			上ノ平・矢代山地区2号	隅丸方形	6.0	6.0	4	
			上ノ平・矢代山地区24号	方形	5.0	5.0	2か (柱穴は9基確認)	
			百両山地区第31号	方形	2.7	2.7	不明 (小穴あり)	
矢代山墳丘墓群C支群SI1	隅丸方形?	5.2	—	不明 (1基確認)				
後生山遺跡	糸魚川市	30m	1号住居跡	円形?	7.0	—	4	中央土坑・排水溝
			2号住居跡	隅丸方形	4.0	4.0	0	
			3号住居跡	隅丸方形	6.0	—	4	
			4号住居跡	隅丸方形	—	—	2	
堰下遺跡	津南町	100m	1号住居跡	隅丸方形?	3.6	4.6	柱穴6基 (主柱穴かは不明)	
			2号住居跡	円?	5.5	—	柱穴4基 (主柱穴かは不明)	
蔵王遺跡	佐渡市	0m	SI1	隅丸方形	4.7	5.1	不明	

1号竪穴 (弥生後期)



直径 8.0～8.5m

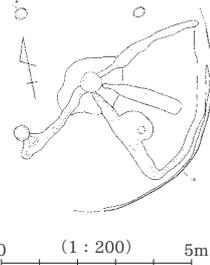
7号竪穴 (弥生後期)



直径 8.8m

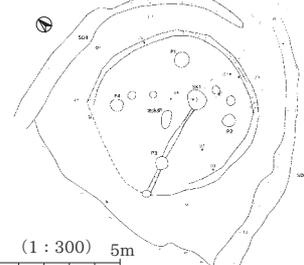
0 (1:300) 5m

後生山遺跡1号住居跡



0 (1:200) 5m

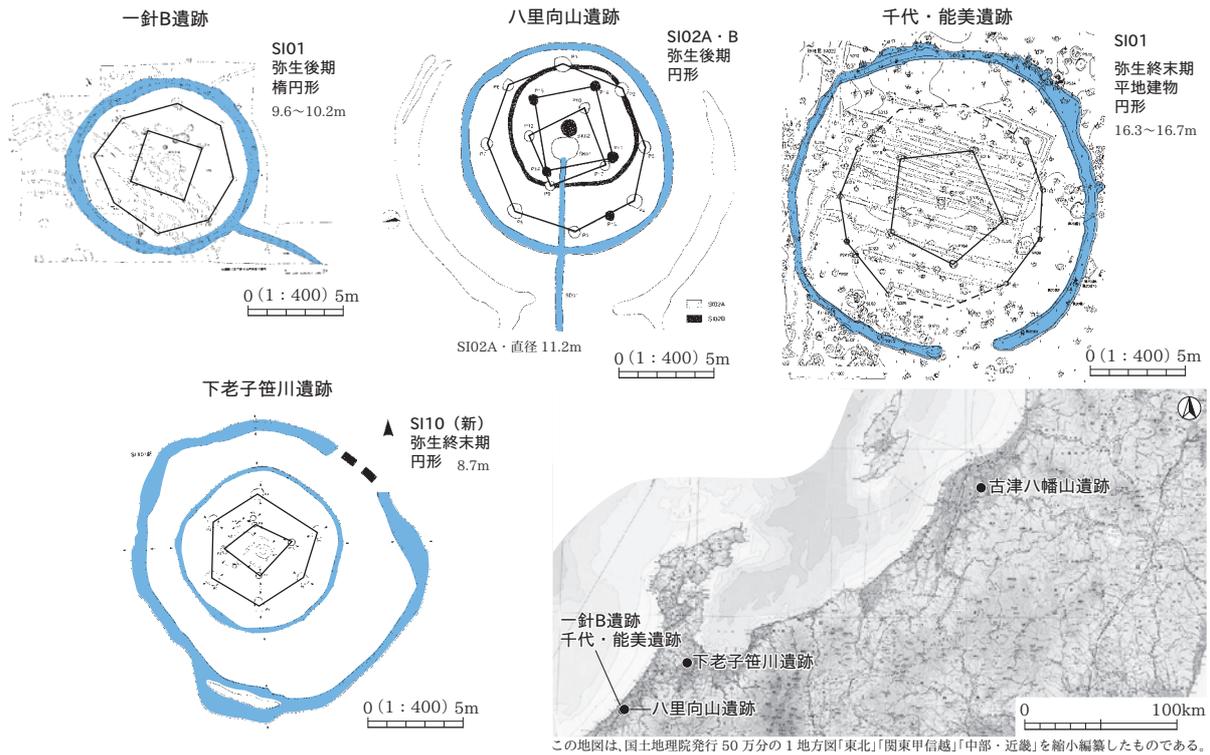
大慶寺御経塚遺跡1号竪穴建物



0 (1:300) 5m

第 17 図 下馬場遺跡 1号・7号竪穴平面図

第 18 図 県内の土坑から排水溝がのびる竪穴建物



第19図 北陸における弥生時代後期・終末期の主な大型建物(1/400)と遺跡分布図

C 方形周溝墓 (SZ743)

1) 埋葬施設

方形周溝墓 (SZ743) では内部において4基の埋葬施設が確認された。県内において2基以上の複数埋葬が確認されている弥生時代後期・終末期の墳墓の事例としては、長岡市の藤ヶ森遺跡第1号墳丘墓の1例のみである(第16表)。ちなみに藤ヶ森遺跡第1号墳丘墓では、墳頂部において4つの落ち込みが確認されており、4基の埋葬施設が存在する可能性が指摘されているが、未調査のため詳細は不明である。

SZ743で中心的な埋葬施設である埋葬部1は、木槨構造の埋葬施設を採用していると考え(第4章第3節)。岡林孝作氏による木槨墓の類型〔岡林2018〕のB類に該当し、弥生時代後期後半頃との年代観と矛盾しない。西日本の事例が大半を占めるが、能登の北中条遺跡の事例もあり留意される。現状における分布を見る限り、西方から日本海ルートによって古津八幡山遺跡へピンポイントでもたらされた可能性が示唆される(第22図、第17表)。

埋葬部2~4は埋葬部1よりも構築時期が古いと考えられ、木棺腐朽後の棺内流入土中の炭化物ではあるが、放射性炭素年代測定で、埋葬部2が埋葬部1より最小で約80年古い値が算出された(第4章第3節、第6章第2節)。両被葬者間に血縁関係があるとすれば、親と親が年老いてから生まれた子供、あるいは孫などの可能性があろうか。埋葬施設の位置関係からは、埋葬部2~4構築時に最も中心的な埋葬施設となる埋葬部1の構築が決められていたと推測される。西日本では中心的な埋葬施設を最初に構築し、その後周囲に埋葬施設を追加していく事例が多いが、本例の順番は逆であり留意される。その要因や背景については今後の検討課題である。ちなみに、四隅切れの



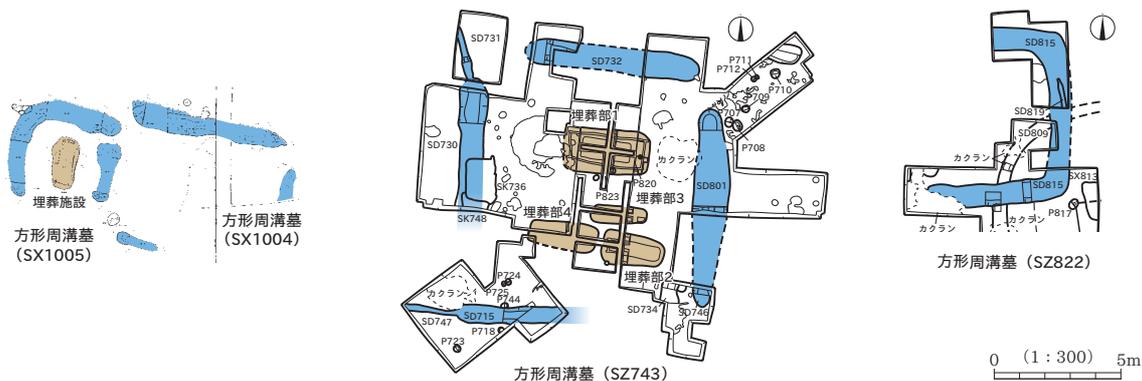
第20図 県内の弥生時代後期・終末期(1~6期)の周溝墓のある主な遺跡

方形周溝墓は弥生時代後期の北陸や会津で比較的多い平面形態であり、その後の四隅切れてはならない方形周溝墓(SZ822)への変遷という流れは隣接地域の動向と一致している〔青山 2024、安中・中江 2024 など〕。

また、古津八幡山遺跡ではこれまでに計 5 基の方形周溝墓が確認されている (SX1004・1005・1303、SZ743・

第 16 表 県内における弥生時代後期・終末期 (1～6 期) の主な墳墓 (遺跡番号は第 20 図に対応)

遺跡名	所在地	遺構名	標高 (m)	墳丘規模 (m) ※周溝内端		周溝 (m)		主体部名称	墓壇規模 (m)		棺規模 (m) (板材外端)		時期 (新潟シンボ 編年 1993)	
				長軸	短軸	幅	深さ		長軸	短軸	長軸	短軸		
1 正尺 C 遺跡	新潟市	SZ610	-0.6	5.2	4.9	0.7~0.8	0.1~0.2	-	-	-	-	6		
2 古津八幡山遺跡	新潟市	方形周溝墓 SZ743	23.0	10.0	8.8	0.6~1.4	1.1	埋葬部 1	3.4	1.8	1.9	0.8	2 前後	
		埋葬部 2	2.5	1.4	2.2	0.6	-	-	-	-	-			
		埋葬部 3	2.2	0.7	-	-	-	-	-	-	-			
		埋葬部 4	2.8	1.2	-	-	-	-	-	-	-			
		方形周溝墓 SZ822	22.6	5.5	-	0.9	0.4	-	-	-	-	-	-	
方形周溝墓 1 SX1005	45.0~46.5	3.1	2.8	0.5~0.8	0.2~0.4	主体部	2.1	1.1	1.6	0.5	1			
方形周溝墓 2 SX1004	45.0~46.5	6.3	4.7	1.0	0.5	-	-	-	-	-	2			
方形周溝墓 3 SX1303	42.2~42.5	3.0	1.5 以上	0.9	0.3	SX1304	2.3	1.0	-	-	1~4			
前方後方形周溝墓 SX03S14	54.2~54.7	13.0	7.5	0.9~2.6	0.2~1.1	-	-	-	-	-	5or6			
3 大沢遺跡 B' 地区	新潟市	方形周溝墓	37.0	3.7	3.6	1.6	0.7	主体部	-	-	1.7	0.8	5	
4 五千石遺跡	燕市・長岡市	方形周溝墓	10.2	4.3	3.8	0.9~1.2	0.2~0.3	-	-	-	-	-	1・2	
5 屋敷塚遺跡	長岡市	方形台状墓	62.2	8.7	8.7	0.5~1.3	0.2~1.0	埋葬施設	4.1	1.9	2.5	0.5~0.6	1・2	
6 奈良崎遺跡	長岡市	1号周溝墓	33.4	10.4	10.4	0.7~1.2	0.7~0.9	-	-	-	-	-	1・2	
		2号周溝墓	30.3	3.5	2.7	0.5~0.9	0.1~0.2	-	-	-	-	-	1・2	
		3号周溝墓	32.0	7.6 以上	6.2 以上	1.1	0.3	-	-	-	-	-	3・4	
7 姥ヶ入南遺跡	長岡市	1号墓	35.4	6.6	6.3	0.5	0.2~0.4	主体部	3.0	1.6	-	-	3~6	
		台状墓北	99.0	16.0	16.0	2.0~2.5	-	-	-	-	-	-	2	
8 大平城跡	見附市	台状墓南	99.0	11.4	7.8 以上	1.3~1.9	0.4~1.0	-	-	-	-	-	2	
9 藤ヶ森遺跡	長岡市	周溝墓	25.1	7.7	6.0 以上	0.5~1.3	0.2	-	-	-	-	-	2	
		第 1 号墳丘墓	25	15	13	不明	不明	主体部 (落ち込み) 4 基か	-	-	-	-	-	2
10 横山遺跡	長岡市	方形周溝	23.0~25.7	11.5	6.5 以上	1.3~2.1	0.5~0.9	-	-	-	-	-	4・5	
		SZ3	30.2	4.2 以上	3.5 以上	0.6~0.8	0.3	SK96	2.2	1.2	1.4	0.5	2	
11 西岩野遺跡	柏崎市	SZ4	30.3	5.8	4.4 以上	0.3~0.8	0.3	SK454	2.4	1.5	2.0	1.0	2	
		SZ5	30.4	2.8 以上	2.1 以上	0.4~0.6	0.1	SK651	0.8	0.5	-	-	2	
		SZ6	30.6	4.6	4.5 以上	1.0~1.3	0.2	SK579	1.7	1.0	-	-	2	
		SZ7	30.8	3.6	3.4	0.5~1.5	0.3	-	-	-	-	-	2	
		SZ2	30.2	4.9	4.8	0.4~0.6	0.2~0.4	-	-	-	-	-	2	
12 子安遺跡	上越市	周溝墓 1 (SZ235)	11.0~12.0	8.2	5.5	2.4~2.8	-	-	-	-	-	-	6	
		周溝墓 5 (SZ231)	11.0~12.0	11.9	9.0	2.0~2.8	-	-	-	-	-	-	2	
		周溝墓 6 (SZ246)	11.0~12.0	8.0 以上	5.8	1.4	-	-	-	-	-	-	2	
		周溝墓 8 (SX239)	11.0~12.0	10.2	10.0	2.0~2.2	-	-	-	-	-	-	2	
		周溝墓 9 (SZ270)	11.0~12.0	5.9	5.4	(1.0)	-	-	-	-	-	-	-	
		周溝墓 11 (SZ276)	11.0~12.0	5.6 以上	4.0 以上	1.6~2.0	-	-	-	-	-	-	-	
13 下新町遺跡	上越市	周溝墓 12 (SZ268)	11.0~12.0	13.0	7.0 以上	1.4	-	-	-	-	-	-	-	
		SX33	14.0	3.2	2.3	0.5	0.1	-	-	-	-	-	5・6	
14 今泉釜蓋遺跡	上越市	1号方形周溝墓	19.5	4.7	4.6	0.4~1.0	0.1~0.3	-	-	-	-	-	-	5・6
		2号方形周溝墓	19.5	6.5	6.3	0.8~2.0	0.3~0.5	-	-	-	-	-	-	3
		3号方形周溝墓	19.6	8.1	6.8	0.8~1.9	0.2~0.4	-	-	-	-	-	-	2
		4号方形周溝墓	19.6	9.2	9.0	2.0~2.6	0.3~0.6	-	-	-	-	-	-	2
		5号方形周溝墓	19.7	7.8	6.7	0.7~1.2	0.1~0.3	-	-	-	-	-	-	2
		6号方形周溝墓	19.7	10.6	8.2	1.4~1.9	0.2~0.5	-	-	-	-	-	-	2
		7号方形周溝墓	19.7	9.1	8.5	1.4~2.1	0.3~0.5	-	-	-	-	-	-	2
		8号方形周溝墓	19.7	7.6	7.3	0.9~1.4	0.4~0.5	-	-	-	-	-	-	2
		9号方形周溝墓	19.7	7.2	6.1	1.1~1.5	0.4~0.7	-	-	-	-	-	-	5・6
		10号方形周溝墓	19.7	7.5	6.3	0.8~1.1	0.3~0.5	-	-	-	-	-	-	2~6
		11号方形周溝墓	19.5	8.8	7.6	1.1~2.4	0.2~0.5	-	-	-	-	-	-	5・6
		12号方形周溝墓	19.6	7.4	4.1 以上	0.4~1.1	0.1~0.5	-	-	-	-	-	-	-
		13号方形周溝墓	19.7	6.7	6.4	0.7~1.0	0.1~0.4	-	-	-	-	-	-	-
		14号方形周溝墓	19.7	6.1	4.3 以上	1.0~1.5	0.2~0.5	-	-	-	-	-	-	-
		15号方形周溝墓	19.7	6.1	5.5	0.7~1.3	0.1~0.4	-	-	-	-	-	-	2
		16号方形周溝墓	19.7	5.0	4.0 以上	0.4~0.9	0.1~0.2	-	-	-	-	-	-	-
		17号方形周溝墓	19.5	3.65 以上	3.5 以上	0.4~0.6	0.1~0.2	-	-	-	-	-	-	-
15 吹上遺跡	上越市	6号SD275・292	25.4	6.0	3.0 以上	0.5	0.5	-	-	-	-	-	1・2	
		7号SD380・SK392	25.5	2.8 以上	2.3	0.2	0.1	SK392	1.2	0.6	-	-	1・2	
		8号SD221	26.1	5.2	5.2	1.7	0.8	-	-	-	-	-	2	
		10号SD107・401	26.2	4.2	4.2	1.2	0.7	-	-	-	-	-	1	
		11号SD125	26.2	5.1	4.6	1.2	0.7	-	-	-	-	-	1	
		12号SD129・132・SK321・SX133	25.8	3.7	3.4	0.4~0.6	不明	-	-	-	-	-	-	1・2
16 斐太遺跡群	上越市	A2 号墳丘墓	170.2	18~20	14~17	0.5~1.2	0.2~0.6	-	-	-	-	-	2~4	
17 苗吹田遺跡	糸魚川市	溝状遺構 B	6.5	8.1	3.6 以上	0.8	0.5	-	-	-	-	-	2	



第 21 図 古津八幡山遺跡の方形周溝墓 (左: SX1004・1005、中: SZ743、右: SZ822 縮尺 1/300)

第1節 遺構

第17表 日本列島における主な木槨墓（〔岡林 2018〕をもとに作成、一部追加・改変 遺跡番号は第22図に対応）

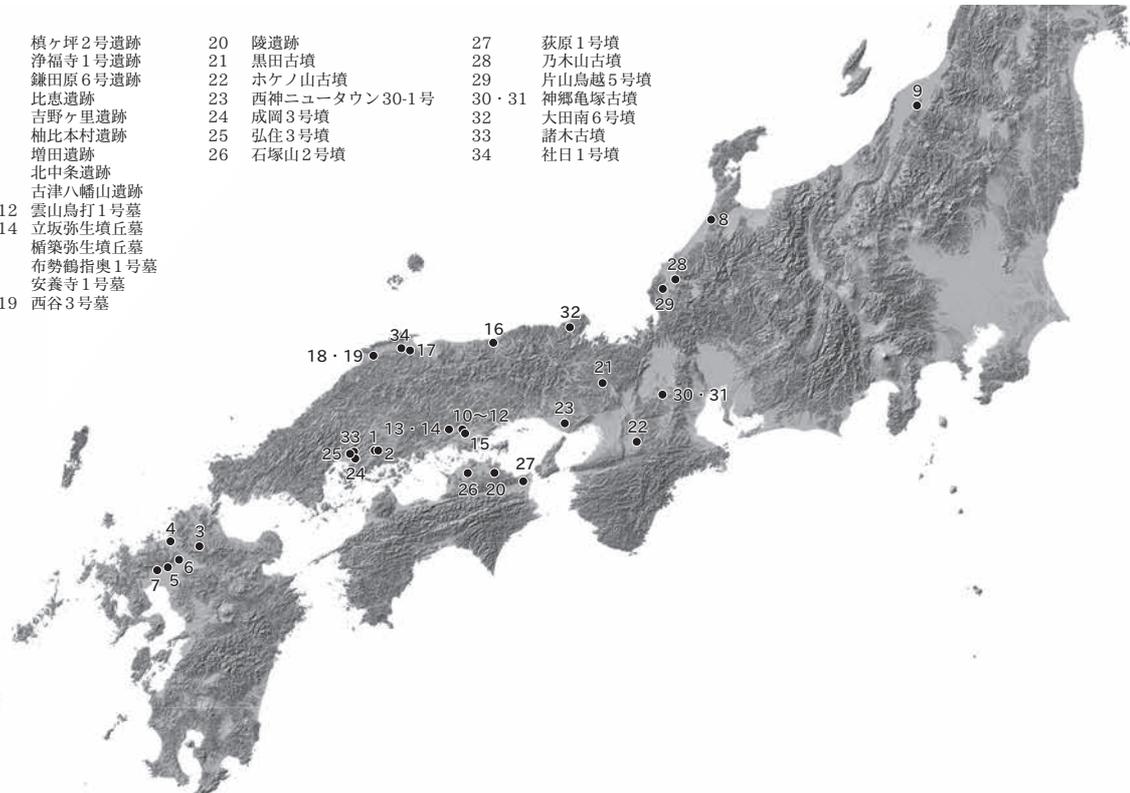
遺跡・遺構	所在地	時期	類型	墳形	規模 (m)	墓壇			木槨				木棺				
						長さ	幅	深さ	棺床・配石	長さ	幅	高さ	長幅比	形式	棺長	幅	
1 横ヶ坪2号遺跡SK1	広島県東広島町	弥生中期後葉	A	円	6.5	2.5	0.8	0.45 - 0.5	棺壇・配石	2.15	0.55	0.15 - 0.2	3.9	(割板式)	2.1	0.4±	
2 浄福寺1号遺跡SK5	広島県東広島町	弥生中期後葉?	A	(木槨墓)		2	0.7 - 0.75	0.15+	棺壇	2	0.55		3.6	(割板式)	2		
3 鎌田原6号木槨墓	福岡県嘉麻市	弥生中期前半~中葉	A	隅丸長方	25×23	6.45	4.25		棺壇・粘土敷	3.59	0.88		4.1	箱形	2.2+	0.46	
4 比恵遺跡SX03	福岡県福岡市	弥生中期前葉	A	(土坑墓)		4.1	1.8		棺壇	3.4+	1.1		3.1	(割板式)	2.7	0.5 - 0.6	
5 吉野ヶ里遺跡SP0912	佐賀県吉野ヶ里町	弥生中期中葉	A	(木槨墓)		2.8	1.3		棺壇	2	0.7		2.9	(割板式)	1.9	0.5	
6 楠比本村遺跡SP1100	佐賀県鳥栖市	弥生中期初頭	A	(木槨墓)		7.35+	3.7+		棺壇	2.65	0.7 - 0.8		3.5	(割板式)	2	0.6	
7 増田遺跡SP6407	佐賀県佐賀市	弥生前期末~中期前半	A	(木槨墓)		2.45	0.95	0.55	棺壇	2.1	0.75		2.8	(割板式)	1.9	0.45	
8 北中条遺跡木槨墓	石川県津幡町	弥生後期末	(B)	(木槨墓)		3.86	2.92	0.45	×	3.2	1.58		2	(組合式)			
9 古津八幡山遺跡方形周溝墓(SZ743)埋葬部1	新潟県新潟市	弥生後期後半頃	B	方	9.6×8.4	(3.4)	1.78		×	3.06	1.2		2.5	組合式	1.9	0.80	
10 雲山鳥打1号墓(第3主体)	岡山県岡山市	弥生後期後葉	B	長方	約20×15	4	2.5	0.9	置き土	2.7	1.4		1.9	組合式	1.9	0.55	
11 雲山鳥打1号墓(第2主体)		弥生後期後葉	B			4.3	2.5	1.3	?	3	0.95			3.2	組合式	1.6	0.45
12 雲山鳥打1号墓(第1主体)		弥生後期後葉	B			4.1	3.8	0.6+	?	2.5	1.3	0.6	1.9	組合式			
13 立坂弥生墳丘墓(第2主体)	岡山県総社市	弥生後期後葉	B	楕円	約18				板石敷	2+	1		3	組合式	1.7+		
14 立坂弥生墳丘墓(第3主体)		弥生後期後葉	B							小礫敷	2.7	0.9		2.3	組合式		
15 橋梁弥生墳丘墓(中心主体)	岡山県倉敷市	弥生後期後葉	B	双方中円	約80	9	6.25 - 5.5	2.1	底板	3.6	1.3 - 1.6	0.88+	3	組合式	2.2	0.8 - 0.9	
16 布勢鶴指奥1号墓(第1主体部)	鳥取県鳥取市	弥生後期中葉	B	長方	17.8×10.6	4.8	3.4	1.4	×	2.96	1.18	1	2.5	組合式	2	0.4 - 0.56	
17 安養寺1号墓(第1主体)	島根県安来市	弥生後期末	(B)	四隅突出	20×16	5	3.3	1.2 - 1.3	×	3	1.3 - 1.6		2.1	組合式	2.25	0.4 - 0.7	
18 西谷3号墓(第1主体)	島根県出雲市	弥生後期後葉	B	四隅突出	50×40	6.1	4.8 - 4.4	1	置き土	2.6	1.2 - 1.25	0.7 - 0.8	2.1	組合式	2.1	0.8 - 0.85	
19 西谷3号墓(第4主体主棺)		弥生後期後葉	(B)			6	4.5		×	2.6	1.25	0.8	2.1	組合式	2.3	0.8	
20 陵遺跡ST-02(第1墓壇)	香川県さぬき市	弥生後期中葉	B?	円	11	-	-	-	×	2.83+	1.55		-2	?			
21 黒田古墳(第1主体部)	京都府南丹市	古墳前期初葉	C1	前方後円	52	10	6.5	2.5	礫床	6.5	2.5 / 2.7	1.5	2.5	舟形	4	0.7 - 1.2	
22 ホケノ山古墳(中心埋葬施設)	奈良県桜井市	古墳前期初葉	C2	前方後円	80	10	6		礫床	6.5	2.6	(約1)	2.5	舟形	5.3	1.3	
23 西神ニュータウン30-1号	兵庫県神戸市	古墳中期	C	円	16	2.7+	1.9		礫床	2+	1.4 - 1.6		2.1	割板式	1.3+	0.4	
24 成岡3号墳(第1主体)	広島県広島市	古墳前期初葉	C1	円	13.5×11.5	3.85	1.9	0.94	置き土	2.6	1	0.4	2.6	舟形	2.6-	1-	
25 弘住3号墳	広島県広島市	古墳前期初葉	C2	双方中円	25の円丘に5以上の突出部	4.5	3	1.3	礫床	2.7	1.2	1.2	2.3	舟形	-2	0.8	
26 石塚山2号墳(第1主体部)	香川県丸亀市	古墳前期初葉	C2	円	約25	3.65	2.55	1.25	×	3.65	2.55	1.25	1.4	?	2.1	0.8	
27 萩原1号墳	徳島県鳴門市	古墳前期初葉	C2	前方後円	26.5	-	-	-	礫床	5.5	3		1.8	舟形	4	1.3	
28 乃木山古墳(第1埋葬施設)	福井県永平寺町	古墳前期初葉	(A')	長方	30×24	7.2	4.5	1.1	×	4.7	1.4 - 1.6	1	2.9	組合式	3	0.7	
29 片山鳥越5号墳(第1埋葬)	福井県清水町	古墳前期初葉	(A')	長方	16.5×14.5	3.6	2.2	0.9	×	3	1.2		2.5	組合式	2	0.5	
30 神郷亀塚古墳(第1主体)	滋賀県東近江市	古墳前期初葉?	(A')	前方後方	36.5	-	-	-	粘土床	4.7	1.3	1.3	3.6	舟形	(2 - 2.5)	0.5	
31 神郷亀塚古墳(第2主体)		古墳前期初葉?	(A')			?	1.25		(棺壇)	3.5	1.1	1.1	3.2	舟形	2	0.5	
32 大田南6号墳	京都府京丹後市	古墳後期後葉	A'	円	28.5	9.6	6.5	2.5	×	6.2	1.18 - 1.37	0.5 - 0.6	4.5	箱形	5.4	0.8 - 1.14	
33 諸木古墳	広島県広島市	5世紀後半	A'	円	11	2.62		0.6 - 0.7	棺壇・配石	2.3	0.9		2.6	組合式	2	0.5	
34 社日1号墳(第1主体部)	島根県松江市	古墳前期初葉	(A')	方	19.5×15	5	1.6 - 2	1.1	×	3.5	0.7 - 0.85	0.8+	4.5	割板式	3	0.6	

類型	長幅比	四側板を立てた後の槨底面の整備	槨の裏込め
A	3.0 ~ 4.0前後	なし	あり
B	1.5 ~ 2.5前後	平らに整える	あり
C	1	中央が舟底状にくぼんだ棺床を整える	あり
	2		なし

- 1 横ヶ坪2号遺跡
- 2 浄福寺1号遺跡
- 3 鎌田原6号遺跡
- 4 比恵遺跡
- 5 吉野ヶ里遺跡
- 6 楠比本村遺跡
- 7 増田遺跡
- 8 北中条遺跡
- 9 古津八幡山遺跡
- 10~12 雲山鳥打1号墓
- 13・14 立坂弥生墳丘墓
- 15 橋梁弥生墳丘墓
- 16 布勢鶴指奥1号墓
- 17 安養寺1号墓
- 18・19 西谷3号墓

- 20 陵遺跡
- 21 黒田古墳
- 22 ホケノ山古墳
- 23 西神ニュータウン30-1号
- 24 成岡3号墳
- 25 弘住3号墳
- 26 石塚山2号墳

- 27 萩原1号墳
- 28 乃木山古墳
- 29 片山鳥越5号墳
- 30・31 神郷亀塚古墳
- 32 大田南6号墳
- 33 諸木古墳
- 34 社日1号墳



第22図 国内の主な木槨墓の分布（遺跡番号は第17表に対応）

822)。このうち墓壙や木棺の規模が確認されている方形周溝墓 (SX1005・1期新) と SZ743 (2期頃) とを比較すると、墳丘規模 (長さ) は約3倍であり、埋葬施設についても SZ743 の埋葬部 1・2の方が墓壙・木棺ともに規模が大きい (第16表、第21図)。

2) 周溝からのびる排水溝

方形周溝墓 (SZ743) の南辺の周溝 (SZ743-SD715) と西辺の周溝 (SZ743-SD730) の端からは、排水溝と推測される短軸 0.15～0.37m の細長い溝 (SD747・731) が西方の沢へ向かってそれぞれのびているのが確認された (第IV章第3節)。北辺及び東辺の周溝においてこの種の溝が存在するかどうかは不明である。方形周溝墓に伴うこの種の排水溝の類例については未見であり、今後の検討課題である。

D 土器を埋置したピット (P806・807)

10Tにおいて、柱を抜き取った後に柱穴内に意図的に弥生土器 (2期) を埋置したと考えられるピットを2基確認した (P806・807)。遺構覆土には炭化物も多く含まれる。両ピットは建物に関連する一連の遺構と推測されるが、建物の全体像については不明である (第IV章第3節、図版22)。方形周溝墓 (SZ743) と近く、出土遺物から年代が重なると推測されることや SZ743 と軸が一致することなどから両者の関連性が示唆される。出土状況からは何らかの儀礼に伴う建物の可能性があろう。本遺構の広がりや構造なども含め、今後の検討課題である。

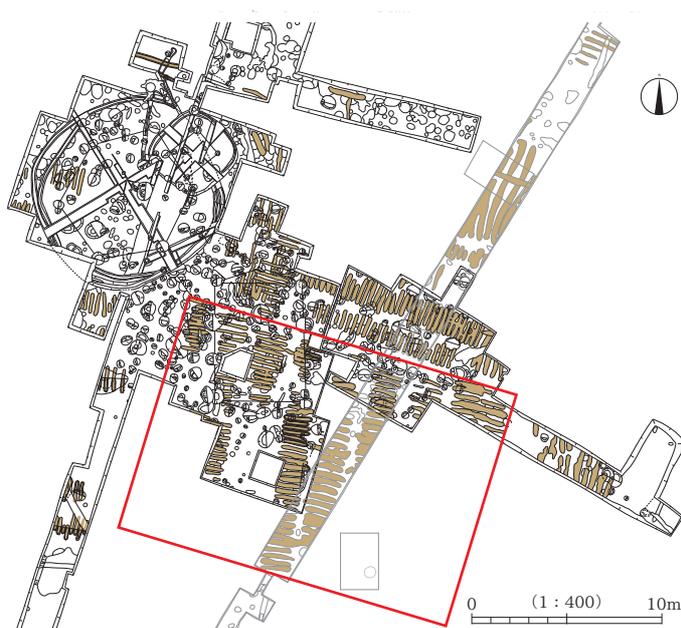
E 近世以降の土坑墓 (SK384・736・748)

1Tの大型竪穴建物 (S11) 内に位置する土坑 SK384 は、古銭6枚と炭化した木製の数珠玉2点、骨片、多量の炭化物が出土しており、放射性炭素年代測定の日代値 (第VI章) から江戸末期～明治時代の火葬土坑と推測され、周辺にはこの種の土坑墓が複数基存在した可能性が考えられる (第IV章第3節)。

また、方形周溝墓 (SZ743) 内の土坑 SK736・748についても、平面プラン確認時に骨片が出土していることから土坑墓と考えられる (第IV章第3節)。SK384 と SK736・748 とでは平面プランがそれぞれ円形と長方形で、覆土の特徴も違うことから年代が異なることが推測される。SK736・748の詳細な年代については不明であるが、地山ブロックを多量に含んだ遺構埋土の特徴や遺構の形状などから、近世～近現代の土坑墓と推定される。

F 近・現代の畑の畝跡

古津八幡山遺跡が位置する丘陵一帯は、太平洋戦争前後を中心に畑地として利用されており、これまでの発掘調査でも畑の痕跡や畑地造成による切り盛りの状況などが確認・報告されている [甘粕・川村ほか1992、相田・渡邊ほか2014]。本書報告の北東地区の調査においても、1・3Tを中心に畑の畝の痕跡が溝として確認されている (第23図)。1・3Tの溝をみると、直行する2方向のものが存在する。溝の方向は当時の地形に沿っていると考えられ、また溝の方向の違いから畑地と畑地との境界やひとつの畑地の範囲をうかがうことができる。第23図の赤枠は同じ耕作者によるひとつの畑地と推定され、長軸 (東西) 約18m、短軸約13mを測る。



第23図 大型竪穴建物 (S11) 周辺における畑の痕跡

第2節 遺物

A 弥生時代の土器の位置づけ

今回報告の調査で完掘した遺構はなく、遺構出土土器は大型の竪穴建物（SI1）を除いて全体的に少ないが、本項では竪穴建物と方形周溝墓から出土した弥生時代の土器（第24図）を対象に、古津八幡山遺跡の既存の編年案〔渡邊2001・2004・2013・2019〕や県内の編年案〔滝沢2010b・2011a・2012、笹沢2005など〕と対比しながらその年代について概観する。なお、第26図は既存の編年案をもとに北陸系土器を中心に時期ごとにまとめた図である。ちなみに、古津八幡山遺跡では竪穴建物SI03S20から1期古と推定される土器が出土しており、この時期が古津八幡山遺跡の出現期と考えられているが、第26図では1期古は除いている。

竪穴建物 SI1 全体の器形をうかがえるものは少ないが、高杯1は4期のSD03S16（内環濠A）の190（第26図）と口縁部の形態が類似する。小型器台（25）や直口壺（6）、蓋（34～36）の存在も4期として矛盾はない。シャープさを欠き、形骸化した擬凹線を意識した有段口縁の甕（47）も古く遡らないものであろう。有段口縁甕が少ない一方、口縁端部を摘み上げたり（13・49・50・51）、平らに面をもったり（14・52～54）、丸く収めたり（12）するくの字状口縁甕が多いことも新しい要素ととらえられる。他方、15の口縁部形態はやや古い様相が見られる。なお、天王山式系土器である69はいわゆる屋敷段階の資料である（石川日出志氏・渡邊朋和氏ご教示）。

以上、大型の竪穴建物であるSI1出土土器はおおむね4期に位置づけられると考える。出土土器の大半は北陸系土器で、天王山式系土器や折衷土器はわずかである。弥生時代後期後半（2期）に北陸系土器と天王山式系土器、さらには両者の折衷土器（八幡山式土器）の比率が拮抗していた状況とは大きく異なっている。

ちなみに、SI1は1度建て替えを行っている。建て替え前の壁溝SI1-SD186出土土器で明確に古い要素をもつ土器は認められず、建て替えが連続して行われたことを示唆するが、19は口縁部の形態が不明であるものの、3期のSI03S06の185（第26図）と類似しており、やや古い要素をもつ可能性がある。

竪穴建物 SI401 天王山式系の甕72は、口縁部の形態から2期頃の年代が推測される。なお後述するように、2期に位置づけるSI728とは建物の軸が一致する。

竪穴建物 SI465 大型の竪穴建物SI1を壊してつくられていることから4期以降の建物と判断できる。いずれも破片資料で口縁部を欠損するなど詳細な時期は不明であるが、小型壺の体部と考える76のサイズや形状は、4・5期以降の小型壺と類似する。高杯脚部74は、形態から4期もしくは5期頃であろうか。以上、SI465出土土器は4期もしくは5期と捉えられ、当遺跡における弥生時代集落の中で最も新しい時期の竪穴建物といえる。

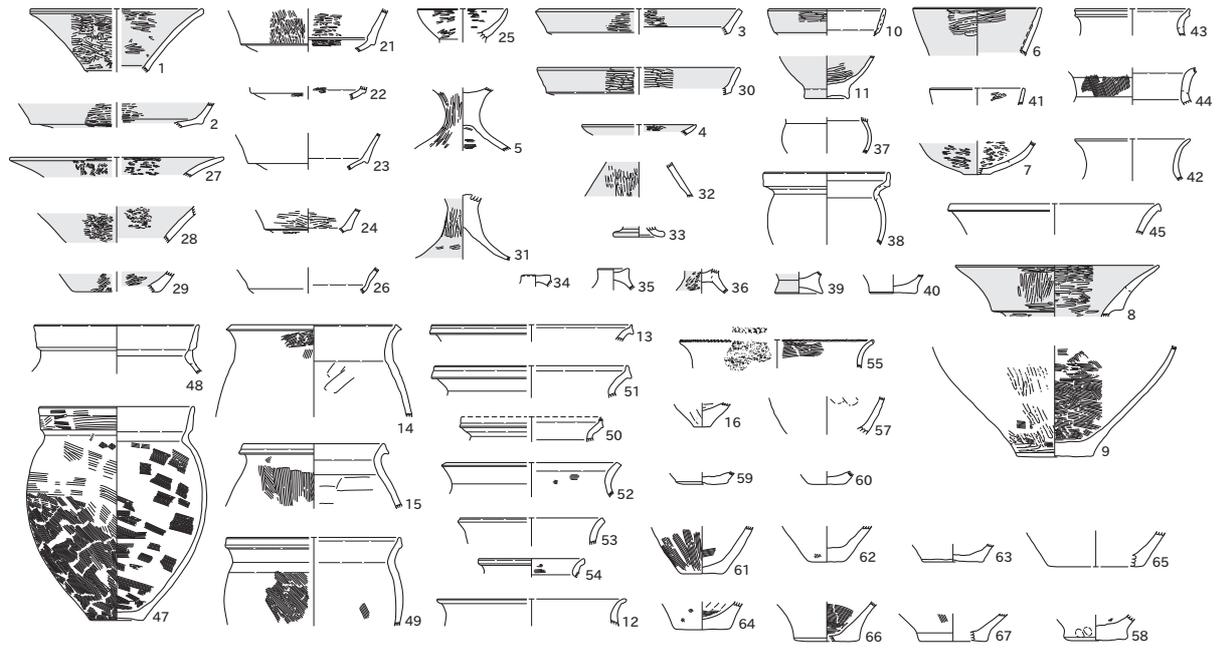
竪穴建物 SI728 高杯脚部の86は形態から2期の中に収まると推測される。折衷土器の83や天王山式系土器の84も2期に位置づけられよう。

竪穴建物 SI802 掲載土器は有段口縁甕の口縁部破片87と、沈線間に交互刺突文を施す東北系土器88の破片資料のみである。詳細な時期については不明であるが、2期頃の資料と推測する。なお、周溝の軸を見るとSI821の軸と近い可能性がある。

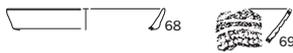
竪穴建物 SI821 SI821の柱穴P811から出土した折衷土器89は、2期古に位置づけられているSX1004の779（第26図）の口縁部と類似する。

方形周溝墓 SZ743 東辺の周溝（SD801）出土の小型壺102は、周溝底面から約0.2m上の1層から略完形の状態で出土しており、周溝が埋没した後に墳丘から転落した土器と推測される。口縁部に擬凹線文を意識したと考える3条の横方向の沈線が施されている。県内において口縁部に横方向の沈線を施す小型の直口壺の類例は少ないが、上越市裏山遺跡の東環濠出土土器の中に認められる（第25図184）。なお、裏山遺跡東環濠出土土器は2期に位置づけられている。また、大きさは異なるものの102の底部や体部の形態は、第26図にある古津八幡山遺跡のSX03N04の417（1期新）やSX1004の776（2期古）、SI0602の900（2期新）、SI03N03

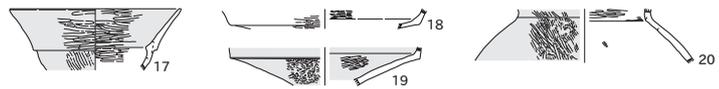
竪穴建物 (S11)



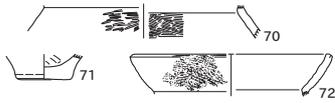
S11柱穴 (S11-P511)



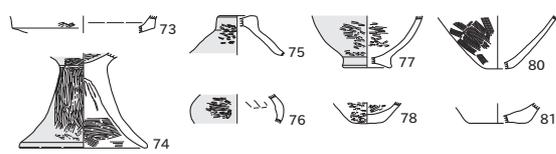
建て替え前の壁溝 (S11-SD186)



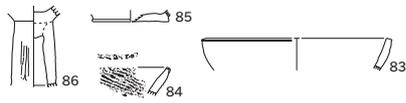
竪穴建物 (S1401)



竪穴建物 (S1465)



竪穴建物 (S1728)



竪穴建物 (S1802)

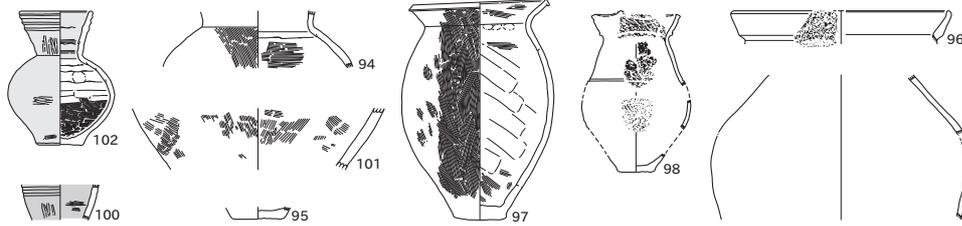


竪穴建物 (S1821)

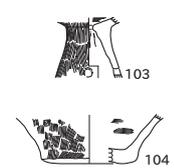


方形周溝墓 (SZ743)

周溝 (SD715・730・732・801)

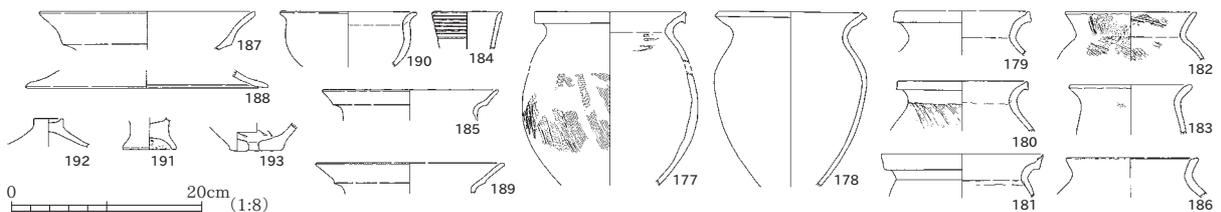


埋葬部1 (SZ743・SK739)



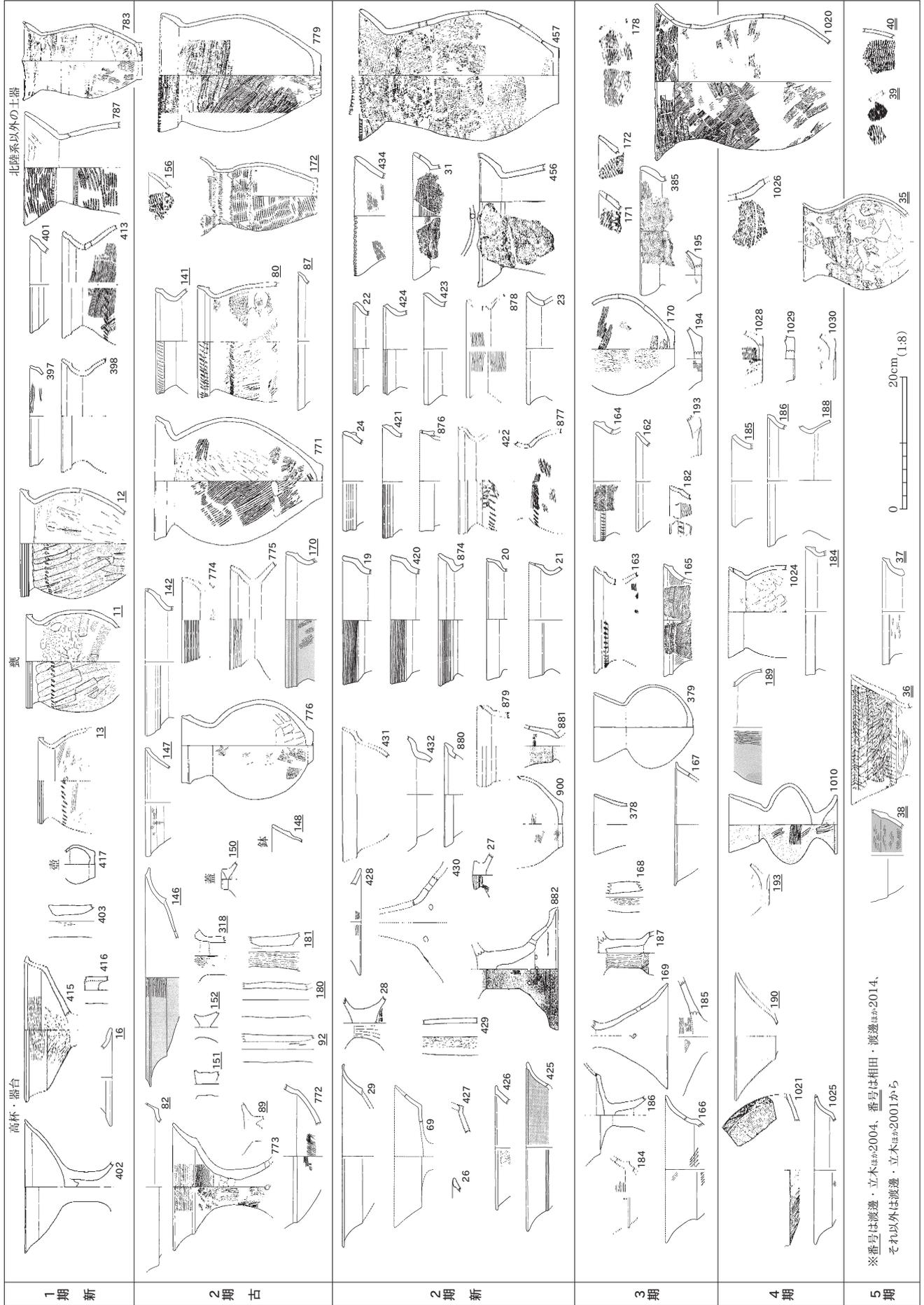
0 20cm (1:8)

第 24 図 古津八幡山遺跡第 20～25 次調査の主な遺構出土土器



0 20cm (1:8)

第 25 図 上越市裏山遺跡東環濠出土土器



第26図 古津八幡山遺跡における北陸系土器を中心とした土器変遷図 (過去の調査資料)

の379(3期)と一部類似点が認められる。口縁部の沈線の幅は等間隔ではなく上の2条の幅が比較的広いなどシャープさを欠き、体部中位が膨らむ球胴形の形態などは新しい要素ともみられる。ちなみに、北辺の周溝からも同様の特徴を持つ壺100が出土しており、この種の赤彩された壺が墳丘上に複数個体置かれていたことがうかがえる。

西辺の周溝底面から出土した甕97は、いわゆる「く」の字状口縁甕で、器壁が底部も含めて全体的に厚く、重量感のある土器である。体部があまり膨らまない形態で、口縁端部は面をもち、端部下端を垂下させる特徴をもつ。この種の体部や口縁端部の特徴は1・2期の甕に多い特徴と考える。

天王山式系の土器98は猫橋式と法仏式の間くらいに位置づけられるという(渡邊朋和氏ご教示)。また、96は形態から2期または3期と推測される。

さて、SZ743の周溝出土土器はいずれも2期を中心とする年代が推定されるが、既述のとおり埋葬施設の底面標高の違いや放射性炭素年代測定結果などから、埋葬部1と埋葬部2とで構築年代が異なるものと考えられる。放射性炭素年代測定では、埋葬部1は概ね2・3期の年代幅の中に収まるといえ、周溝出土土器の年代的な位置づけと整合する。また、埋葬部2については埋葬部1より古い年代が想定され、1期まで遡る可能性もある(第四章第3章)。

以上、方形周溝墓SZ743出土土器は2期を中心とし、一部前後する可能性のある土器が含まれると考える。SZ743の年代については、土器の年代観に加え、埋葬施設が4基ありそれらの構築時期が異なることや、埋葬部1と埋葬部2の放射性炭素年代測定の結果などを考慮すると、墳墓自体は2期を中心に1～3期の幅で機能していた可能性を想定しておきたい。なお、本遺構に伴う土器の胎土はいずれも在地のものと考えられ、また明確な外来系土器は確認できない。

方形周溝墓SZ822出土土器が無く土器から年代を推定できないが、SZ822の周溝が竪穴建物SI821の周溝を壊してつくられていることから、2期に位置づけるSI821よりも新しいことが分かる。加えて、1～3期頃と推測するSZ743よりも標高が下がった場所につくられており、また周溝の平面形態が四隅切れでない点などから、SZ743よりも新しい時期の墳墓の可能性が想定される。不明な点が多いものの、3・4期頃の墳墓と推測したい。

以上、本書報告の竪穴建物と方形周溝墓出土の弥生土器の年代について概観したが、上記をまとめると第1表のとおりと考える。

第18表 古津八幡山遺跡における主な遺構の編年対照表

本稿	弥生時代	古津八幡山遺跡 〔渡邊2001〕	越後 〔滝沢2010b・ 2011a・2012〕	新潟シンボ編年 〔日本考古学協会新潟 大会実行委員会 1993〕	北陸南西部 〔田嶋1986・ 2006・2007〕	古津八幡山遺跡の主な遺構			
						既存報告 (第26図掲載の遺構に限る)		本書報告	
						竪穴建物	墳墓		
1期	後期初頭				V-1				
	古	1期古	1	1	V-2	(SI03S20)			
	新	1期新			V-3	猫橋式 SI03N08、SX03N04、SD03S10(外環濠C)、 SX1005(方形周溝墓)			
2期	古	2期古	2-1	2	2-1群	法仏式 SI1307、SI1401(SI03S21)、 SX1004(方形周溝墓)	SI802 SI821	SZ743 ↑ ↓ SZ822	
	新	2期新	2-2 2-3		2-2群	SI03S03、SI0602、SD03S10(外環濠C)	SI401 SI728		
3期	後期末	3期	3	3	3-1群 3-2群	月影式 SI03S06、SI03N03			
4期	終末期 (古墳時代早期)	4期	様相1	4	4群	SI0701、SI0703、SI0802、 SD03S16(内環濠A)	SI1 SI465		
5期		5期			5群	白江式 SK1601			
6期					6群				

B 石器について

古津八幡山遺跡の第20～25次調査で出土した石器は、1,275点である。このうち剥片類・チップ類を除くと185点である。このうち1トレンチからの出土は165点で、器種石器の89.2%を占める。

1) 在地石材・搬入石材について

古津八幡山遺跡の存在する新津丘陵の北部の地質年代は第四紀更新世(約100万年前)で新しく、主に泥・砂・礫の堆積物で構成される〔新潟県2000〕。また丘陵周辺は沖積層である。したがって、石材環境は極めて悪く剥片石器の石材は、新津エリア金津産の黒曜石¹⁾を除くほぼすべて、及び礫石器の石材の多くは他地域からの搬入と推定される。ここでは石器の石材を検討し、在地石材や遠隔地からの搬入石材についてまとめてみたい。

黒曜石

石器で15点、原石で80点認められた。黒曜石の産地同定の科学分析はしていないが、肉眼的な観察によりほぼすべて新津エリア金津産と推定される。金津産の黒曜石の肉眼的特徴は「……直径2～3cm前後で表面は磨りガラス状にくすみ、内部は漆黒あるいは灰黒で不純物は比較的少ない。石鏃等の小型石器には十分使用可能である。現状では八幡山遺跡以外での使用は確認されていない。……」〔立木2001〕という。この特徴と『八幡山遺跡I』〔渡邊・立木ほか2001〕で報告された黒曜石を比較して同定した。また原石を80点抽出したが、直径数mmのものが多く、大きいものは直径1～2cm程度のものである。黒曜石は新津丘陵の金津地区及び周辺から採集できることから〔立木2001〕、搬入以外にも地山からの混入も推定できる。

半透明頁岩

石器で4点出土している。現在のところ唯一、関川村上関の荒川左岸(獅子舞岩)に露頭が認められている〔秦2001〕。半透明頁岩は縄文時代後期前葉までは広範囲に流通していないが、後期後葉からは下越地域に広く流通するようになる〔阿部1997〕。したがって、縄文時代後期前葉の古津八幡山遺跡では、それほど多く使用されて

第19表 器種別石材表

器種名 石材名	石器器種														小計 (点)	
	石鏃	石鏃 未成品	石錐	削器	両極 石器	磨製 石斧 (大型)	磨製 石斧 (小型)	石錘	敲磨 石類	砥石	台石類	剥片 (掲載品)	石核	軽石 製品		玉作 資料
黒曜石	2	1			10								2			15
チャート	1				1				3							5
鉄石英	1	1		4								1				7
玉髓	3		1	1	2							1	1			9
頁岩	2	5		4	5							4	3			23
珪質頁岩	5	1			6							2	1			15
半透明頁岩	3	1														4
凝灰質頁岩										1						1
凝灰岩	10	3	1	5	5			1	4	4		1	4			38
緑色凝灰岩				1	1										1	3
砂岩									9	12	3					24
玄武岩									1							1
安山岩						1			3		1					5
流紋岩	8	2		2	4				4		1	4	1			26
軽石														3		3
ドレライト						1			2							3
輝緑岩						4										4
黒色緻密安山岩					1											1
蛇紋岩						1										1
透閃石岩							2									2
花崗岩									5		2					8
ホルンフェルス									1							1
合計(点)	35	14	2	17	35	7	2	1	32	17	7	13	12	3	1	198

1) 新津丘陵の金津層は主に砂岩・泥岩からなり、この層に黒曜石が混入する。黒曜石は小礫で一部小型石器に使用されるがその数は多くない。

おらず全体の 2.0% の比率である。

黒色緻密安山岩

1 点のみの出土である。無斑晶質安山岩、ガラス質安山岩などと呼称されるものである。黒色緻密安山岩は信濃川上流部の十日町市・津南町方面や上越市の関川中・上流域で採集でき、周辺の遺跡で剥片石器の石材として多く用いられている〔菅沼 1998、高橋ほか 2000〕。管見ではあるが、下越地域の遺跡での使用例を見ていない。

蛇紋岩・透閃石岩

合わせて 3 点出土している。富山県東部～糸魚川地域で採集でき、同地域では同石材を用いて磨製石斧を製作し各地に供給している。古津八幡山遺跡の磨製石斧も成品として搬入されたものと推定される。

軽石

3 点出土している。阿賀野川支流只見川沿いの沼沢火山に起源をもつ軽石と推定される。縄文時代前期末葉の噴火に伴い新潟平野に流れ着いたものが使用されたと思われ、縄文時代前期末葉～近世の遺跡で確認できる〔立木 2014〕。古津八幡山遺跡の軽石製品は縄文時代あるいは弥生時代のいずれに所属するか判断できない。

その他

チャート、玉髄、鉄石英、頁岩、珪質頁岩、凝灰質頁岩、凝灰岩、緑色凝灰岩、砂岩、玄武岩、安山岩、流紋岩、ドレライト、輝緑岩、花崗岩、ホルンフェルスである。これらはこの地域の主に河川を中心に石材調査をした結果によれば〔阿部 1995、村上・佐藤 2023〕、阿賀野川水系・加治川水系の阿賀野市、新発田市、阿賀町方面で容易に採集できることから、これらの地域からの搬入と推定できる。

2) 出土石器の所属時期について

出土石器の 9 割を占める 1 トレンチは、縄文時代後期前葉の集落の上に弥生時代後期後半～終末期の集落が構築されている。したがって、縄文時代後期前葉と弥生時代後期後半～終末期の遺構・遺物が混在していたものと予想される。ここではそれぞれ石器の器種を検討し、可能な限り所属時期を明らかにしたい。

古津八幡山遺跡第 1～10 次調査（以下、「第 1～10 次調査」とする）の調査範囲は、古津八幡山遺跡の丘陵頂上部とその斜面部である。遺跡の性格は高地性環濠集落であり、集落内の遺構とそれを取り囲む環濠を主体としている。第 20～25 次調査は丘陵裾部の縄文時代後期前葉の集落と弥生時代後期後半～終末期の集落である。このような立地の違いや時期の異なる集落の重複する遺跡の性格の違いから、出土した石器には違いがあるものと思われる。第 1～10 次調査で出土した石器の組成の総括では、弥生時代の石器組成で大きく差が出るのは上越市裏山遺跡の例から後期後半からとし、それまでの石器から鉄器への道具の転換としている。これに対し古津八幡山遺跡では鉄器の所持を否定するものでないものの、石鏃・不定形石器の多出など様相が異なるとした。これについては鉄器の普及に上越地方と下越地方の時間差の可能性を指摘している〔立木 2001〕。

一方、新潟県の弥生時代後期の石器組成は、石鏃、石錐、搔削器類、両極石器、磨石類が主要石器であり、中期後葉以前と変わらないが、石鏃よりも搔削器類や両極石器の出土点数多いという違いがある。しかし、磨製石斧、環状石斧、石包丁などの磨製石器の大幅な減少、金属器用砥石の出現、裏山遺跡に代表とされる軽石製品の出土から金属器の普及と石器の出土点数の大幅な減少を指摘している〔沢田 2019〕。いずれにしても後期前半と後期後半には鉄器の普及を反映し、石器組成や出土数に大幅な変化が推定できる。

以下、所属が推定できそうな石器を器種ごとに検討する。

石鏃

第 1～10 次調査では分類できた 38 点の内、基部の両側縁に抉りが施される所謂「アメリカ式石鏃」4 点、基部に中茎を有する有茎石鏃 26 点、浅いくぼみを持つ凹基無茎石鏃 2 点、平基無茎石鏃 5 点に分類されている。一方、第 20～25 次調査では分類できた 32 点の内、凹基無茎石鏃 9 点、平基無茎石鏃 20 点、円基鏃 3 点であり、形状に大きな違いが見られる。アメリカ式石鏃は弥生時代後期になって新たに加わる石鏃であり、有茎石鏃は弥生時代の遺跡で石鏃を多数組成する遺跡では大半を占め、無茎石鏃も上越市吹上遺跡や柏崎下谷内遺跡で一定量

出土するという〔沢田 2019〕。第1～10次調査では無茎石鏃が7点出土している。

一方、周辺の縄文時代後期前葉の遺跡を見ると、村上市長割遺跡（後期前葉）では、凹基無茎石鏃、平基無茎石鏃、少量の円基石鏃で91%を占め〔滝沢 2011b〕、阿賀町北野遺跡（中期末葉～後期初頭）では、後期中葉の有茎石鏃を除くと凹基無茎石鏃、平基無茎石鏃、少量の円基石鏃ですべての石鏃を占める〔高橋 2005〕。また、柏崎市十三本塚北遺跡（後期前葉）では凹基無茎石鏃、平基無茎石鏃、1点の円基石鏃で95%を占める〔平吹 2001〕。このような石鏃の時期別特徴を見ると第20～25次調査の石鏃の多くは、縄文時代後期前葉の集落に所属するものと推定される。

石鏃未成品

未成品であることから不明な部分もあるが、掲載していないものも含めて見た限りではアメリカ式石鏃、有茎石鏃になりそうなものは皆無であった。したがって、縄文時代後期前葉の石鏃未成品が多いと思われる。

磨製石斧

図示した8点はいずれも主面と側面の境に稜が見られ、横断面が長形状を呈することから定角式磨製石斧である。破損品も含め刃部幅と基部幅の差が大きいことが予想されることから縄文時代後期前葉の所産と推定される。なお、弥生時代後期後半には太形蛤刃石斧や扁平片刃石斧などの大陸系磨製石器は大幅に減少するという〔沢田 2019〕。

石錘

1点のみの出土であるが、切目石錘である。縄文時代中期後半から晩期まで分布する〔渡辺 1973〕ことから縄文時代後期前葉の所産である。

削器・両極石器・敲磨石類

いずれも多く出土し、主要石器の器種の一つであるものの、所属時期は明らかでない。なお、58の敲磨石類は破片資料であり不明確であるものの、使用状況、磨面の様子から弥生時代の所産の可能性はある。

砥石

6点図示したが、鉄器の普及を考えると、横断面方形状で、石材が凝灰岩の64～66は弥生時代ないしそれ以降の所産と推定される。また61の光沢を帯びた砥面の状況は縄文時代には見られないことから、弥生時代の所産と思われる。

軽石製品

85・86は小型の軽石製品である。面状に使用されるが、溝状擦痕、鋭利な刃先による筋状擦痕などは見られない。軽石製研磨具は上越市裏山遺跡で多く出土〔小池ほか 2000〕し、金属器の普及の反映とされている（立木 2001）。第20～25次調査で出土した軽石製品は、裏山遺跡出土の軽石製研磨具とは大きさや使用痕が異なるように思われる。しかし、弥生時代の所産かどうか明確でない。

玉作資料

1点のみの出土である。新潟県内では緑色凝灰岩を用いた玉作は弥生時代中期中葉に始まり後期まで行われる〔笹沢 2019〕ことから弥生時代の所産と推定される。

以上、第20～25次調査で出土した石器についてその所属時期を検討してきた。不明なものも多いが、石鏃や磨製石斧など所属時期の明らかになったものは、縄文時代後期前葉に所属するものが多く、弥生時代後期後半～終末期に所属するものが少ない。弥生時代後期後半～終末期には鉄器が普及し、石器が大幅に減少したことの反映と思われる。

C 弥生時代のガラス小玉について

1) 概要

今回報告した古津八幡山遺跡の調査区からは、SI1 で 3 点、SZ743 の周溝 (SD730) で 1 点、SZ743 の埋葬部 1 (SK739) で 1 点の計 5 点のガラス小玉が出土している。時期は SI1 を弥生時代終末期 (本書 4 期)、SZ743 を弥生時代後期後半 (同 2 期) を中心とする時期と考えていることから、ガラス小玉も同時期の資料の可能性が高いと考える。一方、第 13・14 次調査においては遺構外から 2 点のガラス小玉が出土し、既に報告されている〔渡邊・立木ほか 2004〕。したがって、本遺跡ではこれまで計 7 点のガラス小玉が検出されたことになる。

本書ではこのガラス小玉 7 点について、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所の田村朋美氏に分析をしていただいた (第 VI 章第 3 節)。結果は 7 点中、1 点〔渡邊・立木ほか 2004 図版 47.No.58〕が中世以降 (12 世紀以降) に流通した資料で、6 点が弥生時代後期に流通のあった資料とされた。この 6 点はいずれもカリガラス製のガラス小玉で、技法は引き伸ばし法によるものであり、コバルト着色による紺色透明 (Group PI) の資料が 1 点と、銅着色による淡青色透明 (Group PII) の資料が 5 点である。

本項では弥生時代後期から終末期における県内出土資料をあげ、本遺跡の 6 点の資料を概観することとしたい。

2) 県内の弥生時代後期から終末期におけるガラス小玉出土遺跡と点数、及び出土遺構について

第 1 表はガラス小玉が出土した県内の弥生時代後期から終末期に関する遺跡一覧で、管見の限り 17 遺跡が該当し、144 点出土している¹⁾。これらの遺跡の位置は第 27 図に示した。遺跡の分布を見ると、出土遺跡間が近く密になる地域と単独で位置する遺跡が認められる。なお、各遺跡の文献に関しては第 20 表にて示した。

この 17 遺跡で遺跡の性格に防御的集落 (高地性集落・環濠集落) の特徴を有するとされたのは、堂の前遺跡・大武遺跡・上桐の神社裏遺跡・今泉釜蓋遺跡・東沢遺跡を除いた 12 遺跡が該当し²⁾、ガラス小玉が出土する遺跡が環濠集落や高地性環濠集落という点で重要とした滝沢規朗氏の見解〔滝沢 2009d〕を踏襲するものとする。

資料の分析は 144 点中 93 点が行われ、全体の約 65% が分析されていることになる。93 点の内訳は、山元遺跡県調査の 69 点、西岩野遺跡 13 点、東沢遺跡 1 点、蔵王遺跡 4 点、古津八幡山遺跡 6 点となる。いずれも引き伸ばし法のカリガラスである。着色・色調について



第 27 図 県内における弥生時代後期から終末期に関するガラス小玉出土遺跡分布図

1) 長岡市原山遺跡のガラス玉に関しては、6 点で写真におさまる図録〔西田・宮尾ほか 2013〕もある。しかし、管見の限り図化されているものが 3 点のため、今回は 3 点とした。また、長岡市諏訪田遺跡で採集されたガラス小玉 (淡いコバルト色) が弥生時代の所産として報告されている〔寺村・久我ほか 1991〕が、主体となる時期が弥生時代中期後半ということもあり第 1 表には入っていない。なお、個人寄贈資料にも採集されたガラス小玉が存在する〔加藤ほか 2013〕。同じく長岡市山王 B 遺跡で弥生時代中期後半から後期に位置づけられるとされるガラス玉 (淡緑色) の報告がある〔田中 1989〕が、伴出土器が明確でなく詳細不明ともあり、第 1 表には入っていない。

なお、佐渡市東沢遺跡の資料と製作技法及び色調が共通し、化学組成も類似する大型紺色のカリガラス小玉〔田村 2015a〕が、佐渡市浜田遺跡第 1 号古墳から出土している〔本間ほか 1975〕。田村氏は大型紺色のカリガラス小玉について弥生時代後期後半に北部九州を中心に流通するが南関東にも分布し、古墳時代前期には流入が中断、中期前半に流通量が激増し、その後は次第に減少する資料として変遷等を述べ、「浜田第 1 号古墳は古墳時代終末期に比定されており、すでにカリガラスの流入が途絶えていたと考えられる時期の資料であるため、副葬までに一定期間伝世したものと推察される」〔田村 2015a〕とした。

2) 鯨ヶ尾城跡内に重複する矢代山墳丘墓群 C 支群は斐太遺跡 (高地性集落・環濠集落) の集落域に対応する墓域とされているため、今回は高地性集落・環濠集落に含めたかたちで扱った。一方、今泉釜蓋遺跡は釜蓋遺跡の墓域と推測されるが、両遺跡をあわせた全体の状態が判断できないためここでは除外した。ちなみに吹上遺跡の環濠は、掘削時期についての詳細は明確にできないが、廃絶時期から中期には掘削されていると考えられている〔滝沢 2009e〕。

は、山元遺跡の69点は銅着色による淡青色、西岩野遺跡はコバルト着色の紺色透明10点と銅着色の淡青色透明3点、東沢遺跡はコバルト着色の紺色透明1点、蔵王遺跡の4点は銅着色の淡緑色透明、本遺跡はコバルト着色の紺色透明1点と銅着色の淡青色透明5点である。

なお、古津八幡山遺跡以外で建物から資料が出土したのは4遺跡で、大沢遺跡B'地区・裏山遺跡・釜蓋遺跡の竪穴建物と、蔵王遺跡の平地建物からとなる。また本遺跡以外で資料が墳墓に伴うとされたのは2遺跡で、山元遺跡の2基の土坑墓（県調査1T.SK1、市調査1号土坑墓¹⁾）と、西岩野遺跡の方形周溝墓（SZ3）の墓壙（SK96）となる²⁾。したがって本遺跡は県内で唯一、建物と墳墓に伴ってガラス小玉が検出されていることになる。

ちなみに、本遺跡で資料が出土した竪穴建物と方形周溝墓及び墓壙は、遺跡内で最大規模となる。そこで上述の6遺跡における各遺跡内での遺構規模を比較検討した³⁾。建物は遺跡内で比較対象のない蔵王遺跡の平地建物⁴⁾を除くと、3遺跡とも最大規模の竪穴建物から資料が出土しており留意されよう。墳墓に関しては、西岩野遺跡で資料の出土した方形周溝墓及び墓壙の規模は遺跡内で中位程度であり、最大とはいえない。方形周溝墓に関する出土は少なく、資料の増加を待ちたい。なお墳墓の形態が異なるが、山元遺跡で検出された18基の土坑墓を長軸の規模で比較すると、資料が出土した市調査1号土坑墓が最大で、次いで県調査1T.SK1となる。

3) 県内における当該期のガラス小玉の色調について

県内では分析されていない資料もあることから、ここでは144点の色調に着目した。仮にカリガラスとすれば紺色がコバルト着色のGroup PI、淡青色がGroup PIIに相当する可能性を考えたためである。しかし透明感については各報告書に記載のないものもある。色調については大賀克彦氏の論考〔2002〕を参考に、各報告書で紺色やコバルトブルー、また判断に迷うが群青色とされたものを「紺色」として一括し、淡青色やスカイブルー、ライトブルー、水色、淡緑色、緑色、青緑色といった表現を「青色」として一括した（色調の記載がない山元遺跡市調査資料については写真図版から淡青色と判断し青色に含めた）。なお、実見していない資料も多いことを記しておく。

結果としては144点中123点が「青色」となり、仮に写真での色調の見え方による違いがあっても県内は「青色」が多いといえよう。ちなみに、この時期の県内では黄色や橙色、赤褐色などの資料は無いようである。

4) まとめにかえて 古津八幡山遺跡出土資料について若干の流通経路の検討

本遺跡の資料はコバルト着色の紺色カリガラス（Group PI）が1点、銅着色の淡青色カリガラス（Group PII）が5点である。このガラス小玉がどのような経路で古津八幡山遺跡へもたらされたのか若干検討したい。

これまでにガラス小玉について数々の研究がある。それらのうちカリガラス製のガラス小玉について全国的な変遷過程や流通に関する研究のうち、大賀克彦氏の論考〔2002・2003・2010・2020〕、肥塚隆保氏・田村朋美氏・大賀氏の論考〔2011〕、大賀氏・田村氏の論考〔2016〕を参考とし、本遺跡の資料と関連性がうかがえる箇所を整理すると以下ようになる。

弥生時代後期初頭から前葉に日本列島へのガラス小玉の流入が激増し、北部九州と丹後半島・豊岡盆地を中心とする近畿北部の二つの流通の核が存在する。この時期に流通が激増するコバルト着色と銅着色のカリガラス製小玉に関して両地域の流通状況は、北部九州ではコバルト着色がやや優勢となり、近畿北部では銅着色が90%前後と圧倒的に多くなる。また東海から関東南部や中部高地では、出土するガラス製品の色調構成が近畿北部と

- 1) 市調査資料の6点中5点は土坑墓外北側斜面の出土であるが、出土位置などの検討から1号土坑墓に伴う資料が斜面に流れ込んだものや、また葬送儀礼の一部に関連するものと考えられているため〔吉井・野田ほか2013〕、ここでは墳墓に伴うとした。
- 2) 吹上遺跡の資料は周溝墓南溝上層出土であり、弥生時代中期の周溝墓に直接伴うものではなく、溝内の上層に堆積した後期後半の遺物包含層〔笹澤2006〕からの出土である。また鮫ヶ尾城跡（矢代山墳丘墓群C支群）の資料は、鮫ヶ尾城登城道の堀切付近での表採資料で、墳丘墓を中世遺構が破壊した際に流出したものであろうとされている〔佐藤2009〕が、その墳墓の具体的な状況等は欠く。よってここでは両遺跡とも直接的に墳墓に伴うものとしては扱っていない。
- 3) 本遺跡の遺構計測方法〔本書〕と同様の仕方でも、各報告書掲載遺構図から再計測した数値で検討した（第七章第1節第2・3表参照）。なお、墳墓の形態が異なる山元遺跡の土坑墓の規模に関しては参照の表には入れておらず、ご容赦いただきたい。
- 4) 同じ場所に少なくとも7回は建て替えられたとされる建物（SB16～23）で、他所で平地建物は未検出である。建物の時期は、遺物から古墳時代早期を中心に弥生時代後期後葉から古墳時代前期と幅があり、玉も同時期の可能性が高いとある〔滝沢2017〕。

共通することから、近畿北部からの流入が想定されている。続く弥生時代後期中葉から後葉では、銅着色のカリガラス製小玉の流入は一旦中断し、北部九州ではカリガラスより別な種類・材質のガラス小玉が優勢となり、近畿北部周辺ではカリガラス製小玉の流通が激減する。一方、中部高地から北関東、南関東地域では流通量が顕著に増加し、その構成は青色と大型紺色の引き伸ばし技法のカリガラスがほぼ拮抗するとされ、その流通量の多くは大型紺色の資料ともされており、関東南部に大型紺色の資料の流通の核があるとされた。古墳時代に入ると、前期初頭ごろに再び流入する銅着色のカリガラス製小玉か、前期後葉に出現する他の種類・材質のガラス玉が大部分を占め、畿内を中心として流通し周辺地域へと拡散するが、畿内からの財の流入が少ない地域では、伝世品の占める割合が高いとされた。この再出現した銅着色カリガラス製小玉の端面は明確な研磨痕をもつものが大部分であるとされ、製作時期からは一定の伝世期間を経過している可能性が高いとされた。

このようにカリガラス製小玉の材質・色調、並びに法量による時期的な変遷や地域性などが論じられている。

県内及び周辺地域における Group PI の大型品の流通について

Group PI は、弥生時代後期前葉までは直径が3～4ミリを中心とするもの（Group PI（紺小））に対して、後期後葉では直径5ミリを超える大型品（Group PI（紺大））か、直径2ミリ程度の紫色味が強い粟玉状のもの（Group PI（紫粟））に変化するとされた〔大賀 2020〕。古津八幡山遺跡の SII から出土した Group PI の資料は、直径 8.00mm 程度であることから Group PI（紺大）といえ、後期後葉以降の資料といえる。また、端面が研磨されていることから流入から一定の期間が経過している資料と本書で田村氏は推察している。

先述のように、この資料の流通が多いとされる北部九州と関東周辺では、位置的に本遺跡は後者に近い。ここで関東地方周辺¹⁾の墳墓出土のガラス小玉に関して述べた斎藤あや氏の論考〔斎藤 2014・2015〕をみよ。斎藤氏によると、弥生時代後期後半にあたる時期の近畿北部では淡青色カリガラスは姿を消し、出土数も激減することから近畿北部を介さない流通としたうえで、北信地域や北関東は淡青色透明が多く、南関東は紺色透明の大型カリガラスが多いとした。そして主に紺色透明の大型品は、東京湾岸地域に運び込まれた製品が海路や陸路で東から西へ拡散したものと捉え、太平洋側からの流通を想定した。この斎藤氏の論考をもとに長野県の状況を論じた小山岳夫氏は、弥生時代後期中葉から後葉の長野県北部と群馬県北部のガラス小玉は丹後地域の伝世品とみられる淡青色小型品が主体とされ、長野県南部は大型紺色の資料が多いことを指摘した〔小山 2020〕。さらに、長野県木島平村根塚遺跡のガラス小玉を分析した田村氏・谷澤亜里氏・中村大介氏による考察〔田村・谷澤・中村 2024〕では、コバルト着色の大型品について小山氏の指摘を示し、伊那盆地や松本市の具体的な出土例を挙げ、「太平洋側に流入したガラス小玉の一部は天竜川に沿って北上しているものと考えられよう」とした。

このように Group PI の大型品に関して関東地方や長野県では、太平洋側から内陸部への流通経路が想定されている。県内で Group PI の大型品もしくはその可能性がある資料の出土は、上越地方の釜蓋遺跡と鮫ヶ尾城跡（矢代山墳丘墓 C 支群）、長岡市大武遺跡・上桐の神社裏遺跡、佐渡市東沢遺跡²⁾、古津八幡山遺跡となる。本遺跡で中部高地系の土器（5期頃）〔相田・渡邊ほか 2014〕が出土している点を考慮すれば、大型品といえる Group PI の本遺跡及び県内への流入経路に関して、太平洋側からの流通の可能性を検討する必要もあろうか。

県内及び周辺地域における Group PII の流通について

本遺跡も Group PII が卓越する点で近畿北部の構成に類似することが本書で田村氏により指摘されている。県内の資料も本項³⁾で示したとおり、色調のみでは「青色」となるガラス小玉の出土量が多い。そこで、出土したすべてが銅着色のカリガラスである山元遺跡県調査と蔵王遺跡を参照する。

山元遺跡の県報告資料を分析した肥塚氏と田村氏は、淡青色のカリガラスは畿内を中心とする地域に多く見られる点から、この地域との交流を示す重要な手掛かりとなるものとされ〔肥塚・田村 2009〕、滝沢氏はまとめの

1) 斎藤氏は東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県・群馬県・栃木県・茨城県の関東地方と、長野県・山梨県・静岡県とした〔斎藤 2014〕。

2) 田村氏は、同遺跡の資料は分布の中心である北部九州・南関東から離れており流入経路の解明に課題が残るとした〔田村 2015a〕。

中で多量副葬や土器なども考慮したうえで丹後を中心とした日本海側ルートでもたらされた可能性が高いとされた〔滝沢 2009d〕。また、蔵王遺跡の資料を分析した田村氏は、引き伸ばし法による銅着色のカリガラス小玉の弥生時代中期から古墳時代前期にかけての変遷の概要を述べたうえで、「全て銅着色の小玉であり古墳時代前期前葉の典型的な様相」とし〔田村 2015a〕、鹿取渉氏はまとめの中で、搬入先は限定されないものの畿内から日本海ルートで直接、もしくは丹後・能登等を経由してもたらされたと想定した〔鹿取 2015〕。この両遺跡の検討からは、弥生時代後期から古墳時代前期前葉頃の銅着色のカリガラス小玉について、近畿北部や畿内との関連性や影響が推測されていることとなる。

なお本書で田村氏は、本遺跡の資料は端面が僅かに研磨されていることから、流入から一定の期間が経過していることが示唆されるとした。青色カリガラスの端面研磨の有無に関して、大賀氏は後期前半と後期後半～終末期の区分に用いられており〔大賀 2003〕、この点からすると本遺跡の Group PII の資料は後期後半以降のものと推測でき、遺構ないし遺跡の時期とも矛盾はない。しかし、一方でこの状況は先述した後期中葉から後葉に青色のガラス小玉の流通量が増加するとされた中部高地や北関東・南関東といった地域との関連性もうかがえようか。Group PI の小型品と Group PII の資料構成となる西岩野遺跡の報告では、遺跡周辺地域でガラス玉が比較的多く出土するのは長野県北部と指摘し、また「北陸を見ると若狭周辺では大量に出土することは少なく、福井・石川・富山県でガラス玉が見られる」として、北陸ルートもしくは信州ルートから搬入されたものと考えられている〔丹 2019〕。

そこで周辺地域の状況を整理したい。上述の斎藤氏は、弥生時代後期前半の関東地方周辺のガラス小玉は淡青色が優勢で近畿北部と似た様相とされ、経路について近畿北部から東海地方に達し、そこから東京湾岸地域に入ると想定した。また、長野県北信・中信・東信地域のガラス小玉については新潟県から北信地域に入る経路の推定〔斎藤 2012〕以外にも、富山・新潟県での出土が希薄なことと静岡県西部の出土量が多い点を考慮し、中信から北信への経路も想定した。さらに後期後半における北信地域や北関東は淡青色透明が多いと指摘し、南関東や北信～北関東の淡青色透明ガラス小玉には後期前半の伝世品が存在するものとした〔斎藤 2014・2015〕。

また、先にあげた田村氏・谷澤氏・中村氏の論考によると、北陸地域の資料の副葬が顕著になるのは弥生時代後期後半で、銅着色カリガラスを主体とするセットが目立つ点（山元遺跡も例示）などや、北陸のガラス小玉について大賀氏が「北陸では、弥生時代後期初頭に近畿北部へ流入したものの一部が、やや降った時期に二次的に流入する傾向が認められる」〔大賀 2010〕とされたことから、「現状では、北陸地域のガラス小玉は近畿北部を経由して持ち込まれたものである可能性が最も高いといえよう」とした。ただし、弥生時代後期後半には近畿北部で銅着色のカリガラスは基本的に見られなくなっているとして、北陸地域への流入時期がいつかという問題が残るとされた。さらに中部高地の銅着色カリガラスの多くは、近畿北部から北陸地域を経由する日本海ルートで持ち込まれたものとしている〔田村・谷澤・中村 2024〕。

これまでの県内資料での指摘や周辺地域の指摘からも、弥生時代後期後半における北陸の淡青色のガラス小玉は近畿北部を経由して持ち込まれた資料の可能性が高い。伝世品が存在する可能性を考慮したうえでも、本遺跡の Group PII の資料は近畿北部からの流通品で、さらに日本海側を経路とした可能性が高いと推測できよう。

古津八幡山遺跡へのガラス小玉の流入について

以上のように、古津八幡山遺跡のガラス小玉の流入経路は日本海側の経路も推測できようが、Group PI の大型品は中部高地における太平洋側からの北上経路の存在もあり一概にいえない状況となっている。田村氏・谷澤氏・中村氏も先行研究を踏まえたうえで、「東日本におけるガラス小玉からは、弥生時代後期後半には、日本海側から流入し中部高地に南下する経路と、太平洋側から流入し中部高地を北上していく経路のふたつが併存し、複合的な流通網が形成されていたことがうかがえる」〔田村・谷澤・中村 2024〕と整理されている。

また、古津八幡山遺跡では他地域の影響がうかがわれる土器や、鹿角装鉄剣（鹿角製把）、鉄鏃、木槨構造などの遺物・遺構が認められている。これらは本遺跡へのガラス小玉の流入経路に参考となるかもしれない。滝沢氏

第20表 新潟県内における弥生時代後期から終末期に関するガラス小玉出土遺跡一覧（遺跡番号は第27図に対応）

遺跡名 (〈〉は便宜的呼称)	市町村	遺跡の時期	点数	出土位置	分析	技法	材質	色調	断面特徴	備考	高砂佐保・野田佐保 周辺の 有無	遺跡から出土した 特徴的な遺物	文献	
1 堂の前遺跡 <長瀬>	村上	中期後半～ 後期前半	1	中・近世の包含層	×	引き伸ばし法	-	透明感のある緋色	×	土器の時期から弥生時代のガラス玉とされる。気泡は「孔と平行に列状」(暫切法により制作され、加熱による孔の長短の差が認められる) (吉田2010)。ここでは田村氏の表現 (田村2015b) を用いて引き伸ばし法とした。	-	鉄器 (後期前半)	(石川 ¹⁾ 2010)	
2 山元遺跡 <長瀬>	村上	中期後半～ 後期後半	72 (完形68、半形4) 6 (全て破損)	A地点IT、SK1 (土坑墓) 5点: 1号土坑墓外北側斜 面 1点: 風通穴IT産上 SI1	○ 分析資料は 引き伸ばし法 (69点)	分析資料は 引き伸ばし法	分析資料は 引き伸ばし法 カリガラス 分析資料は 引き伸ばし法	本文: スカイブルーを基調、数点は緑色味を帯びる 分析69点 肥後・田村2009) : 赤褐色 (銅着色) 赤と同様の赤褐色と判断した)	-	出土遺物の主体は後期前半～後期後半と推定。 72点中69点分析 (完形を対象としたと考えるが、対象資料の明示はない)。 断面については「断面形から小口面が平坦でないものが多い」と記載あり。 気泡等記載なし。 県調査の半製品も含め人為的な産行の可能性がある (澤田2013)。	○	37m	筒形銅製品・銅器・ アメリカ式石織 (吉井・野田 ¹⁾ 2013)	(滝沢・澤田 ¹⁾ 2009)
3 古津八幡山 遺跡	新潟市	後期前半～ 終末期	5 (半形2) 6 (全て破損)	図版36.6.ガラス2: S11 図版36.6.ガラス3: S11 図版36.6.ガラス4 (半形): SZ743.周産 (SD730) 図版36.6.ガラス5: SZ743 埋割部1 (SK739)	○ 引き伸ばし法	引き伸ばし法 カリガラス	カリガラス	赤褐色透明 (銅着色) 赤褐色透明 (銅着色) 赤褐色透明 (銅着色) 赤褐色透明 (銅着色) 赤褐色透明 (銅着色)	○	本書4期の遺物。 本書2期を中心とする遺物。	○	50m	鉄器・ アメリカ式石織	(本書)
4 大沢遺跡B 地区	新潟市	後期前半～ 古墳前期	1	2004図版47.No.59: 13 次2T1区	×	-	-	赤褐色透明 (銅着色) (田村本書)	-	(渡邊・立木 ¹⁾ 2004)	×	アメリカ式石織	(小野1982、 甘利・荒木 1994)	
5 大沢遺跡 A	長岡市	弥生～古墳 期	5 (丸玉1半 形、小玉4)	4号住居址壁溝	×	-	-	スカイブルー 2点: 赤褐色 (丸玉1含む) 3点: 青褐色	○	気泡及び気泡列は「孔方向に平行」 (甘利・荒木1994)。4号住居址の時代を示す明確な資料は得られていない。 気泡等は記載なし。色調は本文と観察者が異なるため本文を使用。「時期の特定は困難」とあるが、報告書内の表では最終シンボ4期～古墳中期に「ガラス小玉」とされている。 史 (田中1996a) ではライトブルーとあるが、写真図版では黒く見え、また (田中1989) ではコバルトブルーとあることからコバルトブルーとした。	-	30m	アメリカ式石織	(新井・坂上 ¹⁾ 2014)
6 上柳の神社 裏遺跡	長岡市	中期後半～ 終末期	1	採集	×	-	-	コバルトブルー 1点: コバルトブルー 1点: ライトブルー	-	色調については和尙村史 (田中1996b) ではライトブルーとあるが、写真図版では黒く見え、また (田中1989) ではコバルトブルーとあることからコバルトブルーとした。 色調については和尙村史 (田中1996b) ではライトブルーとあるが、写真図版では黒く見え、また (田中1989) ではコバルトブルーとあることからコバルトブルーとした。 色調については和尙村史 (田中1996b) ではライトブルーとあるが、写真図版では黒く見え、また (田中1989) ではコバルトブルーとあることからコバルトブルーとした。 色調については和尙村史 (田中1996b) ではライトブルーとあるが、写真図版では黒く見え、また (田中1989) ではコバルトブルーとあることからコバルトブルーとした。	-	40m	-	(田中1989・ 1996a)
7 北野大平遺 跡	長岡市	後期後半	2	採集	×	-	-	青色透明	-	「細かい気泡」あり。	○	鉄器	(田中1985、 長岡市1992a)	
8 横山遺跡	長岡市	中期～終末 期 (主体は 後期後半～ 終末期)	1 (半形)	表面採集	×	-	-	赤褐色透明 2点: 赤褐色透明 10点: 赤褐色透明 (コバルト着色) 3点: 赤褐色透明 (銅着色)	-	「細かい気泡」あり。写真6点掲載の気泡もある。図化3点は欠損していない。 後期後半の遺物。ガラス玉の構成から遺物の年代と矛盾なく、小形の緋色カリガラスが主体であることから、古墳時代には下らない (田村2019)。	○?	アメリカ式石織	(田中1985、 長岡市1992b)	
9 原山遺跡	長岡市	中期後半～ 古墳前期	3 (図化3点)	採集 (図化3点)	×	-	-	赤褐色透明 10点: 赤褐色透明 (コバルト着色) 3点: 赤褐色透明 (銅着色)	-	後期後半の遺物。ガラス玉の構成から遺物の年代と矛盾なく、小形の緋色カリガラスが主体であることから、古墳時代には下らない (田村2019)。	○	20～ 25m	-	(田中2019、 中島、丹 ¹⁾ 2019)
10 西岩野遺跡	柏崎市	後期後半～ 古墳前期	13	SK96 (SZ5の墓溝) 2点: 1号竈穴 3点: 4号竈穴 1点: 包含層	○ 引き伸ばし法	引き伸ばし法 カリガラス	-	透明感のあるスカイブルー	○	気泡は「多く存在する」。管状のものをカットしたかかは不明。銅製製作等の可能性指摘 (加藤・石田2000)。	○	鉄器	(小池・野水 ¹⁾ 2000)	
11 裏山遺跡	上越市	後期後半	6	2点: 1号竈穴 3点: 4号竈穴 1点: 包含層	×	-	-	透明感のあるスカイブルー	○	気泡は「多く存在する」。管状のものをカットしたかかは不明。銅製製作等の可能性指摘 (加藤・石田2000)。	○	鉄器	(小池・野水 ¹⁾ 2000)	
12 釜蓋遺跡	上越市	環濠集落成 立～隆起は 後期～古 墳期	1 (半形) 表土 9 (半形) 表土 S183 (うち1点はP1230) 4 (半形) 表土 18 (穴埋) 表土 4 (穴埋) 表土	分析資料は 引き伸ばし法 カリガラス	分析資料は 引き伸ばし法 カリガラス	分析資料は 引き伸ばし法 カリガラス	スカイブルー 1点: コバルトブルー 8点: スカイブルー (うち1点半形) 1点: コバルトブルー (穴埋) 3点: スカイブルー	気泡等記載なし。 S183は終末期～古墳初頭 (新潟シンボ4・5期) の遺物 (瀧尾 ¹⁾ 2013)。 気泡等記載なし。 S11568・S183は終末期～古墳初頭 (新潟シンボ4・5期) の遺物 (瀧尾・内 ¹⁾ 2021)。 気泡等記載なし。 S11568・S183は終末期～古墳初頭 (新潟シンボ4・5期) の遺物 (瀧尾・内 ¹⁾ 2021)。 気泡等記載なし。 S11568・S183は終末期～古墳初頭 (新潟シンボ4・5期) の遺物 (瀧尾・内 ¹⁾ 2021)。	-	気泡等記載なし。 S11568・S183は終末期～古墳初頭 (新潟シンボ4・5期) の遺物 (瀧尾・内 ¹⁾ 2021)。 気泡等記載なし。 S11568・S183は終末期～古墳初頭 (新潟シンボ4・5期) の遺物 (瀧尾・内 ¹⁾ 2021)。	○	0m	-	(田村 ¹⁾ 2008) [瀧尾・瀧尾・ 野村 ¹⁾ 2013] (瀧尾 ¹⁾ 2015) (瀧尾 ¹⁾ 2021)
13 今泉釜蓋遺 跡	上越市	後期前半～ 古墳前期	1	運轉外出土遺物 (31Pリットル遺物)	×	-	-	スカイブルー	-	気泡等記載なし。弥生～古墳の遺物。	-	-	-	(田村・瀧尾 2010)
14 吹上遺跡	上越市	中期中葉～ 後期終末	1	2号方形陪葬墓 (SD31) の 南溝上層	×	-	-	赤褐色	-	気泡等記載なし。2号方形陪葬墓は弥生中期後半～中期末の遺物で、その溝上層に堆積した弥生後期後半の包含層から出土。 気泡等記載なし。資料は「直丘墓を中世遺構が破壊した際に流出したものである」と記載される。	○	0m	青銅器銅製品・ 青銅器銅製品・ アメリカ式石織	(瀧澤 ¹⁾ 2006)
15 駿ヶ尾遺跡 (駿ヶ尾C群)	妙高市	後期後半～ 終末期	1	表塚	×	-	-	赤褐色	-	気泡等記載なし。資料は「直丘墓を中世遺構が破壊した際に流出したものである」と記載される。	○	45m以上 遺跡群)	鉄器 (巻込跡出土)	(佐藤2009)
16 東沢遺跡	佐渡市	後期前半～ 古墳前期	1	排土	○	引き伸ばし法 カリガラス	カリガラス	赤褐色透明 (コバルト着色)	-	土器中期～古墳前期 (記載なし)。 「小口面は平坦」と記載あり。 遺物は出土層の時期が異なる。 遺物の時期から後期後半～終末期と推定され、弥生時代前期～中期の遺物と推定される。また、古墳前期のガラス玉とあることから、古墳時代には下らない (田村2015a)。 新シンボ=1993 日本考古学協会シンボ 展シンボ=2005 新潟県考古学協会シンボ	-	-	-	(能取 ¹⁾ 2015)
17 蔵玉遺跡	佐渡市	後期前半～ 古墳前期	5 (半形以下1は半形以下で分析していない)	1点: 包含層 4点: 中世遺物Pt (うち1点は半形以下で分析していない)	○ (4点)	分析資料は 引き伸ばし法 カリガラス	分析資料は 引き伸ばし法 カリガラス	本文: スカイブルー 分析4点 (田村2015a): 淡緑色 透明 (銅着色)	-	遺物は出土層の時期が異なる。 遺物の時期から後期後半～終末期と推定され、弥生時代前期～中期の遺物と推定される。また、古墳前期のガラス玉とあることから、古墳時代には下らない (田村2015a)。 新シンボ=1993 日本考古学協会シンボ 展シンボ=2005 新潟県考古学協会シンボ	○	0m	銅器 (後期後半～古墳 前期)、銅鏡 (古墳前 期)	(能取・滝沢 ¹⁾ 2017)

表は山元遺跡 (瀧沢・澤田¹⁾2009)・西岩野遺跡 (中島・丹¹⁾2019) の報告書をもとに、一部改変・追加して作成した。

「-」は防衛的集落とはされていない

は新潟県北部のガラス小玉・鉄器・青銅器の様相から「現状では明確にできないが信濃川を北上する内陸ルートの検討も大きな課題と考えている」〔滝沢 2014〕とされ、本遺跡も複合的な見地を要すると考える。なお第 27 図からは河川から大きく離れない立地の遺跡が多いようである。やや内陸に位置する本遺跡も、当時は西側に湿原がひろがっていたとの指摘もあり〔鴨居・安井 2004〕、河川を利用してガラス小玉を入手したのであろうか。

なお本項では、県内資料の一部をカリガラスの可能性で論じた箇所があり、今後県内の出土資料に理化学的分析が行われれば、当然変更される点もある。古津八幡山遺跡でも今回の分析によって 1 点は弥生時代の所産ではないことが判明した。新たな資料の増加や分析も含め、さらなる検討が必要となろう。

D 古津八幡山遺跡出土鉄器からみる弥生時代の広域交流

1) 先学における古津八幡山遺跡出土鉄器の評価

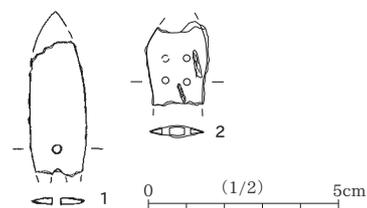
土器の様相から北陸系と東北系の分布圏縁部と評され、両地域からの影響が強いと想定される古津八幡山遺跡だが、鉄器については、SX1005 方形周溝墓の主体部から出土した鹿角製把鉄剣の存在により〔豊島 2003〕、鹿角製把の流行地である中部高地、関東からの影響が評価されてきた。近年では、中部高地や関東が主体となる無茎三角形（有孔）の分布圏に古津八幡山遺跡も含まれることが、東日本出土鉄鍬の分析により明らかとなった〔林 2023, pp. 69-70〕。鉄器から想定される中部高地、関東と古津八幡山遺跡のつながりは、ますます強固なものとなっていると言えよう。

実際、中部高地、関東と古津八幡山遺跡の交流関係を鉄器から推測できるのは事実であり、鉄器以外の視点からも両地域との交流関係を探っていくべきだろう。一方、土器から推測できる北陸南西部や東北南部との関係を鉄器から探ることも欠かせない。とくに本報告では、4 基の埋葬施設が確認された方形周溝墓（SZ743）や木槨構造の埋葬施設（SK739）など、墓制についても西日本の一面を持っていたことが明らかにされており、鉄器からみる西からの影響を探る必要性が高まっている。そこで本稿では、鉄鍬の観察所見をもとに、西日本や朝鮮半島と古津八幡山遺跡の関係を考えてみたい。

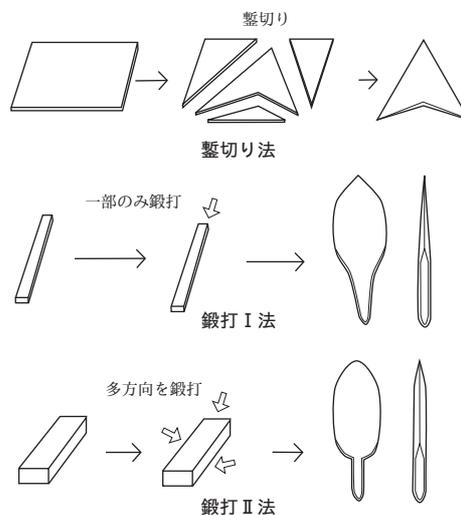
2) 製作技法からみる古津八幡山遺跡出土の鉄鍬

古津八幡山遺跡から出土した鉄鍬は、SI0804 出土例（第 28 図-1）〔渡邊・立木ほか 2001〕と SI728 出土例（同図-2）（本報告図版 36-2）の 2 例である。報告前の 2 だけでなく、1 について言及した研究も少なく、中部高地、関東を中心に分布する無茎三角形（有孔）との共通性を指摘する見解〔林 2023, pp.69-70〕と、やや丸みを帯びながら側縁が平行となる鍬身形態に注目し、北部九州や朝鮮半島出土資料との関連性を述べた見解〔鈴木 2022, p.43〕にとどまる。両研究は、ともに平面形態に注目した分析成果を述べており、結果として相反する見解が導き出されている。それを踏まえここでは、技術的視点から古津八幡山遺跡出土資料について再検討してみたい。

弥生時代の鉄鍬製作技法は、裁断技術で製作する技法（鑿切り法）と鍛打技術で製作する技法（鍛打法）に大別できる。また鍛打法は、棒状素材の一部を鍛打して鍬身部を作り出す鍛打Ⅰ法と多方向から塊状素材を鍛打し成形する鍛打Ⅱ法に分けられる〔村上 1998, p.78・2007, p.52, 松木 1999, 鈴木 2020, pp.44-45〕（第 29 図）。鑿切り法で製作された鉄鍬は、平面形態が直線的な一方、鍛打法は曲線的な形状となる。また、鑿切り法の鉄鍬は断面形が



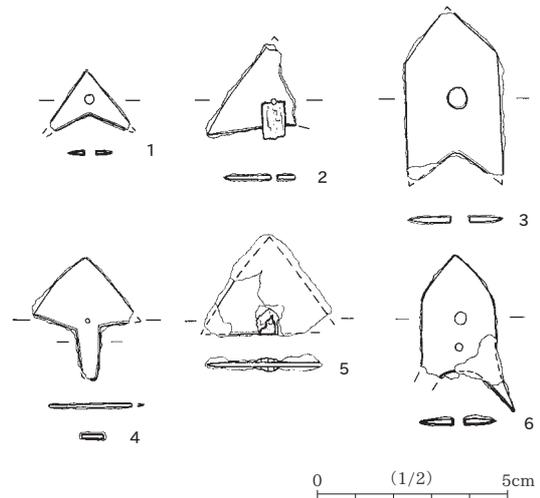
第 28 図 古津八幡山遺跡出土鉄鍬



第 29 図 鉄鍬の製作工程と分類

板状になる一方、鍛打法は凸レンズ形となる傾向にある。これらの形態的特徴を踏まえ、古津八幡山遺跡出土鉄鎌の製作技法と地域性について考えてみたい。

まず2001年に報告された第28図-1の製作技法を考えてみる。一般的に無茎三角形の鉄鎌は鑿切り法に区別される傾向にあるが、本例の平面形態は直線的と言い難く、側縁は全体的に丸みを帯びている。裁断技術のみでこの形状を作り出すのは難しく、鍛打技術の利用が想定できる。さらに断面形が凸レンズ形である点も見逃せない。本資料は鍛打法で製作された鉄鎌である可能性が高い。続いて本報告書に掲載されている2だが、1と同じく側縁の形状が曲線的であり、断面も凸レンズ形となる。報告文でも触れたように、こちらの資料も鍛打法で製作されたと考えるべきだろう¹⁾。



1 本村東沖：長野 2～4 中高瀬観音山：群馬
5 若尾山：神奈川 6 七瀬：長野

第30図 中部高地・関東における鉄鎌

では古津八幡山遺跡出土資料と同じく、無茎三角形の資料が多い中部高地や関東の資料はどうだろうか。結論から述べると、両地域の資料の多くは鑿切り法で製作されている。第30図の例からわかるように、直線的な平面形態を呈した資料が多く、断面形も板状となっている。長野県中野市七瀬遺跡出土例(第30図-6)など、鍛打法による成形が疑われる資料も認められるが、本資料の断面形は板状に近く、このような資料の数も多くない。つまり、同じ無茎三角形鎌に分類できる古津八幡山遺跡出土例と中部高地、関東で出土する鉄鎌だが、技術的視点からみると、その差異が明確であり、これらの資料の共通性を主張するのは難しい。

後述でも触れるように、曲線的な側縁形状となる無茎三角形鎌は、北部九州や朝鮮半島東南部に認められる。これらの製作技法は、実見を進めた検討が必須となるが、古津八幡山遺跡出土鉄鎌に影響を与えた地域の候補になりえる地域だろう。

3) 平面形態からみる古津八幡山遺跡出土鉄鎌の再検討

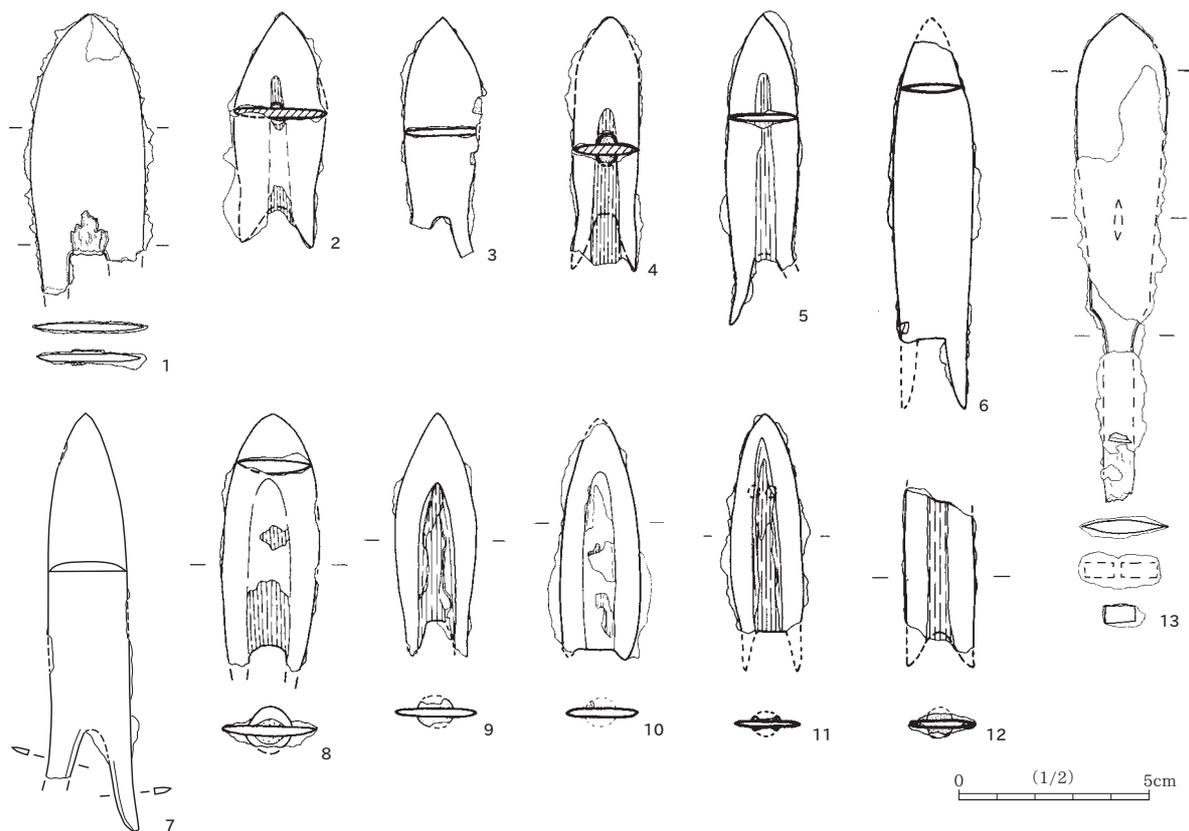
古津八幡山遺跡出土鉄鎌が無茎三角形鎌に分類できることは間違いないが、技術的視点やより細かい平面形態の違いに注目することで、無茎三角形鎌を細分できると述べてきた。これを踏まえここでは、古津八幡山遺跡出土鉄鎌の特徴である、側縁が曲線的な資料、とくに2のように、側縁形状がS字となる資料に注目し、他地域との関係を考えてみたい。

上述でも触れた第30図-6など、東日本でも側縁S字となる資料は認められるが、その数は少ない。ゆえに類例が多いのは西日本となるのだが、そのなかでも有茎の資料も含め、側縁S字となる鉄鎌が目立つのは北部九州である²⁾(第31図-1・7・13)。とくに、形状や法量は異なるものの、福岡県福岡市小笹遺跡第4号石蓋土坑墓出土例や同県北九州市岡遺跡Ⅲ区4号住居出土例³⁾など、無茎三角形で側縁がS字となる資料が出土して

1) 筆者自身、鍛打法で製作された弥生時代の無茎三角形鎌について深く言及してこなかった。そのため鍛打法の分類は、有茎資料の観察所見に基づく「鍛打Ⅰ法」と「鍛打Ⅱ法」の大別にとどまっているが、新たな技法の存在を想定していく必要があるかもしれない。

2) 松木武彦が指摘するように、古墳時代になると、側縁がS字となる有茎三角形鎌や平根系有茎柳葉形・圭頭形鎌が日本列島各地で認められるようになるが〔松木2003、2006、p.36〕、弥生時代の類例は限られる。ただし、鎌身の平面形がS字に近くなる平根系有茎柳葉形・圭頭形鎌(ライオン・ジョセフ分類の平根系定角式)は弥生時代終末期の瀬戸内地域に一定量認められる〔松木2003・2006、p.36、ライオン2019〕。また石川県金沢市塚崎遺跡や福井県あわら市茶山崎遺跡でも、側縁がS字に近く、細長い有茎三角形の鉄鎌が出土している。

3) 岡遺跡出土例は逆刺が欠損しているため、側縁がS字になると断定できないが、後述する朝鮮半島出土例の形態などを考慮すると、S字の形態となる可能性が高いだろう。



1 岡：福岡 2・4・6・9～11 玉城里：浦項（慶尚北道） 3 徳泉里：慶州（慶尚北道） 5 隍城洞：慶州（慶尚北道）
8 朝陽洞：慶州（慶尚北道） 12 大安里：蔚山 13 蒲生：福岡

第31図 朝鮮半島東南部及び北部九州における鉄鎌

いる点は注目したい。さらに朝鮮半島東南部、いわゆる嶺南地域には、北部九州を上回る数の類例が確認できる（同図-2～6）。かつて松木武彦が指摘したように、本地域には大型で逆刺が発達した無茎三角形鎌が多く〔松木2006, p.40〕、紀元後2世紀後半（高久編年Ⅴ期）頃から〔高久2003〕、側縁S字となる資料が急増する。そのなかには、慶尚北道浦項市玉城里遺跡121号木槨墓出土例（同図2）のように、第28図-2と類似した形態の資料も認められる。また朝鮮半島東南部には、第28図-1と類似した形態も確認でき（第4図-8～12）、特異な平面形態を呈する古津八幡山遺跡出土鉄鎌と朝鮮半島東南部の関係を想定したくなる。

ただし、北部九州や朝鮮半島東南部の資料は、古津八幡山遺跡出土資料に比べサイズが大きい。最大幅の位置や孔が穿たれている場所など、細かい差異が確認できる点も否めない。また併行関係の整理を進め、新潟県の後期後半（新潟シンボ編年2期）と上述した形態の鉄鎌が北部九州や朝鮮半島で流行し始める時期が合致するか確認する必要もあろう。資料数が限られる現状、古津八幡山遺跡出土鉄鎌と北部九州や朝鮮半島東南部を結びつけるのは時期尚早であり、林が主張する有孔磨製石鎌との関係なども引き続き考慮していくべきだろう〔林2023, pp.69-70〕。

4) 孔からみる古津八幡山遺跡出土鉄鎌

最後に孔の数と配置にも注目して、古津八幡山遺跡出土鉄鎌を検討してみたい。第28図-1は、鎌身下部中央に1孔のみ穿たれており、その配置から根挟みとの関係が想定できる。このような配置は日本列島各地で類例が認められ、その系譜を議論するのは難しい。一方、第28図-2は、鎌身中央に並列する2孔が2列に縦列する特徴的な配置となっている。この配置は、岩井頭彦が1類としたものであり、東海地域を中心に流行した多孔銅鎌（第32図-3）の影響が想定されている。類例は少なく、2006年段階では京都府綾部市久田山遺跡から

出土した2例(同図-4・5)に限られていた〔岩井2006〕。

近年では、立谷聡明が九州地域における多孔鏃を整理しており、実用的な緊縛孔として多くの孔が穿たれた鏃が中九州地域で流行し、当地域と交流するなかで、緊縛孔として機能しない多孔鏃が北部九州で創出されたと推測した〔立谷2020〕¹⁾。第28図-2が緊縛孔として機能するか否かは検討が必要だが、九州地域と古津八幡山遺跡の関係性を考えるうえで重要となってくる視点だろう。ただし、九州地域における例は下部に向かうにつれ、孔と孔の間隔が広がる形態が多く(第32図-1・2)、第28図-2とはやや形態が異なる。現状、孔同士の間隔が変わらず2孔が縦列する例(岩井1類)は、上述した久田山遺跡例、近年出土した佐賀県唐津市中原遺跡SP13230出土例(第32図-6)、そして東海地域における多孔銅鏃に限られるだろう。

第28図-2と類似した孔配置の資料は少なく、詳細を語ることは難しい。ただし、多孔銅鏃が流行する東海地域や久田山遺跡が所在する近畿地方北部、そして中原遺跡が所在する北部九州など、いずれも新潟市より西の地域から類例が出土している。さらなる検討が必要だが、第28図-2に穿たれた孔は、西からの影響を示す証左と言えるのかもしれない。

5) 鉄器からみる古津八幡山遺跡と広域交流

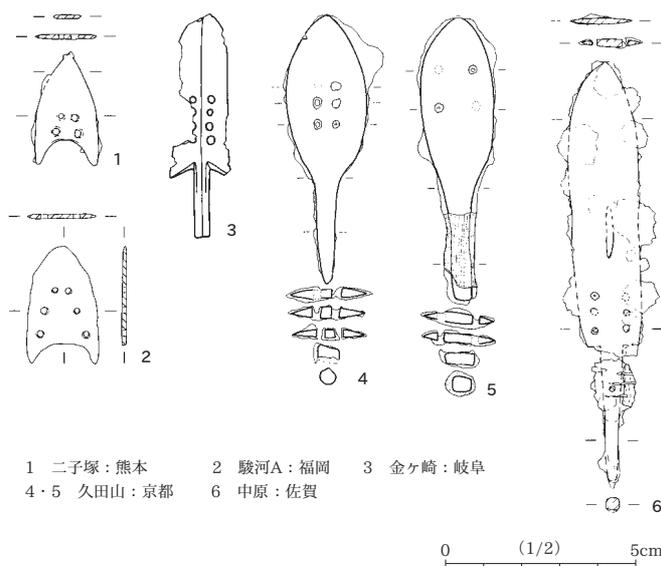
古津八幡山遺跡から出土した鉄鏃に注目したところ、平面形態や孔配置といった属性を根拠に西からの影響を推測することができた。古津八幡山遺跡出土例が2例に限られることにくわえ、平面形態やサイズなどに細かい差異が認められるため、さらなる検討が必要だが、北部九州や朝鮮半島東南部といった地理的に離れた地域からの影響も疑っていきべき状況となった。

もちろん、鹿角製把鉄剣のように中部高地や関東から影響を受けた鉄器が存在するのは間違いない。また、土器や石器の様相からわかるように、北陸西部や東北部とも積極的に交流していたのだろう。交通の要衝に位置する古津八幡山遺跡の集団は、様々な地域と交流関係を有していた可能性が高い。本遺跡出土鉄鏃は、その広域交流の一端を示す重要な資料と評価できよう。

図版出典

所蔵先を記載したものは筆者実測。著者名を記載したものは文献および報告書より引用。

第28図：1・2=新潟市文化財センター、第29図：筆者作成、第30図：1=長野市埋蔵文化財センター、2～4=群馬県埋蔵文化財調査事業団、5=藤沢市生涯学習部郷土歴史課、6=長野県立歴史館、第31図：1・13=北九州市埋蔵文化財調査室、2・4=国立慶州博物館2000、3=嶺南文化財研究院2009、5=嶺南文化財研究院2010、6・10=嶺南埋蔵文化財研究院1998b、7=福岡市教育委員会1973(筆者トレース、一部改変)、8=国立慶州博物館2003、9・11=嶺南埋蔵文化財研究院1998a、12=蔚山大学校博物館2002、第32図：1・2・6=立谷2020、3=財団法人岐阜県文化財保護センター、4・5=岩井2005



第32図 弥生時代における多孔鏃の諸例

1) 中九州地域における多孔鏃の存在は古くから知られており、緊縛孔としての機能が評価されてきた〔村上1992, p.468〕。また立谷が推測した変化は岩井も想定しており〔岩井2005, pp.11-12〕、久住猛雄も同様の見解を持っている〔久住2017〕。

引用文献

<論文>

- 岩井頭彦 2005 「京都府綾部市里町久田山古墳群 H 支群出土鉄器の再検討」『太爾波考古』第 22 号 両丹考古学研究会
- 岩井頭彦 2006 「有孔鉄鏃からみた古墳副葬鉄鏃の系譜」『考古学研究』第 53 巻第 2 号 考古学研究会
- 久住猛雄 2017 「3 世紀のチクシと三韓と倭国」『魏と洛陽から『親魏倭王』印の旅 - 楽浪・帯方・三韓から邪馬台国へ - 資料集』ふたかみ邪馬台国シンポジウム 17 香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」
- 鈴木崇司 2020 「弥生時代の東日本出土鉄製武器にみる鉄器製作技術」『考古学研究』第 67 巻第 3 号 考古学研究会
- 鈴木崇司 2022 「東日本における弥生時代の鉄器 - 鉄器の製作・入手・消費からみる地域性 -」『新潟県考古学会秋季シンポジウム発表要旨 石器・鉄器からみた新潟の弥生時代 - 広域的な交流と特質 -』新潟県考古学会
- 高久健二 2003 「嶺南地域の武器組成 - 紀元前 2 世紀後葉～紀元後 4 世紀を中心に -」『古代武器研究』vol.4 古代武器研究会
- 立谷聡明 2020 「弥生時代の九州地方における鉄製武器の普及 - 武器の消費傾向からみた生産と流通にかんする予察 -」『古代武器研究』vol.16
- 豊島直博 2003 「弥生時代の鹿角装鉄剣」『東国史論』第 18 号 群馬考古学研究会
- 林 大智 2023 「北陸の高地性集落と鉄製武器の普及 - 集落動態からの位置づけと鉄製武器の保有形態」『古代文化』第 74 巻第 4 号 古代学協会
- 松木武彦 1999 「岡山地域における弥生時代鉄鏃の展開」『古代吉備』21 古代吉備研究会
- 松木武彦 2003 「古墳出現期の鉄鏃の一樣相 - 腸袂三角形鉄鏃について -」石野博信編『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 松木武彦 2006 「第 3 章 日本列島と朝鮮半島における武器の形態比較 - 認知的視点による武器の比較形態学研究序説 -」『日本列島と朝鮮半島の国家形成期における武器発達過程の考古学的比較研究』
- 村上恭通 1992 「11-8 弥生鉄器の諸問題」『二子塚 - 熊本内陸工業用団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 -』熊本県教育委員会
- 村上恭通 1998 「鉄器普及の諸段階」下條信行編『日本における石器から鉄器への転換形態の研究 < 平成 7 年度～平成 9 年度科学研究費補助金 (基礎研究 B) 研究成果報告書 >』
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- ライアン・ジョセフ 2019 「古墳出現期の瀬戸内における鉄鏃の生産と流通 - 浦間茶臼山古墳出土鉄鏃を中心に -」『古代吉備』第 30 集 古代吉備研究会
- 渡邊朋和・立木宏明ほか 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

<報告書>

- 蔚山大學校博物館 2002 『蔚山大安里遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2003 『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』
- 国立慶州博物館 2000 『玉城里古墳群Ⅱ - 『가』地区発掘調査報告』
- 国立慶州博物館 2003 『慶州 朝陽洞遺跡Ⅱ』
- 福岡市教育委員会 1973 『福岡市小笹遺跡発掘調査報告書』
- 嶺南文化財研究院 2009 『慶州 徳泉里遺跡Ⅲ - 木槨墓 -』
- 嶺南文化財研究院 2010 『慶州 隍城洞 575 番地古墳群』
- 嶺南埋蔵文化財研究院 1998a 『浦項玉城里遺跡Ⅰ - ㄱ地区』
- 嶺南埋蔵文化財研究院 1998b 『浦項玉城里遺跡Ⅱ - ㄴ地区』

第3節 まとめ

本章第1節Aでは、主に本書報告の北東地区における弥生時代の遺構の変遷について記載したが、本節では遺跡全体における弥生時代の空間利用及びその変化について、これまでの調査や研究成果も踏まえながら概観するとともに、今後の課題なども提示することでまとめたい。なお、これまでの調査の多くは保存のための確認調査であり、調査範囲が限られることも多いため、竪穴建物を中心に時期が不明な遺構も存在する。

弥生時代後期前半・後半（1・2期）（第33図）

古津八幡山遺跡で最も古い弥生時代の土器は弥生時代後期前半（1期古）と考えられ〔渡邊 2001・2013〕、その時期が弥生時代における古津八幡山遺跡集落の開始時期とみられる。そして、遅くとも弥生時代後期前半（1期新）のうちに外環濠の掘削が行われている〔渡邊 2001・2004・2013 など〕。さらに北地区の外環濠内部を中心に、弥生時代後期前半から後半（1期新から2期新）の竪穴建物が多く分布しており（居住区 A-1・A-2）、当該期において標高の高い北地区が集落の中心であったといえる。なお、遺物の出土量や遺構数などから、本遺跡のピークは後期後半（2期）と考えられる。

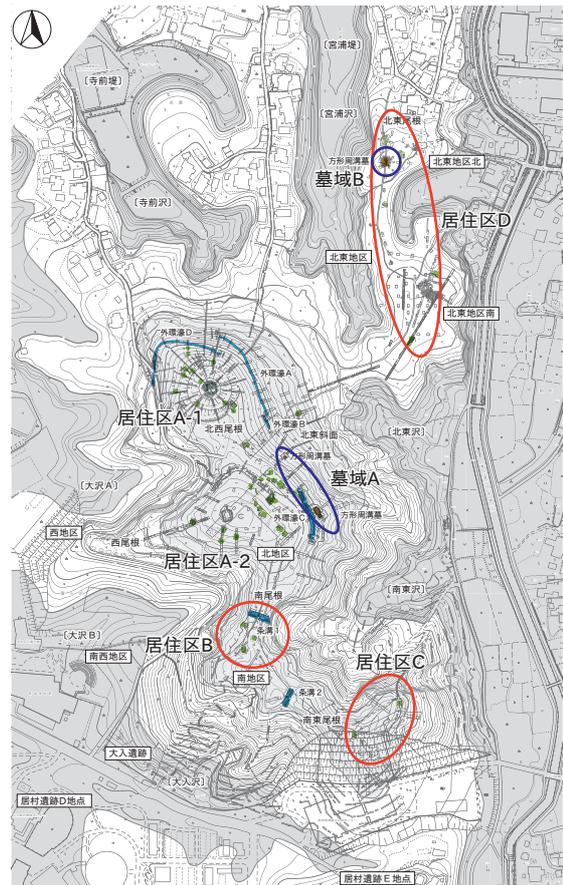
一方、本書報告の北東地区でもこの時期に竪穴建物が点在していたことが判明した（本章第1節A・第2節A）。なお、西方からの影響が推測される鉄鍬（本章第2節D）を出土する竪穴建物（S1728）が存在することからは、北東地区の竪穴建物が遺跡中心部である北地区の竪穴建物に比べて出土品で劣っていないことが示唆される。

墳墓については、北地区の外環濠の外側において方形周溝墓が後期前半から後半（1期新から2期）に築造されている（墓域A）。一方、本書報告の北東地区北でも墓の存在が判明した（墓域B）。遅くとも後期後半（2期）には方形周溝墓（SZ743）が築造され、以降、墓域が形成されたものと推測する（本章第1節A・第2節A）。

なお、北東地区北の方形周溝墓 SZ743 は、頂上部の北地区の方形周溝墓に比べて墳墓や墓壇の規模が大きく、4基の埋葬施設を持つ点など在地の中では異質である。中心的な埋葬施設である埋葬部1（SK739）の構築時期は他の3基の埋葬施設よりも新しいと推測され、弥生時代後期末（3期）まで下る可能性があるが、いずれにせよ複数埋葬や、埋葬施設に木槨構造が採用されている点なども含め、西方の影響がより強い墳墓と考えられる（本章第1節C）。

弥生時代後期末・終末期（3～6期）（第34図）

内環濠Aについては、弥生時代後期後半（2期）の竪穴建物を壊して掘削されていることや、環濠内から弥生時代終末期（4期）の土器が出土していることなどから、内環濠Bとともに弥生時代終末期前後に掘削されたと推測される。内環濠A・Bは遺跡の最高所に位置し、外環濠とは異なって方形を意識した平面形へと変化しており、機能の違いも含めて留意される。内環濠内部の遺構の把握や、南西側にも内環濠が存在するのか、などは今後の課題である。



第33図 弥生時代後期前半・後半（1・2期）の遺構図

なお、外環濠・条溝については埋土出土土器から当該期にはおおよそ埋没していたと考えられるが、外環濠C・Dについては断面の層位や出土土器の検討から、終末期(4期)前後に再掘削がなされたとの指摘もあり〔笹沢2015〕、外環濠C・Dは浅いながらも当該期にも機能していた可能性がある。

竪穴建物については、頂上部の北地区や南地区で減少する一方、南東尾根でまとまりを見せ(居住区C)、さらに北東地区南では大型の竪穴建物(SI1)が終末期(4期)に出現し、その後、竪穴建物(SI465)が続く(居住区D)。大型の竪穴建物(SI1)は炉跡や貯蔵穴が存在しないことから居住以外の用途が想定され、支柱6本の多柱構造である点や排水溝を伴う構造などから、西方の拠点集落との関連性が示唆される(本章第1節B)。

ちなみに、SI1出土のヤリガンナ(図版36-1)は、現時点で新潟県内では3例目(後生山遺跡の鉄器がヤリガンナであった場合は4例目)で、弥生時代のヤリガンナとしては日本海側最北の事例である(第21表)。

竪穴建物SI1やSI465出土の土器の系統を見ると、大半が北陸系土器で、東北系土器あるいは折衷土器(八幡山式土器)は非常に少ない。北陸系土器と東北系土器、折衷土器の比率が拮抗していた後期後半の様相とは大きく異なることがうかがえる。

また、終末期(5期)には中部高地系の櫛描文土器〔相田・渡邊ほか2014〕が出土しているほか、古津八幡山遺跡の南約300mに位置する居村C遺跡D地点において、標高約20mの山頂平坦面の土坑2基から羽状縄文を施した土器が出土しており、東北北部との関係もあったことが分かる〔渡邊・立木ほか2001〕。

墳墓については、北東地区北で竪穴建物が見られなくなる一方、前段階の方形周溝墓(SZ743)に続いて墓域が形成されていったと考えられる(本章第1節A・第2節A)。当該期に古津八幡山遺跡では居住域と墓域とを意識的に分けした可能性がある。北東地区北の墓域がどこまで拮がりをもって形成されているのか、さらには別の尾根に居住域や墓域が存在しないのか、などは今後の調査でさらに確認していく必要がある。

北地区では遺跡最高所において前方後方形周溝墓(SX03S14)が築かれている。出土土器に限られるため詳細



第34図 弥生時代後期末・終末期(3~6期)の遺構図

第21表 県内における弥生時代の鉄器一覧(遺跡番号は第35図に対応〔滝沢2015〕・〔森2019〕をもとに作成)

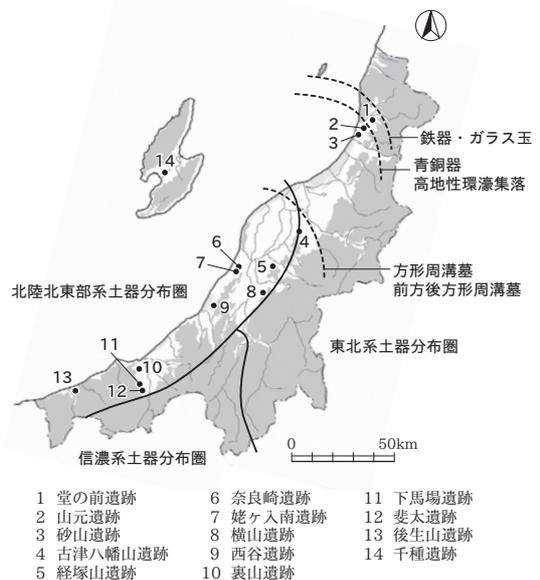
遺跡名	鉄器									計	青銅器	備考
	鎌	鋤先	針状	斧	剣	刀子	ヤリガンナ	鏝・鏝	不明・他			
1 堂の前遺跡								1		1		竪穴建物SI318
2 山元遺跡					1					1	○	埋設土器内
3 砂山遺跡										2		
4 古津八幡山遺跡	2				1		1			4		鉄剣：方形周溝墓(SX1005)、鉄鎌：竪穴建物(SI0804・SI728)、ヤリガンナ：大型の竪穴建物(SI1)
5 経塚山遺跡				1						1		3号住居址
6 奈良崎遺跡						1				4		弧状をなす不明品のみ竪穴出土
7 姥ヶ入南遺跡				1	1					2		周溝墓主体部
8 横山遺跡										1		
9 西谷遺跡										1		環濠内
10 裏山遺跡	3	6					1			11		鋤先1点を除き包含層
11 下馬場遺跡	1		9				1			3	14	針状鉄製品は13号竪穴
12 妻太遺跡	2					1				4	7	鎌は土坑墓上層、他は竪穴建物
13 後生山遺跡										1	1	1号住居址、ヤリガンナもしくは鉄鎌
14 千種遺跡					1					1	1	報告では刀子
合計	8	6	9	2	4	2	3		17	51		

な築造時期は不明であるが、弥生時代後期前半から方形周溝墓を築いていた古津八幡山遺跡においては、前方後方形という新たな墳墓形式といえ、当遺跡の中で最も新しい段階の墳墓と推測される。古津八幡山遺跡出土土器の下限を考慮し、当該期の墳墓とみておきたい。

以上、当該期は本遺跡において環濠の機能が低下するとともに、居住域や墓域などの分布が大きく変化したことが見て取れる。また、前述のとおり東北系土器及び折衷土器の比率が急減する時期でもある。さらに、北東地区北において方形周溝墓 (SZ743) 以降墓域が形成され、終末期 (4期) には大型の竪穴建物 (SI1) が出現するなど、古津八幡山遺跡を取り巻く内外の状況が大きく変化していたことが推察される。

なお、北東地区で確認された遺構や遺物をみると、方形周溝墓 (SZ743) における複数埋葬や木槨構造の埋葬施設、大型竪穴建物 (SI1) における多柱構造や中央土坑、排水溝といった建物構造、SI1 出土のヤリガンナや SI728 出土の鉄鎌、SI1 や SZ743 出土のガラス小玉などのように、西方との関連性がうかがえる遺構や遺物が比較的目立つ点は留意される。北東地区で大型建物を建てたり、墓域を形成したりした集団は、北地区などの丘陵頂上部で生活していた集団とは別の系統の集団である可能性もあるかもしれない。今後の検討課題である。

さて、現状において新潟県北部は弥生時代における高地性集落や環濠集落、方形周溝墓、前方後方形周溝墓、さらに遺物においてはガラス玉や鉄器、青銅器の分布の日本海側における北限に位置している。このうち、古津八幡山遺跡は方形周溝墓や前方後方形周溝墓といった墳墓形式の北限になっている。また、古津八幡山遺跡ではガラス玉や鉄器も出土しており、それらいわゆる西方もしくは半島由来の遺構・遺物がセットになって確認できる北限の遺跡といえる。古津八幡山遺跡が北陸北東部系土器分布圏の境界域に位置することがその背景としてあろう (第 35 図)。古津八幡山遺跡から北東約 65km の東北系土器分布圏に位置する村上市の山元遺跡は日本海側北限の高地性環濠集落であるが、墓はいずれも土坑墓で、環濠の規模は幅・深さともに小さく、古津八幡山遺跡と異なる点が多い (第 35・36 図)。



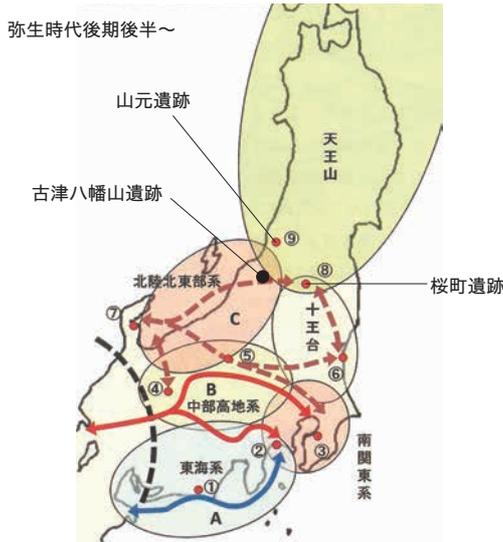
第 35 図 県内の弥生時代鉄器出土遺跡及び要素別境界ライン (土器分布圏とその境界は〔滝沢 2009〕による)

以上見てきたように、古津八幡山遺跡は日本海側における高地性環濠集落の北限域に位置し、北陸北東部系土器と東北系土器、それらの折衷土器が一定量出土し、また方形周溝墓 (SZ743) の木槨構造の埋葬施設に加え、出土したガラス玉や鉄製品、石鎌、さらには竪穴建物の構造などは、東西・南北のモノや情報が交差する本遺跡の特徴をよく示す遺構・遺物といえる。

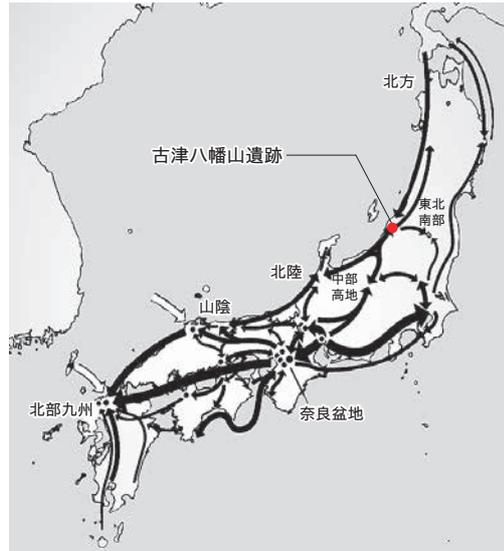
古津八幡山遺跡は、日本海から阿賀野川水系を利用して内陸、とりわけ会津方面へ抜ける際の要衝に位置しており、また、新津・東山丘陵や信濃川をはじめとする大小河川による交通網により、各地域との多角的な交流が可能な場所に位置していたと考えられる。このような地勢的優位性が、弥生時代に古津八幡山遺跡の集団が力をつけ、さらには古墳時代に県内最大の古墳である古津八幡山古墳を築造するに至った大きな要因といえよう¹⁾。

以上、弥生時代後期・終末期において、古津八幡山遺跡やその周辺は文化圏の境界エリアに位置し、地勢的な優位性を基盤として東西・南北をつなぐネットワークが交わる遺跡として、北陸あるいは関東・北信から西方由来の物や情報もたらされ、また、会津盆地をはじめとする東南北部との交流や、東北北部とのつながりも形成

1) 現在、古津八幡山遺跡や JR 新津駅が所在するエリア (旧新津市) は鉄道のまちとして著名で、新津駅は羽越本線 (終点秋田駅) と磐越西線 (終点いわき駅) の始発駅であるとともに、北陸や中部高地・関東などとつながる信越本線の主要な中継駅であるなど鉄道網の重要な結節駅となっている。時代は異なるものの、当地域の地勢的特徴を考えるうえで示唆に富む。



第36図 弥生時代後期の地域圏とネットワーク
〔西川 2019〕を一部改変

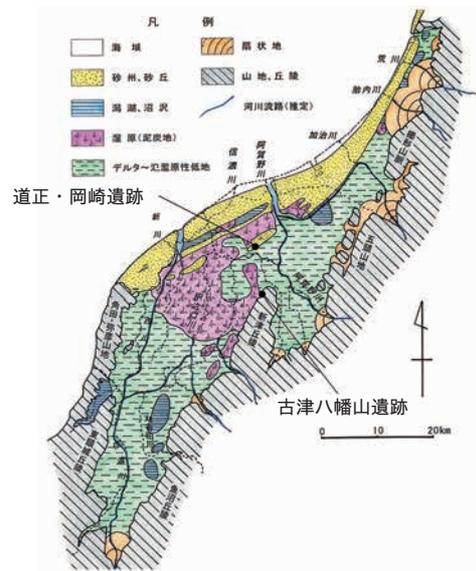


第37図 3世紀前半の人の動き
〔松木 2007〕を一部改変

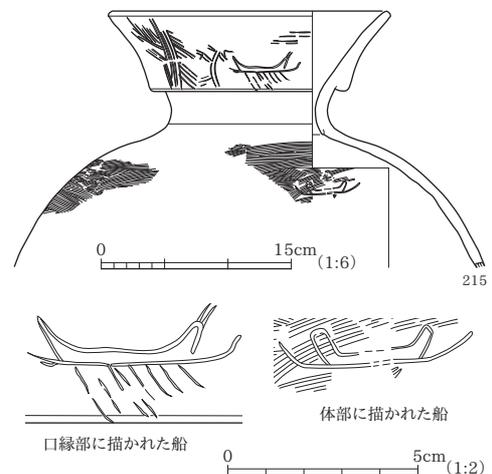
していたものと考えられる(第36・37図)。さらに、本書報告の木槨構造の埋葬施設や、大型竪穴建物の建物構造に見られるように、首長間交流によって比較的遠距離から日本海を經由してピンポイントでもたらされる場合もあったことが推察される。

なお、日本海と通じるラグーン(潟湖)の縁辺部に営まれた港湾性集落と考えられている新潟市の道正遺跡では、大型の準構造船など2隻の船が描かれた弥生時代終末期から古墳時代前期(新潟シンボ編年6・7期)の線刻土器が出土している(第38・39図)。また、隣接する岡崎遺跡からは弥生時代後期の土器も出土している。道正遺跡・岡崎遺跡は日本海から古津八幡山遺跡へと至る際の経路近辺に位置する遺跡と推測するが、道正遺跡の線刻土器は当時の海上及び内水面交通による活発な往来をうかがわせる。

さて、弥生時代後期から終末期にかけて会津盆地では北陸北東部系の土器が増加し、その後、竪穴建物や墳墓形態の類似性も含めて、北陸からの移住があった可能性も論じられている。また、北陸北東部の中でもとりわけ能登・越中の様相に近いとの指摘がある〔青山 2008・2013、阿部 1989、小黒 2009、川村 1993、坂井・川村 1993、滝沢 2013、田嶋 1994、辻 1994a・b・2008、福田 2011・2013など〕。日本海と会津盆地をつなぐ要衝に位置する古津八幡山遺跡の集団は、古墳出現前夜の激動の社会情勢の中において、どの地域や首長らと関係性をもち、どのような立場・役割を担っていたのだろうか。本書報告の調査結果を含め、古津八幡山遺跡の遺構や遺物の内容、変遷などが徐々に明らかになってきた。今後の重要な課題である。



第38図 約2000年前の越後平野の古地理図と道正遺跡・岡崎遺跡
〔鴨井・安井 2004〕を一部改変



第39図 道正遺跡の線刻土器〔奈良・相田ほか 2024〕

要 約

- 1 古津八幡山遺跡は新潟市秋葉区（旧新津市）古津・金津に所在する。最高所の標高は 54.5m であるが、本書で報告する北東地区の尾根は標高約 20～25m を測る。
- 2 磐越自動車道建設の土取りに先立つ試掘調査によって昭和 62（1987）年に発見された遺跡である。平成 17（2005）年に国史跡に指定（平成 23（2011）年に追加指定）され、現在、遺跡の主要部分は史跡公園として公開しており、環濠や竪穴建物、古墳などが復元整備されている。
- 3 本書で報告する第 20～25 次調査は、平成 29（2017）年に策定された「国史跡 古津八幡山遺跡保存活用計画」に則り、平成 29 年度から令和 4 年度にかけて実施した保存目的の遺跡範囲内容確認調査である。なお、調査場所はいずれも史跡指定地外に位置する。
- 4 調査の結果、弥生時代後期・終末期の遺構・遺物を確認したほか、縄文時代早期と後期、中・近世の遺構・遺物、平安時代の遺物を確認した。
- 5 遺構として竪穴建物 6 棟、掘立柱建物 1 棟、方形周溝墓 2 基、土坑 17 基、溝 115 条、性格不明遺構 24 基、ピット 487 基などを確認した。遺跡で最大となる弥生時代の大型の竪穴建物（SI1）や、4 基の埋葬施設を持ち、うち 1 基が木槨構造の埋葬施設と考える方形周溝墓（SZ743）などの弥生時代の重要遺構が検出され、弥生時代の遺構・遺物が史跡指定地外へ拡がることを確認した。
- 6 本書報告の調査により、北東地区南は弥生時代後期・終末期に主に居住域として、北東地区北は弥生時代後期後半には居住域と一部墓域、終末期には墓域として利用されていたことが判明した。
- 7 方形周溝墓（SZ743）は、長軸約 10m・短軸約 8.8m で、古津八幡山遺跡の方形周溝墓の中では最大である。内部では 4 基の埋葬施設が確認され、東日本の弥生時代の墳墓としては希少な複数埋葬事例といえる。時期は出土土器や放射性炭素年代測定などから、弥生時代後期後半を中心とする時期（本書 1～3 期頃）と推測する。

中心的な埋葬施設である埋葬部 1 は、東日本における弥生時代の墳墓の中では基本的に認められない木槨構造の埋葬施設を採用していると考えられ、西方の拠点集落・有力者層とのネットワークを背景に、日本海を経由してピンポイントで本遺跡へもたらされたと推察される。
- 8 一辺 9.6m の弥生時代終末期の大型竪穴建物（SI1）は、6 基の支柱穴を有し、中央土坑や排水溝を伴う点など、他の竪穴建物とは異質な構造である。炉や貯蔵穴を持たない点も含め、居住以外の用途で利用した可能性が考えられるとともに、西方の拠点集落・有力者層との関連が推測される。
- 9 弥生時代の遺物は弥生時代終末期の北陸系土器が主体で、弥生時代後期後半の北陸系土器のほかに東北系土器・折衷土器が少量確認されている。時期は本書 2 期～4 期（新潟シンボ編年 2 期～4 期）が主体をなす。
- 10 古津八幡山遺跡は日本海側における高地性環濠集落の北限域に位置する。方形周溝墓（SZ743）の木槨構造の埋葬施設に加え、出土した鉄器やガラス玉、石鏃、さらには竪穴建物（SI1）の構造などは、東西・南北のモノや情報が交差する境界域、結節点としての本遺跡の特徴をよく示す遺構・遺物といえる。
- 11 縄文時代早期後半の土器が小ピット（P3）から出土した。古津八幡山遺跡ではこれまでに確認されていなかった時期の資料である。新潟市内で最も古い土器であり注目される。
- 12 江戸末期～明治時代の火葬土坑墓（SK384）が 1 基確認された。他にも近世～近現代の墓と推測される土坑が複数基確認されており、調査地周辺が近世～近現代において墓地として利用されていたことが判明した。
- 13 丘陵帯は太平洋戦争前後を中心に畑地として利用されており、これまでの調査でも畑の痕跡や畑地造成による切り盛りの状況などが確認・報告されている。

本書報告の北東地区の調査においても畑の畝の痕跡が溝として多数検出されており、場所によっては当時の畑地の境界などを推定できる。

引用・参考文献

- ア 相澤 央 2012a 「第三編 古代・中世 第一章 古代の東蒲原郡 第三節 越後国と陸奥国の成立」『東蒲原郡史 通史編 1 自然・原始・古代・中世・近世』東蒲原郡史編さん委員会
- 相澤 央 2012b 「第三編 古代・中世 第一章 古代の東蒲原郡 第四節 律令制下の東蒲原」『東蒲原郡史 通史編 1 自然・原始・古代・中世・近世』東蒲原郡史編さん委員会
- 相澤 央 2015 「第七章 総括 第2節 遺物 B 墨書土器」『下新田遺跡 第6・8・9次調査』新潟市教育委員会
- 相田泰臣 2015 「V 研究活動 一資料紹介・研究ノート等 3 新潟市秋葉区舟戸遺跡出土遺物」『新潟市文化財センター年報』第2号 新潟市文化財センター
- 相田泰臣 2019 「新潟市 古津八幡山遺跡」『新潟県考古学会 第31回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 相田泰臣 2023 「新潟市古津八幡山遺跡の調査」『新潟県考古学会 第35回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 相田泰臣・渡邊朋和ほか 2014 『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書 一第15・16・17・18・19次調査一』新潟市教育委員会
- 相田泰臣ほか 2015 『大沢谷内遺跡Ⅳ 第19・20・21次調査』新潟市教育委員会
- 相田泰臣ほか 2020 『大沢谷内遺跡Ⅵ 第15・17・19次調査』新潟市教育委員会
- 会津坂下町教育委員会編 2023 『会津坂下町文化財報告書第7集 令和4年度 埋蔵文化財センター企画展「杵ガ森古墳と稲荷塚遺跡」講演会『北越からみた弥生時代後期～終末期の会津 一史跡古津八幡山遺跡の調査成果から一』報告書』
- 青木 学・内田 仁ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集 中曽根遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青山博樹 2005 「会津における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 青山博樹 2013 「桜町遺跡をどう考えるか」『東北南部における弥生後期から古墳出現前夜の社会変動 一福島県湯川村桜町遺跡資料見学・検討会 一 予稿集』弥生時代研究会
- 青山博樹 2015 「古墳出現期の列島東北部」『倭国の形成と東北』吉川弘文館
- 青山博樹 2022 「天王山式期をめぐる諸変動」『月刊考古学ジャーナル』No.776 特集 弥生後期の東北 (株)ニューサイエンス社
- 青山博樹 2024 「東北南部の様相」『東日本における土器からみた古墳社会の成立』東日本古墳確立期土器検討会
- 阿部朝衛 1979 「1 石鏃」『北海道亀田郡七館町峠下縄文時代遺跡出土資料 聖山 一考古学資料 別冊2一』東北大学文学部考古学研究会
- 阿部朝衛 1989 「土器からみた東北地方古墳成立期の様相」『帝京史学』第4号 帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛 1995 「新潟県北部地域における石器材料の調査」『帝京史学』第10号 帝京大学文学部史学科
- 阿部朝衛 1997 「新潟県北部地域における縄文時代の石材使用とその背景」『帝京史学』第12号 帝京大学文学部史学科
- 甘粕 健 1994 「東日本における古墳の出現 一みちのくをめざして一」『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 甘粕 健・荒木勇次 1994 「II 考古資料 3 遺跡と遺物 大沢遺跡 B' 地区」『巻町史 資料編 1 考古』巻町
- 甘粕 健・小野 昭ほか 1982 『大沢遺跡』II 新潟大学考古学研究室
- 甘粕 健・小野 昭・川村浩司ほか 1993 『越後山谷古墳』新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
- 甘粕 健・川村浩司ほか 1992 『古津八幡山古墳Ⅰ 1991年測量調査報告』新潟市教育委員会
- 甘粕 健・古川知明ほか 1981 『大沢遺跡 B'・B地区の調査概報』巻町・湯東村教育委員会
- 荒川隆史 2004 「第四章 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- イ 石川日出志 1996 「安田町六野瀬遺跡の縄文時代晩期末石器群の検討から」『北越考古学』第7号 北越考古学研究会
- 石川日出志 2004 「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 石川日出志 2013a 「天王山式土器研究の諸課題」『東北南部における弥生後期から古墳出現前夜の社会変動 一福島県湯川村桜町遺跡資料見学・検討会 一 予稿集』弥生時代研究会
- 石川日出志 2013b 「弥生時代の新潟県域」『弥生時代の新潟』新潟県立歴史博物館

- 石川日出志 2021 「企画展 2 関連講演会（第 1 回）東日本における弥生時代後期の交流」『令和 2 年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館企画展関連講演会記録集』新潟市文化財センター
- 石川日出志 2022 「総論 弥生時代後期の東北 -天王山式土器とその前後-」『月刊考古学ジャーナル』No.776 特集 弥生後期の東北（株）ニューサイエンス社
- 石川博行ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 213 集 堂の前遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石黒立人 2009 「四隅切れ方形周溝墓原論」『方形周溝墓の埋葬原理』福井県鯖江市教育委員会
- 石黒立人 2019 「『地域・間』関係を考えるために '19」『弥生時代における東西交流の実態 -広域的な連動性を問う-』西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会合同シンポジウム実行委員会
- 今井さやかほか 2021 『秋葉遺跡 第 13 次調査』新潟市教育委員会
- エ 遠藤恭雄ほか 2014 『沖ノ羽遺跡Ⅴ 第 18・19 次調査』新潟市教育委員会
- 遠藤恭雄ほか 2018 『大沢谷内遺跡Ⅴ 第 25 次調査』新潟市教育委員会
- オ 大賀克彦 2002 「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
- 大賀克彦 2003 「紀元三世紀のシナリオ」『風卷神山古墳群』清水町教育委員会
- 大賀克彦 2010 「ルリを纏った貴人 -連鎖なき遠距離交易と「首長」の誕生-」『福井市立郷土歴史博物館研究報告 小羽山墳墓群の研究 -研究編-』福井市立郷土歴史博物館
- 大賀克彦 2016 「第七章 各論 2 城の山古墳出土玉類の考古学的検討」『胎内市埋蔵文化財調査報告書第 26 集 城の山古墳発掘調査報告書（4～9 次調査）』胎内市教育委員会
- 大賀克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしへの河をのぼる 古川登さん退職記念献呈考古学文集』『いにしへの河をのぼる』製作委員会
- 大賀克彦・田村朋美 2016 「日本列島出土カリガラスの考古学的研究」『古代学』第 8 号 奈良女子大学古代学学術研究センター
- 大森 勉 1986 『後生山遺跡 新潟県糸魚川市後生山遺跡発掘調査概報』糸魚川市教育委員会
- 岡林孝作 2018 『古墳時代棺槨の構造と系譜』（株）同成社
- 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究』7 道具と技術 雄山閣出版
- 小熊博史 2019 「第 2 章 縄文時代 第 2 節 土器 第 2 項 早期」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学
- 小黑智久 2008 「越中の様相 -四隅突出型墳丘墓から前方後方墳へ-」『「婦負のクニ」成立のころ -四隅突出型墳丘墓から前方後方墳へ-』富山市教育委員会
- 小黑智久 2023 『コシの古墳と地域社会』（株）雄山閣
- 尾崎高宏 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 152 集 下馬場遺跡・細田遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子・穴澤義功ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 158 集 越巻 4 号塚 谷地製鉄跡 大慶寺御経塚』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野 昭 1982 『大沢遺跡・Ⅱ 第 3 次調査概報』新潟大学考古学研究室
- カ 春日真実ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 76 集 江内遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 116 集 奈良崎遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・坂上有紀ほか 2014 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 249 集 大武遺跡（古代～縄文編）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 「第 5 章 遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集 和泉 A 遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学・石田守之 2000 「第四章 遺物 4 石器・石製品 A 縄文時代・弥生時代（3）ガラス小玉」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 96 集 裏山遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤由美子・岡本郁栄・小池勝典・白井雅明 2012 「若月正光氏寄贈 諏訪田遺跡出土品について（前編）」『長岡市立科学博物館研究報告』第 47 号 長岡市立科学博物館
- 加藤由美子・岡本郁栄・小池勝典・白井雅明 2013 「若月正光氏寄贈 諏訪田遺跡出土品について（後編）」『長岡市立科学博物館研究報告』第 48 号 長岡市立科学博物館

- 加藤由美子・西田泰民・降幡順子 2015 「諏訪田遺跡表採ガラス棒状製品の科学分析」『長岡市立科学博物館研究報告』第50号 長岡市立科学博物館
- 鹿取 渉 2015 「第VI章 まとめ 6 ガラス小玉について」『東沢遺跡』佐渡市世界遺産推進課・佐渡市教育委員会
- 鹿取 渉 2017 「第VII章 まとめ 1 蔵王遺跡の遺構について」『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』佐渡市世界遺産推進課・佐渡市教育委員会
- 鹿取 渉ほか 2015 『東沢遺跡』佐渡市世界遺産推進課・佐渡市教育委員会
- 鹿取 渉・滝沢規朗ほか 2017 『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』佐渡市世界遺産推進課・佐渡市教育委員会
- 金内 元・小村正之ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第210集 荒町南新田遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男・佐藤昭治ほか 1991 『山崎A遺跡発掘調査報告書』見附市教育委員会
- 金子正典 1999 『内野手遺跡・経塚山遺跡』新潟県三条市教育委員会
- 金田拓也 2014 「第三章 第3節 (1) 2) 石器」『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書 一第15・16・17・18・19次調査一』新潟市教育委員会
- 金田拓也ほか 2017 『舟戸遺跡II 第25次調査』新潟市教育委員会
- 鴨井幸彦・安井 賢 2004 「古地理図でたどる越後平野の生いたち」『土と基礎』52巻11号 地盤工学会
- 川上貞雄 1989 「第二編 考古 2 歴史時代の遺跡と遺物 一八 古津諏訪社前遺跡」『新津市史 資料編第一巻 原始・古代・中世』新津市
- 川上貞雄 1990 『大沢谷内遺跡発掘調査報告書』小須戸町文化財調査報告(2) 小須戸町教育委員会
- 川上貞雄 1994a 「第一編 考古資料 一五 大倉山遺跡」『五泉市史 資料編一 原始・古代・中世』五泉市
- 川上貞雄 1994b 「第一編 原始・古代・中世の田上郷 第一章 原始時代の田上 第四節 古墳の出現とエゾ塚古墳」『田上町史 通史編』田上町
- 川上貞雄 1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上貞雄 1996 『金津丘陵製鉄遺跡群 居村B・D地区』新津市教育委員会
- 川上貞雄・木村宗文ほか 2002 「第一章 原始・古代・中世の五泉郷」『五泉市史 通史編』五泉市
- 川上貞雄ほか 1981 『山崎須恵窯址』五泉市教育委員会
- 川上貞雄ほか 1983 『平遺跡緊急発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川上貞雄ほか 1987 『九ツ塚 緊急発掘調査報告書』小須戸町教育委員会
- 川村浩司 1993 「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第2号 環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 1994 「北陸北東部の古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 川村浩司 1996 「越の土器と古墳の展開」『古代王権と交流 3 越と古代の北陸』名著出版
- キ 木村宗文 1989 「第三編 文献二五〔郡・郷〕」『新津市史 資料編第一巻 原始・古代・中世』新津市
- 木村宗文 1993 「第一編 原始・古代・中世の新津 第二章 古代越後国と大和政権 第三節 越後国の成立と人々の生活 二 越後国の成立」『新津市史 資料編第一巻 原始・古代・中世』新津市
- 木村宗文・田村 裕ほか 1989 「第三編 文献 史料解説」『新津市史 資料編第一巻 原始・古代・中世』新津市
- ク 草間敬子・湯尾和広・野村忠司ほか 2013 『史跡 斐太遺跡群 釜蓋遺跡確認調査概要報告書1』上越市教育委員会
- コ 小池義人・野水 仁ほか 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 裏山遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄 1991 『新潟県上越市 中島廻り遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄 1979 『山畑遺跡』上越市教育委員会
- 小島幸雄 2002 「山畑遺跡」『上越市史』資料編2 考古 上越市
- 肥塚隆保・田村朋美 2009 「第VI章 化学分析 1 山元遺跡出土のガラス小玉について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2011 「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』566号 第一法規株式会社
- 小林昌二 1995 「原始古代中世 第三章 村と港と古代国会 第一節 国郡の形成」『新潟市史 通史編1 原始古代近世(上)』新潟市
- 駒形敏朗ほか 1987 『横山遺跡』長岡市教育委員会
- 駒形敏朗・鳥居美栄ほか 1999 『藤ヶ森遺跡』新潟県長岡市教育委員会
- 小山岳夫 2020 「第I部 研究発表 中部高地を介した弥生後期の交流 -「箱清水式」大地域型式圏を中心として-」『考古学リーダー27 弥生時代の東西交流 -広域的な運動性を考える-』(株)六一書房

- サ (財)石川県埋蔵文化財センター 2012 『平成24年度環日本海文化交流史調査研究集会 弥生時代の墓 発表要旨・資料集』
- 斎藤あや 2012 「弥生時代におけるガラス玉の流入～関東地方とその周辺を中心に～」『西相模考古』第21号 西相模考古学研究会
- 斎藤あや 2014 「関東地方における玉類の流通と画期 -ガラス小玉を中心に-」『西相模考古学研究会 記念シンポジウム資料集 久ヶ原・弥生町期の現在 -相模湾/東京湾の弥生後期の様相-』西相模考古学研究会
- 斎藤あや 2015 「第1部 研究発表とコメント 玉類の流通と変化の画期、財との関係性 -シンポジウムを終えて-」『考古学リーダー24 列島東部における弥生後期の変革 -久ヶ原・弥生町期の現在と未来-』(株)六一書房
- 斎藤寿一郎 1983 「第二編 幕藩社会の成立と郷土 第三章 小須戸の町立て 第三節 街道と宿駅 -矢代田宿・小須戸宿と街道」『小須戸町史』小須戸町役場
- 斉藤義信 1991a 「第三編 信仰と文化 第二章 民間小祠と信仰」『新津市史 資料編第六巻 民俗・文化財』新津市
- 斉藤義信 1991b 「第三編 信仰と文化 第三章 信仰的な講 第二節 参詣・登拝の講」『新津市史 資料編第六巻 民俗・文化財』新津市
- 坂井秀弥 1989 「新潟県新津市八幡山出土の古式土師器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ(研究代表者甘粕健)編
- 坂井秀弥・戸根与八郎ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡 下新町遺跡 子安遺跡』新潟県教育委員会
- 笹澤(諫山)えりか 2009 『中田遺跡 第2次調査』新潟市教育委員会
- 笹澤正史 2006 「第IV章 遺構と遺物 第4節 集落Ⅱ期(弥生中期後半～末)の遺構と遺物」『吹上遺跡』上越市教育委員会
- 笹澤正史 2013 「桜町遺跡の北陸系土器の編年的位置」『東北南部における弥生後期から古墳出現前夜の社会変動 -福島県湯川村桜町遺跡資料見学・検討会- 予稿集』弥生時代研究会
- 笹澤正史 2015 「分布圏北縁の動向 -新潟県内の高地性環濠集落の素描-」『《論集》環濠集落をめぐる諸問題2015』《環濠(壕)論集》刊行会
- 笹澤正史 2019 「第3章 弥生時代 第5節 生産と流通 第3項 玉の生産と流通」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 笹澤正史ほか 2006 『吹上遺跡』上越市教育委員会
- 笹澤正史・中村直人ほか 2007 『吹上遺跡範囲確認調査報告書』上越市教育委員会
- 笹澤正史・大平理恵ほか 2008 『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』上越市教育委員会
- 佐藤 慎 2005 『斐太歴史の里確認調査報告書』新井市教育委員会・斐太歴史の里調査団
- 佐藤 慎 2006 『斐太歴史の里確認調査報告書』Ⅱ 新井市教育委員会・斐太歴史の里調査団
- 佐藤 慎 2009 『斐太歴史の里確認調査報告書』Ⅳ 妙高市教育委員会
- 佐藤 慎ほか 2002 『斐太歴史の里確認調査概要報告書』斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会
- 佐藤 慎ほか 2003 『斐太歴史の里確認調査概要報告書』Ⅱ 斐太歴史の里調査団・新井市教育委員会
- 佐藤雅一・山本 克 1998 『津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町教育委員会
- 鯖江市教育委員会 2009 『方形周溝墓の埋葬原理』史跡 王山古墳群環境整備工事完成記念考古学研究フォーラム記録集
- 澤田 敦 2013 「第VII章 総括 2 山元遺跡出土ガラス小玉及び石器の顕微鏡観察」『山元遺跡』村上市教育委員会
- 沢田 敦 2019 「第3章 弥生時代 第5節 生産と流通 第1項 石器の生産」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- ス 菅沼 亘 1998 「第V章 1-B 石器」『笹山遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 鈴木郁夫 1989 「第一編 自然」『新津市史 資料編第一巻 原始・古代・中世』新津市
- 鈴木浩平 1993 「第一編 原始・古代・中世の新津 序章 郷土の自然 第一節 地形の概観」『新津市史 通史編・上巻』新津市
- 鈴木崇司 2022 「東日本における弥生時代の鉄器 -鉄器の製作・入手・消費からみる地域性-」『新潟県考古学会2022 秋季シンポジウム発表要旨』新潟県考古学会

- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識』Ⅲ 縄文土器 柏書房株式会社
- セ 関 雅之 1972 『滝ノ前遺跡 新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報』 村上市教育委員会
- タ 高橋浩二 2005 「北陸の弥生墳墓から古墳へ」『季刊考古学』第92号 雄山閣
- 高橋理彦・野村忠司 2010 『子安遺跡』 上越市教育委員会
- 高橋保雄 2005 「3 石器・石製品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第141集 北野遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2018 「3 石器類について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第271集 六反田南遺跡Ⅵ』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2024 「第Ⅳ章 第4節 E 石器」『道正遺跡 第2・3・4次調査 岡崎遺跡第4・5次調査』 新潟市教育委員会
- 高橋保雄ほか 2000 「3 石器」『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』 新潟県中郷村教育委員会
- 滝沢規朗 2005a 「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005b 「土器の分類と変遷 ーいわゆる北陸系を中心にー」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2009a 「新潟県の月影甕」『新潟県の考古学』Ⅱ 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2009b 「新潟県における弥生時代の建物について」『三面川流域の考古学』第7号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2009c 「第Ⅳ章 遺構 2 各説 A 平成17・18年度」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2009d 「第Ⅶ章 まとめ 1 出土遺物について B ガラス小玉について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2009e 「第Ⅶ章 まとめ 2 遺跡の動向について B 県内における高地性集落・環濠集落」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2010a 「古墳出現前後に盛行する中山南型式の高杯について ー北陸北東部固有の大型・有稜・身の浅い高杯についての一試論ー」『新潟考古』第21号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010b 「新潟県弥生後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2011a 「阿賀北における古墳時代前期の土器について(上)」『三面川流域の考古学』第9号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2011b 「C 石器・石製品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第224集 長割遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2012 「阿賀北における古墳時代前期の土器について(下)」『三面川流域の考古学』第10号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2013 「阿賀北における弥生時代後期の北陸系土器について」『三面川流域の考古学』第11号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2014 「特論 山形県内及び隣接地域の弥生時代研究の成果 V 新潟県北部の弥生時代」『弥生時代の山形』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料
- 滝沢規朗 2015a 「越後・佐渡における鉄器と青銅器 ー伝来の系譜と性格ー」『古代文化』第66巻第4号 古代学協会
- 滝沢規朗 2015b 「新潟県の月影甕 ー外来系甕の検討2ー」『新潟県の考古学』Ⅱ 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2015c 「第Ⅲ部 コラム集 7 越後・佐渡における弥生時代後期の土器・玉・鉄・青銅器」『考古学リーダー24 列島東部における弥生後期の変革 ー久ヶ原・弥生町期の現在と未来ー』(株)六一書房
- 滝沢規朗 2016 「企画展3 関連講演会 北陸と会津を結んだ? 古津八幡山遺跡 ー弥生時代後期の村・土器からさぐるー」『平成27年度 史跡 古津八幡山 弥生の丘展示館企画展関連講演会記録集』 新潟市文化財センター
- 滝沢規朗 2017 「第Ⅶ章 まとめ 5 金属製品・ガラス製品について C ガラス小玉について」『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』 佐渡市世界遺産推進課・佐渡市教育委員会
- 滝沢規朗 2024 「北陸北東部の様相」『東日本における土器からみた古墳社会の成立』 東日本古墳確立期土器検討会

- 滝沢規朗・澤田 敦^{ほか} 2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 竹田和夫 1989a 「第三編 文献九九・一〇〇 上杉玄清定実知行宛行状・長尾晴景副状」『新津市史 資料編第一卷 原始・古代・中世』新津市
- 竹田和夫 1989b 「第三編 文献一一七 三条同名同心家風給分御帳」『新津市史 資料編第一卷 原始・古代・中世』新津市
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1994 「北陸西部の古墳確立期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 田嶋明人 2006 「「白江式」再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房
- 田嶋明人 2007 「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2011 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その4)」『西相模考古』第20号 西相模考古学研究会
- 田嶋明人 2012 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その5)」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会
- 田嶋明人 2013 「4期の画期をめぐって」『東生』第2号 東日本古墳確立期土器検討会
- 龍田優子^{ほか} 2015 『下新田遺跡 第6・8・9次調査』新潟県教育委員会
- 龍田優子^{ほか} 2023 『程島館跡 第7・9次調査』新潟県教育委員会
- 田中 靖 1985 「東山丘陵西麓採集の弥生時代及び古墳時代の遺物」『三条考古学研究会機関誌』第3号 三条考古学研究会
- 田中 靖 1989 「島崎川流域における弥生時代の遺跡」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 田中 靖 1996a 「原始・古代編 第三章 弥生時代の和島村 第二節 遺跡と遺物 第二項 上桐神社裏遺跡」『和島村史 資料編Ⅰ 自然 原始・古代・中世 文化財』和島村
- 田中 靖 1996b 「原始・古代編 第三章 弥生時代の和島村 第二節 遺跡と遺物 第三項 大平遺跡」『和島村史 資料編Ⅰ 自然 原始・古代・中世 文化財』和島村
- 田中 靖・安藤正美^{ほか} 1988 『耳取遺跡等範囲確認調査報告書』見附市教育委員会
- 谷澤亜里 2019 「玉から弥生・古墳時代を考える」『考古学講義』ちくま新書1406 (株)筑摩書房
- 谷澤亜里 2020 「考古学は何を明らかにしていくのか 生産と流通を考える 弥生時代」『季刊考古学』第150号 (株)雄山閣
- 谷澤亜里 2023 「弥生時代のガラス製玉類」『九州考古学の最前線Ⅰ 縄文～古墳編 季刊考古学・別冊』43 (株)雄山閣
- 田村浩司・細野高伯^{ほか} 2008 『古津川遺跡』三条市教育委員会
- 田村朋美 2015a 「第Ⅴ章 自然科学分析 2 東沢遺跡出土ガラス製遺物の自然科学的調査」『東沢遺跡』佐渡市世界遺産推進課・佐渡市教育委員会
- 田村朋美 2015b 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』第95号 物質文化研究会
- 田村朋美 2019 「Ⅳ 自然科学分析 2 西岩野遺跡出土のガラス小玉の分析」『西岩野2』柏崎市教育委員会
- 田村朋美 2024 「ガラスの考古学」『文化財科学』第88号 日本文化財科学会誌
- 田村朋美・谷澤亜里・中村大介 2024 「第5章 長野県木島平村根塚遺跡出土遺物の理科学的分析」『璽印・ガラス・鉄器からみた西暦1～3世紀 日本列島・東アジアの広域交流の重要性 研究成果報告書』明治大学文学部考古学研究室 明治大学日本古代学研究所
- 田村 裕 1989a 「第三編 文献四三 城長茂・新津四郎等誅さる」『新津市史 資料編第一卷 原始・古代・中世』新津市
- 田村 裕 1989b 「第三編 文献五三 金津資義等、北陸道大將軍北条朝時に従軍す」『新津市史 資料編第一卷 原始・古代・中世』新津市
- 田村 裕 1989c 「第三編 文献六四 羽黒義成軍忠状写」『新津市史 資料編第一卷 原始・古代・中世』新津市
- 田村 裕 1989d 「第三編 文献八二 蒲原郡段銭帳」『新津市史 資料編第一卷 原始・古代・中世』新津市
- 田村 裕 1993 「第一編 原始・古代・中世の新津 第三章 荘・保と武士の世 第一節 新津市周辺の保と荘園」『新津市史 通史編・上巻』新津市
- 丹 俊詩 2019 「第Ⅶ章 まとめ 2 遺構・遺物について」『西岩野2』柏崎市教育委員会
- ツ 立木宏明 2001 「3 八幡山遺跡の石器について」『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会

- 立木宏明 2004 「第IV章 4 遺物 B2) 石器・石製品」『八幡山遺跡群発掘調査報告書 ー第11・12・13・14次調査』新津市教育委員会
- 立木宏明 2014 「第3節 細池寺道上遺跡の軽石製石製品について」『細池寺道上遺跡Ⅲ 第26次調査』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2004 『愛宕澤遺跡発掘調査法古書』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2008 『沖ノ羽遺跡Ⅳ 第15次調査』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2021 『細池寺道上遺跡Ⅹ 第29・31次調査』新潟市教育委員会
- 立木宏明ほか 2023 『原遺跡 第10・11次調査』新潟市教育委員会
- 辻 秀人 1994a 「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 辻 秀人 1994b 「東北南部における古墳出現期の土器編年 ーその1 会津盆地ー」『東北学院大学論集』第26巻 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年 ーその2 ー」『東北学院大学論集』第27巻 東北学院大学学術研究会
- 辻 秀人 1996 「蝦夷と呼ばれた社会」『古代蝦夷の世界と交流』古代王権と交流1 名著出版
- 辻 秀人 1998 「列島における東北世界の成立」『歴史の中の東北』河出書房新社
- 辻 秀人 2001 「東北の弥生土器と土師器」『アジア文化史研究』第1号 東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻
- 辻 秀人 2008 「倭国周縁域と大和王権 ー東北地方を中心としてー」『百済と倭国』高志書院
- 辻 秀人 2016 「東北日本周縁域の古墳成立過程 ー城の山古墳と大塚森古墳ー」『城の山古墳発掘調査報告書(4～9次調査)』胎内市教育委員会
- テ 寺村光晴 1966 『国学院大学考古学研究報告第三冊 古代玉作の研究』(株)吉川弘文館
- 寺村光晴・土田孝雄ほか 1978 『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴・久我 勇ほか 1991 「第五章 京田・諏訪田遺跡」『寺泊町史 資料編1 原始・古代・中世』寺泊町
- ト 戸根与八郎ほか 1974 『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』新潟県教育委員会
- 戸根与八郎・坂井秀弥ほか 1989 「総合運動公園計画(仮称)に伴う遺跡確認調査」『新津市史 資料編 第一巻 原始・古代・中世』新津市
- 土橋由理子・加藤 学 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第165集 馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 豊島直博 2010 「第I部 鉄製武器の分類と編年 第1章 弥生時代の鉄製武器 第2節 弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『鉄製武器の流通と初期国家形成』(株)塙書房
- 鳥居美栄・駒形敏朗ほか 2001 『五斗田遺跡』長岡市教育委員会
- ナ 長岡市 1992a 「第三章 長岡の遺跡と遺物 第三節 弥生時代の遺跡と遺物 横山遺跡」『長岡市史 資料編1 考古』長岡市
- 長岡市 1992b 「第三章 長岡の遺跡と遺物 第三節 弥生時代の遺跡と遺物 原山遺跡」『長岡市史 資料編1 考古』長岡市
- 中川晃子 2018 「新潟県における周溝を持つ建物の分類と変遷 ー竪穴建物との比較からー」『新潟考古』第29号 新潟県考古学会
- 中川成夫・倉田芳郎 1956 『新津田家七本松須志器窯跡発掘調査報告書』北方文化博物館
- 中島栄一ほか 1976 『中店遺跡』田上町教育委員会
- 中島義人・丹 俊詞ほか 2019 『西岩野2』柏崎市教育委員会
- 中村五郎 1997 「初期ヤマト政権と東日本」『古代学研究』137 古代学研究会
- 中村直人ほか 2008 『釜蓋遺跡範囲確認調査概要報告書』上越市教育委員会
- 中村直人・湯尾和広 2010 『今泉釜蓋遺跡』上越市教育委員会
- 奈良佳子・相田泰臣ほか 2024 『道正遺跡第2・3・4次調査 岡崎遺跡第4・5次調査』新潟市教育委員会
- ニ 新潟県 2000 『新潟県地質図(2000年版)・新潟県地質図説明書(2000年版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 新潟県考古学会 2005 『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 新潟市 2007 『新新潟歴史双書2 新潟市の遺跡』
- 新潟市 2008 『新新潟歴史双書3 石油王国・新潟』
- 新潟市文化財センター 2013 『シンポジウム 蒲原平野の王墓 古津八幡山古墳を考える』新潟市文化財センター

- 新潟市文化財センター 2018 『平成 29 年度 新潟市遺跡発掘調査速報会』 新潟市文化財センター
- 新潟市文化財センター 2019 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2018』 新潟市文化財センター
- 新潟市文化財センター 2020 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2019』 新潟市文化財センター
- 新潟市文化財センター 2021 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2020』 新潟市文化財センター
- 新潟市文化財センター 2022 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2021』 新潟市文化財センター
- 新潟市文化財センター 2023 『新潟市遺跡発掘調査速報会 2022』 新潟市文化財センター
- 新潟市文化スポーツ部歴史文化課 2017 『旧新津油田金津鉱場総合調査報告書』
- 新津市図書館 1979 「第一篇 旧金津村 第十一章 神社」『新津市誌 金津・小合・新関地区編』 新津市役所
- 西川修一 2016 「列島北縁の古墳時代前期のネットワーク」『城の山古墳発掘調査報告書（4～9次調査）』 胎内市教育委員会
- 西田泰民 2014 「日本海ガラスロード」『平成 25 年度越後国域確定 1300 年記念事業記録集』 新潟県教育委員会
- 西田泰民・宮尾 享ほか 2013 『平成 25 年度夏季企画展 弥生時代のいがた』 新潟県立歴史博物館
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『東日本における古墳出現過程の再検討』
- ノ 野田豊文 2011 「弥生時代後期の会津地域と砂山式 - 福島県会津地域桜町遺跡出土土器群の検討から -」『新潟考古』第 22 号 新潟県考古学会
- 野田豊文 2015 「新潟県内の弥生時代後期東北系土器群像」『新潟県の考古学』Ⅱ 新潟県考古学会
- 野田豊文 2019 「第 3 章 弥生時代 第 2 節 土器 第 3 項 後期 1 天王山式土器」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 野村忠司・角張淳一ほか 2009 『子安遺跡』 上越市教育委員会
- ハ 橋詰 淳・永瀬史人・宮尾 享 2024 『珠玉の国 新潟 ヒスイ、青玉、赤玉』 新潟県
- 橋本博文 1997 「北陸における鉄器の普及と展開」『東日本における鉄器文化の受容と展開』 鉄器文化研究会
- 橋本博文 1999 「副葬品」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 橋本博文 2004 「3 世紀の越の建物と墓制」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 4 邪馬台国時代の越と大和 資料集』 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 橋本博文 2023 「講演 最近の新潟県における弥生～古墳時代の研究動向 - 古墳出現期とその後の展開 -」『新潟県考古学会第 35 回大会研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- 秦 昭繁 2001 「新潟県北部地域の石器石材環境 (2)」『北越考古学』第 12 号 北越考古学研究会
- 林 大智 2012 『小松市 千代・能美遺跡』 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
- 林 大智 2019 「企画展関連講演会 (第 3 回) 弥生の「鉄」がつなぐ日本海沿岸流域の交流」『平成 30 年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館企画展関連講座・講演会記録集』 新潟市文化財センター
- 林 大智 2023 「北陸の高地性集落と鉄製武器の普及 - 集落動態からの位置づけと鉄製武器の保有形態 -」『古代文化』第 74 巻第 4 号 古代学協会
- ヒ 樋口真己 2004 「中世 第二章 鎌倉期の白河荘 第一節 鎌倉権力の進出」『笹神村史 通史編』 笹神村
- 久田正弘・林 大智ほか 2002 『小松市 一針 B 遺跡・一針 C 遺跡』 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター
- 平吹 靖 2001 「3 縄文時代の石器」『十三本塚北』 柏崎市教育委員会
- 広井 造・小林隆幸 1992 「横山遺跡」『長岡市史 資料編 1』 長岡市
- フ 福島雅儀 2011 「第 3 章 まとめ 第 3 節 会津平における古墳時代のはじまり」『桜町遺跡 (2 次)』 福島県教育委員会・(財) 福島県文化振興事業団ほか
- 福島雅儀・福田秀生ほか 2011 『桜町遺跡 (2 次)』 福島県教育委員会・(財) 福島県文化振興事業団ほか
- 福田秀生 2011 「第 3 章 まとめ 第 1 節 弥生時代の遺物について」『桜町遺跡 (2 次)』 福島県教育委員会・(財) 福島県文化振興事業団ほか
- 福田秀生 2012 「桜町式土器におけるキメラ土器」『桜町遺跡 (2 次)』 福島県教育委員会・(財) 福島県文化振興事業団ほか
- 福田秀生 2013 「桜町遺跡の発掘調査成果」『東北南部における弥生時代後期から古墳出現前夜の社会変動 - 福島県湯川村桜町遺跡資料見学・検討会 - 予稿集』 弥生時代研究会
- 文化庁文化財部記念物課 2010 「第 VI 章 遺構の記録」『発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -』
- ホ 星野信明ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 80 集 沖ノ羽遺跡Ⅱ (B 地区)』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細野高伯ほか 2012 『大沢谷内遺跡Ⅱ 第 7・9・11・12・14 次調査』 新潟市教育委員会

- 本間信昭 1991 「第一章 縄文時代の遺跡と遺物 第二節 遺跡と遺物 第五項 山王遺跡」『寺泊町史 資料編1 原始・古代・中世』 寺泊町
- 本間嘉晴・関 雅之・本間信昭 1975 『浜田遺跡』 真野町教育委員会
- マ 前田清彦 2009 「方形周溝墓の造墓計画 ～群構成の歴史的意義～」『金大考古』第65号 金沢大学考古学研究室
- 前山精明 1999 「第3章 弥生時代・古墳時代 第2節 土器 第4項 続縄文」『新潟県の考古学』 高志書院
- 前山精明 2014 「Ⅱ 開発事前審査 2 平成23年度・24年度の事前審査に係る試掘確認調査の概要 (3) 秋葉遺跡 第9・10次調査」『新潟市文化財センター年報』第1号 新潟市文化財センター
- 前山精明 2018 「Ⅴ 研究活動 ー資料紹介・研究ノートなどー 1 秋葉区大野中遺跡出土の縄文時代遺物 ー阿賀野川低地に形成された遺跡の性格をめぐってー」『新潟市文化財センター年報』第5号 新潟市文化財センター
- 前山精明ほか 2010 『大沢谷内北遺跡 第3次調査』 新潟市教育委員会
- 前山精明ほか 2023 『平遺跡Ⅱ 第9次調査』 新潟市教育委員会
- 松木武彦 2007 『列島創世期』 小学館
- 松島悦子・山下 研 2010 『五千石遺跡 2区・4区西地区』 燕市教育委員会
- ミ 水澤幸一 2015 「蒲原平野の遺跡分布からみた潟と河川」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』 島根県古代文化センター
- 御嶽貞義 2010 「北陸地方の弥生墳丘墓における木槨について ー小羽山30号墓造営の歴史的意味ー」『福井市立郷土歴史博物館研究報告 小羽山墳墓群の研究 ー研究編ー』 福井市立郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会
- 宮田進一・伊藤 潔ほか 2006 『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- ム 村上章久・佐藤直美 2023 「C 石器・石製品」『土橋遺跡』 新潟県阿賀野市教育委員会
- モ 望月精司・津田隆志ほか 2004 『八里向山遺跡群』 小松市教育委員会
- 森 貴教 2019 「第3章 弥生時代 第5節 生産と流通 第5項 鉄器の受容と系譜」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 森 貴教 2020 「越後における弥生時代の鉄器化 ー砥石の分析からー」『新潟考古』第31号 新潟県考古学会
- 森 貴教ほか 2022 『新潟大学考古学研究室調査研究報告 21 上桐の神社裏遺跡 2 赤坂遺跡 1』 島崎川流域遺跡調査団
- ヤ 八重樫由美子 2004 『新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡発掘調査報告書』 寺泊町教育委員会
- 安 英樹 2008 「2 弥生集落の様相 ⑤ 北陸 高地性集落」『集落からよむ弥生社会』 (株)同成社
- 安田 稔・宮田安志ほか 2005 『荒屋敷遺跡 (4次) 桜町遺跡 (1次)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団ほか
- 安中哲徳・中江隆英 2024 「北陸南西部の様相」『東日本における土器からみた古墳社会の成立』 東日本古墳確立期土器検討会
- 八藤後智人 2005 「信濃川右岸 8 森田遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現 (第2分冊)』 新潟県考古学会
- 山上卓夫 1994 「第一編 原始・古代・中世の田上郷 第三章 戦乱の時代と護摩堂山 第二節 越後の内乱と護摩堂山」『田上町史 通史編』 田上町
- 山元 亮 2023 「列島東縁の高地性集落・高所立地集落の展開」『古代文化』第74巻第4号 古代学協会
- ユ 湯尾和広ほか 2015 『国指定史跡 斐太遺跡群 釜蓋遺跡確認調査概要報告書 2』 上越市教育委員会
- 湯尾和広・溝内淳介ほか 2021 『国指定史跡 斐太遺跡群 釜蓋遺跡確認調査概要報告書 (総括編 1)』 上越市教育委員会
- ヨ 横山勝栄・大森 勉ほか 1983 『内越遺跡』 新潟県教育委員会
- 吉井雅勇 2013a 「第七章 総括 3 遺跡について」『山元遺跡』 村上市教育委員会
- 吉井雅勇 2013b 「第七章 総括 4 山元遺跡の位置づけ ー発見の意義と今後の課題ー」『山元遺跡』 村上市教育委員会
- 吉井雅勇・野田豊文ほか 2013 『山元遺跡』 村上市教育委員会
- 吉田好孝 2010 「第七章 まとめ 1 遺物 D ガラス小玉」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第213集 堂の前遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ワ 渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会

- 渡邊朋和 2001 「第Ⅶ章 まとめ 1 弥生土器」『八幡山遺跡群発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡邊朋和 2004 「第Ⅵ章 まとめ」『八幡山遺跡群発掘調査報告書 ー第11・12・13・14次調査ー』新津市教育委員会
- 渡邊朋和 2005 「古津八幡山遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 渡邊朋和 2013 「新潟県における弥生時代後期の様相 ー古津八幡山遺跡を中心にー」『東北南部における弥生時代後期から古墳出現前夜の社会変動 ー福島県湯川村桜町遺跡資料見学・検討会ー 予稿集』弥生時代研究会
- 渡邊朋和 2015 「Ⅱ 開発事前審査 2 平成25年度の事前審査に係る試掘・確認調査の概要 (8) 塩辛遺跡 第7次調査」『新潟市文化財センター年報』第2号 新潟市文化財センター
- 渡邊朋和 2019 「第3章 弥生時代 第2節 土器 第3項 後期 2 天王山式土器以降」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 渡邊朋和 2021 「企画展2 関連講演会 (第2回) 天王山式土器からみた東日本の弥生社会 ー古津八幡山遺跡成立期の動向ー」『令和2年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館企画展関連講演会記録集』新潟市文化財センター
- 渡邊朋和 2022 「天王山式土器の系譜を読み解く試み」『月刊考古学ジャーナル』No.776 特集 弥生後期の東北 (株) ニューサイエンス社
- 渡邊朋和・相田泰臣 2013 『国史跡 古津八幡山遺跡保存整備事業報告書 ー2000年の時を越え よみがえる弥生の丘ー』新潟市教育委員会
- 渡邊朋和・穴澤義功ほか 1998 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 分析・考察編』新潟市教育委員会
- 渡邊朋和・小田由美子ほか 1997 『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』新潟市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明ほか 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』新潟市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明ほか 2002 『中谷内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』新潟市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明ほか 2004 『八幡山遺跡群発掘調査報告書 ー第11・12・13・14次調査ー』新潟市教育委員会
- 渡邊裕之・坂上有紀ほか 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第208集 立野大谷製鉄遺跡 姥ヶ入製鉄遺跡 姥ヶ入南遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 誠 1973 『縄文時代の漁業』雄山閣出版
- 藁科哲男 2001 「第Ⅵ章 八幡山遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析」『八幡山遺跡発掘調査報告書』新潟市教育委員会

別表1 遺構計測表

凡 例

- 遺構名 記載は、SI→SB→SZ→SK→SD→SX→Pの順で、その番号順である。ただし、竪穴建物(SI)を構成する壁溝や排水溝(SD)・土坑(SK)・柱穴(P)・方形周溝墓(SZ)を構成する周溝や排水溝(SD)・埋葬施設(SK)については、それぞれ竪穴建物(SI)・方形周溝墓(SZ)の中で記載している。
溝(SD)については第IV章第3節Bで記載しているものに限り掲載した。
また、性格不明遺構(SX)とピット(P)については、断面図や出土遺物を掲載しているもの、第IV章第3節Bで記載しているものに限り掲載した。
- 時代 なお、遺構図版No.・写真図版No.を明記し、索引としての役割をもたせてある。
遺構の帰属する時代は、出土遺物や覆土の特徴などから推定する大きな時代区分を示した。
詳細な時期については第IV・V・VII章を参照されたい。なお、判断できなかった遺構については空欄とした。
- 主軸方向 竪穴建物・掘立柱建物・方形周溝墓について示した。
- 規模 遺構の計測については第IV章第3節Aのとおりである。溝(SD)については長軸が長さで、短軸が幅である。なお、規模の()内数値は推定値である。
- 平・断面形態、堆積形状 完掘をせず半截までの遺構が大半を占めるが、その場合の平面形態については、プラン確認などで推定した形態を示した。
また、断面形態や堆積形状は、セクションライン上の形態・形状を基本とした。

竪穴建物(SI)

図面図版	写真図版	調査年次	トレンチ	遺構名	遺構		グリッド	時代	主軸方位	規模(m)			柱痕部分の底面標高(m)	柱痕幅(m)	形態		遺物		備考		
					種別	番号				長軸	短軸	深度			平面形	断面形	有無	遺物実測図番号			
																				上端	底面
14	4 6 7	20次 21次 22次 23次	IT	SI1		1T	41~46L, 39~48M, 38~49N, 40~49O, 40~48P, 42~46Q	弥生時代	N-30°-W	9.60	9.60	0.51	25.38	-	-	隅丸方形	弧状	○	図26-1~図28-69 図32-1~4, 6~9, 13, 16, 17, 19, 21~29, 31, 35~37 図33-38, 40, 44, 53, 54 図34-56~60, 62, 65, 66, 68, 71 図35-73, 76~79, 81~84, 86~92 図36-ガラス1~3 図36-鉄1	建て替え後の壁溝	
14	8 10	21次 22次 23次		SD	185	1T	41~46L, 39~40M, 38~39~49N, 48~49O, 40~42~45~48P, 42~46Q			-	0.12~ 0.50	0.18	25.36	-	-	-	半円状	○		建て替え後の壁溝	
14		21次 22次 23次		SD	186	1T	43~45L, 39~40M, 39N, 40O, 40~46P			-	0.18~ 0.32	0.11	25.45	-	-	-	弧状	○		建て替え前の壁溝	
14	8	22次 23次		SD	508	1T	45~49N			3.37	0.16~ 0.22	0.10	25.26	-	-	-	V字状	○		排水溝建物内	
14	8	23次		SD	651	1T	50~52N			2.80	0.20~ 0.35	0.05	25.16	-	-	-	弧状	○		排水溝建物外	
14	7	23次		SK	648	1T	45N			0.62	0.53 以上	0.48	24.91	-	-	円形	漏斗状	○		中央付近の土坑	
14	7	21次		P	194	1T	45~46O, 45~46P			0.61	0.45	0.68	24.75	24.75	0.110	楕円形	U字状	○		柱穴	
14	7	22次		P	507	1T	47~48N			0.63	0.54	0.44	24.95	24.95	0.35	楕円形	漏斗状	○		柱穴	
14	7	22次		P	511	1T	39~40N, 40O			0.70	0.68	0.53	25.00	25.00	0.30	-	台形状	○		柱穴	
14	7	22次		P	526	1T	45M			0.48	0.37	0.36	25.08	25.08	0.20	楕円形	台形状	○		柱穴	
14	7	22次		P	527	1T	42P			0.57	0.44	0.27	25.17	25.17	0.18	楕円形	台形状	○		柱穴	
14	7	23次		P	601	1T	41~42M			0.69	0.60	0.43	25.09	25.09	0.29	楕円形	漏斗状	○		柱穴	
19	12	22次	IT	SI401	SI	401	1T	58~60I, 58~60J, 58~60K, 58~60L	弥生時代	N-19°-E	6.22	2.10 以上	0.30	24.22	-	-	隅丸方形	-	○	図28-70~72 図33-42, 47, 49 図35-80, 85	
15	4 6 8 9 10	22次 23次	IT	SI465		1T	45~49L, 45~49M, 45~49N	弥生時代	N-45°-W	4.21	4.10	0.39	25.20	-	-	隅丸方形	弧状	○	図28-73~82 図32-11, 14, 30, 32, 33, 図33-52, 図34-63, 70		
15	10	20次 23次		SD	96	1T	45~48L, 45~48~49M, 45~49N			-	0.14~ 0.32	0.19	25.22	-	-	-	弧状	○		壁溝	
15	8 10	23次		SD	616	1T	48M, 48~50N			2.26 以上	0.12~ 0.18	0.06	25.25	-	-	-	弧状			排水溝	
15	9	23次		SK	603	1T	45~46L, 46M			1.00	0.70 以上	0.36	25.04	-	-	-	V字状	○		貯蔵穴	
15	9	22次 23次		P	494	1T	48M			0.39	0.39	0.45	24.87	24.87	0.20	円形	U字状	○		柱穴	
15	9	23次		P	605	1T	47L			0.24	0.23	0.56	24.79	24.79	0.23	円形	台形状	○		柱穴	
15	9	23次		P	606	1T	45M			0.28	0.25	0.47	24.84	24.84	0.21	円形	U字状	○		柱穴	
15	9	23次		P	607	1T	46N			0.44	0.41	0.52	24.84	24.84	0.27	円形	V字状	○		柱穴	
24	20 21	24次	5T5	SI728		5T	77~79A, 77~79B, 77~79C, 77~79D, 77~79E, 77~78F	弥生時代	N-13°-E	(5.00)	-	0.29	22.91	-	-	隅丸方形	弧状	○	図28-83~86 図33-55 図36-鉄2		
24	20	24次		SD	737	5T	79C, 78~79D, 77~78E, 77~78F			-	0.10~ 0.16	0.25	22.84	-	-	-	U字状	○		建て替え前の壁溝	
24	20 21	24次		SD	745	5T	78~80B, 79C, 79D, 78~79E, 77~78F			-	0.18~ 0.42	0.29	22.91	-	-	-	漏斗状	○		建て替え後の壁溝	
24	21	24次		P	735	5T	78B, 78C			0.37	0.25	0.34	22.47	22.47	0.30	楕円形	U字状	○		柱穴	
25	22	25次	9T2	SI802		9T	18~20A, 18~20B, 18~19C, 18~19D	弥生時代	-	(5.00)	-	0.25	24.04	-	-	円形	弧状	○	図28-87, 88		
25	22	25次		SD	803	9T	21A, 21B, 20~21C, 20~21D			-	0.28~ 0.42	0.19	24.13	-	-	-	半円状	○		周溝	
23	23	25次	11T 12T 13T	SI821		11T 12T 13T	9~10D, 6~13E, 6~14F, 6~14G, 8~15H, 8~15I 1~6A, 1~6B 2~3A, 2~4B, 2~4C	弥生時代	N-11°-W	(6.0)	-	-	-	-	-	隅丸方形	-	○	図28-89		
23	23 24	25次	11T 13T	SD	809	11T 13T	9~10D, 6~13E, 6~7~12~14F, 6~13~14G, 14~15H, 14~15I 2A, 2B			-	0.32~ 0.62	0.20	23.26	-	-	-	弧状	○		周溝	
23	23	25次	11T	P	811	11T	11H			0.31	0.29 以上	0.28	23.23	23.23	0.19	円形	U字状	○		柱穴	
23	24	25次	11T	P	817	11T	9G, 9H			0.42	0.31	0.37	23.08	23.08	0.29	楕円形	U字状	○		柱穴	
23	24	25次	12T	P	818	12T	2A, 2B			0.54	0.43	0.32	23.18	23.18	0.42	楕円形	U字状	○		柱穴	

掘立柱建物 (SB)

図面図版番号	写真図版番号	SB1	方位		建物形式	身舎面積 (㎡)		総面積 (㎡)		間数	桁行 (m)		梁行 (m)	主軸長	
			N-0°			亀甲形	29.60	33.00	1間×3間		6.30	4.70			7.70
			遺構	グリッド	時代	平面形	断面形	長軸	短軸	最大深度	底面標高 (m)	柱底下端標高 (m)	遺物有無	遺物実測図番号	備考
17	10		P 140	1T		楕円形	漏斗状	1.10	0.89	0.50	25.42	25.67	○	図29-90~93	柱穴
17	11		P 141	1T		円形	U字状	0.76以上	0.62	0.81	25.12	25.12	○		柱穴
17	11		P 142	1T		円形	U字状	0.77	0.62以上	0.57	25.34	25.41	○		柱穴
17	11		P 148	1T		円形	漏斗状	0.93	0.84	0.60	25.32	25.32	○		柱穴
			P 149	1T		円形	漏斗状	1.06	0.96	0.23	25.67	25.67	○		支柱
17	11		P 156	1T		楕円形	台形状	0.66	0.57	0.37	25.59	25.67	○		柱穴
17			P 158	1T		楕円形	U字状	0.82	0.52	0.40	25.58	25.58	○		柱穴 主軸柱 (南)
17	11		P 159	1T		円形	U字状	0.70	0.58	0.57	25.34	25.34	○		柱穴
17	11		P 178	1T		円形	U字状	0.42	0.39	0.43	25.40	25.40	-		柱穴 主軸柱 (北)
17	11		P 192	1T		楕円形	漏斗状	0.87	0.69	0.61	25.24	25.24	○		柱穴
17	11		P 313	1T		長方形	U字状	0.62以上	0.41以上	0.44	25.41	25.41	○		柱穴

方形周溝墓 (SZ)

遺構図版番号	写真図版番号	調査年次	トレンチ	遺構名	遺構種別	遺構番号	グリッド	時代	主軸方位	規模 (m)			底面標高 (m)	柱痕部分の底面標高 (m)	柱痕幅 (m)	形態		堆積形状	分層	重複関係	遺物有無	掲載遺物	備考
										上端		深度				平面	断面						
										長軸	短軸												
22	15 16 17	25次	5T 6・7 6T 3・4 7T 1~3 8T1	SZ 743			37・38C, 28・29・37・ 38D, 28~38E, 28~37F, 30~37G, 30~37H	弥生 時代	N-6°-E (南北外 11.30)	10.02	8.78	-	-	-	-	方形	-	-	-	○	図29-94 ~104 図32-5, 12, 20 図36-ガ ラス4, 5		
22	16	24次	6T4		SD	715	35・36A, 35~38B, 37・38C			4.12 以上	0.60~ 0.74	0.30	23.78	-	-	-	弧状	レンズ状	3	P744を 切る	○	周溝 (南辺)	
22	16 17	24次	7T1		SD	730	1~6B, 1~6C			5.14 以上	0.87~ 1.12	0.24	23.72	-	-	-	弧状	レンズ状	3	SK736・ 748に切 られる	○	周溝 (西辺)	
22	17	24次	7T2		SD	731	6~8B			2.10 以上	0.23~ 0.37	0.12	23.71	-	-	-	弧状	レンズ状	2		○	排水溝 (SD730 の先)	
22	17	24次	5T6 7T3		SD	732	28・29D, 28・29E, 28・29F, 28・29G			(6.86)	0.98~ 1.09	0.25	23.62	-	-	-	弧状	レンズ状	3		○	周溝 (北辺)	
22		24次	5T7		SD	746	37・38C			-	0.67	0.20	24.01	-	-	-	弧状	レンズ状	2		○	周溝 (東辺) SD801 に続く	
22		24次	6T4		SD	747	38C, 38・39D, 39E			2.10 以上	0.15~ 0.27	0.05	23.84	-	-	-	-	単層	1		○	排水溝 (SD715 の先)	
22	17 18	25次	8T1		SD	801	1~3A, 1~3B, 1~3C, 1・2D, 1・2E			7.88	0.93~ 1.42	0.31	23.93	-	-	-	弧状	斜位	3		○	周溝 (東辺) SD746 に続く	
22	17 18 19 20	24次 25次	5T6 7T3		SK	739	31~33F, 31~33G, 31~33H			3.40	1.78	0.17	24.01	-	-	隅丸長 方形	台形状	-	10		○	墓壇 埋葬部1	
22	17 18 19 20	24次 25次	5T6		SK	741	35・36E, 35・36F, 35・36G			2.48	1.37	0.35	23.92	-	-	隅丸長 方形	台形状	-	7		○	墓壇 埋葬部2	
22	17 18 19 20	24次 25次	5T6		SK	742	34・35F, 34・35G, 34・35H			2.23	0.72	0.30	23.97	-	-	隅丸長 方形 or 楕円形	台形状	-	7		○	墓壇 埋葬部3	
22	17 18 19 20	25次	5T6 6T4 7T3		SK	810	5T 35G, 35・36H 6T 34D 7T 0・1E, 0・1F, 0・1G			2.75	1.16	0.29	23.86	-	-	隅丸長 方形	(台形状)	-	9		○	墓壇 埋葬部4	
22	20	25次	5T6		P	820	32F			0.15	0.14	0.10	24.01	-	-	円形	半円状	レンズ状	2	SK739 を切る		SK739 内	
22	18	25次	5T6		P	823	33G			0.22	0.19	0.09	24.08	-	-	円形	弧状	単層	1	SK739 を切る		SK739 内	
23	23 24	25次		SZ 822		11T	8・9B, 8・9C, 2・3・8・9D, 2・3・6~9E, 2~9F, 2~9G	弥生 時代	N-4°-W	(5.50) (外7.05)	4.88 以上	-	-	-	-	方形	-	-	-		○	SI821- SD809 を切る	方形周溝 墓
23	24	25次		11T		SD	815	11T		-	0.83~ 0.94	0.42	23.02	-	-	-	台形状	レンズ状	5	SI821- SD809 を切る		周溝	

別 表

土坑 (SK)

遺構 図版	写真 図版	調査 年次	トレン チ	遺構名	グリッド	時代	規模 (m)			底面 標高 (m)	形態		堆積形状	分層	重複関係	遺物	
							上端		深度		平面	断面				有無	掲載遺物
							長軸	短軸									
18	12	21次	1T	SK 275	1T 31・32G, 31・32H	縄文時代	1.03 以上	0.70	0.29	25.74	楕円形	弧状	レンズ状	3	SD279・280・281・287、 P273に切られる	○	
14	8	21次 22次 23次	1T	SK 384	1T 43・44N	近世～ 近現代	0.99	0.75	0.17	25.30	楕円形	弧状	単層	2	S11、P653を切る P657・658に切られる	○	図31-木1・2 図36-銅1～5
19	12	22次	1T	SK 417	1T 51・52J	弥生時代	0.80	0.65	0.14	25.15	楕円形	弧状	レンズ状	2	P419に切られる	○	
18	12	22次	3T	SK 420	3T 4～6E, 4・5F	弥生時代	1.31	0.79	0.32	25.49	楕円形	階段状	レンズ状	3	P430を切る SD447に切られる	○	
21	14	23次	4T1	SK 622	4T 4・5B	縄文時代	0.72	0.62	0.20	24.12	楕円形	弧状	レンズ状	2		○	
21	14	23次	4T1	SK 623	4T 2・3A	縄文時代	0.91	0.83 以上	0.17	24.38	不整形	弧状	レンズ状	2	SD627に切られる	○	
21	14	23次	4T1	SK 628	4T 3B	縄文時代	0.52 以上	0.40	0.21	24.33	楕円形	台形状	レンズ状	2	SD627に切られる	○	
23	21	24次	5T2	SK 701	5T 12F	弥生時代	0.58 以上	0.44	0.14	23.59	楕円形	弧状	レンズ状	2		○	図29-105
23	22	24次	6T3	SK 706	6T 21・22C	弥生時代	1.30 以上	0.76	0.11	24.10	楕円形	弧状	レンズ状	2		○	図29-106
22		24次	7T1	SK 736	7T 2・3B, 1～3C, 1～3D	近世～ 近現代	1.90	1.21	-	-	不整形な長方形	-	-	-	SZ743-SD730、SK748を切る	○	
22	17	24次	7T1	SK 748	7T 1B, 1C, 1D	近世～ 近現代	1.08	0.55 以上	-	-	方形or長方形	-	-	1	SZ743-SD730を切る SK736に切られる	○	

溝 (SD)

遺構 図版	写真 図版	調査 年次	トレン チ	遺構名	グリッド	時代	規模 (m)			底面標 高 (m)	断面形態	堆積形状	分層	重複関係	遺物	
							上端		深度						有無	掲載遺物
							長軸	短軸								
13		20次	1T	SD 40	1T 50・51M	弥生時代	1.58 以上	0.41～ 0.45	0.12	25.23	弧状	単層	1	P41を切る SD39に切られる	○	図29-107
13		20次	1T	SD 45	1T 49・50M	弥生時代	0.30 以上	0.22～ 0.25	0.07	25.29	弧状	単層	1		○	
21	14	23次	4T2	SD 615	4T 12A, 12B	弥生時代	1.70 以上	0.43～ 0.61	0.17	23.47	弧状	レンズ状	2	P618を切る	○	
21		23次	4T2	SD 620	4T 13・14A, 14・15B	弥生時代	2.52 以上	0.15～ 0.23	0.12	23.38	弧状	レンズ状	2	P621・625に切られる	○	
21	14	23次	4T1	SD 627	4T 2～4A, 1～4B	弥生時代	3.70 以上	0.28～ 0.54	0.19	24.31	半円状	単層	1	SK623・628、SD638、P634・644を切る P635・643に切られる	○	
21	14	23次	4T1	SD 638	4T 1・2B	弥生時代	0.37 以上	0.26	0.05	24.58	弧状	単層	1	SD627に切られる	○	

性格不明遺構 (SX)

遺構 図版	写真 図版	調査 年次	トレン チ	遺構名	グリッド	時代	規模 (m)			底面標 高 (m)	形態		堆積形状	分層	重複関係	遺物	
							上端		深度		平面	断面				有無	掲載遺物
							長軸	短軸									
13		20次	1T	SX 13	1T 22～25M		2.90	1.70 以上	0.20	25.85	不整形	弧状	単層	1	SD14に切られる	○	
13	5	20次	1T	SX 36	1T 33・34M	縄文時代	1.45 以上	1.35 以上	0.24	25.69	不整形	弧状	レンズ状	2	SD16・17・18・19、 P50に切られる	○	
13		20次	1T	SX 38	1T 27・28M		0.73	0.56	0.09	25.86	楕円形	弧状	単層	1	SD29・31・32に切られる		
13	5	20次	1T	SX 42	1T 51～53M	縄文時代	1.66	0.85 以上	0.71	24.46	楕円形or不整形	階段状	レンズ状	5	P41・97・114に切られる	○	図30-109～ 111
13	5	20次	1T	SX 78	1T 68・69M	近世以降	0.65	0.50 以上	0.22	23.20	円形or楕円形	弧状	レンズ状	3		○	
13		20次	1T	SX 117	1T 69・70M		0.85	0.35 以上	0.23	23.11	-	V字状	ブロック状	5			
13	5	20次	1T	SX 118	1T 74・75M	縄文時代	1.35 以上	0.50 以上	0.24	22.89	楕円形or不整形	弧状	ブロック状	5		○	
13		20次	1T	SX 125	1T 72・73M	縄文時代か	1.19	0.48 以上	0.27	22.95	楕円形	台形状	ブロック状	3			
20	13	20次	2T	SX 127	2T 10・11・12	近世以降	1.80	1.70 以上	0.34	22.14	不整形	台形状	レンズ状	6		○	
20	13	20次	2T	SX 129	2T 25・26		0.73	0.34 以上	0.13	22.34	円形or楕円形	弧状	ブロック状	3			
20	13	20次	2T	SX 133	2T 18・19		1.33	1.00	0.27	22.30	楕円形	V字状	ブロック状	5		○	
20	13	20次	2T	SX 134	2T 28・29		0.91	0.67 以上	0.11	22.21	不整形	弧状	斜位	3			
16	10	21次	1T	SX 284	1T 40・41L, 40M	縄文時代	1.02	0.59 以上	0.40	25.35	楕円形	台形状	斜位	6	S11-SD185、P188・391 に切られる	○	
14		21次	1T	SX 396	1T 42・43N	近世	-	0.50	0.17	25.44	-	半円状	単層	1	S11を切る		
18	12	22次	3T	SX 436	3T 8D		0.55	0.40	0.07	25.73	楕円形	弧状	水平	2	P435に切られる		
14		22次	1T	SX 536	1T 45N	近世以降か	0.47	0.17 以上	0.41 以上	-	不整形	-	-	2	SI465-SD96を切る		
25	21	24次	6T1	SX 702	6T 1C		0.88 以上	0.88 以上	0.19	23.59	不整形	弧状	レンズ状	3		○	
24		24次	5T5	SX 740	5T 78～80A, 79B		1.45 以上	0.89 以上	-	-	不整形	-	-	-		○	
23		25次	11T	SX 812	11T 13～15D, 13～15E, 13～15F	近世以降	4.00	2.00	1.50 以上	-	方形or長方形	-	-	-			
23		25次	11T	SX 813	11T 8～10H, 8～10I	中世以降	1.52	0.60 以上	-	-	長方形or不整形	-	-	-		○	図30-112

ピット (P)

遺構 図版	写真 図版	調査 年次	トレン チ	遺構名	グリッド	時代	規模 (m)			底面標 高 (m)	柱痕部 分の底 面標高 (m)	柱痕幅 (m)	形態		堆積形状	分層	遺物	
							上端		深度				平面	断面			有無	掲載遺物
							長軸	短軸										
13		20次	1T	P 3	1T 4・5M	縄文時代	0.31	0.28	0.14	25.98			円形	半円状	レンズ状	2	○	図30-113
13	5	20次	1T	P 41	1T 51・52M		0.86	0.60以上	0.49	24.77			—	漏斗状	ブロック状	4	○	
13		20次	1T	P 43	1T 17M		0.23	0.16以上	0.19	25.93			—	U字状	レンズ状	3	○	
13		20次	1T	P 46	1T 49・50M	縄文時代	0.37	0.15以上	0.35	24.98			—	漏斗状	ブロック状	4	○	図30-114
13		20次	1T	P 47	1T 56・57M	縄文時代	1.02	0.78	0.42	24.36	24.36	0.155	—	漏斗状	柱痕	4	○	
13		20次	1T	P 48	1T 36L・M	縄文時代	0.85	0.82	0.64	25.20	25.20	0.485	楕円形	階段状	柱痕	7	○	図35-74
13		20次	1T	P 49	1T 51・52、L・M	縄文時代	0.63	0.54以上	0.64	24.67	24.67	0.195	—	漏斗状	柱痕	4	○	図30-115・116
13		20次	1T	P 52	1T 52L・M	縄文時代	0.51	0.32以上	0.62	24.59	24.59	0.200	—	U字状	柱痕	9	○	
13		20次	1T	P 55	1T 38M	弥生時代	0.85	0.65	0.67	25.13	25.13	0.145	—	漏斗状	柱痕	6	○	図30-117
13		20次	1T	P 71	1T 34M		0.25以上	0.24	0.08	25.83			—	弧状	レンズ状	2		
13		20次	1T	P 83	1T 55M	縄文時代	0.41	0.36	0.42	24.48	24.48	0.105	円形	漏斗状	柱痕	7	○	図32-15
13	5	20次	1T	P 97	1T 53M		0.18	0.06以上	0.31	24.77			—	漏斗状	レンズ状	2		
13		20次	1T	P 109	1T 51M	縄文時代	0.29以上	0.28	0.11	25.16			楕円形	弧状	レンズ状	2	○	図33-41
13		20次	1T	P 113	1T 58M		0.48以上	0.32	0.09	24.60			楕円形	弧状	ブロック状	2		
13	5	20次	1T	P 114	1T 52M		—	0.26	0.15	25.08			—	弧状	レンズ状	2		
13		20次	1T	P 121	1T 73・74M		0.43	0.21以上	0.29	22.98			—	U字状	レンズ状	2		
13		20次	1T	P 126	1T 75M		0.30	0.10以上	0.13	23.03			—	V字状	水平	2		
20		20次	2T	P 132	2T 30	弥生時代	0.31	0.30以上	0.29	21.86			—	漏斗状	レンズ状	3		
16		21次	1T	P 166	1T 34G・H	縄文時代	0.45	0.40	0.23	25.76			円形	半円状	レンズ状	2	○	図34-69
16		21次	1T	P 184	1T 40L	縄文時代	0.71	0.59	0.31	25.51	25.51	0.370	円形	階段状	柱痕	5	○	図30-118・119
14		21次	1T	P 189	1T 46・47P	弥生時代	0.48	0.41	0.50	24.92	24.92	0.260	円形	U字状	柱痕	6	○	
16		21次	1T	P 198	1T 43J	縄文時代	0.51	0.41	0.38	25.41	25.41	0.320	楕円形	U字状	柱痕	4	○	図30-120
16		21次	1T	P 212	1T 43・44、J・K	縄文時代	0.82	0.67	0.35	25.40	25.40	0.185	楕円形	弧状	柱痕	4	○	図30-121
16		21次	1T	P 239	1T 41K・L	縄文時代	0.60	0.58	0.64	25.37	25.37	0.295	円形	U字状	柱痕	3	○	図30-122
16		21次	1T	P 243	1T 39J・K	縄文時代	0.63	0.53	0.40	25.51	25.51	0.260	円形	U字状	柱痕	4	○	図30-123
18	12	21次	1T	P 272	1T 33G、32・33H	弥生時代	0.50	0.25以上	0.22	25.80	25.85	0.320	楕円形	半円状	柱痕	3	○	
18	12	21次	1T	P 273	1T 32G・H	縄文時代	0.46	0.19以上	0.22	25.80			楕円形	台形状	斜位	2	○	
16		21次	1T	P 285	1T 35・36J	弥生時代	0.60以上	0.40	0.38	25.56	25.56	0.290	楕円形	漏斗状	柱痕	6	○	図30-124・125
16		21次	1T	P 308	1T 42・43K	縄文時代	0.51	0.37	0.51	25.29	25.37	0.260	楕円形	漏斗状	柱痕	3	○	図34-61
17	11	21次	1T	P 314	1T 41K	縄文時代	0.30	0.22	0.15	25.69			楕円形	弧状	斜位	2		
17		21次	1T	P 367	1T 36・37H	縄文時代	0.50	0.43	0.28	25.68	25.68	0.185	楕円形	半円状	柱痕	4	○	
14		21次	1T	P 377	1T 44・45O	縄文時代	0.50	0.44	0.52	24.96	24.96	0.210	円形	U字状	柱痕	7		
14		21次	1T	P 379	1T 41・42O	縄文時代	1.03	0.86	0.47	24.98	24.98	0.450	円形	漏斗状	柱痕	8	○	図35-75
14		21次	1T	P 385	1T 45O	縄文時代	0.33	0.12以上	0.10	25.35			楕円形	弧状	レンズ状	2		
14		21次	1T	P 386	1T 46P	縄文時代	0.42	0.20以上	0.07	25.36			楕円形	弧状	単層	1		
14		21次	1T	P 390	1T 43N	縄文時代	0.18	—	0.04	25.42			楕円形	弧状	単層	1		
16	10	21次	1T	P 391	1T 41L		0.41	0.26	0.09	25.67			楕円形	—	—	1		
18		22次	3T	P 407	3T 4・5、C・D	弥生時代	0.86	0.70	0.40	25.48	25.48	0.20	楕円形	階段状	柱痕	6	○	図34-67
19	12	22次	1T	P 419	1T 51J	弥生時代	0.26	0.18	0.14	25.16			楕円形	箱状	レンズ状	2	○	
18	12	22次	3T	P 430	3T 4E	縄文時代	0.60	0.40以上	0.09	25.73			—	弧状	レンズ状	2		
18	12	22次	3T	P 435	3T 8D		0.46	0.41	0.12	25.68			円形	半円状	レンズ状	2		
14		22次	1T	P 488	1T 40・41N	弥生時代	1.03	0.42以上	0.34	25.28	25.28	0.32	—	漏斗状	柱痕	5	○	
15		22次	1T	P 493	1T 48M	弥生時代	0.43	0.39	0.06	25.27			円形	弧状	レンズ状	2		
14		22次	1T	P 512	1T 41O・P	弥生時代	0.68	0.36	0.31	25.21			—	半円状	レンズ状	3	○	図30-126
14	7	22次	1T	P 528	1T 41・42P	弥生時代	0.32	0.29以上	0.46	24.98	24.98	0.12	楕円形	V字状	柱痕	4	○	
19		22次	1T	P 534	1T 58J		0.25	0.20	0.08	24.58			楕円形	半円状	単層	1		
19		22次	1T	P 535	1T 59J		0.47	—	0.21	24.38			—	漏斗状	水平	2		
14	7	23次	1T	P 609	1T 45・46N		0.74	0.66	0.55	24.92			楕円形	漏斗状	水平	6	○	
14		23次	1T	P 613	1T 46・47、O・P	縄文時代	0.57	0.41	0.56	24.84	24.84	0.19	楕円形	漏斗状	柱痕	11	○	図32-18
21	14	23次	4T2	P 618	4T 12B	縄文時代	0.44	0.20以上	0.10	23.56			—	—	単層	1	○	
21		23次	4T2	P 621	4T 14A・B	弥生時代	0.54	0.52	0.44	23.02	23.02	0.19	円形	漏斗状	柱痕	6	○	
21		23次	4T1	P 631	4T 1A	弥生時代	0.23	0.22	0.14	24.54			円形	U字状	レンズ状	2	○	図30-127
21		23次	4T2	P 633	4T 14・15A	弥生時代	0.24	0.10以上	0.23	23.26			—	漏斗状	斜位	3		
21	14	23次	4T1	P 634	4T 1B	弥生時代	0.24	0.16以上	(0.15)	(24.50)			—	—	—	2		
21	14	23次	4T1	P 635	4T 1B	弥生時代	0.26	0.21	0.11	24.54	24.54	0.15	楕円形	半円状	柱痕	2		
15		23次	1T	P 649	1T 46・47M	弥生時代	0.39	0.36	0.41	25.02	25.02	0.20	円形	漏斗状	柱痕	4	○	
14		23次	1T	P 652	1T 51N	弥生時代	0.29	0.27	0.50	24.71	24.71	0.16	楕円形	U字状	柱痕	4	○	
15		23次	1T	P 654	1T 48M	弥生時代	0.27	0.25	0.67	24.63	24.63	0.17	円形	台形状	柱痕	4	○	図30-128
21		23次	4T3	P 670	4T 24A	弥生時代	0.19	0.12以上	0.20	23.44			—	U字状	水平	2		
23		24次	5T2	P 703	5T 13・14F	弥生時代	0.33	0.30	0.44	23.46	23.46	0.15	円形	U字状	柱痕	6	○	図30-129
22	16	24次	6T4	P 744	6T 36B	弥生時代	0.28	0.20以上	0.23	23.72	23.72	0.15	円形	U字状	柱痕	4		
24	22	25次	10T	P 804	10T 5A・B	弥生時代	1.04	0.52以上	0.39	23.55	—	0.15	円形or楕円形	漏斗状	柱痕	3	○	図34-72
24	22	25次	10T	P 805	10T 1・2、A・B	弥生時代	1.17	0.93	0.34	23.72	—	0.12	楕円形	漏斗状	柱痕	5	○	
24	22	25次	10T	P 806	10T 1A	弥生時代	0.21	0.20以上	0.46	23.73	23.73	0.17	—	U字状	柱痕	2	○	図31-130~132
24	22	25次	10T	P 807	10T 2A・B	弥生時代	0.25	0.21	0.30	23.76	23.76	0.17	楕円形	U字状	柱痕	1	○	
24	22	25次	10T	P 808	10T 3A	弥生時代	0.32	0.12以上	0.19	23.98	23.98	0.24	—	U字状	柱痕	2		
23	23	25次	11T	P 816	11T 11H・I	弥生時代	0.51	0.33	0.26	23.25			楕円形	漏斗状	水平	3		

別表2 土器観察表

- 凡例 1 時代 土器の年代を示した。詳細な時期については第V・Ⅵ章を参照されたい。
 2 系統 弥生時代の土器については「1. 瀬田山遺跡発掘調査報告書」(産経・立木ら2001)に従い、A群：北陸系土器、B群：折敷在地系土器を示した。
 3 法量 遺存率が低く、種の正確な復元が難しい遺物については、推定値として()付で表示した。
 4 調整・施文 調整や施文の位置については、口縁部を口、頸部を体、底部を底と略して表示した。なお、ヨコナチについては省略した。
 5 色調 土器の色調は「新版 標準土色帳」(農林水産省農林水産技術会議事務局1967) 2005年版の記号を用いた。
 6 胎土 胎土内に含まれる鉱物・小礫などについて記した。観察はルーペを用いた肉眼観察である。「石」は石英、「長」は長石、「雲」は雲母、「赤」は赤色鉱子、「焼」は焼土、「角」は角閃石を表す。
 7 遺存率 分數表示で遺存の割合を示した。

図版No.	写真・調査No.	トレンチ名	出土位置		層位	時代	系統(群)	器種	法量 (cm)		遺存率	部位	外面調整・施文	内面調整	色調		胎土	備考
			遺存名	グリッド					口径	底径					器高	口縁部		
26	25	1	22x	IT	S11-SD185	45Q	1	弥生 A	高杯	(18.0)		3/36	杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR7/4	石・長・海	内外面赤彩
26	25	2	21x	IT	S11	42N	2	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	2.5YR4/3	石・チ・海	内外面赤彩
26	25	3	22x	IT	S11-SD185	44Q	1	弥生 A	器台	(20.9)		1/36	受部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR7/6	石・チ・海	内外面赤彩
26	25	4	22x	IT	S11-SD185	-	1	弥生 A	器台	(12.0)		1/36	受部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/4	石・海	内外面赤彩
26	25	5	23x	IT	S11-SD185	42L	1	弥生 A	高杯				脚部	ハラメ	ハラメ	10YR7/4	石・長・海	内外面赤彩
26	25	6	21x	IT	S11-SD185	40M	4	弥生 A	壺	13.1		5/36	口縁部	ハラミガキ	ハラミガキ	5YR5/6	石・海	内外面赤彩
26	25	7	23x	IT	S11-SD185	42L	2	弥生 A	鉢				口縁部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR6/6	石・長・海	内外面赤彩
26	25	8	23x	IT	S11-SD185	41L	2	弥生 A	壺	2.8		9/36	口縁部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR6/6	石・長・海	内外面赤彩
26	25	9	22x	IT	S11-SD185	45Q	1	弥生 A	壺	21.3		1/36	口縁部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/6	石・海	内外面赤彩
26	25	10	21x	IT	S11-SD185	40M	4	弥生 A	鉢	8.0		7/36	口縁部	ハラメ	ハラメ	10YR6/4	石・白・海	外面黒
26	25	11	21x	IT	S11-SD185	40M	4	弥生 A	鉢	12.1		7/36	口縁部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR7/4	石・長	外面赤彩
26	25	12	21x	IT	S11-SD185	46Q	1	弥生 A	壺	4.4		15/36	口縁部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/6	石・長・白・海	内外面赤彩
26	25	13	22x	IT	S11-SD185	44L	1	弥生 A	壺	(19.6)		1/36	口縁部	ハラメ	ハラメ	10YR6/6	石・長・海	外面スス
26	25	14	21x	IT	S11-SD185	39・40M	1・2・3	弥生 A	壺	(21.0)		1/36	口縁部	ハラメ	ハラメ	10YR6/4	石	外面スス
26	25	15	21x	IT	S11-SD185	40Q	4	弥生 A	壺	17.4		3/36	口縁部	ハラメ	ハラメ	5YR6/6	石・長・海	外面スス
26	25	16	23x	IT	S11-SD185	39N	2	弥生 A	鉢or壺	14.6		8/36	口縁部	ハラメ	ハラメ	7.5YR6/6	石・長・海	外面スス
26	25	17	20x	IT	S11-SD186	40M	3	弥生 A	高杯	1.7		36/36	底部	ハラケズリ	ハラケズリ	7.5YR6/4	石・長・海	外面赤彩
26	25	18	22x	IT	S11-SD186	43P	2	弥生 A	高杯	18.0		8/36	杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR6/4	石・長・海	外面赤彩
26	25	19	22x	IT	S11-SD186	43P	2	弥生 A	高杯				受部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR7/4	石・長・海	内面口縁部赤彩
26	25	20	22x	IT	S11-SD186	41P	1	弥生 A	壺				頸部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR7/6	石・長・チ・海	内外面赤彩
26	25	21	23x	IT	S11	43N	2	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/6	石・長・海	外面赤彩
26	25	22	22x	IT	S11	43P	3	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR7/4	石・長・海	外面赤彩
26	25	23	20x	IT	S11	41L	2	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR7/4	石・長・海	外面赤彩
26	25	24	21x	IT	S11	39N	2	弥生 A	高杯	(9.3)		1/36	杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/6	石・白・海	内外面赤彩
26	25	25	21x	IT	S11	40P	3	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR8/4	石・チ・海	内外面赤彩
27	25	26	21x	IT	S11	39M	3	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR8/4	石・チ・海	内外面赤彩
27	25	27	22x	IT	S11	45P	2	弥生 A	高杯	(22.2)		2/36	杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/6	石・長・海	内外面赤彩
27	25	28	22x	IT	S11	43P	3	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/6	石・長・海	内外面赤彩
27	25	29	23x	IT	S11	39N	1	弥生 A	高杯				杯部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR7/6	石・長・海	内外面赤彩
27	25	30	21x	IT	S11	39M	4	弥生 A	器台	(21.1)		1/36	受部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR5/3	石・海	内外面赤彩
27	25	31	21x	IT	S11	40Q	2	弥生 A	高杯				脚部	ハラミガキ	ハラミガキ	5YR4/6	石・長・海	外面赤彩
27	25	32	21x	IT	S11	40Q	2	弥生 A	器台				脚部	ハラミガキ	ハラミガキ	2.5Y6/6	石・海	外面赤彩
27	25	33	23x	IT	S11	39N	1	弥生 A	高杯or器台or鉢	5.0		10/36	脚部	ハラミガキ	ハラミガキ	7.5YR6/8	石・長・海	外面赤彩
27	25	34	21x	IT	S11	40M	4	弥生 A	蓋	3.0		32/36	つまみ	ハラメ	ハラメ	10YR6/6	石・白・海	外面赤彩
27	25	35	20x	IT	S11	42L	2	弥生 A	蓋	3.3		14/36	つまみ	ハラメ	ハラメ	7.5YR6/6	海	外面赤彩
27	25	36	21x	IT	S11	40N	2	弥生 A	蓋				つまみ	ハラミガキ	ハラミガキ	5YR4/6	石・長・海	外面赤彩
27	25	37	23x	IT	S11	40N	1	弥生 A	鉢				頸部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR5/6	石・海	外面赤彩
27	25	38	21x	IT	S11	40Q	1・2	弥生 A	鉢	13.0		3/36	口縁部	ハラミガキ	ハラミガキ	10YR6/6	石・長・海	外面赤彩
27	25	39	21x	IT	S11	42N	1	弥生 A	鉢	5.0		12/36	底部	ハラメ	ハラメ	10YR7/6	石・長・海	外面赤彩
27	25	40	20x	IT	S11	41L	2	弥生 A	鉢	4.8		27/36	底部	ハラメ	ハラメ	10YR8/4	石・海	外面赤彩

図版 No.	複製 No.	調査 年次	トレンチ 名	出土位置		層位	時代	系統 (群)	器種	法量 (cm)		遺存率	部位	外面調整・施文	内面調整	色調		胎土	備考	
				遺構名	グリッド					口径	底径					器高	口径			外面
27	25	41	23X	IT	S11	41L	2	弥生 A	壺	(9.7)		1/36	口縁部	ハラミガキ			7.5YR6/6	石・長・海		
27	25	42	21X	IT	S11	40M	1	弥生 A	壺	(12.0)		1/36	口縁部				7.5YR6/6	石・長・海	外面スス	
27	25	43	23X	IT	S11	40N	1	弥生 A	壺	(12.0)		1/36	口縁部				7.5YR6/6	石・長・海		
27	25	44	21X	IT	S11	40O	2	弥生 A	壺	(21.9)		2/36	口縁部	ハケメ			7.5YR7/6	石・チ・白		
27	25	45	21X	IT	S11	39N	1	弥生 A	壺	(15.0)		2/36	口縁部				10YR7/4	石・チ		
27	25	46	21X	IT	S11	40N	2	縄文	壺or深鉢			2/36	口縁部				5YR6/6	石・長・海		
27	25	47	20X	IT	S11	39・40M	1・2・3	弥生 A	壺	16.1	22.6	18/36	口縁部～底部	縄文LR 口：ハケメ (縦凹線文を意欲か) 体：ハケメ			7.5YR6/6	石・長・チ・海	体部外面一部スス	
27	25	48	20X	IT	S11	40M	1	弥生 A	壺	17.1		3/36	口縁部～体部上位				5YR6/6	石・長・海		
27	25	49	23X	IT	S11	41N	2	弥生 A	壺	(18.0)		1/36	口縁部～体部中位	体：ハケメ			10YR6/4	石・長・海		
27	26	50	21X	IT	S11	40N	2	弥生 A	壺	(14.6)		1/36	口縁部				7.5YR5/4	石・長・チ・海		
27	26	51	22X	IT	S11	42O	2	弥生 A	壺	(20.0)		1/36	口縁部				10YR6/4	長・海		
27	26	52	22X	IT	S11	41P	1	弥生 A	壺	(18.0)		1/36	口縁部	ハケメ			10YR6/4	石・海	外面スス	
27	26	53	20X	IT	S11	41L	2	弥生 A	壺	(15.0)		2/36	口縁部				10YR6/4	石・海		
27	26	54	20X	IT	S11	41L	2	弥生 A	壺	11.0		3/36	口縁部				10YR5/4	石・長・チ・海		
27	26	55	23X	IT	S11	42L	1	弥生 C	壺	(20.0)		2/36	口縁部	口端：小遊状 口：ハケメ、ハケメによる縦溝状施文 キザミ、沈線			10YR6/4	石・長・焼		
27	26	56	21X	IT	S11	40N	2	縄文	深鉢			1/36	口縁部				7.5YR6/3	石・長・チ	内面炭化物	
28	26	57	20X	IT	S11	40M	1	弥生 A	壺			12/36	底部	ハラナデ			7.5YR5/8	石・長・海	内面炭化物	
28	26	58	22X	IT	S11	44O	2	弥生 A	壺	6.7		36/36	底部	ハケメ			10YR5/3	石・長・海	外面スス	
28	26	59	20X	IT	S11	42L	2	弥生 A	壺or深鉢	5.5		8/36	底部				10YR6/6	石・長・海		
28	26	60	22X	IT	S11	42P	2	弥生 A	壺	4.0		15/36	底部				7.5YR5/4	石・長		
28	26	61	21X	IT	S11	39N	1	弥生 A	壺	6.3		22/36	体部下位～底部	ハケメ			10YR6/6	石・長・海	内面炭化物	
28	26	62	22X	IT	S11	42P	1	弥生 A	壺or深鉢	4.0		8/36	体部下位～底部	ハケメ			10YR7/4	石・長・海		
28	26	63	20X	IT	S11	39M	1	弥生 A	壺	6.3		17/36	底部				10YR6/4	石・長・白・海		
28	26	64	23X	IT	S11	40N	1	弥生 A	壺or深鉢	6.0		9/36	底部	ハケメ、ハラナデ			10YR5/3	石・長		
28	26	65	21X	IT	S11	41O	2	弥生 A	壺or深鉢	(10.0)		3/36	体部下位～底部	ハケメ			10YR5/3	石・長		
28	26	66	22X	IT	S11	43P	3	弥生 A	壺or深鉢	6.6		3/36	体部下位～底部	ハケメ			10YR7/6	石・長・海		
28	26	67	21X	IT	S11	39N	1	弥生 A	壺or深鉢	7.0		8/36	底部				7.5YR2/1	石・長		
28	26	68	22X	IT	S11-P511	40O	1	弥生 A	壺	(16.3)		2/36	口縁部				明赤褐	5YR5/6	石・長・白・海	外面スス
28	26	69	22X	IT	S11-P511	40O	1	弥生 B	壺			1/36	口縁部				2.5YR5/3	石・長・焼		
28	26	70	22X	IT	S1401	60K	1	弥生 A	壺				肩部	ハケメ			10YR7/4	石・長		
28	26	71	22X	IT	S1401	58I	1	弥生 A	壺	5.8		11/36	底部	ハラミガキ			2.5Y5/4	石・チ・海		
28	26	72	22X	IT	S1401	59J	1	弥生 B	壺	(20.6)		1/36	口縁部	ハラナデ			10YR6/4	石・長・焼・海		
28	26	73	22X	IT	S1465	45L	2	弥生 A	高杯				杯部				10YR7/4	石・海		
28	26	74	22X	IT	S1465	45L	1	弥生 A	高杯	13.4		14/36	杯部底部～脚部	杯：ハラミガキ 脚：しぼり肌、ハケメ			7.5YR6/6	石・海	外面赤彩 杯部内面赤彩	
28	26	75	23X	IT	S1465	46N	2	弥生 A	蓋	3.9		1/36	杯部底部～脚部	ハラミガキ			10YR6/6	石・長・海	外面赤彩	
28	26	76	22X	IT	S1465	47L	1	弥生 A	壺			7/36	つまみ～体部	ハラミガキ			2.5Y6/3	石・長・海	外面赤彩	
28	26	77	23X	IT	S1465	45・46N	1	弥生 A	鉢	5.0		11/36	体部	ハラミガキ			10YR6/6	石・長・海	外面赤彩	
28	26	78	22X	IT	S1465	45L	1	弥生 A	鉢or壺	3.2		23/36	底部	ハラミガキ			10YR6/4	石・長・チ・海		
28	26	79	22X	IT	S1465	49M	1	縄文	深鉢?	(19.0)		1/36	口縁部				10YR5/4	石・長・白・海	外面スス	
28	26	80	23X	IT	S1465	47L	1	弥生 A	壺	3.0		12/36	体部下位～底部	ハケメ			5YR6/8	石・長・海	内面炭化物	
28	26	81	22X	IT	S1465	45M	1	弥生 A	壺or壺	6.0		7/36	底部				10YR5/4	石・長		
28	26	82	23X	IT	S1465	46L	1	縄文	深鉢?	6.5		8/36	底部				10YR6/4	石・長		
28	26	83	24X	5T	S1728-SD745	79C	1	弥生 B	壺or深鉢	(19.0)		1/36	口縁部	口端：キザミ・刺突 口：縄文RL			オリーツ刷	2.5Y4/4	石・チ・海	外面スス
28	26	84	24X	5T	S1728-SD745	79D	1	弥生 B	壺or壺			1/36	口縁部				10YR5/3	石・海	外面スス	
28	26	85	24X	5T	S1728-SD745	79D	1	弥生 A	壺or壺			1/36	杯部				10YR7/4	石・長		
28	26	86	24X	5T	S1728-SD745	79B	1	弥生 A	高杯	8.0		1/36	杯部	ハラミガキ			10YR7/4	石・長		
28	26	87	25X	9T	S1802-SD803	21B	1	弥生 A	壺	(16.0)		1/36	口縁部				5YR6/8	石・長		
28	26	88	25X	9T	S1802	19A	1	弥生 B	壺or深鉢			1/36	口縁部	沈線文、交互刺突文			5Y4/1	石・長		
28	26	89	25X	11T	S1821-P811	11H	1	弥生 C	壺	(17.0)		3/36	口縁部	口端：キザミ 口：ハケメ			10YR4/4	石・長・チ・海	外面スス	
29	26	90	21X	IT	SEI-P140	38・39K	1	縄文	壺				肩部	縄文			10YR4/2	石・長・チ・海		
29	26	91	21X	IT	SEI-P140	38・39K	1	縄文	鉢			2/36	口縁部	口端：波状、指頭状 口：キザミ			7.5YR6/6	石・長		

写真 No.	図版 No.	複製 No.	調査 年次	トロンチ 名	出土位置		層位	時代 (詳)	系統 (詳)	器種	法量 (cm)		遺存率	部位	外面調整・施文	内面調整	色調		胎土	備考
					遺構名	グリッド					口径	底径					器高	口径部		
29	26	92	21x	IT	SH-P141	36・37K	4	縄文	A	鉢	6.0	6/36	底部				7.5YR6/6	石・長・チ・海		
29	26	93	21x	IT	SB1-P148	40I	3	縄文	A	深鉢			底部				10YR7/3	石・長		
29	26	94	24x	6T	SZ743- SD715	36A	1	弥生	A	壺				口縁部～体部上位			10YR7/6	石・長		
29	26	95	24x	6T	SZ743- SD715	36A	1	弥生	A	壺	5.5	12/36	底部				2.5Y7/6	石・長・海		
29	26	96	24x	6T	SZ743- SD715	36B	2	弥生	B	甕	(226)	1/36	口縁部				10YR7/4	石・長・チ・海	外面スス	
29	26	97	24x	7T	SZ743- SD730	4B・C	2	弥生	A	甕	14.0	8/36	略完形				2.5YR5/6	石・長・チ・海	外面スス黒斑 内面炭化物	
29	26	98	24x	7T	SZ743- SD730	5B	1	弥生	B	壺	(84)	3/36	34/36	口縁部～体部、 底部				10YR7/6	石・長・焼・海	
29	26	99	25x	7T	SZ743- SD730	4B・C	1・2	弥生	C	壺				頸部～体部				7.5YR7/6	チ・白	外面黒斑
29	26	100	24x	5T	SZ743- SD732	28F	1	弥生	A	壺				口縁部				5YR8/6	石・長・チ・海	内外面赤彩
29	26	101	24x	5T	SZ743- SD732	28E	1	弥生	A	壺				体部下位				2.5Y7/4	石・長・チ・海	
29	26	102	25x	8T	SZ743- SD801	2D	1	弥生	A	壺	7.5	4.7	7/36	略完形				7.5YR6/6	石・長・チ・海	外面赤彩 口縁部内面赤彩
29	26	103	25x	5T	SZ743- SK739	32G	1	弥生	A	高台				受部底部～脚部				10YR6/6	石・長・チ・海	透かし孔
29	26	104	25x	5T	SZ743- SK739	32H	1	弥生	A	甕	10.0	27/36	体部下位～底部					7.5YR5/4	石・長・チ・海	外面スス
29	27	105	24x	5T	SK701	12F		弥生	B	壺		2/36	口縁部					10YR7/4	石・長・海	
29	27	106	24x	6T	SK706	21C	1	弥生	A	甕	(21.3)	1/36	口縁部					10YR6/6	石・長・海	
29	27	107	20x	IT	SD40	51M	1	弥生	A	高杯				口縁部				10YR7/3	石・長・海	内外面赤彩
29	27	108	25x	IT	SD819	5G	1	中世	A	鉢 (泉涌焼)				体部				5Y5/1	灰	
30	27	109	20x	IT	SX42	52M	5	縄文	A	深鉢	24.3	5/36	口縁部～体部上位					5YR6/6	石・長・チ・海	外面スス
30	27	110	20x	IT	SX42	52M	5	縄文	A	深鉢				口縁部				2.5Y7/4	石・長・チ・海	外面スス
30	27	111	20x	IT	SX42	52M	5	縄文	A	深鉢	10.0	9/36	底部					7.5YR5/6	石・長・海	外面スス
30	27	112	25x	11T	SX813	9H	1	中世	A	鉢 (泉涌焼)				口縁部				5Y4/1	灰	
30		113	20x	IT	P3	4・5M	1	縄文	A	深鉢				体部上位					石・長	外面スス
30	27	114	20x	IT	P46	49M	1	縄文	A	深鉢				口縁部				5YR5/6	石・長・チ	外面スス
30	27	115	20x	IT	P49	51M	2	縄文	A	深鉢		2/36	口縁部					7.5YR7/6	石・長・チ	外面スス
30	27	116	20x	IT	P49	51M	2	縄文	A	深鉢	5.8	7/36	底部					10YR7/3	石・長・海	内面炭化物
30	27	117	20x	IT	P55	38M	1	弥生	A	鉢	(13.4)	1/36	口縁部					7.5YR6/6	石・長	
30	27	118	21x	IT	P184	40L	1	縄文	A	深鉢				口縁部				10YR5/2	石・長・チ	外面スス
30	27	119	21x	IT	P184	40L	3	縄文	A	深鉢				口縁部				10YR5/2	石・長	外面スス
30	27	120	21x	IT	P198	43J	2	縄文	A	手づくね土器	5.1	11/36	略完形					10YR6/6	石・長・海	外面スス 外面一部アスファルト
30	27	121	21x	IT	P212	44J・K	1	縄文	A	深鉢		1/36	口縁部					7.5YR5/3	石・長・海	外面スス
30	27	122	21x	IT	P239	41L	1	弥生	C	甕				体部上位				10YR6/3	石・長・海	外面スス
30	27	123	21x	IT	P243	39J・K	1	縄文	A	深鉢				口縁部				7.5YR6/4	石・長・チ・白	外面スス
30	27	124	21x	IT	P285	35・36J	3	弥生	A	蓋	3.7	36/36	つまみ					2.5Y5/4	石・長・チ	
30	27	125	21x	IT	P285	35・36J	3	弥生	A	甕	10.0	10/36	底部					10YR7/4	石・長・焼	
30	27	126	22x	IT	P512	41P	1	弥生	A	高杯or器台				脚部				10YR7/6	石・長・海	
30	27	127	23x	4T	P631	1A	1	弥生	A	壺				体部				10YR7/4	石・長・海	外面赤彩
30	27	128	23x	IT	P654	48M	1	弥生	A	鉢?	3.0	16/36	底部					10YR7/6	石・長・海	
30	27	129	24x	5T	P703	14F	1・3・4	弥生	C	壺	17.0	8/36	口縁部～体部中位					7.5YR7/4	石・長・チ・海	
31	27	130	25x	10T	P806	1A	1	弥生	A	甕or壺	(15.4)	2/36	口縁部					10YR8/4	石・長	
31	27	131	25x	10T	P806	1A	1	弥生	A	甕or壺				頸部～肩部				7.5YR7/6	石・長・チ・海	
31	27	132	25x	10T	P806	1A	1	弥生	C	壺				体部				7.5YR6/6	石・長・チ・海	外面炭化物付着
31	27	133	21x	IT	37L	(10.7)	1b	弥生	A	高台		2/36	受部					10YR7/4	石・チ・海	

写真 図版 No.	掲載 図版 No.	調査 年次	トレンチ 名	出土位置		層位	時代 (群)	系統 (群)	器種	法量 (cm)		遺存率		部位	外面調整・施文	内面調整	色調		胎土	備考
				遺構名	グリッド					口径	底径	器高	口縁部				底部	外面		
31 27 134	20X	IT	42P	1b	弥生 A	高杯				8.2		12/36	杯部	ハラミガキ		ハラミガキ	7.5YR6/6 7.5YR6/6	石・長・海 石・長・焼・海	内外面赤彩	
31 27 135	20X	IT	44・45P	1b	弥生 A	高杯							脚部				にぶい黄褐色	石・長・チ・海	内外面赤彩	窠孔(未確認)、他に 窠孔に開接するとみら れる凹形の痕跡あり
31 27 136	22X	IT	46N	I	弥生 A	高杯							脚部				明黄褐色	石・長・チ・海	底面赤彩	
31 27 137	21X	IT	46P	IIa	弥生 A	高杯				3.4		36/36	つまみ~体部				7.5YR6/6	石・長・チ・海		
31 27 138	21X	IT	36L	1b	弥生 A	蓋				4.5		36/36	底部				7.5YR6/6	石・長・チ・海	底面赤彩	
31 27 139	20X	IT	37M	IIa	縄文	鉢?											にぶい黄褐色	石・長・チ・海	底面赤彩	
31 27 140	21X	IT	46O	IIa	弥生 A	鉢				4.6		3/36	底部				明黄褐色	石・長・チ・海	内外面赤彩	
31 27 141	21X	IT	51G	1b	弥生 A	鉢				(9.6)		1/36	口縁部~体部				5YR5/4	石・長・チ・海	内外面赤彩	
31 27 142	21X	IT	36K, 36L	1b	弥生 A	壺				8.0		1/36	口縁部~体部下位				にぶい黄褐色	石・チ・焼・海		
31 27 143	21X	IT	35・36L	1b	弥生 A	壺							口縁部				7.5YR6/6	石・長・海		
31 27 144	21X	IT	47K	1b	弥生 A	壺				(14.8)		1/36	口縁部				7.5YR6/6	石・長・海		
31 27 145	21X	IT	36L	1b	弥生 A	甕				(17.0)		2/36	口縁部				7.5YR6/6	石・長・海		
31 27 146	22X	IT	41P	I	弥生 A	甕				(18.7)		1/36	口縁部				にぶい黄褐色	石・長・チ・海	外面スス	
31 27 147	22X	IT	41P	I	弥生 A	甕				20.2		1/36	口縁部~頸部				にぶい黄褐色	石・長・海	外面スス	
31 27 148	20X	IT	46P	1b	弥生 A	甕				(20.0)		2/36	口縁部				黄褐色	石・長・海	外面スス	
31 27 149	20X	IT	45M	IIa	弥生 A	甕						1/36	口縁部				明黄褐色	石・長・チ・海	外面スス	
31 27 150	21X	IT	37L	1b	弥生 A	甕				7.0		8/36	底部				10YR5/8	石・長		
31 27 151	20X	IT	50M	IIa	弥生 A	甕				6.5		7/36	底部				7.5YR7/6	石・焼・海		
31 27 152	24X	5T	2F	II	弥生 A	高杯				(20.0)		1/36	杯部				明黄褐色	石・長・チ		
31 27 153	24X	7T	8C	II	弥生 B	鉢or甕				4.6		36/36	底部				7.5YR6/6	石・長・チ	外面スス	
31 27 154	25X	9T	19A	IIb	弥生 B	鉢or甕							体部				にぶい黄褐色	石・長・チ	外面スス	
31 27 155	25X	9T	20C	II	弥生 B	鉢or甕							口縁部				にぶい黄褐色	石・海	外面スス	
31 27 156	25X	11T	21E	II	平安	無台榎(土師器)				6.0		4/36	底部				明黄褐色	石・長・チ		

別表 3 木製品観察表

写真 図版 No.	掲載 図版 No.	調査 年次	トレンチ 名	出土位置		層位	器種	平面形	法量 (mm)	重量 (g)	手法	時代	備考
				遺構	グリッド								
31 27 1	23X	IT	SK384	44N	1層	穀珠玉	円形	6.3	5.4	4.1	1.0	0.047	ケズリ 近世 漆付着
31 27 2	23X	IT	SK384	44N	1層	穀珠玉	円形	5.7	5.4	4.9	0.7	0.038	ケズリ 近世 漆付着

別表4 石器観察表

石鏃

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	遺存状態	側縁形態(正面観)	備考	
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)					
32	28	1	23	1T	S11	42L	1層	A	24.4	17.3	4.3	1.10	流紋岩	完形	直線	ていねいな作り、両側縁やや凹凸あり
32	28	2		1T	S11			A	(18.0)	(14.3)	3.7	(0.60)	凝灰岩	尖頭部先端・脚部脚欠	直線?	衝撃剥離あり、尖頭部は衝撃による破損か
32	28	3	21	1T	S11	39N	2層	A	(23.5)	13.3	6.0	(1.70)	流紋岩	尖頭部先端欠	直線	やや厚い、両側縁はいびつな形状
32	28	4	22	1T	S11	42P	3層	A	19.0	(11.5)	2.8	(0.40)	玉髓	脚部片脚欠	直線	薄手でていねいな作り
32	28	5	24	5T	SZ743-SK741	36F	1層	A	17.5	10.5	2.0	0.44	珪質頁岩	完形		薄手でていねいな作り、五角形鏃
32	28	6	20	1T	S11	40・41M	2層	A	(17.0)	10.0	3.0	(0.40)	珪質頁岩	尖頭部先端欠	直線・外湾	尖頭部先端に衝撃剥離あり、小形品
32	28	7	21	1T	S11	39N	1層	A	17.0	(12.5)	3.5	(0.45)	流紋岩	脚部片脚欠	外湾	やや粗雑な作りで両側縁はいびつな形状、小形品
32	28	8	22	1T	S11	42P	2層	A	16.5	(13.0)	5.0	(0.54)	流紋岩	脚部片脚欠	直線・外湾	風化やや著しい、小形品
32	28	9		1T	S11			A	10.1	8.7	1.9	0.10	半透明頁岩	完形	直線	非常に小形で薄手、ていねいな作り
32	28	10	20	1T		47M	IIa層	B	(21.0)	(23.5)	6.5	(2.32)	珪質頁岩	尖頭部先端・脚部脚欠	直線	尖頭部先端は衝撃剥離による破損やや厚手の作り
32	28	11	23	1T	SI465	47N	1層	B	22.0	13.0	6.0	1.32	凝灰岩	完形	直線・外湾	作りはやや粗雑で厚み除去は不完全
32	28	12	25	5T	SZ743-SK739	32G	4層	B	21.5	9.5	2.5	0.45	半透明頁岩	完形	直線	小形で薄手、ていねいな作り
32	28	13	23	1T	S11-P601	41M	1層	B	20.4	13.1	3.9	0.60	流紋岩	完形	直線	小形品
32	28	14	23	1T	SI465	47M	1層	B	17.3	15.5	3.6	0.80	凝灰岩	完形	直線・外湾	小形でやや粗雑な作り
32	28	15	20	1T	P83	55M	1層	B	(16.5)	(15.0)	4.0	(0.80)	流紋岩	尖頭部先端・脚部脚欠	直線?	尖頭部脚部の欠損面は新しい、アスファルト付着
32	28	16	22	1T	S11-SD185	41P	2層	B	15.0	13.0	3.0	0.48	凝灰岩	完形	直線	小形品、やや風化している
32	28	17	22	1T	S11	43O	1層	B	(13.0)	(13.7)	4.0	(0.50)	凝灰岩	尖頭部先端・脚部脚欠	直線	尖頭部脚部の欠損面は新しい、小形品
32	28	18	23	1T	PE13	47P	4層	B	15.0	12.9	3.3	0.50	凝灰岩	完形	外湾	小形で薄手な作り、やや風化している
32	28	19	21	1T	S11	40O	2層	B	14.5	13.0	2.5	0.40	玉髓	完形	直線・外湾	小形で薄手、ていねいな作り
32	28	20	25	5T	SZ743-SK739	32G	1層	B	14.5	(7.0)	2.0	(0.19)	珪質頁岩	1/2欠	外湾	尖頭部から脚部まで衝撃剥離の破損あり
32	28	21	22	1T	S11	42P	1層	B	15.0	12.5	3.5	0.59	玉髓	完形	直線	小形でやや厚手
32	28	22		1T	S11			B	14.0	10.3	2.2	0.30	珪質頁岩	完形	直線・外湾	小型で薄手な作り、粗雑な作りで素材の形状をよく残す、両側縁はいびつな形状
32	28	23	22	1T	S11-SD185	41P	1層	B	14.3	12.5	2.5	0.37	凝灰岩	完形	直線	小形で粗雑な作り、素材の形状が良く残り、両側縁はいびつな形状
32	28	24	22	1T	S11	42P	3層	C	(19.0)	15.5	5.5	(1.75)	鉄石英	尖頭部欠		基部は円みを帯びる
32	28	25		1T	S11			不可	(13.8)	(7.9)	(2.9)	(0.20)	頁岩	基部欠	直線	尖頭部破片、ていねいな作り

石鏃未成品

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	備考	
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)				
32	28	26	21	1T	S11	42O			32.0	21.5	8.0	3.57	頁岩		ほぼ全面に二次調整されるが厚さの除去不完全
32	28	27	21	1T	S11	40P	2層		22.5	15.0	6.5	1.86	流紋岩	縦長剥片	ほぼ全面に二次調整されるが厚さの除去不完全
32	28	28	21	1T	S11	41N	1層		(24.0)	(13.9)	6.2	(0.95)	凝灰岩		風化が激しく二次調整は判然としない、基部は欠損か?
32	28	29	20	1T	S11	40・41M	3層		21.0	13.0	4.5	0.60	凝灰岩		風化が激しく二次調整は判然としない
32	28	30	23	1T	SI465	46L	1層		19.2	16.4	6.5	1.60	頁岩	縦長剥片	二次調整は全周するが厚さの除去不完全
32	28	31	22	1T	S11	41P	1層		21.0	14.0	5.0	1.89	半透明頁岩	縦長剥片	二次調整はほぼ全周するが厚さの除去不完全

石鏃

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	遺存状態	備考	
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)					
32	28	32	22	1T	SI465	46M	1層		32.0	17.0	4.0	2.59	玉髓	縦長剥片	完形	正面中央部に自然面を残す、鋸部に剥離が集中
32	28	33	23	1T	SI465-P606	45M	1層		25.5	16.1	5.8	1.40	凝灰岩	縦長剥片	完形	やや風化している、鋸部に剥離が集中

削器

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	二次調整部位	遺存状態	備考	
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)						
32	28	34	20	1T		56M	IIa層		41.5	22.0	5.0	4.57	凝灰岩	縦長剥片	裏面右側縁・底縁	完形	二次調整は不連続剥離
32	28	35	21	1T	S11	42N	1層		33.0	25.0	8.5	5.70	凝灰岩	縦長剥片	裏面両側縁	完形	二次調整は不連続剥離
32	28	36	21	1T	S11	40O	1層		30.0	13.0	7.5	3.15	玉髓	縦長剥片?	正面底縁	完形	縦長剥片を切断後、二次調整か
32	28	37	21	1T	S11	40O	1層		27.0	25.0	7.5	4.72	頁岩	縦長剥片	正面右側縁・裏面右側縁	完形	二次調整は連続剥離
33	28	38	21	1T	S11	41N			25.0	26.0	6.0	4.80	頁岩	縦長剥片?		完形	裏面の底縁に使用痕の微細剥離、正面左側縁切断か
33	28	39	20	1T		57M	IIa層		21.0	23.0	5.0	2.29	凝灰岩		両面全周	完形	両面に浅角度の連続剥離

両極剥離痕のある石器

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	状態	備考	
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)					
33	28	40	21	1T	S11	40O	2層		25.0	24.0	6.0	4.67	凝灰岩	剥片	剥片状	4極2対の剥離痕
33	28	41	20	1T	P109	51M	1層		20.0	13.0	6.0	1.43	黒曜石	円礫	剥片状	2極1対の剥離痕、新津金津産か、正面に自然面あり
33	28	42	22	1T	SI401	59I	1層		16.0	13.5	5.0	1.65	黒曜石	円礫	剥片状	2極1対の剥離痕、新津金津産か、裏面に自然面あり、被熱

磨製石斧

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	刃部平面形	刃部断面形	遺存状態	備考	
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)						
33	28	43	23	4T		1A	1層		147.0	48.0	27.0	262.5	輝緑岩	円刃	両刃	完形	定角式大型磨製石斧、風化著しく研磨痕見えず
33	28	44	21	1T	S11-SD186	39N	3層		114.0	61.5	31.0	263.5	安山岩	円刃	両刃	完形	定角式大型磨製石斧、製作時の敲打痕が多く残り、研磨痕は少ない、刃部に敲打状の痕跡あり、転用礫石か
33	28	45	21	1T		39I	Ib層		98.5	(46.0)	22.0	(170.0)	蛇紋岩	円刃	両刃	刃部一部欠損	定角式大型磨製石斧、刃部は刃こぼれ状につぶれている
33	28	46	22	1T		58K	1層		(31.0)	45.0	(17.0)	(32.3)	輝緑岩	平刃	両刃	基部欠損	定角式大型磨製石斧か、刃縁は刃こぼれ状につぶれている
33	28	47	22	1T	SI401	59J	1層		(72.0)	(56.0)	(33.0)	(149.0)	輝緑岩			刃部欠損	定角式大型磨製石斧、裏面に敲打状の使用痕あり
33	28	48	20	1T		36M	IIa層		(55.0)	(41.0)	(26.0)	(76.7)	輝緑岩類			刃部欠損	定角式大型磨製石斧
33	29	49	22	1T	SI401	60J	1層		(49.0)	(31.0)	(15.0)	(34.2)	透閃石岩			刃部欠損	定角式小型磨製石斧、刃部の破損面に剥離を施している
33	29	50	23	1T		46N	1層		(38.0)	(28.0)	(11.0)	(16.0)	透閃石岩			刃部欠損	定角式小型磨製石斧、研磨痕は光沢を帯びる

石錘

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	遺存状態	備考
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)				
33	29	51	23	4T		22B	II層	52.0	30.0	12.0	22.15	凝灰岩	偏平長楕円礫	完形	両端部に切り込みを入れた切目石錘

敲磨石類

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	磨痕部位	敲打部位	遺存状態	備考
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)						
33	29	52	23	1T	SI465	46N	1層	(37.0)	57.0	(43.0)	(101.0)	チャート	円礫	裏面	上端	2/3欠損	被熱
33	29	53	23	1T	SI1	42M	1層	158.0	100.0	60.0	1240.0	砂岩	楕円礫	正面	正・裏・両側面・両端	完形	剥離と敲打痕の混在
33	29	54	21	1T	SI1	41O	2層	83.0	76.0	51.0	430.0	花崗岩	円礫	正裏面	正裏面	完形	正裏面の敲打面は凹凸が著しい
33	29	55	24	5T	SI728-SD745	77F		(66.0)	(105.0)	(31.0)	(232.0)	砂岩	扁平礫		正面・左側面	1/2欠損	破損は正面の敲打による、被熱
34	29	56	23	1T	SI1	46N	覆土	134.0	79.0	43.0	630.0	流紋岩	楕円礫		下端	完形	敲打部は剥離によりやや鋭い
34	29	57	21	1T	SI1	40N	1層	131.0	57.0	21.0	165.0	凝灰岩	垂円礫	正面・右側面	裏・側面両端	完形	磨痕面に擦痕あり、敲打による剥離あり
34	29	58	21	1T	SI1	40O	1層	(72.0)	85.0	(18.0)	(185.0)	安山岩	扁平礫	正面	正面	破片	被熱によるハジケあり、上面の破片、使用痕著しい
34	29	59	21	1T	SI1	40O	1層	99.0	61.0	38.0	252.0	流紋岩	楕円礫		両端	完形	両端部の一部敲打
34	29	60	20	1T	SI1	41M	3層	(83.0)	(67.0)	(40.0)	(252.0)	砂岩	垂円礫?	左側面		1/2欠損	被熱によるハジケあり

砥石

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	砥面部位	砥面状態	遺存状態	備考
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)					
34	29	61	21	1T	P308	42K	1層	(114.5)	(105.5)	(72.0)	(1233.0)	砂岩	正面	中	破片	砥面に光拓あり、被熱により破損か、置砥石
34	29	62	22	1T	SI1	41P	1層	(67.0)	(57.0)	(35.5)	(170.0)	砂岩	正裏面	中	破片	被熱により破損か
34	29	63	22	1T	SI465	47L	1層	(69.0)	(42.0)	9.0	(13.4)	凝灰質砂岩	正裏面	中	破片	板状素材を利用
34	29	64	20	1T		48N	1b層	(65.5)	35.0	27.5	(79.6)	凝灰岩	正裏・右側面・上端面	細	1/2欠	断面方形状、手持ち砥石
34	29	65	23	1T	SI1	42M	1層	(64.0)	18.0	16.4	(33.7)	凝灰岩	正裏・両側・上端面	細	下端欠	断面方形状、手持ち砥石
34	29	66	20	1T	SI1	40M	1層	54.0	21.0	16.0	17.6	凝灰岩	正裏・両側・下面	細	完形	断面方形状、手持ち砥石

剥片類

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	打面幅(mm)	打面		正面		裏面		備考
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			自然面	剥離面	自然面	剥離面数	剥離面	自然面	
34	29	67	22	3T	P407	4D	2層	50.0	45.0	13.0	20.66	凝灰岩	22		3		7	1		
34	29	68	21	1T	SI1	42O	3層	43.5	42.0	8.0	12.74	流紋岩	17		1	あり	6	1		
34	29	69	21	1T	P166	34H	1層	46.0	40.0	8.5	14.90	頁岩	26		3		8	1		
34	30	70	22	1T	SI465	45M	2層	38.0	42.0	21.0	16.90	頁岩	41	あり	2		7	1		
34	30	71	20	1T	SI1	42L	3層	46.0	31.0	10.0	14.74	流紋岩					4	1	右側面に切断状剥離あり、打面・打点は切断で除去	
34	30	72	25	10T	P804	5A	1層	33.0	48.0	11.0	16.45	珪質頁岩	2		2	あり	6	2		
35	30	73	20	1T	SI1	41M	1層	39.5	23.5	6.0	3.97	珪質頁岩	4		1	あり	2	1		
35	30	74	20	1T	P48	36M	3層	33.0	24.0	6.0	4.30	流紋岩	5		1		7	1		
35	30	75	21	1T	P379	41O	1層	31.0	24.0	8.0	2.54	頁岩	5		1		2	1	上端に切断状剥離あり、打面・打点は切断で除去、風化やや著しい	
35	30	76	21	1T	SI1	39N	1層	33.0	20.0	11.0	6.70	流紋岩	11		1		5	1	左側面に切断状剥離あり	
35	30	77	21	1T	SI1	42N	1層	31.5	15.0	11.5	4.90	頁岩	12	あり			1	2		
35	30	78	21	1T	SI1	40N	2層	15.0	17.0	4.0	0.90	鉄石英					4	1	小形でチップ状、打面・打点は遺存せず	
35	30	79	21	1T	SI1	40O	2層	18.0	9.5	4.0	0.68	玉髓					2	1	小形でチップ状、打面・打点は遺存せず	

石核

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	備考
					遺構名	グリッド	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
35	30	80	22	1T	SI401	60K	1層	51.0	46.0	40.0	92.50	凝灰岩	自然礫	風化著しく詳細不明
35	30	81	21	1T	SI1	41O	2層	28.0	22.0	17.0	7.20	頁岩	荒削片	風化やや著しく詳細不明
35	30	82	23	1T	SI1	39N	2層	57.0	55.0	24.0	50.00	凝灰岩	剥片	右側面・下端は折断状剥離か
35	30	83	21	1T	SI1	41O	2層	22.0	16.0	17.0	7.70	黒曜石	自然礫	両極剥離の石核
35	30	84	20	1T	SI1		2層	32.5	28.5	16.0	9.51	頁岩	剥片	

軽石製品

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	遺存状態	備考
					遺構名	グリッド	層位	長さ	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
35	30	85	22	1T	SI401	59I	1層	44.0	34.0	23.0	20.13	軽石	完形	裏面を使用
35	30	86	23	1T	SI1	43M	2層	34.0	23.0	24.0	4.21	軽石	略完形	正裏・右側面を使用

玉作資料

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	備考
					グリッド	遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
35	30	87	21	1T	SI1	40O	2層	13.5	10.0	4.0	0.61	緑色凝灰岩	剥片	管玉製作工程の形割段階の失敗品か

搬入礫

図版No.	写真図版No.	報告No.	調査年次	トレンチ	出土地点			大きさ				石材	素材	遺存状態	備考
					グリッド	遺構名	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)				
35	30	88	20	1T	SI1	42L	2層	149.0	87.0	58.0	1272.0	玄武岩	垂円礫	完形	敲磨石類の可能性もあるもの断定できず
35	30	89	20	1T	SI1	41L	1層	(124.0)	64.0	45.0	(435.0)	凝灰岩	長楕円礫	下端欠損	意識的な剥離あり、使用痕は見られない
35	30	90	20	1T	SI1	40M	3層	(91.0)	73.0	63.0	(449.0)	凝灰岩	垂円礫	1/2欠損	被熱、一部器面荒れ敲磨石類可能性もあるもの断定できず
35	30	91	21	1T	SI1	40O	2層	83.5	57.5	40.0	250.5	砂岩	円礫	完形	風化による剥落著しい、敲磨石類の可能性もあるもの断定できず
35	30	92	21	1T	SI1	38N	3層	(53.5)	44.0	36.0	(100.0)	凝灰岩	円礫	1/2欠損	滑らかな器面を呈し敲磨石類の可能性もあるもの断定できず
35	30	93	20	1T		44Q	1b層	56.0	24.0	19.0	27.7	白色凝灰岩	垂角礫	完形	風化著しく摩滅、石核の可能性もあるもの断定できず

別表5 ガラス製品（ガラス玉）観察表

図版 No.	写真 図版 No.	掲載 No.	調査 年次	トレンチ名	出土位置		層位	種別	時代	法量 (mm)			重量 (g)	色調	備考
					遺構名	グリッド				長さ	幅	厚さ			
36	31	1	23	1T	SI1	43L	1層	ガラス玉	弥生時代	7.24	—	4.43~4.98	0.20	紺色透明	半損。長さは残存値。推定の直径は約8.00mm。 孔径1.57mm。
36	31	2	21	1T	SI1		2層	ガラス玉	弥生時代	3.40	3.19	2.98	0.05	淡青色透明	孔径1.28mm。
36	31	3	21	1T	SI1	39N	3層	ガラス玉	弥生時代	3.68	3.36	2.45	0.04	淡青色透明	孔径1.44mm。
36	31	4	24	7T	SZ743-SD730	4B	2層	ガラス玉	弥生時代	3.41	—	3.19	0.03	淡青色透明	半損。孔径0.95mm。
36	31	5	24	7T	SZ743-SK739	4G	1層	ガラス玉	弥生時代	4.83	4.63	3.78	0.10	淡青色透明	孔径2.34mm。

別表6 鉄製品観察表

図版 No.	写真 図版 No.	掲載 No.	調査 年次	トレンチ名	出土位置		層位	器種	時代	法量 (cm)			重量 (g)	備考
					遺構名	グリッド				残存長	最大幅	厚さ		
36	31	1	21次	1T	SI1-SD185	39N	6層	ヤリガンナ	弥生時代	4.90	1.20	0.45	6.40	
36	31	2	24次	5T	SI728	77D	1	鉄鏃	弥生時代	2.25	1.55	0.25	2.40	4孔

別表7 銅製品（銭貨）観察表

図版 No.	写真 図版 No.	掲載 No.	調査 年次	トレンチ名	出土位置		層位	銭種	時代	法量 (cm)			重量 (g)	備考
					遺構名	グリッド				長さ	幅	厚さ		
36	31	1	22次	1T	SK384	44N	1層		近世	上2.30 下2.50	上2.30 下2.50	上0.10 下0.10	6.13	2枚が固着
36	31	2	22次	1T	SK384	44N	1層	寛永通寶	近世	2.50	2.50	0.10	3.60	
36	31	3	22次	1T	SK384	44N	1層	寛永通寶	近世	2.25	2.20	0.09	2.16	
36	31	4	22次	1T	SK384	44N	1層	寛永通寶	近世	2.50	2.50	0.10	3.70	
36	31	5	22次	1T	SK384	44N	1層	寛永通寶	近世	2.50	2.50	0.10	2.77	
36	31	6	20次	1T		67M	1 a	寛永通寶	近世	2.20	2.20	0.10	1.95	
36	31	7	20次	1T		69M	1 a	寛永通寶	近世	2.50	2.45	0.10	2.02	